ひろきの不思議な物語～水晶伝説の謎～

ハムチィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひろきの不思議な物語～水晶伝説の謎～

【Ｎコード】
Ｎ６２９６Ｒ

【作者名】
ハムチィー

【あらすじ】
地球とは違う悪魔族と天使族が入り混じる世界。そこに『ひろき』と『ひろし』がつれてこられた。二人はそれぞれ悪魔族、天使族の手助けをするように言われるのだった。

はじめに

この本書に書かれたことはすべてフィクションです。実際の団体、人物には一切関係ありません。また、誤字、脱字などがある場合がございます。そのようなものを発見した場合は、受け流すか、納得がいかないようでしたら、直接申し出てください。

それから、これは小学生の頃から作っていた物語です。そのため、多少幼かったり、ヤバイ所とかございます。言葉変えると妄想ストーリーです。特に最後の方、キモイです。多少、手は入れてありますがほぼ当時のままです。できるだけ大人の知識を持たずに子供の知識だけで呼んでいただくとよろしいと思います。それから魔法という言葉が出てきますがこれは一番想像しやすいのがドラゴンボールのエネルギー波とかだと思ってください。その方が分かりやすくなります。例でいうと魔法光線はカメハメ波です。

本編について

本編はプロローグを除きました。ほぼ、要約文で書かれています。なのであまり台詞が少ないです。

私自身、小説で書きたいのですが、本編が長いので無理だと思われます。ご了承ください。

投稿は可能な限り毎日行います。毎日１２時に投稿する予定です。

よろしくお願いします。

感想、要望など、随時、受け付けております。

選ばれた3人

今日もチャイムが鳴り響く。それと同時に生徒達が慌しく動き始めた。

「あぁー。授業始まっちまうよ。」

「もう?早くねぇ。」

「そろそれ、お前ら席付けよ。遅刻すっぞ。」

「大丈夫だよ。席すぐ近くだし。それに駆陸ならいつも遅刻すんじゃん。それよりトランプもう一戦やろうぜ。」

3人は1つの机に集まり、トランプを手に持った。案の定、駆陸はチャイムが鳴ったときには来なかった。

「(っしゃーっ。これで勝てる。スペ3はでた。ジョーカーが使える)」

やっているのは『大富豪』定番中の定番のゲームだ。そして、チャンスが回ってきた。

「よっしゃー。これで終わりだー。ジョーカーっ。そして…。」

『ガシッ』

誰かが腕をつかんだ。手にはハートの3があった。

「遅刻はするが、グッドタイミングで来るのが俺だぜ。」

「先生っ!!」

「さぁーてと、2人遅刻と…。」

「待って待って待って。」

そういってひろきとひろしは自分の席に着いた。

「しょうがねえなあ。」

ニヤけたまま出席簿にしるしをつけていた。

その後、ホームルームは終わった。そして、駆陸の口からとある言葉がこぼれた。

「今日で、1学期も終わりだ。みんな夏休みを前に興奮しているだ

ろ？だから、その熱を冷ましてやる。この間のできの悪かったテスト返すぞ。」
「えっ。」
クラスのみんなが唖然とする。
「えっ。教科違くね？」
「ひろき。無駄だ。あいつはむちゃくちゃな人間だ。なんでもありえないことをする。だから、無理だ。」
「そうだよなあー。」
そんな言葉をいって嘆いている中、テストは返され始めていた。
「よし次、あつし。」
「順番めちゃくちゃかよ。」
「それもあいつだ。」
「……っ。」

テストを返されたあつしは笑顔で帰ってきた。
「おい。どうだったんだったよ。」
「ふっふっふ、８０点さ。」
「マジかよっ！？あの難しいのだろ？どうしてそんなにとれんだよ。」
「実力さ。」
「くっそーっ。」
「おい、ひろしっ。」
「ハイ。」
ひろしが席を立ちテストをもらいにいった。そして、表情を変えないまま戻ってきた。
「おいっ。どうだったんだよ？」
「６０点。」
「ま、まじか。あつしが８０で、ひろしが６０、ということは俺は１００か！！」
「いや、４０点。」

「まてまてーい。」
2人のよそうにひろきは突っ込んだ。ひろき自身には100点を取る自身があったのだ。

「おーい、ひろき。」
「さあ、きたぜ。笑顔で帰ってきてやるぜ。」
ひろきはどうどうと顔をニヤやかせて、駆陸のところに向かった。

10秒後

ひろきは下を向いたまま、とぼとぼと帰ってきた。
「どうだったん。ひろき。」
「……20点……。」
「ダーッハッハッハッ。だめじゃん。ってかあかてーーーん。」
2人は大爆笑した。それを聞いたひろきは落ち込んだ。
「フッ。赤点は大丈ー夫さ。中間でとってる。」
「誇らしげに言うなよ（笑）」
「でも、もうどうしようもねえな。」
「いいじゃん。赤点はなし。それに明日から夏休みだぜ。」
「まあ、そうだな。」
いつの間にかテストは配り終わっていた。そして、駆陸は教卓に戻っていた。
「よーし。お前ら、明日から夏休みだ。特に受験するやつ。しっかり勉強しろよ。まだ2年だからって甘く見るな。」
「受験か…まあ、俺はどこでもいいけどな。俺は警察官になる。今、不足しているらしいし。」
「そういえばあつしは前からそんなこと言ってたね。俺は建築関係の仕事かな。」
「お前は？ひろし。」
「俺はゲームデザイナー。だからいくのは専門学校。」

「そっか。みんな進学するのか。俺は家継ごうかな。大工だし。受験勉強しなくていいし。」
「ひろき。お前勉強嫌いだもんな…。」
「それがテストに現れているけどな。」
「う、うるせぇ。」
「おい、そこ、うるせぇぞ。」
駆陸は3人に怒鳴ってきた。それを聞いた3人は駆陸の方を向きひざに手を置いた。
「なにやってんだ。もうみんないっちまったぜ。お前らも早く行け。」
「マジかよ。みんな早ぇ。」
そう言って3人は走って体育館に向かった。

終業式はあっという間に終わった。そして、教室に帰ってきた後、駆陸は封筒を取り出した。
「さあ、おまえら、覚悟はできてるか?さっきのテスト以上にどきどきするやつ持ってきたぜ。」
教室全体が静まり、誰もが息を呑んだ。

「(通知表かっ!!!)」
誰もが頭の中で考えていた。そして、駆陸は名前を読み上げていった。

数分後、通知表は2人の手に渡された。
「あれ?俺のは?」
あつしが自分の通知表を探していた。教卓を探しても自分の名前はなかった。
「えっ。あつし。もしかして、ない?」
「はいっ。」

「…わりぃ。やっちまった。俺の机の上だ。」
「なぬーーっ。」
「ホームルーム終わったあと取りに来て。よかったな、学校の机の上で。」
「よくねぇよ。教師しっかーく。」
あつしの叫びは駆陸には届かず、笑いでごまかされた。そして、通知表はあつしを除いて全員に渡された。しかし、ひろしとひろきはまだ、中身を見せ合ってなかった。

「ひろし。終わったあと見せるぞ。」
「ああっ。まあ、勝負は見えてるけどな。」
「ま、待てよ。俺も忘れるな。すぐとってくるから。」
「ああ、待ってるから。早くしてよ。」
「わかってるよ。あっ。先に行っててていいよ。すぐ追いつくから。」
「マジかよ。」
3人は共に成績を争っていた。その為、3人同時にあけたかったのだ。
「よし、それじゃあこれで終わりにする。存分に楽しめっ。」
それを最後に駆陸は教室を後にした。
「それじゃあ、俺行ってくるわ。」
「おう。先行ってるから。」
そう言って2人は教室を出た。そして、あつしは職員室に向かった。

「あつしのためにゆっくり行くか。」
「そうだなっていつも、俺の歩きのスピードにあわしてるからゆっくりだろ。」
「ハハハッだな。」
そう言いつつひろきはチャリの鍵を開け、チャリを押して校門までやってきた。
「ん、ひろし、なに持ってんだ?」

「えっ。ああ、このバット？ちょっと夏に練習しようと思ってな。ってか、お前は何を持っているんだよ。」
「赤ペン。なんかポケットに入ってた。だから、なくさないように持ってようと思って。」
「へぇー。かばん入れちゃえば？」
「いいよ。それより…。荷台に乗れよ。バット重いだろ。二ケツでいこうぜ。」
「いいのか？それじゃあよろしく。」
そう言ってひろしは荷台に乗った。
「ったくしょうがねぇ教師だな。」
ブツブツと言いながらあつしは職員室に向かった。

「ここだよな。たしか駆陸だけ小部屋なんだよな。…あいつの性格上こうなるか…。」
『コンコン』
「しつれーいしまーすっ。」
そう言って部屋のドアを開け、中を覗いた。しかし、そこには無造作に置かれた資料や入れたてのコーヒー、砂糖の袋が置かれていただけでそこに駆陸の姿はなかった。

「ええーっ。どこいったんだよ。消えるなら、俺の通知表返してからきえてくれ。」
そう言って職員室から出ようとした。すると、自然に体が後ろに引っ張られた。何かと思って振り返って見ると、そこには誰もいなかった。しかし、背後にブラックホールのように渦を巻いた物があり、そこに体が引っ張られていた。
「な、なんだよこれ！うそだろ。もしかして俺、死ぬの？待てよ。まだ死にたくない。」
しかし、あつしの体はどんどんとその渦に近づいていった。すると、渦の中心が白く光りだした。そして、ある光景を映し出した。

「な、何だあれ?島、まさか。異次元世界!?」
そういった瞬間、あつしの体は渦の中に飲み込まれた。

ちょうど同じころ、ひろきたちの前にも渦は現れていた。
「ひろき。早くこげ。吸い込まれる。」
「だめだ、これ以上、ペダル漕げない。」
「うそだろっ。あっ。」
2人の体は宙に浮いた。そして、渦の中に吸い込まれていってしまった。

その後、渦は跡形もなく消えてしまった。

選ばれた3人（後書き）

明日は１２時に

選ばれた者の仕事

どれほどの時間がたったのかわからない。無重力の空間が2人を吸い込んでいく。そして、とある場所についたとき2人は目を開けた。すると、そこには青空が広がっていた。

ガバッと体を起き上がらせるひろきとひろし。すると、目の前には荒野が広がっていた。

「ここ、どこだ?」

ひろしが呟く。しかし、ここがどこなのか2人にはわからなかった。

「お、おい。ひろし見ろ。建物だ。町がある。」

「本当か?」

起き上がってみた景色の右側に町があった。その町のほうを2人は見つめていた。

「とりあえず、あの町に行ってみよう。1キロぐらいか?」

「そうだな。」

2人は立ち上がり、歩き出そうとした。しかし、2人は体に異変に気づいた。

「な。何だ。体に感覚がない…?」

「何でだ。おかしい。」

そう言って2人は見合った。そして、あることに気づいた。

「お前。その格好なんだよ。それに背中の…剣!しかも顔も変わっている。」

2人同時の発言だった。2人の衣服は変わっていて、肩には大きな剣を担いでいたのだ。

「何だよこれ。何かと戦えって言うのか?。」

「そうみたいだな。なんていうか。ドラクエみたいじゃないか？」
「ま、待てよ。それじゃあモンスターとか出てくるのか？」
「その可能性はある。」
「無理無理無理無理無理。俺一般人。レベルで言ったら０．１くらいだし。」
「俺だって。」
２人はテンパッた。何もかもがわからなかった。
「と、とりあえず。町へ行こう。ゲームでもそうだろ？情報収集は一番最初にやることだ。」
「だな。」
そう言って２人は剣を担ぎながら歩き出した。
「待つのじゃ。おぬしら。」
「えっ！？」
２人の動きが止まった。そして、息を呑みゆっくり振り返った。すると、そこには一人の男が立っていた。

「よくきたな。」
男は歓迎するような発言をして２人に近づいてきた。とっさに後ろに後ずさりする２人。そして、剣を掴んでその男に向けた。

「だ、誰だっ！ここはどこだ。」
「ハハハッ。無理もないか。突然つれてきてしまったからな。安心しろ。わしはおぬしらの味方の神様だ。」
「神様！！」
２人は驚いたが神様は手を差し伸べた。すると、ひろきは恐る恐るその手を掴んだ。しかし、手は確かに掴んだのに掌に神様の手が触れた感覚がなかった。
「えっ？」
思わず、声が出る。すると、神様はそんな様子を見て微笑んだ。

「手に意識を集中させてみろ。」
そう言われたひろきは手に意識を集中させた。すると、神様の手の感覚がしっかりと感じられた。

「あっ、感じる。」
「そうか、よかったな。」
先ほどの笑みのまま神様は発言をした。
「お前がひろきだな。そして、お前がひろし。よろしくな2人とも。」
「えっ。どうして俺らの名を…。」
「おぬしらを選んだのはわしだからのぉ。当たり前じゃろ。」
「は、はぁ…。」
分からないまま、2人は返事をした。

「お前たちをここに連れてきたのはわしじゃ。そして、お前たちを守っているのもわし。」
「神様が俺たちを？何のために？」
「この世界を平和にするためっていえばわかりやすいかのぉ。」
「平和に？この世界を？」
「ああ、そうじゃ。今からお前らにここに来た理由を伝える。だから、腰を下ろせ。」
そういって神様は2人を座らせた。そして神様自身も座った。

2人はとりあえず言われたままにして神様の様子を見ていた。少しでも多くの情報を聞くためだ。
そんな2人が見つめる中で神様は話しかけた。
「今、この世界には一般の人もいるが2つの属性が存在する。それが『天使族』と『悪魔族』だ。悪魔族はこの世界を征服しようとしている。天使族はそれを食い止めようとしている。それが今のこの世界の現実だ。そして、わしは天使族の頂点に立つものじゃ。じゃ

が、今世界は悪魔族が優勢となっている。そこで、わしは君たちの世界から助っ人を呼ぶことにした。それがお前らじゃ。だから、お前らは選ばれたものなのじゃ。しかし、これでは悪魔族にフェアではなくなってしまうと考えた。そこで、悪魔族、天使族両方に一人ずつ地球人を送ることにした。そして、つれてこられたのがおまえらなのじゃ。ここまででわからないことはあるか。」

「ハイッ。」

すかさずひろしが手を上げた。

「どうして、俺らだったんですか?」

「たまたまじゃ。」

「えぇぇぇぇぇーっ!!」

2人には驚きしかなかった。

「他には?」

「どうして悪魔族が優勢になっているんですか?」

次いでひろきが質問した。すると、神様は一瞬顔をゆがませた。しかし、話しだした。

「悪魔族は何もかも破壊していく。しかし、天使族は一般の人を守りながら戦っている。そのため、どうしても天使族が不利になってしまうのじゃ。」

「そ、そうですか。」

「他には?ないな。続きを話すぞ。」

そういって神様は再度口を開いた。

「次は君たちの体について話そう。君たちの体には魔法をかけておる。そのお陰で地球にいた頃より5倍は身体能力が上がっている。そして、鍛えれば鍛えるほど、身体能力は地球上に比べて数倍早く強化される。さらには魔法が使えるようになっている。そして、もう一つ、おぬしらの体には魔法をかけてある。痛みを感じないという魔法だ。いきなりここにつれて来れられて戦わないといけないと

いうのは何かと抵抗がある。攻撃が怖いなどの感情もおこるじゃろう。それを取り除くために痛みを感じないようにした。しかし、感覚を感じてほしい場所がある場合はそこに意識を集中させれば、感覚を感じられるようにした。とりあえず、体のことは以上だ。」

「ちょっと待ってください。感覚がないって怖くないですか。いつ攻撃されているのかわからないってことでしょ？」

「しかも、感覚がないってことは不死身ってことですか？」

2人があわてながら質問を神様にぶつけた。しかし、神様は冷静に答えた。

「確かに怖いことじゃ。しかし、おぬしらに魔法などの痛みを味わってほしくないというのがわしの考えなのじゃ。じゃから、そこは慣れてもらうしかないんじゃ。それから、おぬしらは不死身ではない。ちゃんと死ぬ。しかし、死ぬ痛みは感じない。しかしじゃ、いきなり死ぬということは大変に危険じゃ。その為、死が近づくにつれて体がだるくなるようにしておいた。傷を受けるたびに体はだるくなり、徐々に立てなくなっていき、最後は目を開けられなくなる。なーに、たいしたことじゃない。慣れれば問題ない。これでいいかのぉ？」

「いや、新たな疑問が生まれました。」

「なんじゃ、ひろき。」

「この世界で死んだら、俺達はどうなるんですか？」

「ああっ、そうか。言ってないな。大丈夫じゃ。この世界で死んだ場合、元の世界に戻される。体に傷も残らんし、後遺症もなにも残らん。じゃから、おぬしらは何も心配することはない。」

「死んだら、元の世界に戻れるんですね。」

突然ひろきが口を開いた。

「ああそうじゃよ。」
「そうですか。それじゃあ…。」
そう言うとひろきは剣を取り出し、刃先を自分に向けた。
「帰ります。」
「なっ！！ひろき。」
「俺は夏休みを楽しみたいんです。こんなところで時間をつぶしたくありません。」
「時間か？それも、大丈夫じゃ。ちゃんと対策は立ててある。じゃから話を聞け。」
そう言ってひろきの剣を掴み置くように言った。
するとひろきは「わ、わかりました。」と言って剣を置き神様の顔を見た。

「時間のことはちゃんと考えた。君たちの時間を無駄に足ないためにな。まず、この世界について話す。この世界の一日は２２時間じゃ。地球より２時間短い。そして、一年は３００日じゃ。そして、地球と違い季節がない。傾いてないからな。そして、この世界と君たちの世界のことだが、こっちの世界での一年が君たちの世界での一秒になっている。じゃから、５年ここにいたとしても現実世界では５秒しか経っておらんのじゃ。しかし、帰った時、この世界で鍛えた筋力なのはすべてなくなりここに来る前の体に戻る。」
「一年で一秒？」
「そうじゃ。」
神様の言葉を聞いたひろきは考え始めた。すると、ひろしが話しかけてきた。
「ひろき。よく考えろ。こんな経験めったにできるもんじゃないぞ。剣使って悪者を倒す。魔法使って悪者を倒す。それに加えて身体能力が人間の５倍。命の保障はされているし、時間の保障もされている。現実世界じゃできないことがこの世界ではできるんだ。帰るなんてもったいねぇぜ。」

「ひろし……。」
「助けろとか平和にしろとか言われたけど、魔法を使えるっていうこの体を楽しもうぜ。この世界にいたとしても１０年が限度だろ？それでも１０秒なんだぜ。」
「そうか、そうだよな。もったいねぇよな。やるわ。俺。」
「おお、そうか、やってくれるか？」
神様は喜んで２人に笑顔を見せた。
「２人ともやってくれるでいいんだな？他に質問はあるか？」

「あ、あの。これから俺達はどこに行けばいいんですか？」

「ん？大丈夫ちゃんと決まっている。これから君達にはアイビスタウンに行ってもらう。あそこに見えてる町じゃ。そこで、修行をするのじゃ。そして、今以上に強くならなければいかん。今のお前達では悪魔族の下っ端でも倒せんからな。『カイル』という男のところに行けば強くしてもらえる。魔法も教わることができるだろう。じゃから、まずはそこに行ってほしい。残念ながらわしはおぬしらと一緒に戦うことはできないのじゃ。じゃから、２人でアイビスタウンまでがんばって行ってくれ。ここから、北に言ったところにある。じゃあ、わしはそろそろ行かんといかんから…。お前らの活躍を期待しているぞ。わしはあくまで力を貸すだけで、魔法の強さなどはおぬしらしだいじゃからな。それから、もし、何か悩んだことがあれば目を閉じてわしを念じろ。そうすれば、おぬしらにアドバイスができる。じゃから、心配せずにがんばるのじゃ。それじゃあ、あとは頼んだ。」
そう言って神様は姿を消してしまった。
「よし、アイビスタウンだな。」
「うおーーーっ。なんかわくわくしてきた。いくぞ、ひろき。」

「おうっ。」

そして、２人は立ち上がり、遠くに見える街に向かって走り出した。

「なあ、ひろき。」
「なんだ？ひろし。」
「結構遠いな…。」
「ああ、１０キロはあるぞ。あんな近くに見えていたのに。」
「もしかして、俺らの身体能力が上がったから視力もよくなって…。」
「考えられるな。だけど、それが分かったからってどうすることもできないだろ。」
「でもさ、身体能力が上がったのなら走りとかも速くなるんじゃねえ。それに持久力もついているかも。」
「そうかもな。それじゃあいっちょ走るか。感覚がないから重さは分からないし、足だけ意識すれば疲れずに走れるな。」
「よーっし。決まり。それじゃあ、次に俺が言う『ＧＯ』で出発ってのはどうだ。」
「いいね。いつでもいいぜ。」

２人はその場に止まり、体勢を低くした。

『ＧＯ！！』

ひろきが言ったと同時に２人がいっせいに走り出した。
そして、猛スピードのまま、アイビスタウンに向かって行った。

その頃、アイビスタウンでは…
「おーい。おばちゃん。飯まだぁ？」
「ちょっと待ちな。順番ってもんがあるんだよ。それに、おばちゃんじゃない。お姉さんと呼びな。」
「悪いな。お姉さん。」

1人の男が宿で食事を待っていた。

「はい、できたよ。」

「いつもワリィな。」

「いいってことよ。それより、なんか今日はご機嫌だね。」

「いやね。なんか今日、俺のところに弟子入りする奴らがいるらしいんだ。それで、どう鍛え上げるか考えるとねー。上機嫌になっちまうんだよ。」

「へえー弟子ね。そりゃ楽しみだ。」

おばちゃんは笑いながら男の席から離れていった。

「うわぁぁぁぁあー。止まらねぇぇぇぇえー。」

「ん、なんだ?」

男は箸を持ちながら不思議な声を聞いていた。そして、それはだんだんと近づいてくることに気づいた。

「敵…ではないな。」

そう言って箸をおいた瞬間、店のドアを突き破って2人の人間が転がりながら男の前に現れた。

「なっ!!!」

「な、なんだいあんた達!!」

店の中にいた誰もが驚いた。そして、入ってきた2人を見つめていた。

幸いけが人はいなかった。

「いっててて…。変に意識しちまった。はっ、やっと止まったぞ。ひろし。」

「やっとか。スピード出すぎだよな。どうなってんだよ。」

そう言いつつ2人は立ち上がった。

「おまえら。どうした?」

男はそんな2人に話しかけた。急に話しかけられ、驚く2人。それ

と同時にことの大変さに気づいた。

「あの、えっと…すみません。」

2人は同時に謝った。すると、そんな2人の前におばちゃんが包丁を持って現れた。

「うっ!!（こ、殺されるっ。）」

2人は死を悟った。すると、おばちゃんは話しかけてきた。

「大丈夫かい?怪我はないかい?」

「ハヒッ!?」

思いがけない言葉に2人は変な声が出てしまった。

「おば…お姉さん。包丁もってちゃ危ないって。怖がってるじゃん2人とも。」

「えっ?ああ、慌ててたからね。ごめんごめん。」

「よ、よかったーっ。」

2人はため息をつき、腰を下ろした。

「で、お前らはだれだ?」

男の口から再度同じ質問が出た。その為、ひろきは口を開いた。

「お、俺はひろき。そしてこいつがひろし…。おれらはちきゅ…ふご。」

ひろきの口をひろしは押さえた。

「馬鹿。なに個人情報教えてんだ。敵かも知れねえんだぞ。」

「そっか、わりぃ。」

「地球だと?」

男は2人に問いかけた。

「ほらひろきー、知っちゃったじゃねぇか。」

ひろきの腕をたたきながらひろしが呟いた。

「いいから質問に答えろ。おまえら地球から来たのか?」

男は2人に問いかけた。すると、ひろしは口調を雑にして答えた。
「ああそうだ。地球から来たんだ。神様ってやつに連れてこられた。」
「なるほど、お前らか…。」
「えっ？」
2人は顔を男に向ける。
「おまえら、カイルってやつを探せって言われなかったか？」
「えっ、あっ、はい。言われました。アイビスタウンにいるって聞いて。」
男の顔を見たままひろきは答えた。
「そうか。そうか。」
そう言って男はしゃがんで2人と同じ目線になった。すると、突然手を差し伸べた。

「俺が、その『カイル』。待っていたぜ。2人とも。」
「えっ、えええーっ！！」
2人は驚き、男の顔を見た。

「おう。俺は紹介したんだ。おまえらも紹介してくれ。そうだな。よし、あそこに座ろう。」
カイルは開いている席を指差しながら2人を立ち上がらせた。
「えっ。あっ、でも、ドア。」
「ああ、大丈夫だよ。なぁ、お姉さん。」
「ああっ。壊れるのは慣れているさ。心配しなくても大丈夫だよ。」
おばちゃんはケラケラと笑い、調理場にもどって行った。他の客も席につき、食事を再開した。

「じゃ、おまえらの名前から聞こうか。」
指を交差させて手を机に置きながらカイルは2人を見つめていた。
「えーっと。俺はひろきです。高校2年生です。」

「同じく、高校2年のひろしです。」
「『ひろし』と『ひろき』…か…。」
そう言って1人ずつカイルは顔を見た。
「俺は、カイル。まあ、まとめていうとお前らの味方だ。よろしく。」
「よろしく、お願いします。」
2人は軽く会釈して、カイルの顔を見続けた。
「おいおい、そんなに緊張すんなよ。それともなに?顔になんかついてる?」
「えっ、は、はい。…ご飯粒ついてます。」
「えっ!?マジかよ!?」
そういってカイルは手で拭ってご飯粒を落とした。その様子を見た2人は笑みをこぼした。
「お、ようやく笑ったな。それでいい。」
カイルは手を再度机の上に置き、2人を見つめた。
「あの、カイルさん?俺たち、鍛えるように言われたんですけど。」
「ああ、大丈夫、ちゃんと聞いてる。俺が明日から教えてやる。だから、心配すんな。」
「は、はぁ…。」
「……。」
「……。」
沈黙が続く。

「何か話せよ。聞きたいこととかあるだろ。」
カイルが沈黙を破り話しかけてきた。
「いえっ。特には今は…。」
「なんだぁ、おまえらー元気ねえ子供だな。よし、それじゃあ、この町を案内してやるよ。一ヶ月は世話になる町だからな。」
「えっ。修行って一ヶ月もやるんですか!?」
一ヶ月という長さに対し、2人は驚きを隠せなかった。

「なに言ってんだ。一ヶ月じゃ短いほうだぞ。特に平和にするっていうんなら、２０年以上の修行が必要だ。」
「に、２０年!!」
「そんなにっ!!」
「まぁ、２０年も修行しなくて大丈夫だ。あとで特別なもん渡すから。」
「そうか、よかった。」
「まあいい。行くぞ。町案内。」
カイルは立ち上がる。それに連れられ２人も立ち上がった。
「おば…お姉さん。お代置いとくよ。それじゃあ。」
「はいよーっ。」
威勢のいい声が調理場から聞こえてきた。それを確認したカイルは店の外に出た。そして、カイルによる町案内は始まった。

案内している中でいるのまにか夜になった。
「うわっ。日が暮れるのはえーなっ。」
「ああ。２２時間だからな。２時間違うと暮れるのも早いだろ。」
２人は空見上げながら話していた。
「どうだ。これでほとんどは回った。今見てもらったのがアイビスタウンだ。いいとこだろ?」
確かにカイルの言うとおり、にぎわっていたし、空気もおいしく、気候も春のような陽気だった。

「よし、それじゃあ。明日に備えて休むぞ。俺んちこい。」
「あっはい。」
カイルに案内されるまま、２人は町の中を歩いていった。そして、１軒の小さい家の前に着いた。
「ここが俺んち。借家だから小さいけど、３人は余裕で住める広さがある。お前らは一ヶ月ここで俺と生活をともにするんだ。」

「は、はい。」
淡々と物事が進んでいく。2人はそれについていくしかできなかった。

カイルの家の中は、1DKトイレ風呂付一階建ての家だった。確かに3人が住むにはちょうどよい広さだった。
「おまえらは寝室で寝ていいぞ。俺はダイニングで寝るから。」
「えっ。そんな悪いですよ。」
「そうですよ。修行まで見ていただくのに、部屋まで貸してくれるなんて。」
「あーっ。小さいことはきにすんな。俺はお前らが力をつけてくれればそれでいいんだよ。」
「そうですか。」
「それじゃあ。遠慮なく。」
そう言って2人は寝室に入っていった。すると、2人は話し始めた。

「ふぅ。とりあえず、これで大丈夫だな。」
「ああ、カイルさん優しくてよかった。」
「だな。」
その後2人はそれぞれ今後のことについて考えていた。

一方カイルは…家の外に出ていた。

「ということはあのうちのどちらかを悪魔族にするんですね?神様。」
「ああ。お前はただあいつらを鍛えるだけでいいからな。そして、最終日にあれを渡してくれ。」
カイルは神様と話をしていた。
内容は2人の今後についての予定だった。

「どちらを天使族にするかは、おぬしが決めていいぞ。カイル。」
「いや、俺は決めません。彼ら自身で決めさせます。」
「そうか。まあ。それでもよい。とりあえず、必ず一人を悪魔族にするんだぞ。」
「わかりましたって。」
その言葉を聞いた神様はスッっと姿を消してしまった。そして、カイルも家の中に入って行った。その後、3人で夕食を済ませ、風呂に入り眠りについたのだった。

そして、次の日、3人は2人が歩いてきた荒野地帯にいた。

レベルアップ

「よーし。それじゃあ、今日からお前らを鍛えていく。最初の3週間は戦いの基本などを学んでいく。そして、ラスト一週で特別実習を行う。いいな？」
「はいっ。」
「おっ、いい返事だな。教える俺も元気になってくるぜ。」
すると、カイルは剣を取り出した。

「さあ、お前らも剣を取り出してみろ。切れ味いいから気をつけろよ。」
カイルの指示を受けた2人はそれぞれ剣を掴んだ。すると、カイルが注意を促した。
「お前ら感覚がないんだろ？そして、意識すれば感覚が感じるようになる…。その場合、まずはその体になれることが大切だ。今、剣を持っているが、そのとき意識するのは掴んでいる手を足だけだ。」
「足と手だけ？」
2人は慣れない体に力を込めながら手と足に意識を持っていった。
「よし、いいだろ。それじゃあ、その状態で剣に力を込めて思いっきり振ってみろ。その時、掛け声をなんでもいいから言ってみろ。言われるがままに実践する2人。

そして、同時に2人はある言葉と共に剣を振り下ろした。
「テストなんてくそ食らえっ。」
&
「受験なんてくそ食らえっ。」
「なんつー掛け声だっっ！！！」
そうカイルが言った瞬間、ひろしの剣から黄色く光るボールみたいなものが出て、前方に飛んで行った。

「えっ。えっ、なにこれ。」
ひろしはテンパッた。そんなひろしにカイルは話しかけた。
「今のが魔法だ。さっきの黄色いのは魔法球といって熱と物凄いエネルギーを持っている。あれに当たると、今のお前らなら吹き飛んでやけどするだろうな。」
「へえーあれが魔法…。」
ひろしはまだ納得がいってなかった。一方でひろきは出なかったことに対して疑問を抱いていた。それに気づいたカイルが話しかけてきた。
「魔法が出ないのは意識が足りないってことだ。意識を高めれば簡単に魔法が出る。弱いやつだけどな。お前らは魔法が使える体になっているからな。」
「そ、そうですか。」
「それから、魔法を放つときちゃんと技名がある。それを叫んで魔法を放ったほうが魔法を放ちやすい。さっきの掛け声は今後一切使うな。」
「はい。」
「で、ちょっと見てろ。」
そういうとカイルは2人に背を向けた。そして、剣を構えると一気に振り下ろした。すると、カイルの剣から帯状の魔法が飛びだし、ずーっと長く伸びて行った。
そして、数秒後その帯は切れて先端ははるか遠くに飛んで行った。
「今のがさっきと違う魔法の魔法光線ってやつだ。これの方が威力は高くなる。というか、魔法を放っている状態で魔法の強弱がつけられる。しかし、これは近距離戦の方が効果を発揮する。あまり、魔法の操作性がないからな。遠距離で戦う場合はさっきの魔法球の方がいい。威力は最初の放った時で決まるが、放った後でも操作をすることもできるし、何よりスピードがある。だから、大体は魔法球を多く用いる。まあ、個人の自由だけどな。お前らには一ヶ月で

人並みより少し1．5倍くらいの強さの魔法が放てるまでにしてやる。いいな。」
「はいっ。」
2人の返事は高らかに響いた。
「そして、ひとつ。魔法を使う上で大切なことを言っておく、よく聞け。」
そういってカイルは2人の顔を見た。
「いいか。魔法って言うのは面白くてすごいものだ。回復もできるし、命を蘇らせることもできる。しかし、使い方を間違えれば町1つも簡単に消せる。それが魔法だ。くれぐれも魔法を使うのは注意するんだぞ。」
「はい。わかりました。」
その言葉を聞いた2人は頷いた。そして、カイルは微笑んだ。

そして、修行は始まった。
最初、基礎体力の向上に励みつつ、感覚がないという体への慣れ。
その後、魔法の練習と武道の習得。
そして、実践を試すような1対1のひろきとひろしによる。実践トレーニング等々…。朝から晩まで修行に励んだ。

食事などはすべてカイルにやってもらい。2人は集中して修行に励んでいた。

そして、三週間が経った。
いつもの通り朝、2人は起きて飯食って準備運動をしていた。すると、カイルがそんな2人に話しかけてきた。

「よーっし。おまえらの力はだいぶついた。これからは本番さながらの練習をする。一週間の間に俺を攻撃して、一発でいいからそれを当てろ。もし当てることができたら、修行は終わりだ。」

「なっ。カイルさんに攻撃を当てる？」
２人はこの３週間でカイルの強さは把握していた。魔法の威力は攻撃をされたことがないのでわからないが、相当強いものだと確信していた。そのため、２人は唖然としながらカイルを見ていた。
「ふっ、お前らならできるさ。しかも、俺はお前らに攻撃しないっていうかできないんだ。だから、いくらでもかかってこい。すべて受け止めてやるぜ。」
すると、カイルは剣を取り出し、体の前に持ってきた。
そして、
「時間は朝食後３０分から昼食の時間までそして、昼食後３０分から夕食までだ。場所は町が見える範囲までだ。どんな手を使ってもかまわないぜ。あばよ。」
と言って、カイルは走り出した。
「なっ！」
その光景を見た２人はあわてて追いかけた。

カイルは攻撃をしてこなかった。しかし、２人の攻撃をことごとくかわされた。
「ハハハッ。どうした？どちらか一人が食らわせればいいんだぞ。」
「（くっそ。カイルさんはえー。）」
「（どう当てろって言うんだよ。）」

そして当てられないまま４日が経った。そんな夕食の時間、３人は話していた。
「ちょっ、カイルさん。強すぎますって。」
「あーん？俺に攻撃当てられないようじゃ平和にできねえぞ。」
「そんなに強いのかよ。」

「ハハッ。でも、初日に比べるとだいぶ俺に近づいてきたぜ。ところどころヒヤっとする場面もあったからな。」

「マジっすか！？」
「ああ、当てられるのも時間の問題だな。」
「っしゃー明日、頑張るぞ。ひろし。」
「おう。」
「それじゃあ、早く寝ろ。」
そうして夜は更けていく。

翌日、いつものように2人はカイルを追っていた。

「まだ体がねむってんぞー。」
「くっそ。本当にあと少しなのかよ。」
ひろきの攻撃はことごとくかわされ、そのたびにカイルは笑っていた。

「よし、それなら。これでどうだ。」
ひろきはフェイントをかけながら連続的に剣を振り、カイルとの間合いを詰めた。しかし、それらの攻撃はカイルに触れることはなかった。
「あめ―ぞ。ひろき。」
そういって最後のひろきの攻撃を左に避けてかわしたその瞬間、ひろきは口を開いた。
「終わりだ。」
「なっ。」
なんと、カイルが避けた方にはひろしが魔法を放っていたのだ。
「いっけーっ。」
ひろしの掛け声と共に魔法球がカイルめがけて飛んできていた。
「チッ。」
すると、カイルは剣を瞬時に体の前に出し、体を隠した。そして、魔法は剣に当たった。
「フッ。危ねぇ。危ねぇ。」

「それはどうかな。」
「へっ？」
何かの気配に気づき、カイルは振り向いた。すると、ひろきが背後めがけて攻撃を仕掛けていた。
「なっ！」
その瞬間、カイルは地面に魔法光線を放ち、その反力を使い体を上昇させていった。その後、2人から距離をとった。

「ふーっ。ふーっ。危なかった。」
「くっそーっ。昨日の夜考えた作戦が…。」
「これでもだめかよ。」
「（こいつら…。俺の動きを読んできやがった。やっぱ若いと成長が早ぇ。）…たく。なかなかやるじゃねえか。」
カイルは2人を見つめていた。
「次こそ決めてあげますよ。」
「やれるもんなら、やってみろっ。」
そして、再度、追いかけっこは始まった。

昼が過ぎ、戦いは午後の部になった。それでもひろき達は苦戦していた。

「はーっ。はーっ。はーっ。疲れた。」
「どうした？限界か？」
「くそ、タフすぎんだよカイルさん。」
2人は息を切らしながらもカイルから目を離さなかった。

「おいっ。カイル。なにやってんだ。」
「んっ。」
カイルが振り返った。すると、いきなりカイルは殴られて吹き飛ばされた。

「か、カイルさん！！」
「ふっ。子供の面倒見てるのか。だらしねぇな。そんなんだからいつまでたっても攻撃できないんだよ。雑魚が。」
カイルを殴った男は笑いながら、カイルを見下ろしていた。男の体は２ｍ以上あり、人間ではない怪物のような姿をしていた。
「おめぇは、まだ下っ端なんだな。何も知らねぇ癖に無駄口たたくんじゃねぇ。」
そう言ってカイルは立ち上がりながら男を睨みつけた。
「な、なんだと。いつも逃げてばかりいるお前に言われたくないわ。」
「俺の強さをなめるなよ？」
「なんだと？」
「俺の教え子がお前を倒す。お前なんてあいつらだけで十分だ。」
「くっ。ふざけるなー。」
男は再度カイルに殴りかかろうとした。しかし、カイルはその攻撃を片手だけで受け止めた。
「うっ。」
「それとも何か？勝つ自身がないのか？」
「な、なめやがってー。あんなやつら簡単に消してやる。」
男は２人に向かってきた。
「ちょっ。待てー。」
「カイルさんっ！！」
「おまえらならいけるさ。そんなやつ。」
「いや無理だって。」
「消えろー。」
男は言葉を発しながら２人に殴りかかってきた。
「（あれっ。なんだろ。相手の動きが見える）。」

「（次にとる行動がわかる。）。」
そう感じた2人。そして、男の攻撃をスッとかわして見せた。
「な、なんだと！！」
男は驚きながらも再度攻撃をしてきた。しかし、それも2人は避けた。そして、いつの間にか男に攻撃していた。

「うごーっ。」
「男は軽く吹き飛ばされた。
「えっ！？」
「弱っ！！」
2人は驚きを隠せなかった。

「く、なんだこいつら。強ぇ…。」
「おい。ひろき、ひろし、一気に決めろ。消しちまっていいぞ。そいつ悪魔族だからな。」
カイルが遠くのほうで声をかけた。
「えっ。いいんですか？」
「ああ、そんな雑魚。悪魔族もいらねぇからな。」
「わ、わかりました。」
「きさまらー。俺をなめんじゃねぇぞっ。」
男は猛ダッシュで2人に向かってくると連続して魔法を放ってきた。
「ひろき。これ避けてあの技行くぞ。」
「ああ、わかった。合体魔法だな。」
そう計画を立てた2人は男の攻撃をかわして男との間合いを詰めていった。
「な、なにっ。」
「ん、あれは。」
「ひろき。今だ。」
ひろしは走りながら剣を光らせ、ひろきの前に出した。
「おうよ。」

ひろしの行動に答えるべく、ひろきも走りながら剣を光らせ、ひろしの剣の先端に自分の剣の先端を当てた。すると、剣先に大きな光が形成された。

「合体魔法…か。」

カイルが呟いた。その瞬間、2人の剣からは大きな魔法光線が出て、男を呑み込んだ。

「ぐぁぁぁあっ。嘘だろーっ。」

そして、数秒後、男は消えてしまった。

「ふーっ。やっと成功したな。ひろき。」

「ああ、タイミングばっちりだったぜ。」

2人はお互いに手を叩き合った。

「いやー。おまえら、よくやった。」

カイルが笑いながら近づいてきた。すると、2人は笑顔のままカイルに走って行った。そして、カイルに近づいたとき、2人は剣に力を入れて、思いっきり振ってきた。

「…っ!?」

カイルはすかさず、上半身を後ろに反らして2人の剣を避けた。そして、2人から距離をとった。

「お、おまえら…。」

カイルがつぶやいた瞬間、カイルの右頬から血が滴りだした。

「!!」

『ニヤッ』

それを見た2人は笑顔を見せた。

「く…。おまえら…。」

カイルは静かに呟き、睨みつけながら2人に近づいてきた。

「や、やっぱ今のだめか?」

「奇襲すぎたもんな。」

2人は顔をそれぞれ見合った。そうしている間にカイルが傍まで来ていた。
「おまえら……。よくやった。」
「へっ。」
カイルは2人に抱きつき、そのまま倒れた。
「いやー。あそこで攻撃されるとは思わなかったぜ。俺の負けだ。おまえら。」
「えっ。いいんですか?」
「ああ。隙を見せた俺が悪い。だから俺の負けだ。」
「あ、ありがとう…ございます。」
その後、カイルは2人を立ち上がらせた。

「あと、2日か。早かったなおまえら。どうするか…。もう渡すか。」
意味不明なことを言ったカイルは白と黒の円形の水晶を取り出した。
「よーし、おまえら。どっちか選べ。」
「なんですか、それ?」
「詳しくはあとで話す。だからどっちか選んで首につけろ。」
水晶には穴が開いており、紐が通っていた。ちょうど首にかけるようになっていたのだ。

「選べっていわれてもなぁ。」
「だな。それじゃあとりあえず、自分の取りたい方に触ろうぜ。」
「よし。わかった。」
2人はそう言って腕を動かした。そして、水晶に手を触れた。しかし、2人はそれぞれ別の水晶に手を触れていた。
「決まりだな。ひろき。お前が『白』。で、俺が『黒』。これでいいな。」
「ああ、シンプルに決まってよかったな。」
そう言いつつ水晶を受け取り、首につけた。その瞬間、2人の体に

異変が起きた。
ひろきは何かを守りたいという気持ちが強くなり、ひろしは何かを破壊したいという気持ちが強くなった。
「白いほうが天使族。黒いほうが悪魔族。」
カイルが呟いた。
その声を聞き、2人はカイルを見た。
「白をとったひろきお前は天使族の手助けをし、黒をとったひろしは悪魔族の加勢をするんだ。」
「えっ。2人とも天使族じゃなかったんですか。」
「ああ、神様に片方は悪魔族にするように言われた。」
「そうか…。俺が悪魔族か。いいだろう。いま、何かを破壊したくてたまらねぇんだ。」
「マジかよ、ひろし。」
「ああ。」
「それでいいな。よし、これでお前らは別々の道を歩いていくことになった。」
「ということは、いずれ、俺はひろしと戦う運命なんですね。」
「まあそうなるな。」
2人は落ち着きを取り戻していた。そして、カイルの話を静かに聞いていた。
「お前らに渡した水晶。それにはすごい力がある。いろんな経験したことを力として使うことができる。もちろん修行のことなんかも力として蓄えられ、いざというときに力を発揮する。だが、それを一度外してしまうと、今まで水晶に貯まった力は全部抜けてしまう。だから、絶対外すなよ。」
「はい。わかりました。」
「それから、ひろし。アイビスタウンだけは手を出すな。手を出したら俺がお前を殺してやるからな。」
「あっ、はい。」
「よし。おれの仕事はここまでだ。お前らは十分強くなった。さっ

きの戦いでわかっただろ。だからこれからは1人で生きていけ。じゃあなっ。って最終日に言いたかったんだけど、お前らが早すぎたから。まだ言わねぇ。その代わり、それぞれの族にぴったりの魔法を教えてやるぜ。」

「なんですか。ぴったりの魔法って？」

「ああ、天使族のお前は死者蘇生の魔法。そして、悪魔族の魔法は最後の切り札。自爆の魔法だ。どちらの魔法も命をとられる。しかし、うまくやれば生き延びることができる。それを教えようと思う。」

「死者蘇生なんてできるんですか？」

ありえない言葉を聞いたひろきがカイルに質問した。

「自爆ってグロいことになりませんか？」

変な予想を立てたひろしも質問した。

「ああ、死者蘇生はできる。そして、自爆してもそこら辺はちゃんと大丈夫だ。それに使うのは本当の最終手段だぞ。めったに使うもんじゃない。」

「まあ、そうですね。」

「よし。いいか。俺が教えるのはやり方だけだ。本番は自分自身でやれ。あと2日で覚えるようになるから。」

「わ、わかりました。」

「それじゃあ、今日はこれで終わりにする。早めに休んでおけよ。」

そう言ってカイルは2人に背を向け歩き出した。

「カイルさん。」

突然後ろで呼ばれた。その為、カイルは振り向いた。

「ありがとうございました。」

2人は頭を下げてお礼を言ってきた。

「おいおい。お礼を言うのは2日後にしろ。まだ修行は終わってな

いんだから。」
カイルは笑いながら2人の傍に行き、3人一緒に家に向かって歩き出した。

その日の夜…
「なあ、ひろき。これから俺ら別々になんだな。」
「ああ。そうだな。別々になって、違う立場になるか。」
「…なあ、ひろき。勝負しねえか。」
「今か？」
「違ぇ。そういう勝負じゃなくてどっちが強くなるかって勝負。お互い強くなったと思ったときに2人で戦うんだよ。」
「いいな。それ、通知表の勝負は分からなかったからな。それで勝負つけるぞ。」
「いいぜ。それまで死ぬなよ。」
「ったりめぇだ。お前こそ気をつけろ。」
「わかっているよ。」
「じゃあ、待っているから。」
「おうよ。」
そう言って2人は眠りについた。そして、翌日から別々の練習が始まった。
それぞれ魔法の感覚を掴みながら必死に練習した。
そして、いつの間にか2日は経っていた。

「っよし。これで修行はすべて終わりだ。ある程度、できそうにはなったがまだ完全じゃない。各自練習するように。」
「はい。」
「もう今日で俺ともお別れだ。楽しかったぜ。一ヶ月。」
「はい。俺も楽しめました。本当に修行してくださってありがとうございました。」
「本当に助かりました。ありがとうございます。」

2人はお礼を言って頭を下げた。
「そうだ。今がそれをいうタイミングだ。お疲れ。2人とも。」
そう言ってカイルは2人の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「よし、それじゃあ、そろそろ、出発するか。」
町の入口まで来たカイルは2人に言ってきた。
「でも、これからどこに行けばいいんですか？」
「あん。そんなのは自分で決めろ。別に旅をしながら悪魔族と戦ってもいいし、どっかに住んで暮らすのもいい。それは自分の自由だ。だけどひろし。お前には行く場所がある。だから、俺についてこい。案内するから。」
「あ、はい。そうですか。」
そして、カイルはひろしの腕を掴んだ。
「それじゃあひろき。もしなんかあったらアイビスタウンに帰って来い。できる限り協力してやるからな。」
そう言って歩き出した。
「か、カイルさん分かりました。お元気で。ひろしも頑張れよ。」
ひろきは手を振り、同じく別方向に歩き出した。

「おい、ひろき。」
突然後ろから声が聞こえてきた。それはひろしの声だった。

歩きながら、振り向くひろき。すると、ひろしはそんなひろきに叫んだ。
「ひろき。水晶を使うときは俺らが戦うときにしよう。それまで使うな。」
「…おうっ。分かった。約束だからな。」
「おうっ。」
その言葉を聞いたひろきは走り出した。それを見てひろしも走りだした。それをカイルはあわてて追いかけた。

こうして2人はそれぞれの道に分かれていった。

ひろきはどこかの町へ。ひろしは…カイルに連れられて…

「ところでカイルさん。俺はどこに行くんですか？」

「ん？魔王城だ。」

魔王城に向かっていった。

こうして、2人の物語は始まった。

レベルアップ（後書き）

次回から要約文になります

第1話　フォック村をみつける（前書き）

ここから要約文です。

第1話　フォック村をみつける

＞i19970―2018＜

ひろしと別れたひろきは海辺に来ていた。海辺といっても浜もなく高さ50?位しかない断崖絶壁の所である。そこの場所に立って、ひろきはあるものを眺めていた。それは、島全体が村になっているフォック村という島だった。なぜ島の名前がフォック村なのかというと、昔、このひろきが立っている断崖絶壁とあの島はもともと1つだったのが、地震の影響でフォック村の部分だけ離れてしまったのだという。だからフォック村島というらしい。しかし、400mくらいは離れていた。

しばらく眺めていると、フォック村から突然大きな音と共に煙が上がり、そして煙の後ろにドラゴンがいることが確認できた。それを見たひろきは400mなら行けると思い、海の上を走っていくという荒業で島を目指して突っ走った。そして、無事に着いた。これも修行の成果である。

ひろきが島に着いた時、もう既にドラゴンの姿はなくなっていた。残っていたのは廃墟と化した村の跡だった。それらを見渡していた時、助けを呼ぶ声が聞こえて来た。その声の所に行ってみると、建物の下敷きになっている人が助けを求めていた。
ひろきはその人を助け出し何が起こったのかと聞いた。すると、さっきのドラゴンはこの村の宝を狙って襲いに来る奴だという。「そんな宝、渡しちゃえばいいじゃん。」とひろきが言うと『その宝を島の何処かに隠したまま隠した場所を忘れてしまった』ということを言ってきた。

「村長は誰だよ。」と言うひろきだったが、実はひろきと話をしているこの男こそフォック村の村長、フォックなのだった。

フォックは村人を守るため村人を安全な所へ避難させ、自分1人だけでドラゴンに戦いを挑み見事負けたらしい。しかし宝は盗られなかった。なので、また明日ドラゴンが襲いに来るみたいだ。そして、フォックもまた1人で戦おうとしているらしい。その話を聞いたひろきは立ち上がった。そして「俺が倒してやる。」とフォックに宣言した。それを聞いたフォックはとても喜び、ひろきを村人がいる避難所へ連れて行った。

避難所では拍手が響いた。救世主の登場に拍手したのだ。村人の顔に希望が生まれていた。

翌日、やはりドラゴンがやって来た。そこへ颯爽と現れたひろきに対し、ドラゴンは笑いだした。

「こんなやつが相手かよ。」と。

その言葉を聞いた瞬間ひろきは一瞬にしてドラゴンの首を斬り落としたすると、ドラゴンはすぐに消えてしまった。

唖然とするフォック達。

ため息をつきスタスタと歩き出すひろき。一瞬時間が止まったがその沈黙は歓声へと変わった。

喜んでいる村人の中、フォックは1人ひろきの側に来てこう呟いた。

「ここに住んでこの村をこの世界を守ってくれないか。俺1人じゃ力が全然足りねぇし、雑魚一匹勝てやしねぇ。お前の力が必要なんだ。」それを聞いたひろきは、ちょうど宿を探していたので快く協力することにした。

ここに住むとなって家を建てなければならなかった。フォックが大工を呼ぼうとするとひろきはそれを止めて、自分で作り始めた。建築科の学校にいっていたのである程度造り方も知っていたし、カ

イルから剣の腕前を上げてもらったので仕口や継手も簡単に出来るのだ。家もできて、これからやっとひろきの世界を守る戦いが始まろうとしている。

第2話　チョック現る

ひろきは海を見つめていた。
この島と向こうの大陸とをつなぐ橋を造ろうとしていたのだ。あったほうが何かと便利だし、海を渡るのが面倒くさいからだ。そのような理由もあり、ひろきは橋を作り始めた。橋の施工には村人も手伝ってくれて、順調に作業は進んでいた。そんな中、誰かが船でこの島へ向かっているのが確認できた。

「チョックが帰ってきた。」
橋の手伝いをしていたフォックが、嬉しげにみんなに知らせていた。このチョックは『食べ物がなる木』という摩訶不思議な木をドラゴンに襲われたせいで食料が無くなった村の為、フォックが頼み探しに行ってもらったらしい。
この木の凄さというのは凄まじいものがある。

なんと木の根もとに海水を一定量掛け、頭の中で食べたいものを考えると、その考えたものが皿ごと木に生るらしい。そして、食べ終わった後、その皿を根もとに置いとくと次の日の朝には無くなっているそうだ。また『お任せ』と頭の中で考えるとバランスの取れた料理を出してくれるという。こんなすごい木を遠くの国まで1人で探しに行って、そして今日帰って来たのである。まあこのチョックは、小さい頃に親と離れてしまい、偶然この島に流れ着き、フォックの許で育てられたという過去がある。なので、今回のこの旅は『食べ物がなる木』の他に『父親を探す』という目的もあったのだ。なのでフォックはチョックを旅にいかせたのだった。

そんなチョックが島へ上陸した。
村人が駆け寄るとチョックはいきなり謝り始めた。なんと『食べ物

がなる木』を見つけて来たのに、ここにくる途中で誰かに捕られてしまったらしい。それを聞き驚く村人達、それを見かねたひろきは「俺が取り戻してやる。」と豪語する。
しかしチョックは驚いた。

「こいつは誰だ。」と。
当然の反応である。

ひろきが自分の事を説明し、やっと納得してもらった。そして、「取り戻してやる。」という言葉が、凄くありがたく思うチョックだったが、自分も一緒に取り戻しに行くという。自分の責任でこうなったのだから、自分で解決したいようだ。ひろきは快くそれに納得し、一緒に行くことにした。チョックの話によると、盗んだ犯人はこの島のどっかにいるという。早速2人は、犯人は捜し始めた。この時、フォックは橋造りに回ってもらった。

2人は島の北側の森の中にいた。しばらく歩いていると、物影に気づいた。何だろうと思い覗くと、それは犯人の姿だった。チョックが勢いよく飛び出そうとするとひろきがそれを止めた。相手の行動を確かめてから行けとのことだった。

しばらく様子を見ているとあの例の木を取り出した。それを見たひろきは、チョックに今居る場所の反対側に行って犯人の前に現れるよう指示をした。計画を実行すると、当然犯人はチョックの方を向いた。その隙にひろきが攻撃をし、犯人と捕らえることができた。やたらあっけなく終わってしまいあんまりしっくりこないひろきだった。

橋の所へ戻ってみると、橋は完成していた。これで不自由無く大陸へ行くことができるようになっていた。完成を見届けた後、取り

戻した木を村の中心に埋めることになった。まだ苗は小さいが海水を掛け想像してみると、本当に皿ごと頭の中の物が木に生った。それを見て村人は大喜び。これでやっとフォック村の食物不足が解決したのでした。

第2話　チョック現る（後書き）

食べ物がなる木って、どんな木だよ…

第3話　早口言葉対決（前書き）

しょーもない話です。

第3話　早口言葉対決

ひろきはある日、剣の手入れをしていた。この剣というのは、魔力が宿っているとカイルから教わっていた。家を造るときに使ったのもこの剣だった。

手入れが終わると、散歩に出かけたひろきは不思議の穴を発見した。ひろきがその穴に入ってみると、1人の男が穴を掘っていた。話を聞くと、この村の宝を狙って地面を掘って探しているらしい。つまりひろきにとって敵である。すかさず止めるよう言うひろきに対し、その男はシカトした。それに腹を立てたひろきは剣を抜いた。それを見た男は、すかさず作業を終わりにしてひろきの方を向いて「俺は、傷つけあうのは嫌いだ。だから早口言葉で勝負しないか。これでお前が勝ったら俺は出て行く。だが、俺が勝ったらお前は立ち去れ。」

いきなり勝負を仕掛けてきやがった。ひろきは剣をしまい、分けも分からん早口言葉勝負をすることになった。

対戦方法は至ってシンプル。どちらかが噛んだら負けである。お題は『カツ丼天丼親子丼、オニギリ味噌汁ゆで卵、朝飯昼飯夕飯、茄子に胡瓜にデカ南瓜、ひーぶにちびたこおにぎりくん、アップルカップルパイナップル』という訳の分からん文章だった。

これを聞いた瞬間、ひろきは勝ちを確信した。なんとこの文章は、ひろきが元の世界で作ったことのある文章だったのだ。なぜこんな世間に発表してないような文章が出てくるのかは謎だが、自分で作ったやつを噛むことはまず無いと思ったのだ。

勝負が始まったが2人とも手を抜かない。2時間の死闘の末、やっと男が噛んでくれた。こうして2人の戦いは幕を閉じて、男はしぶしぶ帰っていった。

穴から出ると丁度フォックと出会った。「何してんだ。」と聞くフォックに対し「暇つぶし。」と答え2人で帰っていった。

その夜、1人の人物が穴の側に立っていた。そいつは人間とは思えない姿をしていた。

「ウケェケェ…よさげな穴ですね。この穴を使えば、憎っくきフォックを消すことができますね。フフフ。さあ覚悟しときなさい。フォックちゃん、明日がお前の命日ですから。ウケェケェ…」

不気味な声がフォック村中に響き渡った。

第3話　早口言葉対決（後書き）

なぜ、こんな早口言葉を思いついたのか。当時（小1）の俺は変だった

第4話　生き埋めにされる二人

フォックとひろきは、2人で魔法の修行をしていた。
フォックは魔法の杖を持っていて少し魔法が使えたのだ。しかし、これから先、そんな魔法では通用しないので、ひろきが魔法を教えていたのだった。その様子をチョックは隣で見ていた。

「よし、合体魔法やろうぜ。」
フォックの魔法がある程度使えるようになった時、ひろきは言い出した。合体魔法とは、2人の魔法の力の加減と魔法を出すタイミングが同じでないと出せない技であるが、2人分の魔法が合わさっているので威力は単純計算で2倍になる大技だ。それを挑戦すべく、ひろきはフォックに提案したのだった。しかし、いくらやっても成功することができなかった。とうとう昼になり、休んでから始めようと昼休みをとった。
ひろきは一旦家へ戻ることにした。ひろきが行ったあとフォックは弁当を忘れていることに気づきフォック達も家へ戻ることにした。

ひろき達はフォック村にある森の中で修行をしていた。その森に入るには1つの道しかない。当然ひろき達もここを通るわけだが、この道の出口付近に人影があった。

「ウケゃゃゃ…。フォックは必ずここを通るはず、だからここで待っていればフォックに出会い、あいつを消すことができる。この穴でな。」

間もなくして、ひろきがここを通りかかった。
「ん、あいつは…一般人か、なら穴に落とさなくていいだろ。」
そう言って工事中の看板を立てた。

「はーい、工事してます。気をつけてください。」
「おつかれっス。」
難なく素通りしたひろき。どうやらひろきの情報はまだ広まってないらしい。その5分後、フォックとチョックが通りかかった。しめしめと思ったこの男、なんと先ほどの穴に枝や土などを用いて穴に被せ、いわゆる落とし穴を作っていたのだった。何も知らないフォック達、案の2人は穴に落ちてしまった。穴の底には人、1人分位しか入りそうもない透明なケースが並んでいて、そのケースに1人ずつ入ってしまった。2人が入ったのを見届けると、その男はすかさずケースの蓋を閉め、中からでは開けることのできないようにしてしまった。すると、男はその穴にコンクリートを流し入れ始めた。しかも、早乾性の早強ポルトランドセメントだった。

もう絶対絶命の2人に、再びひろきがその場へ登場した。それに気づかずフォック達のことを独り言で言っていた。
それを聞いたひろき。
当然ひろきは怒り、その男を問い詰めた。

この時、この男の名前は「ウケケ星人」とひろきによって決められた。今までのことを聞いたひろきは高くジャンプをして、すでに固まってしまったコンクリート目掛けて魔法光線を放った。するとコンクリートは粉々に砕けて、中のケースも破壊した。すると、瓦礫の中からフォック達が姿を現した。まあ無事なようだ。出てきたフォックに対しひろきは合体魔法をやろうと提案。フォックは考えた後それに同意、そして逃げるウケケ星人に対し、ついに2人の合体魔法が完成し、見事ウケケ星人を一撃で倒すことができたのだった。
3人は穴を埋めなおし、また修行に向かっていった。

第４話　生き埋めにされる二人（後書き）

こんな短時間でコンクリートが固まるのか謎である

第5話　カービィのやる気増幅計画（前書き）

カービィ登場

第5話　カービィのやる気増幅計画

ある日、誰かがフォック村に来た。それは、悪者によって破壊されてしまった『星の結晶』たる物を直すべく、壊した悪者を倒そうと旅をしている人達だった。
もちろん天使族である。
その人達は旅の途中、休ませてもらおうと立ち寄ったのがこのフォック村だったのだ。その旅人達はフォック村でひろきと出会うのだった。

ひろきは旅人達と話をし、自分も協力するという。旅人も喜び、ぜひとオッケーしてくれた。しかし、ここである事実が旅人から語られた。なんと、リーダーのカービィという奴のやる気が敵に吸い取られ、ぜんぜん無くなってしまったというのだ。
カービィは大食いで雑魚キャラでもなんでもかんでも飲み込んでしまうらしい。そして凄い事に、戦っている相手、若しくは仲間を吸い込むと、吸い込まれた奴が持っていた能力や技をコピーし、カービィ自身がその技を使えるようになるらしい。とても頼りになる奴だという（知ってるよね？）

ひろきは何とかやる気を出してもらえるようにあれこれするがどれも失敗に終わってしまった。確かに重症だ。そんな中、誰かがひろき達に近づいていた。それはまさしくカービィ達が探していた悪者であった。

突然の訪問にビックリするひろき達だが、すかさず攻撃態勢に変え相手の動きを見ていた。しかし、カービィのやる気は戻っていない。敵の攻撃は激しく、カービィの仲間達は全く歯が立たない。
ひろきも魔法で応戦するも敵は手強くなかなか倒れてくれない。そ

して、敵の攻撃も破壊力があり、徐々にみんなの体力も減ってきてしまった。そして、ついにカービィの仲間達は体力の限界になり倒れこんでしまった。
ひろきは1人で戦うもやはり手強い。しかし、ひろきは何度となく倒されたり吹き飛ばされたりしてもすぐ立ち上がり、戦いを止めることはなかった。
その姿をカービィはずっと見ていた。そして、ついにひろきが体力の限界で倒れ込んだ時、カービィが立ち上がった。

「初対面の人がボク達の為に、あんなぼろぼろになるまで戦っているのに、ボクは何をしているんだ。」そう言ってカービィは敵の前に立ちはだかった。ひろきの努力がカービィのやる気を取り戻したのだった。
カービィはいきなりひろきの剣を吸い込んだ。すると、カービィは光の剣をもった剣士に姿を変えていた。それと同時にひろきの剣はカービィの体内から外へ出されていた。

カービィが光の剣を一振りすると、その剣から魔法光線が出て敵目掛けて放たれた。その魔法はひろきの魔法をも上回る威力の魔法光線であった。多分、ひろきの剣の魔力をコピーしその魔力を一気に出したからであろう。その魔法光線を食らった敵はひろき達が敵の体力を消耗させていたこともあり、一発で倒せることができたのだった。
攻撃が終わった時、カービィは元の姿に戻っていた。そして肝心の『星の結晶』も、元の形に戻ったとカービィ達に伝えられた。これによってカービィ達の冒険は終わりを告げた。
体力も回復し動けるようになるとひろきは一言カービィにいった。
「仲間にならない？」
カービィ達は勿論オッケー。こうして新しい仲間、カービィ達が加わった。

第5話　カービィのやる気増幅計画（後書き）

これを考えた頃、６４のカービィがはやってました。

第6話　石になるひろき達（前書き）

石になるって設定、多いよね

第6話　石になるひろき達

いつもと変わらぬ平凡な朝。しかし、今日はひろきが何やら仕度をしている。何処かに行こうとしているらしい。しかも1人で。

ひろきが家を出ようとするとカービィがひろきの方へ向かってきていた。カービィはこの間仲間になり、一緒に戦ってくれると言ってくれた。その為、いちいちカービィの故郷の『プププランド』からフォック村に来るのは面倒なので、フォックに相談し、空き家を貸してもらえることができたのだった。しかし、カービィの仲間達は色々と忙しい様で故郷に帰って行ったのだった。

カービィは何処に行くのかとひろきに尋ねた。するとひろきは、ここフォック村に来る途中に見つけた不気味な屋敷に行くという。それを聞いたカービィは「ボクも行く。」と言い出し、一緒に屋敷へ行くことになった。

その屋敷に着くと、ひろきとコカービィは妙なオーラを感じ取った。ワクワクして来たひろきはすかさずその屋敷に入った。中に入るとやたら薄気味悪いし、ホコリっぽくて誰もいなそうな雰囲気だった。

とりあえず各部屋を調べていくことにした。そして最終的に誰もいないことが明らかになった。ただし、1つ鍵のかかった部屋がありそこは調べることが出来なかった。

愕然として帰ろうとドアに近づいた時、急にドアが閉まった。驚く2人。そしてその直後、2人の後方でなにやら声が聞こえてきた。

「ウケェケェ…。あなた達は外に出しません。」

ひろきは最初の言葉でそいつが誰だか分かった。

「ウケケ星人だな。」

そう言うとそいつはひろき達の目の前に降り立ち言葉を発した。

「正解だひろき。」

名前はウケケ星人でいいらしい。

そいつの登場にはひろきは驚いた。なんせこいつは第四話で倒したはずだからである。なぜ今生きているのかは本人の口から言われた。なんと、こいつはロボットだったらしい。だから、攻撃を食らっても頭さえ残っていれば復活できるらしいのだ。それを聞いたひろきは「もう一度頭ごと吹き飛ばしてやる。」と言い、剣の先から魔法を出しウケケ星人目掛けて放った。すると、敵は避けようともせずただ突っ立っていた。そこへ魔法が飛んでくると、あろうことか魔法が避けて攻撃はかわされてしまった。

驚くひろき達に対しウケケ星人は笑っている。そして、変なステッキを取り出した。

「このステッキがあれば、お前らの攻撃は効かん。」

そう言い張るウケケ星人に対しひろきはある提案を閃いた。そうするとひろきはカービィに「俺を吸い込め。」という。

そして、吸い込みひろきが体内から出るとそこにはひろきとひろきの能力をコピーしたカービィの姿があった。つまりひろきが2人いることだ。

2人で攻撃するように誘うウケケ星人。やたら余裕な顔をしている。

そして、挑発に乗ったひろき達が魔法を出しウケケ星人に放った。

と、その時、掛かったなと言わんばかりにステッキをひろき達に向け光らせた。そして、ひろき達は光に呑まれた。光がなくなるとそこには無残な姿になった2人の姿があった。魔法も体も何もかもすべて石へと変えていたのだった。

「ついにあの時の無念が果たせた。ひろきを倒した。もう怖くない。ウケケケケ…。」

フォック達は不審に思っていた。村からすぐ近くの所にある屋敷に行くと言うので、そんなに時間がかからないと思っていたのに、一週間たっても帰ってこなかったからだ。もしかしたらカービィの故郷に行ったとの憶測があったが、とりあえずその屋敷に行ってみることにした。

屋敷に着いたフォックとチョックは、とりあえず中に入ることにした。中に入ると何やら石像みたいなものがいっぱい並べられているのが確認できた。それらを見ていくとフォックはある1つの石像に目が行った。

「カービィ…。」

フォックは驚いた。それをチョックに見せようとした時、チョックもまたとんでもない物を発見してしまった。

「ひろきくん…。」

チョックの目の先には、石像と化したひろきの姿があったのだ。それらを見て唖然としているフォック達の前にウケケ星人が現れた。

「ようこそ我が家へ。やっと来てくれましたね、お2人さん。」

どうやらここがウケケ星人の家らしい。

「素晴らしい石像でしょ。こいつら全員、俺に戦いを挑んできたお馬鹿ちゃん達です。ホント間抜けな顔をしちゃって。」

そう言ってひろきの石像をぽんぽんと叩いた。当然怒るフォック。そして怒りにまかせ魔法で攻撃したフォック。結果はひろき同様石にされてしまった。残ったのはチョックだけになってしまった。どうするか悩んだ挙句、体当たりという平凡な行動に走った。しかしそれが功を呼び、体当たりは見事ウケケ星人に当たった。どうやらステッキは打撃攻撃には通用しないようだ。体当たりの衝撃で鍵が

ウケケ星人の懐から落ちた。チョックはそれをすかさず取り、屋敷の奥へと走って逃げた。後ろからウケケ星人が追いかけてくる中、チョックは急いで鍵の掛かった部屋を探し、ついにその部屋を見つけだした。

慌てて中に入ると、そこにはたくさんの檻が置かれていた。そしてその檻の中から声が聞こえてきた。

「ここから出してください。」

どうやら捕まっているらしい。するとチョックは、持っていた鍵でそれらの檻を開けていった。

「ありがとうございます。われわれ『ポケモン』達は、ここの主人に捕まえていたのです。助けてくれた恩もあります。私達も一緒に戦います。よろしいですか。」

もちろんと言うチョック。

「ありがとうございます。私、このポケモン達の故郷の国で王女を勤めているミュウという者です。よろしくお願いいたします。」

そのお礼を聞いたあと、部屋から出ようとするとそこにはウケケ星人の姿があった。しかし、大きな戦力を手に入れたチョック達はウケケ星人を追い詰めた。しかし、ステッキを持っているのでむやみに攻撃できない。

そんな時、ミュウがチョックの横からウケケ星人の後ろへ一瞬にして移動した。テレポートだ。そして、そのままステッキを取った。その後、ステッキをチョックに渡し形勢は逆転。なんとか取り返そうとウケケ星人が攻撃を仕掛けた時、チョックはステッキを使いウケケ星人を石に変えることに成功したのだった。

その後、みんなを元に戻そうと石像を見てみると、みんな攻撃する

直前に石に変えられていたことに気づいた。すると、チョック達はウケケ星人の石像を真ん中にしてそれを囲むようにひろき達の石像を並べた。そして、元の姿に戻すと、みんなの攻撃はウケケ星人に向け放たれたのだった。その破壊力は屋敷ごと吹き飛ぶほどのものだった。

そして、事件は無事にチョックの活躍で解決することができたのだった。

石にされていたみんなはそれぞれ帰っていった。

その中で一匹のハムスターがひろき達を見ていた。

第7話　ハムチィーとの出会い（前書き）

私もハムチィーというペンネームですが、作中に出てくるのはまったくの別人です

ちなみにハムチィーの容姿←
＞ｉ１８８９５―２０１８＜

第7話　ハムチィーとの出会い

あの屋敷騒動から3日が経った。その昼時、誰かがひろきの所に訪ねてきた。それはハムチィーと言う名前でハムスターらしき姿の生物だった。

話を聞くと、この間の石にされた時、ハムチィーも石にされていて戻った時に、ウケケ星人に攻撃を放つときひろきの魔法を見て強い憧れを抱いたらしい。そして今日はひろきの弟子にしてくれるように頼みに来たらしい。

ひろきはそれを聞いて、今日はだるいから後で来てくれと言った。どうやらこの間の戦いの疲れが残っているらしい。すると、ハムチィーはひろきの肩をもみ始めた。するとひろきはため息をつき、リラックスできたとハムチィーに言ってくれた。でも今日は帰ってくれという。しぶしぶ帰ることになったハムチィーだが、3日後に来てくれと言われたのでまだ希望は無くなったわけではなかったのだ。

3日後、ハムチィーは再びひろきの所へ訪れた。すると、ひろきはいきなり「テストをする。」とハムチィーに言い出した。突然の課題に戸惑ったが、ハムチィーはそのテストを受けることにした。

テスト内容は自分の得意とする技の威力や身体能力の調査。たとえば素早さ防御力などを見るテストだった。なぜここまでするのかというと、もし弱いのに仲間という理由で戦いに繰り出された時、命を落とす確立が高いからだ。だからひろきは、その尊い命を無駄にしないようにテストを受けさせ、戦いでも大丈夫というレベルに達しているかどうかを確かめたかったのだ。しかし、ハムチィーはそのレベルに達してはいなかったのだ。ハムチィーがもう諦めかけていた瞬間、突然ハムチィー達の前に敵が姿を現した。

ひろきはハムチィーにそいつを倒せたら合格にしてやるといった。

それを聞きハムチィーは1人敵へと立ち向かって行った。ハムチィーが攻撃をしても撥ね返されるし、魔法を使ってもぜんぜん効いてない。しかも相手の攻撃はハムチィーを軽く吹き飛ばしてしまう程の攻撃を繰り返し続けて攻撃してきた。ハムチィーは幾度となく吹き飛ばされるがそれでも再び立ち上がり、敵に攻撃を仕掛けていった。その姿をひろきはじっと見ていた。ただ腕がかすかに震えているのが確認できた。ひろきは助けてやりたいけど、それじゃあハムチィーの役に立たないので、必死に我慢しているのだった。

そして、とうとうハムチィーに敵の最高の技を当てられてしまい、ハムチィーは吹き飛んだ。そして、もう立ち上がることさえできないようになってしまった。慌てて近寄るひろき。そして、ハムチィーを抱え「その諦めず自分の限界まで耐えて、何度も戦いを挑んだことは、めったにできることじゃない。それができる君は合格だ。」と言ってハムチィーに微笑んだ。

「ありがとうございます。」

そう言って気を失ってしまったハムチィー。ひろきはハムチィーをそっと寝かせ、敵の方を向き「ハムチィーの仇とってやる。」と一言。その瞬間、敵はひろきの放った魔法の中で灰となり存在をけされたのだった。

ハムチィーが目を覚ますとひろきやフォック、チョックにカービィとひろきの仲間が勢ぞろいしていた。「これが、俺の頼れる仲間だ。そしてハムチィー。お前も仲間だ。俺の大切な仲間さ。よろしくなハムチィー。」「こちらこそ、よろしくお願いします。」

こうしてちょっぴり弱いが辛抱強いハムチィーが仲間になった。

第8話　フォック村大ピンチ

ある日、ひろきは爆発音で目覚めた。島の北部（フォック村は北が荒野地帯、東が村、南が森、西が山道となっている。）の方で音がしたようだ。駆け寄ってみると、そこには荒野を穴だらけにしている敵らしき者がいた。どうやら村の宝を探しているらしい。敵はひろきに気づき、作業を中断してひろきの方に近寄ってきた。

「お前何してるんだ。」

「宝を探してる。」

そうきっぱりとそいつが言うと、ひろきの拳が敵へ向かっていった。そして、攻撃が当たり吹き飛ばされた。しかしよく見ると、吹き飛ばされたのはひろきの方だった。

「俺に喧嘩売るの。」

そう言って敵はニヤリと笑った。

立ち上がったひろきは魔法をぶっ放した。しかし、敵はそれを止めてその魔法をひろきに返した。ひろきの魔法は自分自身を襲い、ひろきはまた吹き飛ばされた。そして、敵は笑みを浮かべていた。

「お前、何者だ。」

ひろきは質問した。そいつは快くそれに答えた。

「俺はイガル、ここら辺の地域じゃ俺より強い奴はいない。」

自身たっぷりに言い放った。そんな会話をしている間に他の奴らも集まってきた。

フォック達はひろきの姿をみて攻撃態勢に入った。ひろきもなんとか立ち上がり、攻撃態勢に入った。みんなが一斉に攻撃を仕掛けたがそれでも歯が立たない。何とか持ちこたえたひろき達。そんな中、イガルはフォック目掛けて突っ込んできた。イガルの攻撃は凄

まじく、フォックのガードをもろともしないでフォックに攻撃を食らわした。フォックは攻撃の勢いで飛ばされ、海の中へ落ちていった。それを助けるべくひろきはハムチィーに助けに行くよう命じた。ハムチィーはすぐさま助けようと海へ飛び込んだ。ハムスターなのに泳げるらしい。ハムチィーが助けに行っている間にもイガルの攻撃は続いていた。

そんな中、カービィはコピー能力を使おうと試みて、一瞬の隙をみてイガルを吸い込み、能力をコピーした。そして、その能力を使い、イガル目掛けてイガルが使える強力魔法を使いイガルに放った。この攻撃にはイガル自身も防ぎきれないようで、諸に自分の魔法を食らっていた。しかし、イガルは立っていた。

そして、怒りながらカービィ目掛けて走ってきた。カービィのコピー能力はもう無くなっていて、カービィ自身もさっきの魔法で体力を消耗し身動きが取れない状態であった。そこへイガルが向かってきたのである。ひろき達もぼろぼろで身動きがとれない状態であった。そして、ついにイガルの攻撃がカービィに当たってしまった。その攻撃はなんと蹴り。しかし、イガルの蹴りは重たく、その足で蹴られたカービィは遥か彼方まで飛んでいってしまい、とうとう姿は見えなくなってしまった。蹴り飛ばした後も、イガルの攻撃は倒れこんでいるひろき達に向けられた。

もうぼろぼろでまともに戦えないひろき達、ハムチィーとフォックも戻ってこない。ひろきが諦めかけた時、何かが空から降ってきた。それはカービィだった。ワープスターという乗り物乗ってやってきたが、飛ばされた方とは反対の方向からやってきた。なんと、この世界の地形も球形をしていて地球の半分くらいしかないそうで、なんとカービィはこの星を一周して戻ってきたのだ。

それを見てひろきはあることを閃いた。するとひろきは、最後の力

を振り絞って高くジャンプした。そして、その高さからひろきの中での一番強力な魔法光線を空めがけて発射した。そして、地面に着くとイガル目掛けて魔法を放った。イガルはそれを魔法で受け止め跳ね返そうとした。しかし、ひろきが耐えて跳ね返せない状態にある。どちらも必死で耐えている。

それから5分が経過した。ひろきはまだ耐えている。すると、突然イガルの後ろから魔法光線が飛んできた。さっき空に放った魔法光線だ。イガルはそれに気づいていない。ひろきは少し移動した。するとイガルも移動する。そして、とうとうひろきはイガルが魔法光線に当たる位置まで連れてきた。そんな時、とうとうイガルがその存在に気づいた。その時、魔法を耐えている力が緩んだ。それをひろきは見逃さずその瞬間に力を一気に込めた。すると、イガルはどうすることもできなくなり、ついに2つの魔法に挟まれてこの世から姿を消すことになった。

その後、ひろきは倒れこんだ。丁度その時、ハムチィーがフォックを連れて島へ上がってきた。どうやら無事のようだ。こうして何とか無事この村を守ることができたのだった。

第8話　フォック村大ピンチ（後書き）

あえて言おう、ここら辺一帯で強いのだ

第9話　ジャンプに富んだ赤色戦士

ある日、散歩をしていたひろきは赤色の服を着た手から火の玉を出す青年がモンスターらしき奴と戦っている姿を目撃した。ひろきはその様子を物陰に隠れて眺めていた。するとその青年は、ひろきよりも高いジャンプをしてヒップドロップし、モンスターを倒したのだった。ひろきは早速仲間になってもらおうと近寄って話すと仲間にならないと言ってきた。その為、名前を聞いて、とりあえず一時帰ることにした。青年の名は「マリオ」という名前だった。

それから一週間後、マリオがまたモンスターと戦っているのをひろきが発見した。しかし、戦っている様子がこの間と違っていて、マリオがピンチな状態になっていた。ひろきはすぐさまマリオの所に走った。その間、モンスターはマリオに止めを刺そうとしていた。ひろきはぎりぎりで間に合い、マリオの盾になってひろきが攻撃を受けた。突然の乱入にビックリしたモンスターに対し、ひろきは受けた攻撃の倍ぐらいの攻撃力の魔法を使いモンスターを撃破した。

モンスターが片付くとひろきは、もう一度仲間にならないかと聞いた。

するとマリオは「仲間にならない。」と言う。

しかし

「助けてくれてありがとう。礼をいうぜ。助けてくれたお礼になんか恩返しさせてくれ。」

と、言ってきた。ひろきは何も要らないという。ただお礼がしたいのなら、俺の仲間になれという。マリオはしばらく考えた後、仲間になることを決意した。こうしてひろきの許に新しい仲間マリオが加わったのだった。

第9話　ジャンプに富んだ赤色戦士（後書き）

ルイージは出てきません

第１０話　フリーザーの宅配便

チョックが助けたミュウさんが王を勤める『ポケモン村』に住んでいるフリーザー。彼は世界中に荷物を届ける仕事をしている。いわゆる宅配便である。そんなフリーザーをひろきは芝生で横になっている時に発見した。すると突然、銃声と共にフリーザーが打たれて下に落ちてしまった。慌ててひろきは駆け寄り様子を見た。すると、どうやら掠り傷だけで済んだらしい。その後、ひろきが辺りを見回すと誰もいなかった。どうやら逃げたらしい。フリーザーは大丈夫といってまた飛び立った。

幾日かして、又フリーザーが打たれたらしい。今度は腹部に当たったらしくポケモン村にある病院（ポケモンセンター）に運ばれた。ひろきは見舞いに行き、撃たれた時の状況を聞いた。しかし、犯人は見えなかったという。するとひろきは、無事でよかったことを伝え家へ戻った。

家に着いたひろきは家の戸を開けた。すると、中から銃を持った怪人が現れた。そして、ひろき目掛けて発砲。弾はひろきの頬を掠めた。しかし、弾に当たった後、何だか当たった所が痺れてきたのだった。その隙に怪人は逃げていった。ひろきは痺れていて追うことができなかった。

ひろきはフォックに相談した。すると、あの怪人は自分の魔力を使い自分好みの銃をつくることが出来るという。となると、ひろきが当たったのは雷性の銃で弾も雷なので痺れがきたことが証明できたのだ。問題はどうやってその銃を攻略するかが問題だった。しかし、解決策は見つからず、土壇場で何とかするという結論に辿りついた。

あとはどうやって犯人を見つけるかを考え始めた。すると、その会議にファイヤーとサンダーが突如参加した。そして２匹は自分らが

囮になると言う。そして、ひろき達は2匹の背中に乗って犯人の姿を確認してほしい、そして倒してほしいと言うのであった。2匹が危険だがそれしか方法は無いとしてその作戦で行くことにした。

そして次の日、ついに作戦実行。2人は2匹の背中に乗り飛び立った。しばらく空から見ていると、地面で何か光る物を発見する。ひろきはすぐ避けるように指示。すると、ぎりぎりのところで弾が飛んできた。ターゲット発見し、2匹は急降下を開始した。弾は幾度となく飛んでくる。

それを見事にかわしながらどんどん犯人に近づいて行った。そしてその瞬間、怪物は銃を大砲の形に変えてぶっ放した。すると、弾はフォックの乗っているサンダーに当たり、地面に叩き落されてしまった。

怪物は再度狙いを定め、ぶっ放そうとしている。それを止める為、ファイヤーはサンダーの前に炎の壁を作り標的を定めなくした。ファイヤーはサンダーの前に来て、何とかサンダーを守ろうとした。すると突然、炎の後ろから大量の水が放たれた。ファイヤーは水を浴び弱ってしまう。絶体絶命の状態に怪人は大砲へと形を戻し、2匹と2人目掛けてぶっ放された。その瞬間、後ろから破壊光線が飛んできて弾を粉々に粉砕した。

振り向くとそこにはミュウさんの姿があった。どうやら、3匹を傷つけられたことに怒っているらしい。すると、ミュウさんが怪人に対し金縛りをかけた。そして、ひろき達に攻撃するようにいった。2人は合体魔法で攻撃し見事怪人を倒すことが出来たのだった。今回はミュウさんの助けがあり、何とか解決した事件だった。

戦いが終わった後、2匹は病院へ運ばれて、無事に今回の事件は解決できた。。

第１０話　フリーザーの宅配便（後書き）

時代がこうなんだよ。このころはポケモンも赤と緑しか出てなかったんだよ。
ミュウが憧れだったんだよ。

第１１話　聖戦士タケル現る（前書き）

あっ。これ、ビックリマン２０００の主人公です。
あの頃に考えたものです

第11話　聖戦士タケル現る

ある日、フォック村の隣の島に、ミュウさんがポケモン達を連れこの島に引っ越してきた。この世界は土地に関して基本的自由の世界なので、無人島だった島をミュウさん達が使うことになったのだ。それにより、フォックやひろきとすぐコンタクトが取れ、戦いの時もすぐ駆け付けることができるからである。ミュウさんが一緒に戦ってくれるといった時は誰もが驚いたが、ミュウさんの実力はひろきとの修行後のフォック並だという。いい戦力ができたと誰もが喜んだ。

今までひろきを含め7人の正義のために戦ってくれる奴らがいるが、その中でまだ、剣士と呼ばれる剣使いがいない。ひろきは剣を持っているが、ほとんどその剣から出される魔法で戦っている為、純粋な剣士というものではないのだ。それから、7人ほとんどが魔法を使えるが、命中率があまりよろしくない。（ひろきは別）なので命中率がいい奴を仲間にして命中率を上げる練習をしたいので、そのような仲間を探していたのだ。

ある朝、フォックは普通に朝食を食べていた。すると、インターホンが鳴った為、外へ出るといきなり戦いたいと頼んできた。そいつは『タケル』と名乗り、自分が武者修行しているので戦いたいというものだった。それを聞いたフォックはその戦いに挑んだ。

フォックは魔法で攻撃、それをタケルは軽いフットワークでかわし、フォック目掛けてブーメランらしき物を投げた。すると、それはフォックの頬をかすった。そして、血が出ていることに気づいた。どうやら刃物がついているらしい。あっけにとられているうちにタケルはでかいブーメランを取り出しフォックに投げた。フォックは何

とかそれを避けるが、ブーメランの性質を忘れていたらしく、戻ってきたブーメランにクリーンヒットした。それによって倒れたフォックにタケルは短剣をフォックの首元に当てた。フォックは参ったと一言。この勝負タケルの勝利である。

フォックはタケルに仲間にならないかと誘う。しかし、答えはノー。自分より弱い奴の仲間にはならないというのである。それならばとフォックはひろきを紹介する。ひろきは話を聞き、承諾して戦いを挑むことにした。

ひろきもフォック同様、魔法で攻撃。それらをぎりぎりでかわし、ひろき目掛けて先ほどの刃物付きブーメランを投げた。それをひろきは手で取り、タケル目掛けて投げ返した。タケルはそれを避けて次の攻撃に入ろうとした時、もう既にひろきの魔法がタケルに向かっていた。タケルはそれに当たるがなんとか持ちこたえた。すると、タケルは物影に隠れ、一時様子を見ることにした。ひろきは地面に魔法を放ちその反力で体を上げていき、５０メートル上空の位置にとどまった。そして、タケルの位置を確かめ、降りようとした時、ブーメランが飛んできてひろきの足へ当たった。約５０メートル離れているのにブーメランで足の脛を正確に狙うのはすごいことである。

ひろきはバランスを崩し、頭から落ちていった。しかし、ひろきは地面に着く瞬間、右手から魔法光線を発射。すると、魔法の勢いで体が空中に浮いている状態になった。ひろきは右手で体を支えつつ、左手でタケル目掛けて魔法光線を放った。タケルはそれをでかいブーメランで受け止めた。なんとか魔法は逸らすことができたが、魔法の勢いでブーメランが吹き飛ばされてしまう。それを見たひろきはその後、体を支えている右手の魔法光線をタケルの方に向けた。それと同時にひろきは体を捻り、なんとか着地を成功させた。

突然の行動にあっけにとられたタケルはその魔法を避けることができず、その魔法を食らってしまいタケルは倒れこんだ。この勝負、ひろきの勝ちである。戦いが終わった後、ひろきはタケルの側に行って話しかけた。

「お前の命中率は凄い。ぜひその力を使い、一緒に戦ってくれないか。」

その言葉にタケルは

「自分より強い奴が現われたらそいつの仲間になろうと思っていた。よろしく頼む。」

そう言ってひろきの手を握った。こうしてタケルが8人目の正義の為に戦ってくれる奴となった。

第１２話　ひろきの記憶喪失（前書き）

記憶喪失っていろんなマンガで取り入れているよね

第１２話　ひろきの記憶喪失

ある日、ひろきはフォックの家で泊まることになった。その夜、フォックが寝ぼけてひろきに攻撃をした。すると、ひろきは飛ばされ柱の角に頭をぶつけた。その瞬間、ひろきの記憶が飛んでしまった。しかし、そのままひろきは眠り、次の日の朝になり事件の大事にフォックが気づいた。

何とか記憶を戻そうと頑張るのだが、結果は残念。仕方なく他の奴らに診せる事にした。他の奴らもあれこれ試すが全部だめ。みんなが一休みしている時、ひろきは１人で何処かへ行ってしまった。

ひろきが歩いていると運悪く敵と鉢合わせてしまった。しかし、敵もまだ半人前らしく、ぜんぜん攻撃が食らわない。散々攻撃して相手の顔をよく見た。その時、初めてひろきと気づいた。慌てて逃げ出そうとするが腰が抜けて動けないようだ。敵がもう駄目かと思って諦めているとひろきが攻撃してこない。不振に思った敵はひろきを調べた。そして、ついに記憶喪失だと気づいてしまった。ひろきの記憶がないと分かると、急に敵は強気になり、ひろきに対し「お前は俺の部下だ。」と調子ぶっこき、ひろきをまんまと自分の仲間にした。そして２人はフォック村へ向かうことにした。

フォック達はひろきが帰ってきたことにほっと一安心、したのもつかの間、敵がひろきは自分の仲間になったと主張した。ふざけるなと言わんばかりにフォックが魔法を放つとひろきは敵を庇い、自分から魔法に当たりに行った。唖然とするフォック達。

そんな中、ひろきは「弱いものイジメだめ、いじめる人許せない。」と言い、フォック達に魔法で襲ってきた。

どうやら魔法は本能で覚えているらしい。その攻撃は目茶苦茶に放

っており、あらゆる方向に飛んでいく。そして、ついには敵に当たり、いつの間にか撃退。今度はひろきの側にあった木の根元に当たり木が倒れてきた。その木がひろきの頭にクリーンヒット。
それにより、ひろきは記憶を取り戻したのだった。ただ1つ大切なことを忘れてしまった。ひろしの事をすっかり忘れてしまったのだ。
それにより戦う意味を忘れてしまった。
フォックがすかさず「この世界を守るためだよ。」と力説。
それで納得したらしく、ひろきはこの世界のために戦うことになったのだった。神様のこと、カイルのこと、水晶のこと、元の世界のことは覚えているのにひろしの記憶が無くなった。今後、どうなってしまうのか。

第１３話　敵からの挑戦状

ある日、手紙がひろきの許に届けられた。何とそれはひろき達に対する挑戦状だった。早速みんなを集め、その挑戦を受けるべく決められた場所へ行くことにした。

その途中、フォックはひろきの弱点を聞き出した。するとひろきは『エスパー系の攻撃』と『黒板を爪でひっかく音』と答えた。しかしその話は、挑戦状を出した奴も聞いていたのだった。ひろき達を監視する為にリモコン型監視カメラを飛ばしていたからだった。

そして、ようやく決められた場所に到着。そこは大きな要塞になっていて薄気味悪い所だった。ひろき達はドアを開け中に入った。すると、ひとりでにドアが閉まった。そんな中「あっ、自動ドアか。」と、ハムチィーが突然言い出し、みんな笑いを堪えていた。

要塞の中を突き進んでいくと様々な罠や仕掛けが張り巡らされていた。その仕掛けのおかげでカービィが大岩に追われている時に逸れたり、上からいきなり落ちてきた岩の下敷きになりミュウさんとマラオが怪我をしてしまい、やむなく置いて行ったり、急に床に穴が開きハムチィーとタケルが落ちてしまったりと、次々に罠にかかり、どんどんと仲間は減っていった。そして最終的に残ったのはひろきとチョックとフォックだけになってしまった。そして、とうとう挑戦者がいる所へやってきた。

その部屋は部屋ではなく、屋外闘技場みたいになっていた。しかもその闘技場は、海の上に太い柱一本で支えられたものだった。闘技場に壁は無く、場外になると海の底に行ってしまう所だった。挑戦者は闘技場の真ん中に立っていた。

挑戦者は「イラゴラス」と名乗り、3人でかかってこいと言った。それならばとひろき達は3人で攻撃を仕掛けた。するとイラゴラスは持っていた剣を一振りした。すると凄まじいエネルギーが放たれ、3人は吹き飛ばされてしまう。そして、吹き飛ばされた後、イラゴラスはチョック目掛けて走って行き、剣を振りながらチョックを斬りつけた。チョックはその瞬間、剣から放たれた勢いで場外へ吹き飛ばされてしまった。そして、チョックは海へ向かって落ちてしまった。

次はフォックに向かってくる。何とか止めようと試みるが結果は惨敗。フォックも海へ落ちてしまった。残ったのはひろきだけである。仲間を消され怒りに満ちたひろきは、自分の中での最強魔法をイラゴラスに使った。イラゴラスはその魔法を食らいながら小さい黒板を取り出した。そして黒板をひっかいた。その音を聞いたひろきはたちまち力が抜けてしまい、魔法の勢いもなくなってしまった。ぎりぎりの所で助かったイラゴラス。

力をほとんど出せなくなってしまったひろき。イラゴラスはそんなひろき目掛けて気功砲を撃った。ひろきは吹き飛ばされ海へ落ちそうになった。しかし、何とか闘技場の床を掴んで海へ落ちることは無かった。その後、何とか這い上がり、イラゴラスの前に立った。力もだんだん戻ってきて元のひろきに戻った。しかし、イラゴラスはまだ黒板を持っているので、下手な行動は取れない。そんな中ひろきが取った行動は魔法で黒板を壊すという行動だった。しかし攻撃はかわされ、黒板は破壊されることは無かった。

そして、またイラゴラスが黒板をひっかこうとした瞬間、何者かがイラゴラスを斬りつけた。その傷は深くイラゴラスは命を落としてしまった。

その斬りつけた奴はひろきの方に近づいてきた。ひろきが攻撃態

勢にはいると、そいつは刀をしまった。
そして

「おぬし、ひろきと申す者か。拙者、犬次郎（けんじろう）と申す。今日はそなた様のお仲間になりとうございましてお伺い参った。先ほどの剣術見てもらえましたでしょうか。拙者、刀の腕には自身があります故、なにとぞお役にたてるとう思うてございます。どうか仲間にしてくれるよう、心よりお願いもうします。」
「ええ…。」
「それと、あなた様のお仲間達も助けてございます。この真下に岩場があり、そこに寝かせております。命に別状はございません。」
「本当に。」
「さよう。」
その話を聞き、岩場へ向かおうとするひろきと犬次郎。と、その時、犬次郎の許に鳩が降り立った。何か手紙を運んできたらしく、犬次郎は手紙を読み始めた。
そして
「すまぬ、ひろき殿。拙者行かねばならぬ所ができてしまった。それ故、また後日お伺い申します。それでは。」
と言い要塞の屋根をポーンポーンと跳んでいってしまった。凄い身の軽さである。

ひろきはとりあえず岩場へ向かうことにした。着いてみると確かに全員がそこにいた。何とかみんなを起こし村へ帰ることにした。
犬次郎という謎の人物の事を思い出しつつ。

第１３話　敵からの挑戦状（後書き）

犬次郎
『けんじろう』です！！

『いぬじろう』ではありません！！
（私は『いぬじろう』と呼んでいます。入力するときも『いぬじろう』）

第１４話　ひろきが変化する（前書き）

こんなしょーもない話を書いていいのだろうか

第１４話　ひろきが変化する

ある日、ひろきはカイルに相談すべくアイビスタウンに向かった。村の人達にはひろきが別世界から来たことを言ってない為、フォック達はひろきが何処で生まれて、何処から来たのか分からない状態なのだ。だから今回は、村のみんなに「ちょっと出かけてくる。」と言い、アイビスタウンへ向かったのだった。

ひろきが出て行ってから5時間後、ひろきが戻ってきた。しかし、なんだか様子がおかしい。なんと行く前に比べて、髪型や服やアクセサリーなどがまったく変わっていたのだ。髪は金髪、顔にはド派手なメイク、服は黒い革のシャツ、靴は赤と白の派手な縞模様、そしてスケボーに乗って登場したのだった。パッと見るとしょぼいヤンキーである。しかし顔はひろきそのものだった。ひろきは元々神様の力により、どこでも大丈夫なように顔をそれなりの顔にさせられていた。そして服は中に白いシャツ。その上に袖が破れた青い服を着ている。ズボンはニッカーボッカー（大工さんなんかがよく着るあのだぼだぼズボン）の白いやつ。そして靴は踵が固定することができるサンダルである。眼の色は青で髪の色は黒、すべて神様のデザインである。そんなひろきがとんでもない姿に変わっていたので村人は驚いた。しかもそのひろきは、今までではあるまじき行動を繰り返した。何か変である。

そうみんなが思いだした時、村の入口で誰かが立っていた。それはいつも通りのひろきだった。それを見た派手なひろきは正体を現した。
その正体はポケモン村のメタモンだった。どうやらこのメタモンは、どうにかして目立ちたかったらしい。それでひろきに変身し変わった行動をとって目立ちたかったのだという。

唖然とするひろき達。
すぐさまミュウさんが来てひろきに謝り、メタモンを連れ帰って行った。凄く平和なフォック村のほのぼの事件でした。この後メタモンは厳しい罰を受けました。

第１４話　ひろきが変化する（後書き）

ごめんなさい。

なんか分からないけど、ごめんなさい

第１５話　ひろき、死す

ある秋の日、森の中を犬次郎が走っていた。ひろきに会いに行くべく走っていたのだ。そんな時、犬次郎の前に１匹の人間に似た生物が現れた。そして「覚悟。」と言って、いきなり犬次郎目掛けて刀で攻撃を仕掛けてきた。とっさに鞘で攻撃を受け止める犬次郎。そして一旦２人は後ろへ下がった。

「おぬし、何奴。いきなり現れたと思いきや、いきなり攻撃するとは侍の風上にもおけん奴だ。さあ、名乗るがよい。」

「名など…ない。」

そう敵が言うと、敵は犬次郎目掛けて走ってきた。

「奥義、桜落とし。」

そう言うと敵は犬次郎の後ろに移動していた。「こやつ…。」犬次郎が言葉を発した瞬間、犬次郎の腹から大量の血が噴出した。そして犬次郎は倒れてしまう。

「俺に殺されたことを感謝するんだな。」

そう敵が言うと、犬次郎は息をひきとった。敵はその場からフォック村目指して立ち去った。

その頃、フォック村では毎年恒例の村運動会が開催されていた。そんな中、ひろきは森の方から誰か来るのを発見した。よく見ると、そこにはこの間会った犬次郎の姿があった。これは先ほどの敵が変装しているのだが、ひろきはまったく気づくことが無かったのだ。ひろきはそいつをトラックの中央に呼んだ。

そして

「この人は犬次郎といいます。この間の挑戦状が来た時の戦いで、うちらがピンチの時に助けてくれた人です。彼は俺達の仲間になってくれると言ってくれました。新たな仲間の誕生に拍手をお送りく

ださい。」と叫んだ。すると、会場は拍手が沸き起こった。そんな中、変装した敵がぼそっと「もう犬次郎この世にいませんから。」と言った。

「えっ。」とひろきが言った瞬間、敵はひろきと手を離し、ひろき向かって刀を振りかぶった。

「巌茉流、電斬罵鬼。」そう叫び、ひろきの腹を斬った。その後も敵の攻撃は続いた。

「巌茉流、龍鱗落し。」

「巌茉流、魂滅風斬。」

その間、ひろきは一度も攻撃をしなかった。と言うより敵が速くて攻撃する余裕が無かったのだろう。会場は拍手から悲鳴へと変わっていた。もうひろきは血だらけである。そして、ひろきは最後の攻撃を諸に食らってしまった。

トラックの真ん中に倒れ込むひろき。

刀を鞘へしまう敵。

会場はシーンと静まり返った。次の瞬間、会場の人達が騒ぎだした。フォック達はひろきに近づいた。敵はその隙に逃げようとしていた。しかし、マリオ達がそれを止めた。ひろき自身は痛みを感じないのでどうなっているのか分からない。しかし、だんだんと瞼が閉じていくのが自分でも分かっていた。そして、眼を閉じた瞬間、ひろきという体から抜けたような感覚に陥った。ひろきが魂となって抜けたのだ。

霊になったひろきはどんどん上へ昇っていった。すると、雲の上に国みたいなものがあり、ひろきはそこへ入った。そこは紛れも無く天国だった。

ひろきは不思議に思っていた。死んだはずなのにもとの世界に戻れないからだ。少々天国でテンパっていると、ひろきの前に神様が現れた。そして神様は言い出した。

「ひろき、元の世界に戻れなくて分けわからんじゃろ。無理もない。わしが言ったことと違う事がおこっとるんじゃから。なーに心配することはない。お前さんがここに来れるということは、誰かがお前を生き返らせてくれるということなのじゃ。だからもうじき時間が経てばさっきの世界に帰れるじゃろう。それじゃあ。」

というと神様は去っていった。ひろきはしかたなく生き返るのを待つことにした。

その頃、地上で騒ぎが拡大していた。無理もない。フォック村の英雄となったひろきが死んでしまったからである。フォック達は泣きながら敵と顔を見合わせていた。その時、敵（次から侍）は仲間を紹介すると言ってもう1人を連れてきた。なんと、それはウケケ星人だった。驚くフォック達だったがそれに惑わされず、2人目掛けて攻撃を仕掛けた。とっさに侍の方がウケケ星人の前に出て攻撃を受け止めた。しかしこれは囮、本当の攻撃は侍の真後ろにいたひろきの剣を持ったハムチィーだった。侍は斬られ、侍もこの世を去ることになった。それを見たウケケ星人は侍に近づき何かを侍に食わした。すると、死んだはずの侍が再び動き出したのだった。傷口もなくなっていて完全にやられる前の姿に戻っていた。これにはさすがに驚いたフォック達。その中でウケケ星人は「食べさせたのは生き返りの薬だ。」と言い出した。冷静になったフォックはその話を聞いてあることに気が付いた。

「ひろき生き返らせることできるんじゃねぇ？」

そう考えたフォックはある作戦を思いつく。もう1個同じ薬があるらしいから、どうにかしてそれを取るかという作戦を。

早速作戦開始。

まずチョックが侍を誘き寄せる。その隙にフォックとミュウさんがウケケ星人に攻撃して倒す。そうすることにより侍が気づきウケケの所へ来てさっきの薬を侍が見つけ手に取る。ここまで作戦通り、

次にタケルがブーメランを使いその薬を取るはずだったのだが気づかれ失敗。かと思いきや、フォックはまだ諦めていなかった。
そうこうしているうちに、侍はウケケ星人の口へ薬を入れようとしている。その瞬間、ミュウさんのテレポートが発動した。すると、侍は移動してひろきの隣に来た。薬はひろきの口の中へ入った。慌てて侍がひろきをまた斬ろうとしたが、マリオのファイヤーとフォックの魔法によって邪魔され攻撃は出来ずに終わった。その間にひろきは蘇った。

いきなり天国から地上へ戻されたので何が起こったのか分からない様子で、あたりをキョロキョロしている。フォック達が駆け寄ってきて蘇った喜びを露にしていた。その様子を見てひろきもやっと元の感覚に戻ってきた。その時、侍が立ち上がった。ひろきもそれを見て立ち上がった。
ひろきは「1対1でズルなしの真剣勝負をしよう。」と言い出した。侍は無言で頷いた。かくして、ひろきと侍のバトルが始まった。

どちらもいい動きをしていている。剣をあまり使ったことのないひろきだったがなぜかいい動きをしている。実はカイルに剣術も教わっていたのだ。2人とも互角でどちらも手を緩めない。侍が技を出してきてもひろきはそれをうまくかわしている。ひろきに技は無いものの、確実な攻撃で相手を追い詰めていた。

戦いは5時間にも及んだ。すると、侍が足を汗で滑らせたのをひろきは見た。その瞬間、ひろきの剣は侍の腹を完全に斬っていた。侍はそのまま倒れこんだ。そして永遠の眠りへと付いた。ひろきは自分の手で仇を取ったのだった。ひろきは村人から壮大な拍手を浴びていた。

ひろきはウケケ星人の所へ向かった。戦いの途中で何やら通信して

いるような音が聞こえたという。確かめてみると本当に通信をしていた。

「ツウシンシマス、ツウシンシマス、コノセカイノフォックムラトイウトコロニ…。ヒロキトイウセンシガアラワレタ。コイツガイルカギリ、セカイセイフクハデキマセン。ツヨイヤツガヒツヨウデス。タダチニジュンビシテクダサイ。」

誰かと話している。すると「情報ありがとう。役に立つ情報だ。礼を言う。分かった。そんな強敵がいるならこちらも準備しなくてはならない。早く連絡をくれてよかった。ありがとな。」と返事が返ってきた。ひろき達はそれを静かに聴いていた。すると、突然通信が切れた。すると、ウケケ星人がひろきに話しかけてきた。

「コレデ、オマエモ、オワリダ。アクマゾクガ、ウゴキダシタ、ジキニ、オマエヲタオシニクルカラナ、カクゴシトケヨ。」

そう言い終わるとひろきはウケケ星人の頭を蹴り飛ばした。

そして「どんな相手だろうと関係ない。全員ぶっ倒してやるぜ。」そう言い放った。するとウケケ星人は最後にとんでもないことを言い出した。

「ソウソウ、イイワスレテ、イタガ。ヘンナ、サムライガニシノヤマミチデ、タオレテイルゼ。」

この言葉にひろきはハッとした。「犬次郎だ。」そう言うとひろきは山道へ向かって走り出した。フォック達もそれを追い走り出した。

山道に行くと確かに犬次郎が倒れていた。ひろきは犬次郎を揺らしたが犬次郎は目を開けない。それを見たひろきはある決意をした。

「俺、犬次郎を生き返らせる。」

ひろきはそれができる。その技はとても危険で、一歩間違えればひろき自身の命が摂られるという技だ。ひろきの体の中にある体力や魔法力などのほとんどを犬次郎に贈り、再び犬次郎に命を灯すという。つまりひろきの生きる力がすべて犬次郎に行くのだ。そうすることにより犬次郎は生き返り、ひろきは死ぬということになるのだ。しかし、分け与える力の１％ぐらいを犬次郎に与えなければ、両方が生きることができるという。

ひろきはそれをチャレンジしようとしているのだ。当然止めるフォック達。しかし、ひろきは「やる。」と言い、ついにその魔法を使ってしまった。しばらくすると犬次郎は生き返った。

犬次郎は自分がどうなったのかをフォック達から聞き事の重大さに気づいた。犬次郎はひろきの体を揺すった。しかし、ぜんぜんピクリとも動かない。魔法は失敗してしまったのか。犬次郎は自分の命を捨て生き返らしてくれたひろきを抱きながらぼろぼろと泣いていた。すると一滴の涙がひろきの瞼の上に落ちた。すると、ひろきは動きだして口を開いた。

「大成功だぜ…。」

その瞬間、歓声が上がった。ひろきの復活に誰もが喜んだ。犬次郎はひろきに何度も礼を言っていた。これにて、この事件は終わりを遂げた。

家に帰ろうとするとひろきは立ち上がることができなかった。無理もない。体力のほとんどを分け与えてしまったのだから。ひろきは犬次郎が運んでくれることになった。その帰る途中、犬次郎がひろきに渡したいものがあると言い出し、犬次郎は自分の首に掛けてあった水晶を渡した。それは『青』と『緑』の２つの水晶であった。犬次郎の家に昔からある水晶で、昔はこの水晶のおかげで生き延びることができたという言い伝えがあったらしい。

実はこの水晶、カイルがひろきに集めるように言った水晶なのだが、今のひろきにそれを思い出せる気力は無く、ただきれいな水晶だとしか思えなかった。ひろきは家に着きベットへ寝かしてもらった。これから数日間は休養が必要なので、犬次郎が一緒に暮らして治るまで介護するということになった。

そして、ひろきは犬次郎が見守る中、眠りについた。

第１５話　ひろき、死す（後書き）

技名、適当です。

さて、これで仲間ラッシュは終わります。

第１６話　頑張れ、チョック（前書き）

悪魔族がとうとう動き出します

第16話　頑張れ、チョック

あれから一週間後ひろきはまだ動ける状態ではなく、ベッドで寝たきりの生活を送っていた。しかし、順調に回復していたのでみんな安心した。

犬次郎はずっと看病していたが、回復してきたのでとりあえず家へ帰ることにした。家といってもフォック村に新しく作った家である。犬次郎もここで暮らすことになったのだ。そういえば、侍とウケケ星人の死体が戦いの後放置されていたのだが、次の日の朝にはその死体がなくなっていたのだ。いったいどうなってしまったのだろう。

その日の昼、フォック達はそれぞれ用事があるということで出かけてしまった。村に残ったのはひろきとチョックと他の村人だけになってしまった。それなのでチョックはひろきの家へ来ていた。

ひろきとチョックは喋ったりしながら時間を潰していた。そんな中、誰かがフォック村に入ってきた。すると、いきなりそいつは村を壊し始めた。

それに気づいたチョックは急いで外に出た。すると「お前がひろきか。」と、いきなり質問してきた。

違うと答えるチョック。

次にどこにいるのかと聞かれたが、分からないと言い張った。すると、いきなり敵は攻撃してきた。その攻撃はひろきの家の壁に当たり壁が崩れた。そして、とうとう敵にひろきが見つかってしまった。

当然ひろきは動けないので攻撃できない。チョックだけが頼りである。

チョックはひろきを守るべく、敵目掛けて攻撃を仕掛けた。しかし、攻撃はまったく効いておらず、敵はぴんぴんとしている。すると、

今度はチョックが逆に攻撃を受けてしまった。チョックは吹き飛ばされ、ひろきの前に立ち塞がる物が何もなくなってしまった。そして、敵はそれをいいことにひろき目掛けて攻撃を仕掛けた。しかし、チョックはその攻撃は当ててはならないと思い、何とかダッシュしてひろきの前に立ちチョックが身代わりとなって攻撃を受けた。それでもチョックは必死で耐え、何とか倒れずにいた。しかし、そんなチョックに敵は何度も攻撃を繰り返し当て続けた。

そして、ついにチョックは倒れてしまった。もう立ち上がることさえできず、ただただ倒れ込んでいた。それを見た敵は、チョックを蹴り飛ばし、ひろきの家の中に入ってきた。その後、攻撃しようとした瞬間、どこからか魔法光線が飛んできて敵の顔に当たった。敵が振り向くと、そこにはフォックの姿があった。

丁度帰って来たのだ。

フォックはチョックに

「よく持ちこたえた。よくやった。」

と言った。

そして、敵に「こっち来いよ。」的なことを言った。

すると敵は

「こいつ俺に勝つ気でいるのか。馬鹿な野郎だぜ。俺は悪魔族の１人のセガルだぜ。お前に勝てるわけねぇだろ。」

と言った。

次の瞬間、フォックの魔法がセガルを襲った。セガルは吹き飛ばされ多少の傷を負った。そして、フォックはセガルに近づき「俺はひろきの仲間だ。」と言い、セガル目掛けて魔法を使った。セガルは木っ端微塵になりこの世から消えうせた。フォックはひろきとの修行でここまで成長したのだ。

フォックはチョックを布団にいれ回復するように言った。帰り際、フォックはチョックに「お疲れ。」といって家を出た。
しばらくすると他の奴等も帰ってきてみんなでひろきの家や壊された家を元に戻し再びいつもの村に戻した。

第17話　木村先生の熱血修行（前書き）

木村先生…小４（12年前）の時の担任でした。マッチョで怖かった。

第17話　木村先生の熱血修行

ひろきの体はようやく元通りになった。一ヶ月の月日を経てようやく回復したのだ。しかもこの一ヶ月、敵はぜんぜん現れず、戦うことはなかったのだ。

回復したひろきは「もっと強くならないといけない。」と言い、修行するようにみんなに言った。みんなもそれは思っていたみたいで、全員がオッケーしてくれた。

ひろきは早速修行を開始するが、ひろきの修行だけでは何か物足りなさを感じていた。そこでひろきは神様に相談してみることにした。初めての相談である。

神様はいい修行場所があると言い、ひろきにそこに行くように紹介した。ひろきは早速みんなを連れ、その修行場へ向かった。

入り口に着くとその施設の凄さに驚きを隠せなかった。中に入ろうとすると、誰かが勢いよく飛び出してきた。そして、そのまま何処かへ行ってしまった。すると、後から角刈りの髪型をした人間が走って来た。どうやらさっきの奴を追っていたみたいだが逃げられたみたいだ。

その人ががっくりしている中、ひろきはその人に話しかけた。

「あの、ここで修行したいのですが。」

「ああん。修行したいだとー。いい度胸だなここに来るとは。いいだろ中入れ。」

難なく中に入ったひろき達が見たものは誰もいない修行場だった。

「みんな修行に耐えられずに辞めていく。それだけ厳しいということだ。おれは木村宏昭。ここの師範をやっている。よろしく。さっき逃げちまって今はお前達だけしかいない。着きっきりで面倒見て

やるから、一ヶ月間頑張れ。」
どうやら一ヶ月はここから出られないらしい。ひろき達はそれを踏まえた上で修行に取り組むことになった。
修行はとてつもなく厳しく辛かった。しかし、それでも何とか耐え抜き、一ヶ月の修行をついにあと1日だけになったのだ。
そして翌日、とうとう最後の修行が始まり、ひろき達は最後まで耐え続けた。そして、とうとう修行は終わりを告げた。
その後、木村は「修行をやり遂げた証だ。」と言うと、ひろきにある物を渡した。それは紛れも無くあの水晶だった。
『赤』『黄』2つの色だった。
「これってカイルが集めろって言ってたやつ…あっ。」
ひろきは思い出したみたいだ。
「これは、私がひろき殿にあげた物と一緒の形ではござらぬか。」
犬次郎がそう言ったのでひろきは慌てて犬次郎にもらったやつを確認してみた。
「確かに一緒だ。」
そう言って4つの水晶を照らし合わせた。

とその時、敵が出現。
道場破りらしくこの道場を狙ってきたらしい。すると木村はひろきを戦いに行かせた。
戦いが始まると相手は凄い速いスピードで向かって来た。しかし、ひろきはそれを難なく避け、空振った相手目掛けてパンチを繰り出した。すると掠っただけで相手は吹き飛んだ。
唖然とするひろき。
敵は恐れをなして逃げていった。
「これが一ヶ月で身に付いた強さだ。この力を大切にな。」
そう木村が言うと、ひろき達はお礼をした。そして写真を撮り歴代の修行達成者の欄へ写真を貼った。その隣には『ドラ・ナターシャ』と書かれた写真があり、ひろきはそれをずっと見ていた。

そして、とうとう最後の挨拶も終わり、ひろき達はフォック村へ帰って行った。

第17話　木村先生の熱血修行（後書き）

宏昭は偽名です。

第１８話　カーピィ登場

ある日、フォックとカービィは村を出て散歩していた。その時、フォックが洞穴を見つけた。
早速２人は入ってみた。

中は薄気味悪く、寒気もしていた。そんな中、２人は変なロボットを見つけた。しかし、操縦型らしく動くことはなかった。
それをスルーして２人はさらに奥へと進んで行った。すると前方に何かが見えてきた。それはさっき見たロボットだった。
どうやら迷子になったらしい。
今度は来た道を戻ってみることにした。しかし、同じところへ戻ってきてしまう。
どうするか悩んだ挙句、とうとう座り込んでしまった。そんな時、遠くの方から地響きが聞こえてきた。フォック達は希望を胸に走って行った。
その地響き源の所へ行ってみると、それは、先ほどのロボットが動いている音だった。操縦席には誰かいた為、話を聞こうとするとロボットは襲って来た。敵だったのだ。

２人は何とか攻撃を避けた。洞窟内なので避けるのも一苦労だ。フォックは意を決して魔法を使った。洞窟が崩れる危険があったので使いたくは無かったらしいがしょうがなかった。
フォックの魔法はロボット目掛けて飛んでいく。しかし次の瞬間、ロボットはその魔法を跳ね返した。この間、一ヶ月修行してきたのに魔法が通じないのを目撃してフォックはショックを受けた。そんな時、ロボットに乗った奴が話しかけてきた。
「このロボットは壊せねーぜ。調合金を使っていてそんな魔法じゃ通じないぜ。あ、そうそう出口は俺の後ろにある壁を壊せば出られ

るぜ。壊させる気は無いけどな。」
そう言って敵は攻撃を仕掛けてきた。とっさに避けたがフォックの足にロボットの腕が当たり、怪我をしてしまった。
動きが鈍くなったフォック目掛けて敵は攻撃してくる。それによりカービィのコピー能力でフォックを吸い込むということができず、ただただ必死に攻撃を避けていた。その時、誰かが敵の側に行った。すると、そいつにロボットの攻撃が当たりそうになる。
フォックは何とか力を振り絞ってそいつを庇い、フォックは攻撃を受けた。
「大丈夫か、カービィ。」
近づいたのはカービィだったのか。いや、カービィはフォックの後ろにいた。ということは、フォックが助けたのは…。
その時、カービィが叫んだ。
「カーピィ…。どうしてお前がここにいるんだ。」
カービィの知り合い…らしい。
そして、そいつの正体が明らかになった。
「こいつはボクの妹なんだ。」

突然のサプライズ。フォックは当然驚いた。どうやらカービィの帰りが遅くて心配で、自分も兄を見つけるため旅に出たらしい。そしてここに迷ったらしい。
感動の再会をはたしているが喜んでいるわけにはいかない。敵がまだ残っている。この敵、人情は厚いようでカービィとカーピィの再会の時には攻撃をしてこなかった。
それがそいつの命取りになった。
カービィはカーピィにフォックを吸い込むように言った。カーピィもカービィと同じことができるらしい。
吸い込んだカーピィは魔法使いになった。そして、外へ出されたフォックを今度はカービィが吸い込んだ。これによりカービィも魔法使いになり、フォックは外に出された。これによりフォックは3人

となった。
そして、敵目掛けて一斉魔法攻撃をした。
敵も自慢のロボットで対抗するも、なんと3人の魔法は調合金を破壊していき、そして敵もかき消してしまった。
そして、その攻撃のおかげで壁に穴が開き、やっと外に出られることができたのだ。
3人はとりあえず村に戻ることにした。

第１８話　カーピィ登場（後書き）

オリキャラです。
カービィに妹はいません。

第19話　みんなカードになる

「いい加減帰ってよ。」
カービィはカーピィに帰ってほしかった。
カーピィを危険な目に合わせたくなかったからだ。
そんな兄の気持ちも分からないカーピィは、一緒に住むと駄々をこねていた。そして、それに呆れたカービィは外に出て行ってしまう。すると、突然カービィは魔法の光みたいなモノに包まれてしまった。それを家の中で見ていたカーピィは慌てて家の外に出た。すると、カーピィも同じように光に包まれてしまった。

光が消えると2人はなんとカードになっていた。そして、そのカードを誰かが手に取り運んでいってしまった。光はこいつがやったに違いない。
その頃、ひろき達は近くの芝でピクニックらしき事をしようとしていた。しかし、カービィとカーピィがなかなか来ないのでひろきは様子を見に村へ戻ることにした。ひろきが行った後、誰かがフォック達の側に現れた。そして次の瞬間、そいつはカービィ達が食らったあの光を杖らしき物の先から発光させた。
そして、フォック達はカービィ同様カードにされてしまった。
そのカードは地面に落ち、そいつはそれらを拾い始めた。そして全部拾い終わるとそいつはひろきを待つ間、弁当を食べ始めていた。
数分後、ひろきは帰ってきた。それを見かねた敵らしき者は立ち上がった。そして自己紹介を始めた。

「私、悪魔族のゾゲスといいます。この度は、あなた方を消すべく参上いたしました。私、相手をカードにしてしまうのが趣味ゆえ、貴方のお仲間もカードにさせていただきました。」

そう言ってカードになったみんなを空中へ投げた。するとカードは宙に浮き、ひろきとゾゲスの周りを回り始めた。

ひろきはとりあえずゾゲスに攻撃を仕掛けた。すると、攻撃が当たる瞬間にフォックのカードがゾゲスの前に立ち塞がりゾゲスを守った。驚くひろきに対し、ゾゲスは忠告をした。

「カードになった者はすべて私の僕となる。つまりあなたの攻撃は私に当たらないということです。それから彼らのカードが壊れる時、それは彼らの死を意味します。くれぐれも攻撃に注意してください。」

ひろきは焦ったが、魔法をカードが来る前に当てればと思い、ひろきは高速の魔法光線を撃った。しかし、その攻撃もカードに邪魔され、ゾゲスに当たることは無かった。しかもガードしたのはフォックのカード。さっきの攻撃のダメージもあったせいか、フォックのカードには皹が入ってしまった。

「あらあら、自分で自分の仲間を殺そうとしているなんて、凄い人ですね。」

ゾゲスは笑い出した。ひろきはどうすることもできない。この間の修行の成果が、逆にひろきを不利にしてしまった。

ひろきがどうするか考えている中、ゾゲスは2枚のカードをひろき目掛けて投げ飛ばした。すると、2枚のカードはひろきを挟み込み、身動きを取れないようにした。そこへゾゲスが攻撃を仕掛けてきた。

ゾゲスはカードもろとも魔法でひろきを攻撃した。ひろきは吹き飛ばされた。そして、ひろきを抑えていたカードにも皹が入ってしまった。ひろきは手で支えて起き上がろうとした。するとその時、ひろきは閃いた。

ひろきはそのまま手を地面に着けた状態でじっと止まっていた。
「どうした。降参か。」
そう言いゾゲスが近づいてきた。その時、ひろきは力を籠めた。すると突然、ゾゲスの足元から無数の魔法の玉が飛び出しゾゲスを襲った。突然の攻撃にカードもその攻撃をゾゲスの代わりに当たることもできなかった。ゾゲスはそれを食らい消滅してしまった。
それと同時にみんながカードから戻った。
戻ったみんなはひろきに近づいてきて何が起こったのかと聞いてきた。話によると、カードになっても戦いの様子が見えたらしい。ひろきはさっきの攻撃の説明をし始めた。どうやらひろきはこの間の修行で、操り魔法という操れる魔法を成功させることができたという。
それを使い攻撃したのだが、どうやら最初相手に気づかれないように地面に魔法で大きな穴を開け、その中に操れる魔法を作りだし、穴の中で止めておいて、ゾゲスがこっちに来た時に上へ行くように指示したらしい。それで攻撃を食らわしたという。
まあとりあえず、全員やっと集まりピクニックができると思いきや弁当がなくなっていた。どうやらゾゲスが全部食べてしまったらしい。ひろき達はがっくりして村へ帰ることにした。

家に帰った後、カービィはカービィに今日のことを話し帰るように説明していた。
「いいか、ボクと一緒にいるってことは今日みたいな事がまたあるってことだぞ。怖いだろ。ボクはお前を危険な目に合わせたくないんだよ。大丈夫、時々は家に帰るから。だから、家で待っててほしいんだ。」
するとカービィは
「…うん、わかった。私家に帰る。頑張ってね。お兄ちゃん。」
と言ってカービィは帰っていったのでした。

第19話　みんなカードになる（後書き）

話のネタはコレクターユイの2期最終回だった気がする。

第２０話　盗まれた青水晶

ある夜、ひろきの家に泥棒が入り込んだ。
ひろきはその足音で目覚め電気をつけてみた。すると、あのウケケ星人が青い水晶を取ろうとしていた。
ウケケ星人は運動会の次の日、死体がなくなっていたが、どうやら悪魔族に拾われ修理してもらったらしい。そして、今日は魔王（悪魔族のリーダー）からの命令で、ひろきから青と緑の水晶を取って来いと言われたらしい。そして今に至るわけだ。
ウケケ星人はすかさず逃げ出した。慌てて追うひろき。
若干ひろきのほうが速く、もう少しで追いつくところまで来た。するとその時、ウケケ星人は変に手を動かし、そしてひろきに水晶を向けた。しかもその水晶は紫色であり、ひろきが持っていない物だった。
すると、ウケケ星人はいきなり「エスパー」と叫んだ。次の瞬間、その水晶からエスパー系の攻撃が放たれた。ひろきは諸に食らってしまう。十三話でひろきの弱点は黒板の引っかく音とエスパー系の攻撃だったのでひとたまりもない。
ひろきは吹き飛ばされた。
その隙にウケケ星人は闇の中へ消えてしまった。ひろきはエスパー系の魔法を食らったせいで体が動かなくなっていた。
これがエスパーが弱点の理由である。攻撃を受けた後、体が数分間動かなくなってしなうのだ。
数分が経ち、ようやく体が動き始めると、ひろきは諦めて家に帰ることにした。家に着くと赤と黄の水晶は無事に残っていた。ひろきはそれらを首に掛け、また寝ることにした。
次の日、そのことをフォックと犬次郎に相談した。すると、犬次郎は激しく怒りだした。

「ひろき殿に私の水晶を託したのに、それを盗むとは、なんと無礼な奴、必ず成敗してやる。」
そして、とりあえず3人で罠を仕掛けることになった。

その夜、またしてもウケケ星人が進入してきた。すると、ひろきは起きていてウケケ星人を睨んだ。今度はフォックや犬次郎も一緒にいて3人で待ち構えていた。
当然逃げるウケケ星人。
それを追う3人。

ウケケ星人は村を出るため橋を通りかかった。すると次の瞬間、ウケケ星人は仕掛けていた罠にかかった。追いついた3人が水晶を出すように命じた。
ウケケ星人は拒否。
そして、緑の水晶を持った手を変に動かし、そしてその手を高々と挙げ「リーフ」と、叫んだ。すると、その水晶から草や蔓が出て罠を破壊し、ウケケ星人は脱出に成功した。何が起こったかわからない3人。そこへウケケ星人が逃げながら重要な事を言い出した。
「この水晶の秘められたパワーも知らないで持っているなんて意味無いっしょ。だからこれはわれわれ悪魔族が使わせてもらいます。」
「秘められたパワー!?」
3人は驚いた。ひろきはすかさず首に掛けてある2つの水晶をよーく見てみた。すると何か文字が書かれているのを発見した。
「この水晶を持ち、手を炎の形に動かしその後『ファイヤー』と叫べ。」
赤い水晶にはそう書かれていた。ひろきは早速赤い水晶を手に持ち、炎の形に動かし「ファイヤー」と叫んだ。すると水晶から炎が噴出し、ウケケ星人を襲った。
その後、ひろきがもういいかなと思うと炎は出なくなった。

「それもよこせ。」と、ウケケ星人はひろきの方へ向かってきた。すかさず今度は黄の水晶を手に取り文字を読み取った。

「この水晶を持ち、手をカミナリの形に動かしその後『サンダー』と叫べ。」

早速ひろきはチャレンジ。すると、ウケケ星人のところに雷が落ちてきたのだった。それによりショートしたらしく、ウケケ星人は動かなくなってしまった。すかさず3人は青と緑と紫の水晶を取り出した。急いでいたのは多分、魔王がウケケ星人のことをテレポートで戻させると思ったからだ。そして、案の定ウケケ星人は突然消えてしまった。

ひろき達は青、緑、紫の水晶の文字を読み取った。

青。「手を四角形に動かしその後『ウォーター』と叫べ。」

緑。「手を三角形に動かしその後『リーフ』と叫べ。」

紫。「手を星の形に動かしその後『エスパー』と叫べ。」

と、それぞれ書かれていた。今日は水晶の秘密を知れた。大変重要な日となった。

第２０話　盗まれた青水晶（後書き）

家に鍵を掛けないような村です。

水晶の動きを女子の前でやったという黒歴史がある。

第２１話　ポケモン村が変化する

ある日、ひろき達はポケモン村に行くことになった。しかしフォックは用事があるということで行けなかった。
ポケモン村にはフォック村から橋を架けたのですぐ行ける事ができるのだ。

村に着いた時、ひろき達は異変を感じた。いつも沢山いるはずのポケモン達が１匹も居ないのだ。それでもひろき達はミュウさんに会うべく村の中央に作られた城を訪ねた。

ひろき達が部屋に入ると、ミュウさんはぽつんと立っていた。ひろきが近づくといきなりミュウさんは攻撃を仕掛けてきた。
とっさに避けるひろき。そして、ミュウさんに「いきなり何するんだ。」と言った。するとミュウさんは、いつもと違う声で「わらわの所へ近づくからだ。」と言い出した。
どうやら操られているらしい。しかし、操っている敵は確認することができなかった。

とりあえずここから出ようとした時、既に他のポケモン達が周りを囲っていて出ることができなかった。犬次郎が攻撃しようとするとひろきはそれを止めた。ポケモン達を傷つける訳にはいかないからだ。そうこうしているうちに、ポケモン達はひろき達目掛けて攻撃を仕掛けてきた。ひろき達はその攻撃に当たるがなんとか耐え、その攻撃の煙を利用し何とか城の外に逃げ出した。それに気づいたポケモン達はひろき達を追ってきた。すると、岩場や海の方からもポケモンが飛び出し、ひろき達を追い詰めた。するとエスパーポケモンの１匹が金縛りを使い、ひろき達の動きを封じてしまった。その瞬間、他のポケモン達の一斉攻撃が始まった。そんな中、空中に

も飛行系のポケモン達も集まりだした。その中にはあのフリーザも入っていた。

陸、海、空のポケモン達の攻撃が終わると、今度は伝説のポケモン達の攻撃が始まった。

火炎放射から始まり次にハイドロポンプ、サイコウェーブ、エアブラスト、雷、と続き、そして最後にフリーザによる冷凍ビームでひろき以外の仲間は氷付けになってしまった。

もう立つ体力がないひろきの前に1人の男が現れた。

「どうだ。思い知ったか俺の力を、俺は相手を操り、代わりに攻撃させることができるんだ。このステッキのおかげでな。」

どうやらこいつがこうなった犯人だ。ひろきは何とか立ち上がり攻撃を仕掛けたがポケモン達が攻撃し、逆にひろきが吹き飛ばされた。

「もう、終わりだ。」

そう言って敵はひろきに杖の先のとがっている方でひろきを刺そうとした。するとその時、誰かが敵の顔目掛けて魔法玉を飛ばして敵を吹き飛ばした。ひろきが見ると、そこにはハムチィーの姿があった。

「俺達の力を舐めんなよ。」と言いつつ、ぼろぼろになりながら剣を構えていた。その後も次々と氷の中から出てきた。

「マラオのファイヤーボールが役に立ったぜ。」

どうやらマラオのファイヤーボールで氷を溶かして脱出したようだ。

しかし、みんなぼろぼろでろくに動ける状態ではなかった。

敵はポケモン達に攻撃するように命じた。

ポケモン達が攻撃に入ろうとした瞬間、ひろきは黄の水晶を取り出し雷を呼んだ。雷はステッキのボール（魔力が詰め込まれている場所）に落ちた。するとボールは割れ、ポケモン達は元に戻った。慌てて逃げようとする敵に対し、ミュウさんが自分の剣で敵を切り裂いた。

ミュウさんも剣を持つようになったのだ。

当然敵は消滅し、ポケモン村は温かな村へ戻った。ミュウさんが幾度となく謝り続けるが、ひろき達は大丈夫と返していた。みんなの怪我はミュウさんの回復魔法により回復させてもらったが、ひろきの右足に輝が入っていて、それは回復魔法で治せないので病院へ行くことになった。

ミュウさんの回復魔法は誰よりも凄く、傷なんかはすぐ治してしまうほどで、もう少しレベルが上がれば骨折や骨の輝も直せるようになるという。ひろきもミュウさんのように回復魔法が使えるように日々努力しているのだ。

とりあえず元気を取り戻したひろき達は、村へ帰ることにした。ひろきは犬次郎が負ぶっていくことになった。こうして今回の事件は終わりを告げた。

第２１話　ポケモン村が変化する（後書き）

技の名前が昔だね…

第２２話　雪山での決闘

ある日、ひろきの許へ挑戦状が来た。内容は『１対１で力試しがしたい』という手紙で、どうやら敵ではないようだ。しかし、足の輝のこともあり戦いに行けない。どうするか迷っていると、フォックが代わりに行くと言った。

戦いの場所はフォック村から北に数キロ行った所にある大きな雪山の頂上だった。寒さに弱いフォックは考え直したが、やはり行くことになった。ひろき達もとりあえず行くことにした。ひろきの足も歩けるぐらいに治ってきていた。

北の山には歩いていくことにした。長い道のりだったが、ようやく決められた場所に辿り着いた。頂上の側には小屋があり、ひろき達はその中で戦いを見ることにした。

フォックは頂上に行き挑戦者を探した。ちょうど吹雪いてきて、フォックには不利な状態になってしまった。すると、前方から人影らしき者が見えた。

フォックは近づいて行こうとした時、そいつは攻撃を仕掛けてきた。とっさに避けるフォック。そしてなぜこんなことをするのか聞いた。

「ふふふ、よく来たね。ひろきじゃないのが気に食わないけどまあいいや。こんな手紙に引っかかるなんて、どんだけ戦いに飢えてんだよ。とりあえず、俺はダイって言う悪魔族の１人さ。」

どうやら敵だったらしい。それを聞いたフォックは少々怒り、攻撃を仕掛けた。それをひょいと避けるダイ。そして、攻撃をフォックにやり返した。

フォックもそれを避ける。互角の戦いだ。

「あの小屋にみんないるのは分かっているんだぜ。」
そう言いながらダイはフォックに攻撃してきた。
「なぜこんな所で戦うんだ。」
フォックは避けながらそう言い返した。
「お前等を不利にするためさ。」
そう言って次なる攻撃を放った。「卑怯者。」と言いつつ攻撃をかわそうとしたのだが、反応が遅れてしまい足を負傷してしまった。

続けてダイは攻撃を仕掛けてきた。剣をガトリングのように連続で動かしながらフォックに向かってくる。フォックは杖を使い何とか攻撃をかわしているが、だんだんと攻撃をかわせなくなってきている。寒さのせいだろう。ダイは最後の一振りをフォックに当てて、フォックを吹き飛ばした。白い雪の上に真っ赤に色付けされた上にフォックは倒れていた。ダイはそんなフォックに近づいてきた。
「そろそろ終わりにしようか。」
そう言うとダイは剣の先をフォックに向けた。その時、フォックは一か八かの賭けに出た。それはこの場所で強力な魔法を放つことだった。

フォックはついに魔法を放った。すると、ダイはふっと避けた。失敗に思われたが、賭けというのはこの後起こった。
突然、ダイとフォックの足元の地面が動き始めた。フォックは雪崩を起こしたのだった。
2人はその雪崩に呑み込まれた。そんな中、フォックは顔を出してダイのいる場所を確認し、そこ目掛けて魔法を打ち込んだ。魔法はダイに当たり、ダイは消滅した。

問題はここからだ。雪崩は小屋を呑み込みそうになっていた。すると、ひろき達は外に飛び出し雪崩を前に立ち塞がった。そして、一

斉に魔法を放った。
その魔法は熱を持っていて、どんどんと雪を溶かし始めた。そして雪崩となった雪はすべて水になってしまった。しかもちゃんとフォックは避けていて攻撃していたので、掠り傷1つもなく無事に済んだ（すでにぼろぼろだけど）。
ひろき達はフォックを救出し村に帰ることにした。こうして戦いは終わった。

第２２話　雪山での決闘（後書き）

なんか、雪山出したかったんだよ…

第２３話　大ピンチのひろき（前書き）

ちょっとシリーズものです。

第２３話　大ピンチのひろき

ある日、ひろきはベッドに座っていた。他のみんなもひろきの家に来て雑談を楽しんでいた。すると突然、ベッドの下にワープホールが出現した。（ワープホールとは相手を別の場所へ送ってしまう物。オリジナル道具です）

ひろきはそのワープホールに吸い込まれそうになった。しかし、ひろきをフォック達が必死で掴んで、なんとか助けようとしていた。しかし、どんどんとひろきは吸い込まれていく。ひろきはフォック達も吸い込まれるのを避けるべく、ひろきは自らフォック達の手を離した。そして、ひろきは吸い込まれ、とうとう姿は見えなくなってしまった。その瞬間、ワープホールも消えてしまった。その直後、何処からともなく声が聞こえてきた。

「ひろきを取り戻したかったら『ベジテッド』へ来い。」

それを聞いたフォック達は早速、ひろきを助けるべく、ベジテッドへ向かって行った。

フォック達はベジテッドへ到着してみると、そこでは大きな怪獣が町を襲っていた。早速退治しようとフォック達は戦いを挑んだ。しかし、でかいこともあってなかなか弱らない。そして、その戦いの中で犬次郎がとんでもないものを発見した。

それは怪獣の腹の部分だった。

腹が出ているように思えていたのだがそれは腹ではなかったのだ。なんと毛で作られた巨大な収納空間になっていて、中は空洞になっていたのだ。

そして、その中にはなんとひろきの姿があったのだ。

どうやら、毛でひろきを捕まえているらしく、ひろきは磔の状態に

なっていて意識は無かった。驚くフォック達。そんな中、ベジテッドへ行くように言ったあの声が聞こえてきた。

「怪獣の弱点は腹だよ。だけど攻撃するとひろきを貫くことになるよ。」

それを聞いてフォック達は焦った。とりあえずどうするかを考えた。しかし、考えている途中で怪獣が攻撃してくるのでなかなか考えがまとまらない。とりあえず、ひろきをどう助け出すかを考えることにした。そこで、ミュウさんがテレポートで助けると言って助けに行った。しかし、怪獣の毛には魔法が掛けられてミュウさんは弾き飛ばされてしまった。今度は犬次郎が刀で斬りつけることにした。しかし、結果はミュウさんと同じで吹き飛ばされてしまう。何をしても切れない。どうすることもできない。みんなが諦めかけたその時、ひろきが目を覚ました。

ひろきはフォック達に合体魔法をやれという。ひろきは動ける状態ではないので、中からは攻撃できない。それを聞いたフォック達はあれこれやってみたがどうもタイミングが合わない。そうしているうちに怪獣の攻撃により、みんなは吹き飛ばされてばらばらになってしまう。そんな中、犬次郎の刀も吹き飛ばされてしまう。それを見たひろきは刀で魔法を集めろという。それを聞いた瞬間、みんなにある作戦が閃いた。しかも凄いことに全員が同じ作戦だったのだ。

まず、タケルがブーメランを使い、刀を犬次郎の手元へ弾き飛ばした。その瞬間にマラオの上に犬次郎が乗った。その間にコビィがフォックを吸い込み、能力をコピー。そしてハムチィーを先頭に魔法が犬次郎の刀目掛けて飛ばされた。その間、犬次郎は必死で刀に力を籠めていた。ひろきいわく、刀に自分の魔法力を込めていれば、タイミングがズレていても刀が魔法を吸収して魔法が溜まり、それを放てば合体魔法ができているという。しかし、犬次郎は魔法が使えない。だけどこの場で魔法力を出さなくてはいけないので、犬次

郎は必死でなんとか魔法力が出るように頑張っていた。そして、ついにハムチィーの魔法が近づいてきた。これで刀がその魔法を吸い込めば、犬次郎も魔法が使えるということになる。そしてついにその時が来た。
魔法は刀に吸い込まれた。成功である。

その後もどんどんと魔法を吸い込んでいく。そして、とうとう全員の魔法を吸い込むと、マラオは犬次郎を乗せたままジャンプした。そして、最高点に達した時、犬次郎がマラオを台にジャンプした。そして、毛の空間の上に来た時、犬次郎は刀を振り下ろした。すると、刀の先から斬撃みたいに魔法が飛び出した。その魔法は毛のバリアを吹き飛ばした。その瞬間、ミュウさんがテレポートでひろきを救出。それを見たフォックがすかさず魔法を腹目掛けて放った。怪獣は撃退しひろきも助け出し、終わったと思った瞬間、何かが上から降りてきた。
「いやー。よく倒したね。見事なチームプレイだね。」
その声はあのよく聞こえていたあの声だった。そしてその姿を見た瞬間、誰もが驚いた。なんと姿がひろきそっくりだったのだ。

第２４話　ひろきＶＳひろき（前書き）

偽者登場ー！！ありきたりー！！

第２４話　ひろきＶＳひろき

そいつはひろきのデータを組み込まれて作られたクローン人間だった。しかもひろきが使える魔法も使えるらしい。まさしくひろきが２人居ることになっている。

そいつはいきなりひろき達の前に降り立ち、ひろきに勝負を挑んできた。この戦いに勝負が着くのかは分からないがとりあえず勝負は始まった。

当然どちらとも互角の勝負をしている。そんな中、偽者が口を開いた。

「お前は負ける。理由は仲間がいるからだ。」

そう言って偽者はフォック達目掛けて魔法を放った。突然の攻撃に驚いたみんなは行動が遅れ攻撃に当たってしまう。

「みんな。」

ひろきの叫びも空しくフォック達は倒れてしまう。

「これがお前の負ける理由だ。お前は仲間を大切に思っている。だから俺があいつらに攻撃すれば、お前はそれを食い止めようと何とかしようとする。それが命取りなんだよ。」

そう言って偽者はひろきが使える最高の破壊力を持つ魔法をフォック達目掛けて放った。それを見たひろきは急いでフォック達の前に行き立ちはだかった。そして、ひろきも同じ魔法で返そうとしたが間に合わない。そして、ひろきはその魔法に当たってしまった。

その破壊力は凄まじく、ひろきの体は木っ端微塵になって跡形もなくなってしまった。ひろきはフォック達の為に自ら犠牲になり死んでしまった。フォック達が驚きを隠せない表情で倒れこんでいた。

そして、その前に偽者が歩いて来た。

「お前らのせいでひろきは死んだ。せいぜい自分が仲間になったことを自分自身で恨むんだな。」

そう言って偽者はその場を後にした。フォックは叫んだ。この悲しみを消したい為に叫んだ。ベジテッドにはフォックの声が響いていた。残ったのはフォック達と壊れた町とそしてひろきの剣と４色の水晶だけが残された。希望や未来なんかは先ほどの魔法でどこかに飛んでいってしまった。

第２５話　デルメシアを探して（前書き）

『デルメシア』…微妙に伏線

第２５話　デルメシアを探して

フォック達は町を歩いていた。
手にはひろきの剣と水晶を持っていた。そんな中フォック達は何かを探しているおじさんに出くわした。話を聞くと、どうやらこの世界には『デルメシア』という何でも願い事が叶う植物があるらしい。それを聞いたフォック達は、その植物の事をもっと詳しく聞きだした。
そして、どうやら死んだ人も生き返らせることができるらしい。しかし、一度願ってしまうと１００年間はただの植物になってしまうという。それを聞いてフォック達に希望が戻ってきた。早速みんなは探し出した。しかし、この町だけでは見つけることができなかった。仕方がないので探す範囲を広くして、この世界を全部探すことにした。道のりは長い。（はしょります。）

フォック達はとある人を訪ねていた。いろんな情報を集め、一番有力な情報を頼りに彼の許を訪ねていた。「あなたが、ギガスと親交があった人ですね？」
老人に尋ねるフォック。すると、老人は頷いた。そのことを確認したフォックは『デルメシア』を持っているか聞いた。すると、老人は静かに笑い。部屋の奥から植木鉢を持ってきた。
「これが、『デルメシア』。ちょうど今年、願いをかなえることができる。」
「それを、もらえることはできませんか？」
「なにに使おうとしているんだ？」
「死んだ人を生き返らせるために…。」
「そいつは生き返らせるのに値する人物か？そしてなにより、天使族か？」
「天使族です。生き返らせるのに値するかどうかはあなたには分か

らないと思いますが、少なくとも俺達は値する人だとおもっています。あなたが、ギガスを慕っていたように、俺らもその人を慕っています。」

「…なるほど。よかろう。もっていけ。なに、デルメシアは世界にあと数株ある。」

「あ、ありがとう。ございます。」

そしてとうとうデルメシアを見つけることに成功した。早速みんなは植物に願い事を願った。勿論ひろきの生き返りとベジテッドの町の人の生き返りである。そして、願うとフォック達はいきなり幽体離脱をしてしまった。どうやらこれで天国に行き、ひろき達を連れ戻して来いとの事だった。フォック達は意を決して天国へ向かって飛び立った。

第２６話　仲間という名の宝物

フォック達は天国へ来た。ここのどこかにひろきと町の人がいると言うのだが、入り口で見ただけでは見つけられない。その為、意を決して天国の中へ入ってみた。

そこは暖かく、気候も晴れでとてもいい所だった。そして、天国は町みたいになっていて天使となった死んだ人達が暮らしていた。しかも、その町の雰囲気は明るく、人々の顔は笑顔に包まれていた。本当に平和な所である。

その中を歩いていくと、なにやら人ごみが出来ていた。フォック達が話を聞くとこの人達はベジテッドで殺されてしまった人達だという。そうと分かるとフォック達はここに来た旨を話した。すると彼らは喜び、フォック達にお礼を言ってきた。そのお礼を聞き流し、フォックはひろきの事を聞いた。ひろきだけここにいなかったのだ。話によると、どうやら奥にある修行場に向かったという情報が聞けた。早速フォック達は向かうがチョックはこの殺されてしまった人達を生き返らせる為、誘導して下界へ戻った。

修行場へ向かうと、裏の方でなにやら掛け声が聞こえてきた。何かと思って覗くと、筋トレをしている声だった。それをよーく見てみると、なんとひろきの姿がそこにはあった。

慌ててひろきを連れ出し、事情を話した。すると「遅かったなぁ。」とひろき。その言葉に唖然としたが、フォック達はやらなければいけないことがあったのでとりあえずシカトした。

「俺らのせいで、負けてしまって本当に申し訳ない事をしてしまって、申し訳ありませんでした。」

そう言ってフォック達は頭を下げた。しかし、ひろきは「なんでお前らが謝るんだ。」と言った。

そ
れを返すように「俺らが仲間だったから負けたんだ。」と一言。それを聞いたひろきはフォック達に言い出した。

「仲間がいるとどうしてだめなんだ。仲間がいたら勝てないのか。そんなことはない。1人よりは仲間といるほうが絶対にいい。今だって仲間がいるから、俺は生き返られるんだ。あいつの言ったことは間違っている。仲間は大切だ。仲間がいるとそいつらを助けたくなる。確かに思うが、そんなには思わない。お前らの強さを信じているからな。あの時、俺が助けたのはお前らの強さを信じることができなかったからだな。だから謝るのは俺の方だ。みんな、ごめん。」

そう言ってひろきは頭を下げた。それを見たフォック達は戸惑いを隠せない様子だった。その空気を読んだひろきは、早く帰ってあいつを倒そうと誘った。それを聞いたフォック達はなんとなく返事をした。そして、ひろきを連れ下界へ向かった。その途中、フォックはひろきに勝てるのかと聞いてきた。ひろきは「ああ、勝てるとも。仲間がいるほうが強いってこと証明させてやろうぜ。」と豪語した。ひろきは無事生き返ることに成功した。フォック達が下界へ戻ると希望の石はただの石へと姿を変えていた。

ひろき達は偽者を倒すべく、奴の所へ向かった。

第２６話　仲間という名の宝物（後書き）

天国の生活というものをかきたかっただけです。

第２７話　最強の合体魔法

ついにひろきは偽者を見つけ出した。ひろきは対決を要求。
偽者は驚いたがその要求を呑んだ。

「また、生き返っても仲間をつれてくんのかよ。少しは学習しろ。」
そう言われたがひろきはシカトし、偽者へ攻撃を仕掛けていった。
そして両者のぶつかり合いが起こった。激しい攻防の中、偽者はフォック達に魔法を放っていた。しかし、ひろきは見向きもしない。
しかも、フォック達は魔法を何とか避けるなどして防いでいた。

ひろきと偽者は一旦相手から距離を置いた。そこでひろきは「仲間の必要性を思い知らせてやる。」と言う。
しかし、偽者は「それはできない。」などと言い、前にひろきを木っ端微塵にしたあの魔法をフォック達目掛けて再度放った。しかし、ひろきは動かない。それはかりでなく、剣に力を溜め始めた。偽者の攻撃はフォック達を襲った。しかし、フォック達は立っていた。
そして、フォック達も自分の道具に力を溜め始めた。偽者が動揺している中、みんなはひろき目掛けてそれぞれの道具を投げた。
道具を持ってない奴は魔法力をひろきに送り出した。

道具と魔法力がひろきに向かってくる。その時、ひろきは自分の剣を高々と天に翳した。すると、ひろきの剣は光り、他の道具やら魔法力やらを吸い込み始めた。そして、すべてが１つの塊となった時、他の道具も光り出した。そうしていくうちに、道具は１つの剣へと形を変えたのだった。ひろきはその剣を持ち、偽者の前に立った。

「なんだその剣は、そんな物、俺に通じるわけがないだろ。」
そう言って偽者はフォック達に放った魔法をひろき目掛けて放った。

ひろきは避けようとしない。ただ剣を頭の上へ持っていった。そして魔法が来た時、ひろきは剣を振り下ろした。すると、魔法はきれいに真っ二つに切られ、左右に分かれて飛んでいった。唖然とする偽者、そんな中ひろきはもう一度偽者目掛けて剣を振り下ろした。すると、剣からは今までにない破壊力と大きさとスピードがある魔法光線が放たれた。そして、それは偽者に向かって飛んでいった。

偽者は何とか受け止めようと、腕を大きく広げその魔法を受け止めた。そして、なんとか耐えていた。そこへひろきが力をさらに加えた。すると、とうとう偽者は受け止めることができなくなり、その魔法の餌食になってしまった。今度は偽者が木っ端微塵になってしまった。攻撃が止むと剣は再び元の道具へと戻った。ついに、仲間全員での合体魔法を完成させた。しかし、この技、魔法力をほとんど使ってしまうので攻撃した後は魔法が使えなくなってしまうという欠点があるが、大丈夫だろう。

ひろき達は笑っていた。平和を取り戻したことに嬉しかったのだろう。これにて長い戦いは幕を閉じた…。と、思いきや、ほっとするひろき達の前に何者かが現れた。

「俺の名前はグズグズ、お前らを倒してこの世界を俺のものにするんだ。」

新しい敵の前にひろき達は驚きを隠せない様子でグズグズのことを見ていた。

第２７話　最強の合体魔法（後書き）

ドラゴンボールでいう元気玉みたいなものです

第２８話　グズグズの世界征服

新たな敵、グズグズはひろき達に攻撃を始めた。
さっきの戦いの疲れもあり、避けきれず攻撃に当たってしまう。しかも、魔法が使えない。
ひろき達はただ避けることしかできなかった。攻撃しようにも、グズグズの攻撃が激しくて攻撃できない状態だ。
すごいピンチである。

そしてとうとうひろき達は倒れた。もはや勝ち目はない…。そんな中、グズグズはチョックに近づいてきた。
「キミの命は体の中にクリスタルだな。その水晶を食べれば最強のモンスターになれるという。どうだ。その水晶を渡してくれないか。」

ここで新事実。チョックは普通の心臓を持ってないという。どうやら体の中に入っているクリスタルが命の源らしい。
誰もが知らなかった事実であった。

それを聞いたチョックは勿論拒否。すると、グズグズはいきなり呪文を唱え始めた。すると、チョックの体は光り出し、その後、口から青色のクリスタルが出てきた。チョックは意識を失い、目も白目を向いてしまった。

グズグズはそのクリスタルを手に入れようとチョックの所へ近づいてきた。勿論そのクリスタルを取ってしまえばチョックは死んでしまう。ひろき達が何とかそれを防ごうとするがどうにも体が動かない。そして、グズグズがクリスタルを取ろうとした時、何処からともなく魔法が飛んできてグズグズに当たってグズグズは吹き飛んだ。

その後、誰かがひろき達の前に立ち、剣を構えた。

「うちの息子に手は出させねぇぜ、グズグズ。一年間様子を見てきたが、お前の目的は我が一族の命のクリスタルだったとはな。」

ここでチョックの父親登場。名前はバズ・チョックと言うらしい。バズはチョックのクリスタルを体内に戻した。すると、チョックは意識を取り戻した。そして、ついに親と子の再会が果たされた。

「あの時は悪かった。赤ちゃんだったお前を1人船に乗せ、村から逃がしたことを許してくれ。お前を守るために仕方がなかったんだ。あの後、村人はほとんど死んでしまった。残ったのは俺とお前だけだ。母さんも途中で死んでしまった。死に際に母さんは俺にチョックをどうにか守って欲しいと言っていた。だから今までずっとお前のことを探していた。そして、今日会うことができたんだ。俺はお前を守る為にここに来た。どうか俺の行動を許してくれないか。」

ここで過去が明らかに。それを聞いたチョックは父親を許したのだった。

そうこうしているうちにグズグズが立ち上がっていた。そして、グズグズはたくさんのモンスター達を召喚させた。それを見たバズはひろき達にポーションを渡して飲むようにいった。

ひろき達が飲んでみると体力がみるみる回復していった。ひろき達は立ち上がりモンスター目指して攻撃を仕掛けに行った。攻撃といっても魔法は使えないので打撃やら剣の攻撃であった。モンスターはひろき達の敵ではなかった。

すべてのモンスターを倒し終わると、ひろきはグズグズとバズとチョックがいないことに気づいた。辺りを見回すと、グズグズにやら

れてピンチの状態のバズの姿があった。そして、グズグズはチョックの喉を押さえて捕まえていた。どうやら偽ひろきがひろきを死へ導いたあの作戦をやったようだ。ひろきが助けにいこうとするとグズグズは「それ以上近づいたらチョックの首を斬る。」と脅した。仕方なくひろきは止まった。その隙にグズグズはバズも捕まえた。そうするとグズグズはワープホールを出しワープしようとしていた。その時ひろきが叫んだ。

「チョックの代わりに俺が人質になる。だからチョックを離せ。」

それを聞いたグズグズはひろきの方へ近づいて来た。そして、グズグズはその取引に応じた。そしてひろきはグズグズに連れられワープホールでどこかに行ってしまった。

第２８話　グズグズの世界征服（後書き）

なんだろうね。生きる源がクリスタルって…。
クリスタルについて発展させたかったけど、無理っぽいのでやめます。

第２９話　ひろきとバズを取り戻せ

ひろき達の行方は分からなくなってしなった。そんな時、突然フォックの杖が光りだした。そして、変なマップが出たと思いきや赤く光る点を発見した。それを見てフォックは感づいた。これは、ひろき達の今いる場所を示していることに。
どうやらバズがどうにかしているんだと思う。早速フォック達は示している場所に向かった。

ひろき達がいたのは溶岩の上で、ロープに縛られて宙吊りになっていた。この状態で１日経ったので、ひろき達は頭に血が上りふらふらになっていた。そこへグズグズが登場。
どうやら落とそうとしているらしい。そうすることによりひろき達は死んでバズはクリスタルだけが残るということだ。
　そして、とうとう落とされようとしている時、例によってフォック達が助けに来た。そして、グズグズとフォック達の攻防が始まった。その間にチョックはひろき達を助ける為、ロープを外していた。途中、攻撃の流れ弾に当たり、ひろき達を溶岩の中に落としそうになるが、ぎりぎりで止めて何とか守った。そして、ようやくひろきとバズを助け出した。

そして安全な所に行き、攻撃をかわすことにした。

そんな時、グズグズが弓を取り出した。そして矢を持ち、その矢を放った。何とその矢は悪魔族の矢らしく、当たると心が支配され悪魔のようになってしまうらしい。そんな矢を放ったもんだからフォック達は避けるしかなかった。

その矢は風で流された。そして、あろうことかひろき達の方へ飛ん

でいった。

ひろきが気づき矢の方を向いた瞬間、その矢がひろきの腹に直撃した。運良くひろきに当たったもんだからグズグズは笑い出した。フォックはその瞬間を見逃さなかった。

フォックは杖をバットのように使い、グズグズを吹き飛ばした。しかも、溶岩の方に飛ばしたもんだから、グズグズはそのまま溶岩の中に落ちてしまった。とりあえずグズグズは倒すことができたが…。

ひろきは矢が当たった後、ずっと倒れこんでいた。心配そうにフォック達が見つめる中、ひろきが急に立ち上がった。攻撃態勢に入るフォック達、しかしひろきは攻撃してこなかった。

しばらくするとひろきはいつも通り喋り始めた。大丈夫そうだ…いや、フォックが気づいた。なんとひろきの右目だけが青色から赤色になっていたのだ。

第２９話　ひろきとバズを取り戻せ（後書き）

グズグズ…なぜ、すぐ止めをささなかったし。

第３０話　赤い目の謎

ひろき達はとりあえず一旦フォック村へ帰ることにした。そして、目を病院で診てもらったが、どこも異常はないという。仕方なく様子を見ることにした。

病院から帰ってきたひろきにフォックは剣を渡した。すると、いきなり目の色が青に戻り、激しいオーラを出した。なんていうか正義感に満ちていた。

これで大丈夫かと思いきや、正義感に溢れすぎていて手に負えなくなった。その時、犬次郎は閃いた。そして、ひろきの剣を取ってみることにした。すると、元のひろきに戻った。目も元の赤色になってしまった。

このとき何かに気づいた犬次郎。すると、今度はフォックの杖をひろきに持たせた。すると、ひろきはフォックの動作をし始めた。

そして杖を取ると、元のひろきに戻っていた。

犬次郎の考えは当たっていた。

どうやら今のひろきは、道具を持たせるとその道具を最大限に引き出すことができるらしい。試しに包丁を持たせてみるとひろきはシェフになった。それが分かったフォック達はひろきにいろんなものを持たせて遊んでいた。そしてカービィがひろきにスコップを持たせたら、ひろきは地面を掘り始めた。

どんどんと掘っていくひろきを止めようと追いかけると、ひろきは何かを見つけ出した。それはまさしくフォックが埋めてどこだか忘れていた村の宝だった。

フォックは喜び、ひろきにお礼を言った。しかし、よく見るとそれは、ひろきが探している水晶だった。しかも『茶』の。ひろきがなんとか元に戻った時、フォックはそれをひろきに渡した。水晶を持ったのにひろきは何にも変化を遂げなかった。

そんな時、突如グラサンを掛けた敵が出現した。フォックはひろきに剣を持たせた。正義感たっぷりのひろきは戦う気満々だ。それを見た敵は矢のことを話し出し、そして「こう使うんだ。」と言いひろきの剣を弾き、敵は自分が持っていた剣をひろきに渡してしまった。すると、ひろきの目は両方とも赤色になり、フォック達を攻撃し始めた。

敵になったひろきは恐ろしく激しく、何もかもを壊していった。仕方なく戦うことをしなければならなくなり、仲間同士の戦いになってしまった。

ひろきと戦いながらもフォック達はひたすら剣だけを狙っていた。それを敵が邪魔をしつつひろきも弾き返すので、取ろうにも取れなくて苦戦していた。とりあえず、二手に分かれて敵とひろきをそれぞれ分けて戦おうということになった。

敵の方は案外簡単にけりがついたが、ひろきは手強かった。ひろきから剣を取るだけなのに、相手がひろきということもあり苦戦していた。しかし、とうとう一瞬の隙を見せたひろきから剣を取ることができたのだった。

ようやく戦いが終わったがひろき右目は一向に赤いままだった。どうするか悩んでいた時、ひろきの掘った穴から何かを発見した。

第３０話　赤い目の謎（後書き）

赤色以外にも黄色とか紫も考えてましたが、ボツにしました。

第３１話　『白』の水晶の能力

発見した物を見ると、そこには水晶の事について書かれている紙だった。どうやらフォックが水晶と一緒に埋めたらしい。そして、その水晶には驚くべきことが書かれていた。

「水晶ノ力、失ウ時、１１ノ水晶集メレバ、ソノ力、戻ルコトアリ。」

とりあえず、水晶を１１個集めればいいらしいけどそんな時間はない。ひろきを戻すことが先である。しかも、そう簡単に見つかるものではないのでそのことは置いておくことにした。

ずっと戦い続きなので、みんなの体力はほとんど残っていなかった。疲れ果ててみんなは座り込んでしまった。そんな時、運悪く敵が出現した。しかも、よく見るとさっきの敵と同じグラサンを掛けていた。組織の一員の印なのか。まあそんなことは置いといてひろき達は力を振り絞り戦いを挑んだ。

攻撃を当て続けるひろき達。そして敵を限界まで追い詰めた。ふらふらの状態の敵は突然、水晶を取り出した。まさしくひろき達が探している七個目の水晶だった。色は『白』で何の能力かは把握できない。すると、敵はその水晶を動かし「リカバリー」と叫んだ。すると、敵の体は回復してしまった。

『白』は回復だったのだ。（ちなみに『茶』は土系の物でした。）

敵は完全に回復してしまった。仕方がないのでもう一度攻撃し始めた。止めを刺せばいいのだがなかなか止めが刺さらない。そして、ようやく犬次郎の刀により止めを刺すことに成功した。敵は倒れ煙となって消えてしまった。

その場には水晶だけが残った。

それを使えば回復できるが、敵が倒れた瞬間、ひろき達も倒れてしまい、もう動ける状態ではなくなった。しかし、ひろきはなんとか匍匐前進で進み、何とか水晶を取ろうとしていた。そして、もう少しで届きそうになり手を伸ばした時、誰かがひろきの手を踏んづけた。ひろきが見るとそこにはグズグズに似た姿があった。

第３１話　『白』の水晶の能力（後書き）

カイルに貰ったのも『水晶』。探してと頼まれたのも『水晶』…。
どっちか変えるべきだった。

第３２話　クスクスの世界征服

そいつはひろきを蹴り飛ばした。そして水晶を手に取り首に取り付けた。
誰もがその姿に驚いた。グズグズとそっくりだったから。そいつはひろき達に説明してきた。
「俺はグズグズの兄のクスクスだ。お前らを倒して世界征服を企んでいる。どうだった。さっきの敵達は。あいつらは俺がグラサンで操っていた奴等だ。お前らの体力を少しでも奪う為にな。よくも弟を殺してくれたな。覚悟はできてんだろうな。」

そう言ってフォック達に攻撃を始めた。動けないフォック達は諸に攻撃に当たってしまう。そして、みんなを吹き飛ばした後、クスクスはチョックの所に向かった。チョックの前にはバズが力を振り絞り立ち塞がった。しかし、クスクスはバズを吹き飛ばしチョックに近づいた。
そして叫んだ。
「お前の命が俺を最強のモンスターへ導いてくれる。そして、ギガスに続く新たな伝説をつくるぜ。」
すると、クスクスはチョックに魔法光線を放った。バズの必死の叫びも空しく、チョックはクスクスにより命を落としてしまった。光線が止むと、そこには倒れたチョックとクリスタルが置いてあった。クスクスはそのクリスタルを手に取るとクリスタルを口の中に入れ飲み込んだ。すると、クスクスの体はみるみる変形していき、クスクスは巨大な怪物みたいなものに姿を変えていた。

ひろき達はそいつから出ているオーラみたいなものをびんびんに感じていた。とりあえず今までのどんな敵より圧倒的に強いことだけみんな分かっていた。もう動かない体ともう出せない魔法。もうど

うすることもできないひろき達。そんなひろき達目掛けてクスクスは動き出した。

第３３話　驚異的な究極怪物

ひろき達はただ攻撃の餌食になるしかなかった。
もう戦う体力も無いひろき達はどうすることもできなかった。ひろき達が攻撃を受けている間、バズはチョックの側へ寄っていた。そして、チョックに到着したバズはなにやら粉を取り出した。それは第１５話でウケケ星人が使った薬と同じもので、あの『デルメシア』から作られた薬だと言い出した。そして、特別な調合により生き返らせる薬にしてあるというのだ。多分これはチョックの母親に使おうとしていたんだと思う。だけどそれをチョックに使ったのは、チョックの母親が死に際に言った。「チョックをどうにか守ってはしい。」という言葉からチョックを生き返らせたのに違いない。
チョックは生き返った。しかも体力満タン、魔法力満タンで。チョックが目を開けて見た景色は凄まじいものだった。ひろき達がおもちゃのように怪物に遊ばれていたのだ。

それを見たチョックはクスクスに向って行き、止めるように言った。それに気づいたクスクスは標的をチョックに変えた。そして、襲ってくるかと思いきや、クスクスはバズを捕まえた。
そして言い放った。
「ゲームをしようじゃないか。チョックくん。お前が俺に弱点だと思うところを攻撃しろ。それに成功すれば俺は倒せるが、お前が間違えた場合、俺はバズを攻撃する。もし途中でバズが死んだら、その次はひろきへとどんどん人質を変えていく。いいな。」
それなら勝てる確立がある。チョックはそのゲームに挑戦した。
最初チョックは顔を狙った。しかしはずれ。クスクスはバズに攻撃した。しかし、その破壊力は凄くバズは吹き飛ばされてしまう。しかし、バズはそれに耐え、なんとか生きていた。頑張って耐えたの

だ。

次は股間を狙った。クスクスは倒れ込むがすっと立ち上がりチョックに拳をぶつけた。はずれである。またしてもバズに攻撃が放たれた。今度こそ駄目かと思いきや、バズはまた耐えていた。

かろうじて生きている状態だ。次攻撃を受けたら確実に死んでしまう。それを感じ取ったチョックは足元から顔までパンチを連続で繰り出し続けた。

「どこをやってもだめだ。お前の負けだ。俺に弱点はない。離れろ。」

そう言ってチョックを捕まえようとした。最後にチョックは変身して頭から生えた角をパンチした。そこで捕まったがチョックの拳に何か違和感が残った。チョックは何とか捕まっている手の中から腕を出し、角目掛けて魔法を放った。すると、角は折れた。その直後、折れた先から力が放出されていった。

チョックは手の力が緩んだ隙に逃げ出した。クスクスは激しく動揺していた。と、次の瞬間、クスクスの体が弾け飛んだ。クスクスは粉々になり、この世から消え失せた。弾け飛んだ後、チョックの所に白水晶が落ちてきた。チョックはそれを手に取り、透かして動きを確かめた後「リカバリー」と叫び、ひろき達を回復させた。

全員の回復が終了するとバズがチョックに「チョック。よくやった。俺はお前が子であることを誇りに思う。」と言ってチョックを抱き上げた。

何もかもが終わった。この長い戦いについに終止符がうたれたかと思っていた…。

ひろき達は家に帰る為、村の方に歩いていた。とてもいい笑顔で。そんなひろき達に「待った。」の声をかける奴等がいた。ひろき達が振り向くと、そこには今まで倒した敵達が勢揃いしていた。

第３３話　驚異的な究極怪物（後書き）

なぜ、チョックが倒せたし。
というツッコミはなしで…

第３４話　敵との再試合

そこにいたのは今まで倒した敵達だった。なんと、あの五章で天国へ行ってひろきを連れ戻してきた時、一緒についてきたというのだ。そうなったらまた戦うことしかないので、ひろき達は戦い始めた。

しかし、楽に倒せる。修行もしているし、ゾゲスにはカードに変える杖を持ってないし、洞窟でもないし、操れるステッキも持っていないからだ。あの強かったイガルも、もうあまり強いとは言えなくなっていた。しかし、その中にウケケ星人の姿はなかった。

どんどんと撃退していくひろき達。そんな中、イガルがひろき目掛けて変な魔法を放った。すると、ひろきの体は小さくなってしまった。

小さくなったひろき。
攻撃力も劇的に下がった為、敵を倒せない。フォック達が何とか倒してくれるので大丈夫だがこのままでは駄目だろ。
しかも、まだ右目も赤いままだし、どうしたもんか。イガルに直し方を聞くが分からないという。倒せば戻るだろうとして、フォック達はイガルを倒した。しかし、元には戻らない。

そうこうしているうちに敵は全員片づいた。後はひろきをどうするかである。
あれこれやってみるが駄目である。仕方なくひろきは神様に相談した。すると、時間が経てば直るという。仕方がないのでこれで帰ることにした。
そしてようやく全員家に帰ることになった。戦いの疲れもあるし、

ずっとろくに食べてないみんなはへとへとになりながら自分の家に戻っていった。

バズはチョックの家で休むことにした。ひろきはフォックの家で休むようにした。こうしてひろき達の長い戦いは終わった。

次の日、ひろきが目を覚まし鏡で確認してみると元の姿に戻っていた。喜びのあまりまだ寝ているフォックを叩き起こすと、フォックは寝ぼけてひろきに強力なパンチを食らわした。そのショックでなんとひろきの右目は元の青色に戻っていたのだ。

どうやら強い衝撃を仲間からうけると赤目は直るらしい。

これにより今回のトラブルはすべて解決されたのだった。その後、ひろきはフォックに強力な蹴りを食らわせた。

昼になりひろきは自分の家に戻った。すると、チョックとバズがひろきの家を訪れてきた。なんでもチョックが故郷へ一旦戻ると決めたらしい。それでしばらく一緒に戦えないということを伝えにきたのだ。

ひろきは快くそれを認め、チョック達を見送った。

見送りにはみんなが来て、温かく2人を見送っていた。こうしてチョックとバズの故郷への新しい旅が始まったのだった。

ひろき達はいつ来るか分からない敵に備え、修行へと向かっていった。

その途中、ひろきはフォックにとあることを聞いた。

「なぁ、俺をどうやって生き返らせたんだ?。」

その質問にフォックはことの経緯を話した。すると、新たな問いがひろきに生まれ、フォックに聞いてきた。

「ギガスって誰だ?」

「えっ？」
ひろきの発言に唖然とする一同。ひろきはなんで驚いているのか分からなかった。
「ひろき。ギガスしらねぇのか…。」
「ギガスはもっとも有名な人だよ？」
「えっ。そうなの？」
「ああ。世界中にこんな伝説があるんだ。『この世に計り知れない敵が現れた時、１人の戦士が現れてその敵を封印し、この世界を平和にした。その名はギガスという。』って伝説がな。」
「最強の敵…ギガス…。」
「５０年前の出来事の伝説だ。今は生きているのかさえわからねぇ。この伝説が本当なのかっていうのも…。」
「そうか…。いつかあってみたいな…。」
そう言ってひろきは微笑んだ。

第３４話　敵との再試合（後書き）

やっと伝説を語ることができた。この伝説が物語の鍵?です。たぶん。

第３５話　ひろきの事件

ある雪の日、ひろき達は大きな屋敷に招待された。行ってみると、普通の屋敷と普通の人達が招待してくれた。どうやら敵ではないらしい。とりあえずひろき達はその屋敷の中に入った。

屋敷の中は広く、綺麗で優雅な気分になってきた。今日はここで泊まって明日、パーティが開かれるのだが、それにひろき達は招待されたのだ。その為、普通に休めるはずだったのだが事件は起こってしまった。その夜、ひろきがこの屋敷から消えてしまったのだ。どこかに出て行ったとかそんな状況ではない。本当に姿を消してしまったのだ。

フォック達は探し始めた。それでも見つからず事件は誘拐されたという結論に至った。

フォックはみんなにアリバイを聞いてみた。するとひろきのいなくなった時間はみんなアリバイがあった。その為、もう一度屋敷の人達に話を聞こうとしたら、なんと屋敷の人達の姿も消えていた。

とりあえず、ひろきの部屋を散策してみることにした。すると、犬次郎がテラスへの入り口が開かないことに気づいた。そういえば全員のテラスへのドアは開かなかった。他に出られる所と言えば入り口しかない。ひろきがドアから出たのであれば、鈴がついているので向かいの部屋にいたフォックに音が聞こえるはずだが、音はしなかったという。となると、ひろきはどうやって出て行ったのか。謎はさらに深まってしまった。

とりあえず、それぞれ自分の部屋に戻ることにした。その途中、カービィの口から紐のような物が出ているのが見えた。フォックがそのことを聞いてみると「この間吸い込んだ物。いろんなものを吸い込むからたまに出てきちゃうんだ。」と答えた。それを聞いたフォックは納得し、それぞれの部屋に帰っていった。

犬次郎はひろきの隣に泊まっていた。そんな犬次郎は屋敷から出て、外からテラスに向けひろきの方のテラスへ移った。すると、そこには無数の足跡が残っていた。それらをよく見るうちにテラスのドアノブに目がいった。するとそこには、形状記憶製の針金で固定されていたドアノブがあった。しかもこれは暖めると軟らかくなる針金で、冷やすと元の形に戻る性質があった。それにより閃いた犬次郎はさらにテラスを捜索した。すると手すりの部分に紐を巻きつけた跡があることに気づいたのだった。そこでさっきの廊下のことを思い出した。

すかさず犬次郎はみんなを集めた。しかし、今度はカービィの姿が無くなっていたのだ。部屋にもいなければどこにもいない。その中で、謎を呼ぶことをマラオから聞かされた。

「俺、ずっと廊下にいたけど、カービィは部屋から廊下には出てないよ。」

謎がさらに深くなる。とりあえず、コビィの部屋を捜索し始めた。しかし、何にも手がかりはない。そんな中、テラスへのドアを確かめるためドアノブに触れた時、ほんのり暖かみが残っていることに気づいた。そして、犬次郎はカービィのいなくなったトリックを発見したのだった。

犬次郎は小さいながらも手に魔法球を作った。そして、それを部屋側のドアノブに近づけた。そのまましばらくすると、なんと、止めてある針金が落ちてテラスへ行くことができたのだった。これは、ドアノブが金属であった為、熱を持った魔法球を近づけることによって、熱伝導が働き、テラス側も暖まり、針金の形が変わって落ちたのだった。

ドアが開くとみんなはテラスへ出た。畳４枚分くらいのテラスの中でもやはり足跡がいっぱいあった。その中で黒い足跡を見つけた。それを見てみると、それは足跡の汚れではなく、下につながる階段

のドアの色だったのだ。どうやら雪で隠れていたみたいだ。
ひろき達がいたのは2階のフロア。テラスの下にはなにやら1階フロアのおまけみたいな建物があり、そこの屋上へ階段は続いていた。降りていくと、そこにはまた足跡が続いていた。それを追うと屋上への入口、つまり建物内への入口に続いていた。そこへ入り、下に降りると、なんとそこにはひろきとカービィ、そして屋敷の人達全員が勢ぞろいしていた。その中でみんなは明日のパーティの準備をしていたのだ。ほっとするフォック達、それを見てひろき達は笑い出した。どうやらみんなには秘密にしていたらしいのだ。なぜかというと、明日のパーティはフォックの誕生日をお祝いするものなのだから…。
次の日になり、誕生日パーティが始まった。フォックは感動で泣いている。それを笑いながら祝福するひろき達だった。
すると突然、屋敷の中から煙が立ち込めてきた。

「火事だ。みんな逃げてください。」

慌てて逃げるひろき達。そして全員が無事に脱出できたと思いきや、屋敷の奥さんの子供がまだ中に居るという。それを聞いたひろきは燃えた屋敷の中に飛び込んでいった。

ひろきは青の水晶を使い、なんとか屋敷の中を探し続けた。そして、ようやく見つけて手をとり出ようとした瞬間、屋敷が崩れてきてしまった。フォック達は唖然としていた。奥さんは泣いている。みんなが最悪のことを考えてしまった。
しばらくして、屋敷がすべて崩れた時、炎をバックに誰かが歩いてきた。それはまさしくひろきだった。しかもちゃんと子供を抱えている。煤だらけの顔には笑顔が溢れていた。フォック達と奥さんがひろきの方に駆け寄った。すると、ひろきは子供を奥さんに渡した。奥さんは何べんもお辞儀をして、我が子の帰りを喜んでいた。

それを見届けたひろきは、地面に腰を着いて座り込んだ。

屋敷がなくなってしまい、パーティができなくなってしまった為、ひろき達は帰ることにした。屋敷の人達は、まだ家があるらしく、そちらの家で暮らすことになった。こうして今回の事件は幕を閉じた。しかし、ひろきがフォック村に帰ると、ひろきは倒れてしまった。フォックが様子を確かめると、すごい熱があることに気づいたのだった。

第３５話　ひろきの事件（後書き）

あんまり推理っていえるものじゃないね。

第３６話　ひろきの熱

ひろきの熱は高く、ヤバイ状態になっている。どうやら、攻撃とかの痛みは感じないけど、熱だとかの苦しさは感じるらしい。そんな時に敵が出るのが、この物語の悪いところである。敵はなんとかフォック達によって撃破されたが、ひろきの熱は下がらなかった。

どうするか悩んだ時、フォックが『熱が下がる植物がこの世界のどこかにある』という事を思い出した。早速フォックと犬次郎はそれを探しに旅立った。そして3日後、ついに2人はそれを見つけ出した。急いで帰る2人。そして、ひろきの家につくと中からハムチィーが出てきて

「もうその植物、必要ないよ。」

と凄い暗く言った。まさかと思ってひろきの様子をみると、そこには華やかに笑うひろきの姿があった。

「2人ともごめん。今日の朝、治っちゃった。」

唖然とするフォック達。そして

「無駄足だったな、俺達。」

「ああそうでござるな。」

と笑い出した。これでとりあえず問題は解決し、普通の生活に戻ったのだった。採ってきた植物はひろきの家の庭に植え直すことにした。その後、犬次郎とフォックはハムチィーにゲンコツを食らわしたのだった。

第３６話　ひろきの熱（後書き）

短いけど、手抜きしたわけじゃないよ

第37話　パーティー会場での別れ

ある日、ひろきは夢の中で神様と話していた。なんと、元の世界でひろき達が乗っていた自転車が、通行の妨げになっているらしい。

この世界にはひろきとひろしだけ来たので、自転車はそのまま残ってしまい、丁度道路の真ん中で倒れたので通行する車が通れない状態なので戻してきてほしいらしい。なのでひろきは一旦、元の世界に戻ることになったのだ。

（ここの世界で1年は元の世界での一秒なので車は通らないと思うけど）

しかし、ここで問題が発生してしまった。この世界は元々、元の世界と同じ時間の進み方だったのが、ひろき達が来たことにより、元の世界の一秒が1年となったらしい。その為、ひろきが元の世界に行くとなると、数秒の時間が何年にもなってしまうのだ。

そこで神様がどうにかひろきがいない間だけ時間を戻そうとしたが、どうにも駄目らしい。なので、一秒1年のままになってしまったのだ。もし、元の世界での時間が長引けば、その間に何日も過ぎていくこの世界の中で、敵が幾度となく襲いに来るだろう。

こうなってしまっては大変である。そうならない為に、神様が結界を張って敵が来ないようにすると言ったので、ひろきは元の世界に行くことを決めたのだ。

ひろきが目覚めた朝は、なんと村のパーティが催される朝だった。ひろきはその場所で言うしかないと思い、パーティの仕度をした。

パーティは午後から始まった。次々にイベントが終了していく中、

とうとうひろきはステージの上に上がった。そして、話し出そうとした時、海から怪獣が現れた。

逃げ惑う人々を見てひろきは剣の先に魔法力を溜め、怪獣目掛けて剣を振り下ろした。すると、剣の刃先から魔法の斬撃が放たれた。すると、それは怪獣へ向かっていき、見事怪獣を真っ二つにすることができたのだった。

剣をしまうとひろきは改めて話し始めた。（元の世界のことは言わずに）

当然驚くフォック達。村人からも非難の声が上がっていた。それを見届けたひろきは「必ず戻ってくる。」と言い、走って村を出て行った。フォック達はそのまま立ち尽くし、ひろきの後ろ姿を見ていた。目には水滴を溜めながら。

ひろきはアイビスタウンへ向かった。ここでないと元の世界に戻れないらしい。アイビスタウンに着くと、そこには神様の姿があった。しかし、ポログラムのように体が透けていた。

そしてひろきはそんな神様に連れられ、元の世界に戻っていった。

第37話　パーティー会場での別れ（後書き）

一回ここで最終回にしようとしたんだよ。小学校の時。

でも

また、描き始めて…

まだまだかなり続きます。

第３８話　出会いの日（前書き）

当時（小学生）、前話を作って一ヶ月くらいたってから今回の話を作りました。

第３８話　出会いの日

ひろきは元の世界に戻った。そして、急いで自転車の所へ行き、自転車を田んぼに投げつけ、急いで神様の所へ行った。
時間は０．５秒。（神様の能力を使っているため可能。）
つまり半年の月日が流れてしまった。その為、ひろきと神様は急いで戻ることにした。

その頃、フォック村では敵は現れないものの、いつもの活気はなくなってしまっていた。フォックはいつもぼーっとするようになり、いつも空ばかり見ていた。他のみんなも今までとは違う空気を醸し出していた。
そんな中、ひろきを見かけたという話が飛び込んできた。フォックやみんなは急いでその場所に向かった。
そこには、ひろきの姿があった。フォックは駆け寄り、ひろきに抱きついた。ひろきはそんなフォックをひろきは抱きつくと見せかけ、いきなり剣でフォックを刺した。
驚くフォック達。
そんな中、ひろきはみんなにこう言った。

「ふん、何がひろきだ。涙なんて流しやがって。そんなにひろきに会いたいのかよ。会えねーもんな。もうここにはいないし、帰ってこないもんな。」
そう言ってフォックを蹴り飛ばした。

「お前、ひろきじゃないな。正体を現せ。」
タケルが叫んだ。その瞬間、そいつは正体を現した。なんと偽者だったのだ。

丁度神様がひろきを連れてきた時、結界が解けたので敵が来たのだろう。まさかひろきの姿で来るとは卑怯だな。こいつは変身できる能力を持っているらしく、名前はザブラというらしい。

飛ばされたフォックは立ち上がった。

「ひろきは帰ってくる…。そう約束したんだ…。よくも騙しやがって、ふざけんじゃねぇぞ。」

そう言ってフォックは攻撃を仕掛けた。しかし、いつもの動きができない。さっきの刺された傷と、精神状態の狂いが生じさせたのだ。だから、敵に押されつつある。犬次郎達も戦おうとしているのだが、体が動こうとしない。

フォックの気迫で近寄れないのが原因だった。フォックは1人で戦っていた。悔しさと憎たらしさが醸し出された戦いをしていた。しかし、フォックはとうとう力尽き、ザブラはフォックの首を掴んだ。そして、ザブラは止めを刺そうとしたその時、誰かがザブラの攻撃を止めた。

みんなが見ると、そこには本物のひろきが立っていた。

ひろきはそのままザブラを押さえ、ザブラ目掛けて攻撃をした。ザブラは一撃で倒され、フォックは一命を取り止めた。そして、今回の戦いは終わりを遂げた。

ひろきはフォックを抱え上げ、白水晶でフォックを回復させた。

「遅かったじゃねぇかよ。今までずっと待ってたんだぞ。」

「悪いな、長引いちまった。」

フォックの目には涙が溢れていた。直に犬次郎達も駆け寄り、再会を喜んだ。みんなはいつもの空気を取り戻したのだった。

ひろきは村に帰ってきた。いつもと変わらない日常が戻ってきた。

フォックはぼーっとすることはなくなった。

第３９話　爆発する日（前書き）

夢で見た話しです

第３９話　爆発する日

ある日、ひろきの許へ近くの島に敵が現れたという情報が飛び込んできた。ひろき達は早速島へ向かった。

敵は２匹で無人島に居た。どうやら、ひろき達を倒す特訓をしていたらしい。そこへ突然ひろき達が現れたのだから敵は驚いた。とりあえず、戦いが始まったわけだが、それなりに特訓の成果が出ていた。しかし、ひろき達も毎日修行しているのでこちらと負けてはいない。

そしてとうとう、ひろき達は２匹を吹き飛ばした。

もう勝負は見えたと思いきや、２匹は合体をして再度ひろき達を襲ってきた。（怪物なので合体できます。）

さっきよりパワーもスピードも倍近く上がり、ひろき達は苦戦を強いられた。それでもひろき達は戦い続け、何とか相手からダウンを奪ったのだった。ひろきが最後の攻撃をしようと敵に近づいた時、敵は最後の力を振り絞ってひろきを押さえつけた。そして、敵はこのまま自爆するといいだした。それを聞いたひろきは何とか抜け出そうとするが、敵はひろきを捕まえたまま固まっており、動かなくなっていた。フォック達が攻撃するもぜんぜん壊すことはできなかった。ミュウさんのテレポートで何とかできるかもしれないが、今日はここに来ていない。かと言って呼びに行く時間もない。爆発は残り２分を切っていた。

そんな時、犬次郎が何か光るものを見つけ出した。それはなんと、８個目の水晶『グレー』だった。犬次郎は最後の望みを懸け、その水晶をひろきに渡した。ひろきはその水晶の動きを確かめ、その動きをして『テレポート』と叫んだ。言い放った後、ひろきは目を開けた。しかし、状況は変わっていない。ひろきは犬次郎を見た。

その瞬間、ひろきの目の前は突然暗くなり、どうなっているのか分からなくなった。すると、すぐに視界が開けていた。

そしてよく見ると、目の前には犬次郎の姿があった。そこにいた誰もが驚いた。なんとひろきは捕まっている所から、犬次郎の側まで瞬間移動をしたのだ。この『グレー』の水晶は瞬間移動ができるものだったのだ。

水晶をまじまじと見ていた時、後方で「あと、１０秒です。」という声が聞こえてきた。敵のことをすっかり忘れていたのだ。

急いでその場から遠くへ逃げるひろき達。そしてとうとう敵は爆発した。その爆風でひろき達は海へ飛ばされた。まあとりあえず、全員無事に生き延びることができたのだった。

全てが終わったので帰ろうとした時、ひろきは水晶を使ってみることにした。どうやら、水晶を持っている人と手をつないだ者は水晶を持っていなくてもテレポート出来るらしいのだ。それを聞いたフォック達はひろきと手をつなぎ、先ほどの動作をし『テレポート』と叫んだ。

そして、叫んだ後ひろきは遠くに見えるフォック村を見つめた。すると、みんなの目の前が真っ暗になった。そして視界が開けると、そこにはフォック村の光景が広がっていた。全員テレポートできたのだった。これで大切な移動手段が一つ増えたのだった。

第４０話　２人の喧嘩は強烈だ

ある日の昼、村は叫び声とともに爆発音が聞こえてきた。それはフォックの家の方だった。他のみんなが駆け寄ると、そこではひろきとフォックが対決していたのだ。どうしてこんなことになってしまったのかというと数分前に遡る。

ひろきとフォックは昼前、２人で昼食のカレーを作っていた。その時、ひろきがフォックの嫌いな人参を入れてしまったらしく、それを食べたフォックは怒り、そのカレーを捨ててしまったのだ。その光景を見たひろきは、食べ物を無駄にしたことに怒り、そしてバトルに発展したのだった。

…なんてしょーもない喧嘩なんだ。

まあ仕方がなく犬次郎達は何とか２人を引き離し、別の場所でやるように言って、２人をフォック村から移動させた。

連れて行く間も２人はお互いを睨みあっていた。そして、２人を離した瞬間、２人はまた戦い始めた。犬次郎達はそれをただただ見ていた。殺すまでは行かないと思うし、楽しかったから、みんなはその喧嘩を誰も止めようしなかった。

２人の喧嘩はさらにエスカレートしていった。魔法もバンバン使って土地は穴だらけになっていった。しかも魔法が四方八方に飛んでくるので犬次郎達はゆっくり見ることはできなかった。そんな中、魔法で開いた穴からなんか箱みたいなものが出てきた。

犬次郎達はその箱を開けてみた。すると、中には手紙と『黒』と『こげ茶』の水晶が入っていた。そのため犬次郎は手紙を読んでみた。

「この水晶は戦争で使われたものだ。悪魔族でも天使族でもない奴が使っていた。それをわしらは拾い、こうして2度と奴に渡らないようにここに隠した。もし、最強の敵以外の誰かがこれを見つけることがあれば持って返ってほしい。そして、大事に持っていてほしい。それからその水晶は24個ある。もしそれを全て集めれば、最強の敵に勝つことができるだろう。奴は今、封印されている。その封印が解かれた時。今目の前にある水晶は勝負の大事な道具となる。だからどうか大切にもっていてくれ。」

なんということだ。水晶にそんなことがあったなんて。
ひろきは水晶すべて集めるだろう。そうしたら最強の敵というのにも勝てる。つまりそいつに勝った時点でひろきは最強になる。

犬次郎達はしばらく考えた。
「最強の敵というのは…ギガスの伝説の…。」
伝説にも『最強の敵』というものが出ている。こいつはそいつと同一人物なのかと。
それと同時進行でとあることを全員が思っていた。
「ひろき殿の仲間になれてよかった。」と。
そして、水晶探しを今以上に全力で探すことを決意した。

そうこうしているうちにも喧嘩は続行していた。そんな時、なんとそこに敵が現れたのだ。ひろき達はそれに気づいた。すると、2人はそいつ目掛けて一斉に攻撃し、そいつを倒してしまった。

倒した後、2人は戦いを止めた。
「もう、いいよ。俺が悪かった。」
フォックが突然謝った。それに驚いたひろきは照れくさそうに「わ、分かればいいんだよ。」そう言って喧嘩は幕を閉じた。

2人は水晶の傍に近寄り、ついに水晶の秘密を知ってしまった。
するとひろきは「集めるぜ水晶。」と言って集める本当の理由を知った。

ひろきは水晶を受け取り首に掛けた。そして、昼食を食べるべくみんなは村に戻った。
捨てられたカレーはカービィが全て食べてくれた。
喧嘩の爪あとも後日、ひろきとフォックが直したのだった。

第４０話　２人の喧嘩は強烈だ（後書き）

２つ前の話しで再会に涙してたフォックなのに…
伝説については第３４話で

第４１話　いなくなるカービィ（前書き）

気になるあいつが登場

第４１話　いなくなるカービィ

ある日、カービィは妹のカーピィと一緒に散歩をしていた。カービィはカーピィの後ろを歩いていた。すると、カーピィのリボンが落ちてしまった。カーピィはそれに気づかずに歩いて行ってしまった。

カービィはそれを拾いに戻った。そして、リボンを手に持った時に誰かがカービィを掴み、どこかに行ってしまった。カーピィはしばらくして兄がいないことに気づいた。カーピィは寂しくなり、とりあえずフォック村に行くことにした。

しかし、村にもカービィは来ていなかった。ひろき達は事情を聞き一緒に探し始めた。思い当たる所を探したがどこにもいない。何処に行ったのか見当が付かなかった。

その頃、カービィは両手両足をつながれ車の中にいた。カービィを捕まえた奴はカービィのコピー能力について調べたいらしくカービィを誘拐したのだ。勿論カービィは逃げ出そうとしたのだが、催眠スプレーを浴びてしまい眠ってしまった。

ひろき達はまだ必死で探していた。しかし、手がかりは掴めなかった。しかし、とうとうカービィの目撃情報を掴んだ。ひろき達は早速その場所へ向かうことにした。

その頃、カービィはようやく目を覚まし、自分がピンチなことに気づいた。しかも、もう準備が出来たらしく後はスイッチを入れるだけの状態だった。そして、ついにスイッチが入ってしまった。

カービィの体に電流が流れ、パソコンの画面には様々な文字が書き込まれていった。しかし、カービィのデータが膨大すぎた為、パソコンは爆発してしまった。その爆発のおかげで建物は壊れた。

爆発が止むと、外にはタイムパトロールの人達が集まっていた。そ

のおかげで誘拐犯は逮捕された。そんな中、1人のタイムパトロールのロボットらしき人がカービィに近づいてきた。
そして
「もう大丈夫。心配は要らないよ。この手錠、すぐ外してあげるから。」
と言って、そいつは鉄の手錠目掛けてパンチを繰り出した。すると、一撃で手錠は粉々に砕けた。

唖然とするカービィ。するとそいつは、自分の名を名乗った。
「俺はネコ型ロボットの『ドラ・ナターシャ』って言うタイムパトロールの1人だ。俺はこの世界の悪魔族を全滅させることが目標なんだ。」
それを聞いたカービィは自分達も目標が同じことを打ち明けた。それにはナターシャも食いついた。そして、どこに住んでいるのかを聞いてきたので、カービィはすかさずフォック村と答えた。その瞬間、ナターシャの目つきが変わった。そして、ひろきの事について聞いてきた。その為、ひろきの知り合いだと言うと、ナターシャは心の内を語りだした。

「俺は、風の噂でフォック村に強い奴が現れたという情報を聞いた。調べていくうちにそいつは天使族の仲間だということを知った。その時、俺は一緒に悪魔族と戦いたいと思ったんだ。なあ、フォック村の場所を教えてくれ。地図にも載ってないし、何処だか分からねぇんだ。」
それを聞いたカービィは場所を言おうとした。すると、いきなりナターシャの電話が鳴り、緊急出動命令が出てしまった。仕方なくナターシャは現場に向かうことにした。結局ナターシャは、フォック村の場所は聞くことができなかった。
少ししてひろき達が来た。カーピィはカービィに抱きついた。そんな中、カービィはさっきのことを話した。すると、ひろきは驚き、

ドラ・ナターシャという奴に興味を持ち始めた。

第４２話　キツイ修行は一ヶ月（前書き）

カイルさん再び登場

第４２話　キツイ修行は一ヶ月

ひろきは鉄目掛けてパンチをしてみた。しかし、ナターシャのように粉々にならない。力の差を思い知ったひろきは、修行することを決意したのだった。

ひろき達はフォック達を連れ、アイビスタウンへ向かった。なんと、カイルの元で修行をすると考えているのだ。ひろきはみんなにアイビスタウンのことは「俺が強くなった所だ。」と言っておいた。

アイビスに着くとみんなは驚いた。ここの町は繁盛していて、たくさんの人が行き交っていたからだ。そんな中、ひろきの許へカイルが近づいてきた。すると、カイルはいきなりみんなをあの荒野地帯に連れて行き、早速修行を始めた。

カイルの修行は木村先生同様一ヶ月だったが、明らかに修行のレベルが高すぎた。しかも、家や食べ物は一切支給されず自分で捕るしかなかった。もちろん買い物は駄目。しかし、他の人（仲間内）の食料は盗っていい。

つまり、この一ヶ月、自分1人だけで生き延びなければいけないのだ。

仲間など関係ない。ただ自分だけが強くなればいいと言う気持ちでやらなければ乗り切れない修行だった。

修行は2週間が経過した。ひろき達の目は飢えた野獣のような目つきになっていた。その中で修行を続けていた。もはや、顔つきは悪魔族に見えていた。しかし、力は確実についていた。

ひろきもとうとう鉄を粉々まではいかないが、ぼろぼろになるところまでいった。ミュウさんの回復魔法も骨折ぐらいは簡単に治せる

レベルまでいった。すごい進化を遂げたひろき達。しかし、これはまだ半分までの経過である。

一ヶ月が過ぎ修行も最終日となった。ひろき達はまだ生きていた。一ヶ月飢えに耐え、修行に耐え、何とか今日まで生きてきたのだった。

最終日でもカイルの厳しさは変わらなかった。そして、とうとう修行は終わりを遂げた。そして、カイルの口から「終わり。」と出た瞬間、みんなはその場に倒れこんだ。しかし、ひろきは倒れず、カイルの側に近寄った。

そして水晶のことについて聞いた。すると、最強の敵のことは知っていた。しかし、その他のひろきの質問には答えなかった。

次にひろきは、なぜ自分に集めるように言ったのかを問いかけた。するとカイルは「最強の敵というものを倒したい。」ということを言った。しかも、カイル自身はその水晶を集めることができないらしく、ひろきにそれを頼んだのだった。それを聞いたひろきは納得して、すべて集めることを決意したのだった。

ひろき達は村に戻ることにした。帰り際にカイルはひろきにリストバンドを渡した。このリストバンドは魔法が掛けられており、１週間に５キロずつ重くなっていって、どこまでも重くなるという。しかし、一度外してしまうと今までの重さはなくなり、元の重さ（５キロ）に戻ってしまうという。しかし、例外として外して３０分経つまでにまた着ければ重さは戻らないらしい。ひろきはそれを手首に着け、そしてカイルに礼を言ってフォック村にフォック達を背負い帰って行った。

第４２話　キツイ修行は一ヶ月（後書き）

重さが変わるリストバンドとか…。

考えが幼いなぁ…。

まぁ、考えたの小学生の時なんで…許して

第４３話　２人の心が入れ替わる（前書き）

よくあるはーなーし。

第４３話　２人の心が入れ替わる

修行の後、一週間はみんなの目つきは怖いままだった。そして、目つきが治っても体力は回復せず、みんな歩くのもやっとのことだった。

ひろきは2回目の修行だった為、慣れたらしく3日寝たら回復していた。なので、ひろきはフォックの介護の為、フォックの家に泊まっていた。何でも村長会議というものがあり、それに出るため怪我するわけにはいかなかったのだ。そんなこともあり、ひろきが介護を担当したのだった。しかし、そんな中で事件は起きてしまった。

フォックは階段を降りようとしていた。それを介護する為、ひろきはフォックの側にいた。その時、フォックが階段を踏み外した。それに気づいたひろきはフォックを庇いながら2人で落ちていってしまった。一番下に着いた2人はお互いの心配しようと相手の顔を見ると、そこには自分の顔があり驚いた。なんと、ひろきとフォックの心が入れ替わってしまったのだ。

２人は困り果てた。このままじゃ何かと不便である。しかも、村長会議にひろきが行くことになってしまう。

どうするか考えた挙句、もう一度階段を落ちてみようということになった。そして試みるが効果は得られなかった。仕方がないのでとりあえずみんなに相談することになった。しかし、みんなも疲れていて、それどころではない状態だった。仕方なくひろき達は２人でなんとかすることにした。しかし、どうにも分からない。

そこでひろきはフォックの姿のまま神様に相談してみた。神様は驚いた。突然ひろき以外の奴が呼びかけたのだから。しかし、それがひろきだと分かると安心したらしく話しかけた。そして神様は有力な情報をくれた。ここから北へ十キロ行った所に入れ替わりの梨と

いう梨があって、それを2人同時に食べれば元に戻るという。早速ひろき達はそこへ向かった。

ひろきの体に入ったフォックは体が軽くなったらしくぴょんぴょん跳ねている。一方フォックの体に入ったひろきは体が重く、あらゆる箇所が痛くて歩くのもやっとであった。そんな中、ひろきはここで大変なことに気づいた。ひろきの体は攻撃を食らっても痛みを感じないようになっているのだから、フォックの体に入ったひろきは敵の攻撃の痛みを感じてしまうのだ。ひろきは、当然怖くなり一刻も早くその梨を見つけなければと思い急いだ。しかし、体が重くスピードは出なかった。

ようやく神様が言った場所に着くと、そこには悪魔族の奴が2人ほどいた。どうやら、この梨をひろきに食べさせれば自分の戦闘能力が上がり、フォック達も騙せるという計画を立てていたのだ。しかし、そんなことはさせないと果敢に飛び込むフォック。その様子をひろきは後ろの方で見ていた。修行をしたのだから攻撃は食らわないだろうけど、始めての経験に怖さが現れてしまったのだ。そんな中、フォックは敵を秒殺してしまった。あっけなく終わりを遂げた戦いに溜め息をついたフォックは、急いで梨を採り、ひろきと同時に1つの梨に噛み付いた。すると、辺りが突然光りひろき達を包んだ。そして、光が消えると、そこには元に戻った2人の姿があったのだ。

2人は抱き合い、喜びを露にした。しかし、フォックは少し残念そうな顔をしていた。こうして2人は無事元の生活に戻った。

第４３話　２人の心が入れ替わる（後書き）

梨って…なぜ梨！！

第４４話　きれいな泉を取り戻せ

ある日、２人の子供が助けを求めてフォック村にやってきた。なんでも今まで大切にしていた泉が敵に盗られてしまったらしい。その話を聞いたひろきはその場所へ向かった。

そこに行くと、確かに敵が泉の周りを取り囲んでいた。そもそもなぜこの泉に敵が来たのかというと、この泉の水は飲むだけで疲れたり傷ついたりした体を直してくれるという。その為、ひろきが回復しないようにこの水を汚してしまおうと敵が集まってきたのだった。それを見たひろきは果敢に飛び出した。そして、次々にそいつらを倒していった。

そんな中、気配を消していた敵が子供達に攻撃してきた。すかさず庇うひろき。修行したから食らわないが、この攻撃を食らった後、ひろきは動けなくなってしまった。どうやら毒を掛けられ、体が麻痺してしまったようだ。

ひろきは子供達に逃げるように言った。その瞬間、敵の攻撃がひろきを襲った。子供達にも攻撃は向けられたが、何とかぎりぎりで逃げきることができた。

ひろきは攻撃を受け続けた。１人の攻撃にはまったく効かないが、数えきれないぐらいの敵が一斉に攻撃してくるので、ひろきはダメージを受けてしまった。そんな中、そこにいる敵のボスみたいなものが登場した。すると、そいつはひろき目掛けて魔法を連打した。威力も雑魚敵の倍ぐらいはあり、しかも連打なのでひろきはとうとう倒れてしまった。それを見たボスは、ひろきを殺さずに地下にある牢屋に閉じ込めたのだった。

その頃、子供達はフォック村に来ていた。フォック達に助けを求めにきたのだ。話を聞いたフォック達はひろきを助けるべく泉に行

った。そこに着くと、待ち構えていたように敵が並んでいた。そして、一斉に攻撃をしてきた。それをフォック達は魔法で打ち返した。すると、敵の第二部隊から鉄球が飛ばされた。それをフォック達はパンチで壊したり、刀で斬ったりして攻撃をかわしていた。そこでボスが特大の一撃を放った。フォック達は何とかそれを壊したが、壊した瞬間に中から毒ガスが噴出してフォック達を襲った。そして、みんなの体は麻痺してしまった。そして、フォック達もひろき同様ぼろぼろにされ、ひろきとは別の牢屋へ入れられた。残ったのは子供達しかいなかった。もう頼れる人はいなかった。絶対絶命である。

子供達は、他の子供達がいる洞窟に行った。（大人は捕まっている）そこで話し合った結果。子供達は勇気を振り絞り、敵に立ち向かうことにした。

子供達は敵の陣地に走りこんだ。敵は攻撃してくるがうまくそれをかわし、地下へ向かって走り続けた。途中何人かで敵の攻撃を防いで、その隙に残りが走って切り抜けたりした。そして、ボスのところへ付くと１０人で動きを封じた。その隙に３人が鍵を取り地下へ向かった。地下に付くと、子供達は親より先にひろきを牢屋から出した。そして３人はひろきを担ぎ、地上への階段を昇っていた。その時、敵が階段を降りてきていて、子供達を捕まえようとした。

その時、ひろきが魔法を放った。何とかぎりぎりで出せたっぽい。

それにより敵は倒され、地上への通路は再び開いたのだった。そして、地上に着いた時、子供達はひろきを泉に投げ入れた。そして数秒後、ひろきは勢い良く泉から飛び出た。すっかり回復して、毒も吹き飛んだのだ。

そして、そのままひろきは敵全員に向け特大魔法を放った。この魔法は修行で習得したもので、ひろきが敵と認識した者にだけ当たる魔法なのだ。

だから子供達には食らわない。
その魔法を放たれた敵はどうすることもできずに、ただ魔法を見ていた。そして、敵はひろきの攻撃により跡形もなく消えてしまった。

その後、フォック達や親を出して、みんなで泉に入ることにした。
今回の戦いはこの村の子供達によって勝ったものとなった。

第４４話　きれいな泉を取り戻せ（後書き）

仲間以外にダメージが当たるとか、なんていうチート！！

第４５話　魔王との対面

ある日、ひろきは草原を散歩していた。すると、背後からなにやら魔法が飛んできてひろきに命中した。するとひろきは、突然頭の中が真っ白になり倒れこんだ。
そこへ２人の人物が話しながら歩いてきた。

「いやーさすがですね魔王様。通常の魔法使いでも５ｍくらいまでしか打てない記憶消滅魔法を１００ｍ先まで打てるなんて。ほら、私が決めた目標も当たったみたいで倒れてますよ。」
「そうだな。しかし、魔法使いの記憶消滅魔法は永久に記憶は戻らんけど、ワシは時間が経てば戻ってしまう。それさえ克服すれば世界征服なんて簡単なのに。やっぱ修行が足りんな。」
なんとそれは、魔王とその秘書だった。
２人はひろきに近づくと時間が一瞬止まった。そして、よく考えた挙句、今の内にデータを取ってしまおうと、ひろきを魔王の城に運んで行った。

城に着くとひろきは目を覚ました。それには城の皆がビックリしたが記憶が飛んでいることを知り、一安心していた。ひろきはただ呆然と立ち竦んでいた。ひろきの調査はそのため楽に作業していった。
その頃、フォック村では騒がしかった。みんなひろきがいないと言うことで探していた。原因はひろきにある。ひろきが散歩の時間をいつもとずらし、誰にも言わず、そして家の鍵を閉めずに散歩に行ったことがこの状態にしたのだ。
ひろきの調査は続けられていた。その間、他の敵は一刻も早くひろきを倒したいと考えていた。しかし、その中にひろしの姿はなかった。

データを取るのも最後の仕上げになった時、ひろきの記憶がふつふつと思い出されていった。そして、ついにひろきは全てを思い出した。それにいち早く気づいた魔王は「ひろきを早くここから出せ。」と言って、テレポートを使える奴にひろきを別の場所へ移動させた。なぜ、急いで移動させたかというと、ひろきに悪魔族の現状を知られてしまうのがだめだったためである。それでも、ひろきのデータも取ることができた。今日は悪魔族にとって大変に成果のある結果になった。

「ところで魔王様。どうしてひろきに攻撃せず、データだけ取って返してしまったのですか？」

「気になるのだよ。あいつの成長が…。それにあいつは多分カイルやひろしと同じ人種だろう。データを取って分かったが潜在能力が俺達の仲間より群を抜いている。」

「なるほど…。で、時期が来れば対決すると…。」

「ああ。俺のところまで来れればの話だがな。」

魔王の不気味な笑いは魔王城中に響いた。

ひろきは草原に立っていた。この単時間の事はまったく覚えていなかった。とりあえずひろきは村へ戻ることにした。村へ着くと、みんなは一斉にひろきに駆け寄った。そして、どこに行ってたかを聞いてきたが、ひろきは「散歩。」と答えて自分の家に帰っていた。

フォック達はその場に座り込んで、ため息をついたのだった。

ひろき達はデータを取られ圧倒的有利になった敵に対し、どう戦って行くのだろうか。

第４５話　魔王との対面（後書き）

これで、第1章は終わりです。

次、第2章が始まります。
やっと次章で物語が動きだします。
そして、あいつらもでます。

第４６話　ドラえもんズとの出会い（前書き）

ついにドラえもんズ登場！！

第４６話　ドラえもんズとの出会い

この世界には、ドラえもんズと言われる7人集団がいた。彼らは、悪を滅ぼす為に7人の友情を武器として戦う天使族の仲間であった。今回は、とうとうひろきとドラえもんズが会うお話。

ある日、ドラえもんズは悪さを企む奴等と戦っていた。彼らは親友テレカという道具で退治しようとしたのだが、親友テレカの攻撃が効かなかった。そして返り討ちにあい、敵はそのまま逃がしてしまった。

がっくりしてしまった7人はとぼとぼ歩いていた。すると、7人はフォック村の前を通りかかった。その時、村の方からいきなり魔法が飛んできた。それに驚いたドラえもんズ（ドラズ）だがどうすることもできない。と、その時、ひろきが7人の前に現れその魔法を受け止めた。

「人いるほうに撃つなよフォック、危ねぇだろ。」

ドラズはそれを唖然と見ていた。そして、ひろきはドラズに大丈夫かと聞いてみて、大丈夫そうなので村に戻ろうとした。しかし、ドラズはそれを止め仲間にしてくれと頼んできた。

ひろきはとりあえずドラズを村に呼び、事情を聞くことにした。ドラズ達は先ほどのことを話した。すると、ひろきは俺らが倒してやると言って戦いに行こうとした。しかし、ドラズは「もう一度戦いたい。」と言って、一緒に行くことにした。

さっきの場所に行くと、先ほどの奴等はまだその場所にいた。早

速、ひろき達は退治しようとしたが、相手は巨大なロボットを操りだした。魔法で攻撃しても効かないし、剣も歯が立たない。やたら頑固なロボットである。どうするか迷っているとドラズが『親友テレカ』を取り出しひろき目掛けて光を放った。

なんでも親友テレカは、敵に攻撃するだけではなく、味方の攻撃力を増幅することができるらしいのだ。それを使い、ひろきの魔法の破壊力を上げたのだった。新たな力を得たひろきは魔法を放ってみた。すると、いつもの倍以上の破壊力がある魔法が放たれた。それによりロボットは壊れ、敵を退治（人間なので捕まえます）することができたのだった。

戦いが終わった後、ひろきはドラズに仲間になるように誘った。勿論ドラズはオッケー。これからの戦いに備え、攻撃力を上げてくれるのはとても助かるし、何より仲間が多いほうがこの先有利になるからである。こうして、ドラズは仲間になったのだった。しかし、ドラズ達はこの村には住まず自分の家で暮らすと言う。ひろきは別に構わないらしく聞き流してした。

これから、7人を加え新たな戦いが始まる。

しかし、ここでひろきはあることに気づいた。他の国や地域にはロボットや様々な機械があるのに、どうしてフォック村にはいまだに電話やテレビといった家電がないのだろうか。ということだ。そういえば電気は通っているのになんで無いのだろうか不思議である。まあ、ひろきは深く考えずに忘れることにした。

第４７話　危険なピクニック

今日は新しく仲間に加わったドラえもんズを紹介する為、みんなでピクニックに行くことになった。

広い何もない草原で行われたが、その場所で事件は起こってしまう。なんと、いきなり敵が現れたと思いきや、すぐに魔法をひろき達に向け放ったのだった。すると、敵はその場から立ち去って何処かへ消えてしまった。ひろき達が追いかけようとして飛び出すと、なにやら壁みたいなものに激突した。草原なのに何かにぶつかるのは変である。ひろき達は当たった場所をよく見た。するとそこには、透明なカバーがひろき達に被さっていた。

ひろき達はどうにか出ようとするが魔法も効かない。刀も歯が立たない。ミュウさんのテレポートも『グレー』の水晶のテレポートもだめであった。それを見かねたドラえもんが『どこでもドア』を出して脱出しようとした。しかし、この中に『異次元バリア』というバリアが張られていて、それら脱出に使えるような道具は全て使えなくなっていた。もはやどうすることもできない。土の中にもそのバリアは張られていたのだった。

その時、先ほどの敵がバリア内に入ってきた。脱出方法を聞くと、そいつは「俺を倒さないと出れない。」などとほざき、笑みを浮かべていた。

それを聞いたひろきは早速魔法でそいつを攻撃した。しかし、敵はすかさずバリアから出て魔法をかわした。バリアが張っている為、魔法はバリア内でしか放つことができず、バリアの外にいる奴にはどんなに魔法を撃っても攻撃が当たることがないのだ。しかも、放った魔法はバリアに跳ね返され、あらゆる所（バリア内）にはじき

飛び、自分の仲間達に攻撃が当たってしまうことがあるのだ。しかも、このバリア内の面積は７８．５?と狭く、攻撃に当たる確立が特に高くなっていた。ひろきの魔法はタケルとフォックに当たってしまった。むやみやたらに魔法を放てないのだ。そんな条件にも拘わらず、敵はバリアを出入りしながら攻撃を続けていた。

もうみんなぼろぼろになった中で、ドラ・ザ・キッドが空気砲でそいつに攻撃を当てた。キッドは早打ちの名人で腕には自身があった。今までずっと動きを見ていてやっと当てることができたのだった。すかさず王ドラが得意のカンフーで動きを封じた。その間、ドラリーニョがサッカーボールをドラニコフに見せ、ドラニコフを狼にし、すかさずタバスコとサッカーボールを口の中に入れ、ドラニコフはそれを辛さのあまりファイヤーボールとして発射し敵に当てようとした。その瞬間、ドラメッド?世が分身魔法を使い、ボールを分身させた。そして、それらのボールをドラえもんが『ビックライト』で大きくして敵に放たれた。ボールが当たる瞬間、ひろきがグレー水晶で王ドラを救出、それにより敵にだけボールは当たることになった。しかし、分身したいくつかのボールはバリアに跳ね返され戻ってくる。ボールは犬次郎達に向かってくる。その時、エル・マタドーラが得意のヒラリマントでボールを横に逸らした。そして、ボールは燃え尽きて無くなった。敵はそれらの攻撃によりやられたらしく、消滅してしまった。ドラズのチームプレイを見て圧倒されるフォック達。その瞬間、バリアは解かれたのだった。

こうして、ドラズ達は見事なチームプレイでひろき達を助けることができたのだった。

第４７話　危険なピクニック（後書き）

これも夢でみた話です

第４８話　エイプリルフールの出来事（前書き）

すごく、しょーもない話しです。
飛ばしてもぜんぜん大丈夫です。

第４８話　エイプリルフールの出来事

いつの間にか、この世界では４月になっていた。この世界も元の世界同様、１年十二ヶ月なのだ。しかし、フォック村は温暖な気候の場所に位置している為、冬でも過ごしやすい気温だったのだ。気づかないのも無理はない。

今日は４月１日になっているそうで、ひろきは朝からフォックの嘘に騙されていた。それを聞いたひろきは早速嘘をつき始めた。しかし、おかしなことにひろきの嘘はすべて本当のことになってしまったのだ。それを偶然だと思い、ひろきは嘘をつき続けた。そして、とうとうひろきは「敵が来ちゃったりして。」などという発言をしてしまった。すると、本当に敵が来てしまったのだ。

その敵を見たとたん、ひろきはフォックに「火でも噴きそうだな。」と話しかけた。すると敵は火を噴出した。どうやら、ひろきの言ったことすべてが本当になってしまうのだ。それを察知したひろきは「矢が突然、降ってきたりして。」とか、「雷が敵に当たったりして。」などと言い始めた。すると、やはり空から矢が降ってきたり、敵に雷が落ちたとか次々に言った事柄が本当になっていき、敵を攻撃したのだった。

それに対抗すべく、敵もだまし討ちなどでひろき達を攻撃していった。しかし、ひろき達はそれに耐え、ひろきの魔法により倒されることになった。

戦いが終わった後、ひろきは凄いことを閃いた。なんでも本当になるんだったら、この世界の平和を願えばこの世界は平和になるんじゃないかという考えだ。早速ひろきは「この世界が平和だったらなぁ。」と呟いた。しかし、何の変化も起こることはなかった。変だと思い別のことを願ってみたけどやはり変化はなかった。

どうしたのか悩んでいる時にドラえもんが登場した。そして、嘘が本当になる理由を話し始めた。話によると、ひろきが昨日ドラえもんの所に遊びに来ていた時、ひろきがジュースと間違えて『マジニナール』という喋ったことが本当になってしまう薬を飲んでしまったらしい。その為、ひろきの喋ること全てが本当になってしまったのだった。どうやら、本当のことにならなくなったのは薬の効果が切れたからだという。

それを聞いてひろきは、もう一本欲しいと頼んだが、もう薬は飲んだのが最後の一本だったという。仕方なく、世界平和は自分達の手で掴み取るしかなくなってしまった。
ドラえもんは帰ろうとしていた。そこへひろきが「ドラ焼きがあるよ。」と言って呼び止めた。
勿論、嘘である。

それにまんまとはめられたドラえもんはドラ焼きが食べれないという悲しみから泣き出してしまった。しかたないのでひろきは本当にドラ焼きを用意し、ドラえもんにプレゼントしたのだった。

のほほんとした気温の中でのほほんとした生活を送るひろき達なのでした。

第４９話　危険なクワガタ顎

ある日、ひろきは『食べ物がなる木』の木陰で休んでいた。あの木ももうすっかり大きくなり、普通に高さ５m位までの高さに達していた。枝も伸び、太陽の光を遮ってくれるこの木の下で休むにはとてもいい場所になっていた。

そんなのんびりとひろきが過ごしている時に、どこからともなく何かを切るような音が聞こえてきた。ひろきが音源を捜してみると、それはなんと『食べ物がなる木』を切っている音だった。植木屋さんだったらこの木の成長の為に切っているのだから驚きはしないが、どうもそんな様子は見られない。切り方は雑だし、なんとなく感じる木からの『気』が悲しげに感じられた。

ひろきは伐っている奴に話しかけた。するとそいつは、悪魔族の１人のパナソというクワガタ人間みたいに立派なアゴがある敵だった。どうやら敵はひろき達を食料危機に陥らせて倒そうと考えていて切ったのだという。しかもこいつ、ひろきの存在にまったく気づかなかったという。ひろきはとりあえず戦いをするように言い出したのだった。

ひろきは剣を抜こうとした。するとパナソはいきなり突っ込んできて、ひろきにアゴで攻撃した。ひろきは吹き飛ばされてしまった。なんとか着地し再度、剣を抜こうとした瞬間、またもパナソの攻撃によりひろきは吹き飛ばされて木に激突した。どうやらパナソはひろきに剣を抜かせないようにしているらしい。となると、相手の弱点は斬られる事だと推測できる。だからひろきはなんとしても剣を抜きたくなってきた。

すると、ひろきは木の裏に行き剣を抜こうと考えた。しかし、裏に

行こうとした時にはもうパナソはひろきの目の前にいて、裏に行く以前にひろきは顔面を木に叩き付けられた。凄い速さである。ひろきは何とか木から離れ、パナソに魔法を放った。しかし魔法は食らわない。パナソは再度ひろきに突っ込んだ。その速さに翻弄され、ひろきは攻撃ができない。ひろきの隙を狙って攻撃してくるのだ。しかも、パナソのアゴは鋭く攻撃されるごとに斬りつけられていた。どうやらこの間、悪魔族の城へ行った時のデータで研究したらしい。やたら強く感じてしまった。

突然ひろきは閃いた。すると、ひろきは魔法を自分を囲うように円形に地面に向け放った。すると、砂埃が一斉にひろきの周りを囲み、パナソからはひろきの姿を確認することができなくなってしなった。仕方なくさっきひろきがいた場所に突っ込んだが攻撃は当たらない。何処だと探しているうちに、ひろきはパナソの真上に来ていた。しかも剣を下向きに持ったままひろきは落下した。剣は見事パナソに当たり、パナソは消滅してしまった。

戦いが終わった後、ひろきは切られた枝を手に取ると、それらに向かって『白』の水晶を使った。すると手に持っていた枝はなんと元の場所に戻り、切られる前の姿に戻っていた。『白』の水晶はこんなことまでできてしまうのだ。すると、木は喜びの『気』を出したようにひろきは感じられた。

ひろきはまた、この木の下でのんびりし始めた。

第５０話　操れるステッキ（前書き）

シリーズ物開始！！

第５０話　操れるステッキ

ある日、ひろきは散歩に出かけた。丁度その頃、ドラえもんズの許へ挑戦状が届いたのだった。ドラズはその場所へ向かった。

ひろきは村に戻ってきた。しかし、何か様子が違う。フォック達がいない。ひろきは探したがどこにもいなかった。仕方なく家に入ろうとすると、ポケモン村から爆発音と共に煙が上がった。

ひろきはすかさずポケモン村に行くことにした。それを見かねた何者かが手を離した。すると、今まで壁だと思っていた所から氷の塊が次々と出てきた。よーくそれを見ると、なんと、それはフォック達が氷漬けになったものだった。そこにいた奴はそのまま何処かへ行ってしまった。

ひろきがポケモン村に着くとやはり様子がおかしいことに気づいた。第２１話と同じ雰囲気がしていた。そして、案の定それは現実になってしまった。ポケモン達が操られていたのだ。しかし、唯一の救いがミュウさんは操られていなかったのだ。

２人でたくさんのポケモン達の相手をするのはとても困難であった。しかも、倒してはいけないし、傷も負わせてはいけないので戦いには困難を強いられた。それでも、ひろき達は必死に戦ったのだった。

その頃、ドラズは挑戦状に書かれていた場所へ着いた。すると、そこには電気を食料とするウイルスがたくさんいて、その中にアスレチックのような足場があるだけの場所だった。

ドラズが唖然としている中、目の前に挑戦者が現れた。

敵は７人。しかもロボット。条件は同じだった。

そして、いざ戦いとなると、敵の凄まじさに気づかされた。ドラメッドの魔法もキッドの早打ちも王ドラのカンフーも歯が立たない。圧倒的な強さを見せる7人に対し、ドラズはぼろぼろになっていた。しかし、ドラズは親友テレカを掲げた。

凄まじい光が7人を包み込んだ。しかし、敵はそれに動じずただそれを見つめていた。次の瞬間、王ドラよりはるかにカンフーや拳法が強い7人のリーダーみたいな奴が拳に力を溜めた。そこに、あとの6人が力を送った。そして、その拳を親友テレカの光に向け突き出した。すると、親友テレカの光と拳からの力がぶつかり合った。6人の内の1人が魔法使いで、拳の勢いを魔法として出したのだった。光と力は同じ位の力でぶつかり中間で止まっている。ドラズはさらに力を出した。親友テレカの光が力を押し返した。

すると、パンチを繰り出した奴はニヤリとして「お前たちの力はそんなものか。」と言い、力をさらに溜め込んだ。すると、親友テレカの光は押し返されどんどんとドラズの方へ迫ってきた。さらにドラズは力を出したが返せる状態ではなかった。そして、とうとう親友テレカは負けて、攻撃はドラズを襲ったのだった。

ドラズは吹き飛ばされ、ウイルスの中へ落とされそうになるが、何とか耐えて足場の上に止まった。しかしその瞬間、さっきのパンチした奴がドラメッドを蹴り上げた。すると、ジャンプしドラメッドをウイルスの中に叩きつけた。ウイルスはすぐさまドラメッドに集り、ドラメッドの電気を蝕み始めたのだった。叩きつけた奴はドラえもん達にも近づいて来た。

その頃、ひろき達はというと第21話同様、ぼろぼろにされていた。操っている犯人も出てこないし、ポケモン達を戻す方法も思いつかない。もはやどうすることもできない。ポケモン達はそんな2人を囲み、攻撃を繰り返していた。

一方でドラズもぼろぼろになっていた。相手が強すぎる。もはや戦える力もない状態で敵からの攻撃を食らっていた。その時、どこからともなく魔法が飛んできた。敵の1人に当たり吹き飛ばされ、ウイルスの中に落ちた。

ドラズは攻撃した奴をまじまじと見た。すると、そこにはひろきの姿があったのだった。

ひろきはドラメッドをウイルスの中から引っ張り出し足場へ連れて来た。

まだ、生きていた。

ドラえもんが何とか話かけたがひろきは何も言わなかった。そして、ひろきは敵に向かって攻撃し始めた。敵は先ほど親友テレカを破った攻撃をひろき目掛けて放った。すると、ひろきはそれを受け止め、そしてそれを打ち返した。敵はさらに力を籠めるが、ひろきの魔法はびくともせずに6人に向かっていった。敵はそれを諸に食らい飛ばされた。しかし、うまく足場に降り立ち、ウイルスからは逃れた。

敵はひろきの周りを囲むように広がった。そして、魔法を繰り出した。ひろきは逃げ場を失い、魔法を食らうしか道はなかった。

爆音と共に煙が上がった。6人が微笑して煙を見ていた。と、次の瞬間、煙の中からひろきが飛び出し1人に攻撃を仕掛けた。その敵は倒され、ウイルスの餌食になってしまった。続けてひろきは攻撃を仕掛けた。

次々に敵が倒されていく。ドラズはそれをただただ見つめるしかなかった。

そして、とうとう最後の1人になった。残ったのは7人のリーダーだ。敵とひろきは凄まじい攻防を繰り返していた。そうしているうちに敵が隙を見せた。ひろきはそれを見逃さず、敵に攻撃を食らわした。それが効いたらしく敵の動きは鈍くなった。

そこへひろきが魔法を放つのだから敵はひとたまりもない。7人全てを倒したひろきはドラズの方に降り立った。
そんなひろきにドラえもんが話しかけると、思いもよらない返事が返ってきた。
「俺はお前達の仲間じゃない。人違いだ。俺はひろきではない。名前はない。何にも覚えていない。ただ1つ覚えてること。それは悪魔族にいたことだ。そして『ひろき』という奴を倒せとの命令を受けただけだ。」
そう言うと、そいつは何処かへ行ってしまった。ひろきの正体はひろきではなかったのだ。しかし、外見や魔法はすべてそっくりだった。しかも、悪魔族ならドラズは助けないだろうし、仲間の奴等を倒したりしないだろう。ドラズは唖然として、その場に座り込んだ。丁度その頃、本物のひろきはポケモン達に止めを指されようとしていた。そして、攻撃が当たる瞬間、動きが止まった。
その後、ポケモン達は元のみんなに戻っていった。どうやら、ドラズと戦った7人の内、誰かが操っていたのだろう。その為、倒されたことにより操りから開放されたのだった。

ポケモン達は慌てて2人を回復させて一命を取り止めた。その間、助けを呼びにフォック村を訪れた1匹のポケモンがフォック達に気がついた。急いでフォック達とひろき達は病院に運ばれた。その病院にはしばらくしてドラズも運ばれてきた。ひろきとその仲間達は全員襲われたのだった。

第５０話　操れるステッキ（後書き）

この頃の俺はヒーローが負けそうになるというシチュエーションが大好きだった。

今は昔ほど好きではないが、それでもやっぱりいいよね。だから、この物語はヒーローがぼろぼろになる描写が多いんだ。だけど、残酷までいくのはだめなんだ。グロは耐えられない。

どうでもいいね

第５１話　病院の中での出来事

全員命に別状はなかったかに思えたが、１人だけ大変なことになっていた。ドラメッドである。病状は生きていて故障も何もない状態なのに目を覚まさないという。

多分、ウイルスの影響だろう。他の６人は順調に回復している。ひろき達も元気な姿に戻っていった。しかし、フォック達は氷漬けにされた為、内蔵などに凍傷を負ってしまいしばらく入院が必要になってしまっていた。

数日後、ドラメッドを除くドラズとひろきとミュウさんは退院できる状態まで回復した。もう明日にでも退院できるという。ひろきは早く退院して、自分そっくりのあいつを探しに行きたがっていた。話は全てドラズから聞いたのだった。それにしても、相変わらずドラメッドは目を覚まさない状態だった。

その時、いきなり病院内で爆発が起こった。ひろき達はすぐ駆けつけた。その向かう途中、ドラリーニョが鏡の中に何かを発見した。しかし、すぐに消えてしまい、ドラリーニョはシカトしてひろき達の後を追った。

爆発が起こったのは手術室だった。幸い、そこに人はいなく全員無事だった。しかし、何が原因で爆発したのかがまったく分からなかった。

そんな時、ドラリーニョが先ほどの奴をまた鏡の中で見つけ出した。ドラリーニョはそいつが犯人だと決めつけひろきに報告した。しかし、もう既に鏡の中からは消えていて、誰一人ドラリーニョを信じようとしなかった。ひろきを除いては。

とりあえずドラリーニョは走り出した。自分で見つけるという。ひろきも手伝い、２人でさっきの奴を探した。病院内の鏡を全て調べたが、どこにもいなかった。ひろきもだんだん信用がなくなってきて、壁に寄りかかり休んでいた。その裏には鏡があった。その時、

ドラリーニョはその後ろの鏡の中に奴がいることを発見した。そして、ひろきに報告しようとした瞬間、そいつは鏡の中で魔法を放った。すると、その魔法は鏡の中から出てきてひろきに直撃した。そして、ひろきは吹き飛ばされた。ドラリーニョも魔法の爆発の影響で吹き飛ばされた。鏡は割れ、奴は何処かへ行ってしまった。

爆発音を聞いたドラズ達が駆け寄ってきた。そして、2人の状態を見てドラリーニョを信じ始めた。ひろき達は無事であり自力で立ち上がった。そして、さっきの奴をみんなで探し始めた。

しばらくして看護士の悲鳴が聞こえてきた。早速行ってみると、そこに先ほどの奴が鏡の中にいたのだった。そいつはひろき達に話しかけた。

「お前がひろきか。思ったより弱いな。今回はお前らを消すべく、あるゲームをしようと思っている。この間、傷ついたドラメッドとか言うロボットが目を開けねぇだろ。そいつは一生目を開けない。ウイルスに感染したからな。もし、目を開けてほしければ俺らを倒すことだな。そうすれば奴は目を覚ます。だが、俺らは本気でお前らを消しにいく。この先、まだたくさんの俺の仲間がいる。それを全て倒すことができればいいだけだ。簡単なゲームだろ。ただし、最後のボスは半端ねーぜ。」

いきなりそんなこと言われても分からない。とりあえず敵を全員倒せばいいことだけは分かった。とにかくドラメッドの目を覚ますには目の前の敵を倒せばいいのだが、どうやって攻撃を食らわしたらいいかわからない。

みんなはただじっとしていた。その時、ドラリーニョが閃いた。

『先ほど魔法が通り抜けたのだから、その瞬間にこちらからも飛び込めば入れる』という考えだ。みんなは納得したが、誰が行くのか決まらない。その時、ドラリーニョが行くと宣言したのだった。

ひろき達は作戦を実行すべく、敵を挑発して魔法を放たせた。そ

の時を待っていたとばかりにドラリーニョが鏡に飛び込んだ。魔法がこちらの世界へ少し出た。その瞬間、ドラリーニョも腕を入れた。しかし、ここで大変なことに気づいた。ここを通るためには魔法を押し返しながらでないと入れないのだ。ドラリーニョは必死で耐えていた。その時、ひろきは魔法とドラリーニョの間に隙間があることに気づいた。

ひろきはドラリーニョに「そのまま耐えろ。」と言って、その隙間に狙いを定め、魔法を発射させた。すると、その魔法はその隙間から鏡の中に入り、敵に見事当てたのだった。敵は魔法を出せなくなり、倒れ込んだ。ドラリーニョはまだ、鏡に戻らないように耐えていた。ひろきはもう一発放とうとしていた。その時、敵がドラリーニョに液状の薬を浴びせた。すると、ドラリーニョは動きが止まってしまい、支えてる手も離された。みるみる開いた所は狭くなっていく。ひろきは魔法を放った。あと少しで孔が閉じるというところで魔法は鏡の世界へ入っていった。そして、それは見事敵に当たり、敵は倒されたのだった。

敵に魔法が当たった瞬間、孔は塞がれた為、鏡の世界内で爆発が起こり、病院のあらゆる鏡はすべて弾け飛んだ。幸い、そのせいでの怪我は誰一人いなかった。

ドラリーニョは目を瞑っていた。だが、機械音は聞こえるので死んではいない。この状態はドラメッドと似ていた。もしかしたら先ほどの薬はウイルスを感染させるための薬だったのかもしれない。となると、ドラリーニョは一生目を開けないのかもしれない。

ひろき達は相談した。ゲームに参加するかどうかだ。結果は決まっていた。

ひろきとドラズは生死を賭けたゲームに参加することになったのだった。ミュウさんはポケモン村の仕事があるから行けないと言う。フォック達も入院中なので行くことはできない。よって、今度の戦

いはひろきとドラズだけの戦いになってしまっていた。それでもひろきとドラズは逃げ出そうとはしなかった。全ては大切な仲間の為に行くのだから。

翌日、ひろきは退院した。家に戻ると早速修行を始めた。どんな敵が待ち受けているのか分からないから無性に鍛えたくなったらしい。ひろきのゲームに対する準備は着実に進んでいた。

それから一週間後、ひろき達の許へ挑戦状と書かれた手紙が届いた。手紙には場所だけ書いてあるだけだった。こうして、ゲームは開始された。

ドラリーニョは一週間経っても目を開けなかった。

第５１話　病院の中での出来事（後書き）

ロボットの機能を停止するウイルスって目に見えるんだね（笑）
どんなウイルスだしっ

第５２話　ゲーム開始の挑戦状

手紙が届いた日、ひろきの許へキッドが訪れた。キッドも同じ手紙が来たという。
それでひろきに報告すべく家に来たのだった。その後も次々とドラズが集まった。しかし、ドラニコフはどうしても抜けられない仕事があり来たることができなかった。仕方がないのでこのメンバーで指定された場所へ行くことになった。

指定された場所へ着いた。すると、そこは高い岩だらけの地形であり、とても足場の悪いところだった。岩に登ると、いきなり四方八方を檻で囲まれてしまった。そして、上も塞がれてしまい、もう出ることはできなくなってしまった。と、その時、岩の隙間からあのウイルスが出てきて、地面が見えなくなるくらいにまで敷き詰められた。もう岩の上だけしか行動することはできなくなった。その時、敵が姿を現した。

敵はここでの事を細々と話した。とりあえず敵を倒すまでここから出られないらしい。それを聞いたひろき達は攻撃をしようとしたが敵はどこかへ姿を消してしまった。仕方ないので敵を探すことから始まった。そして、ドラえもんが見つけたが攻撃するとそれを避け、ドラえもんがいる岩を魔法で破壊した。

ドラえもんは別の岩に飛び乗り落ちはしなかった。しかし、敵はどんどんみんながいる岩を壊していった。ひろき達も同じように敵のいる岩を壊していった。そして、とうとう、岩は人数分しかなくなってしまった。その瞬間、ひろきが敵のいる岩を壊した。しかし、その瞬間にはもう敵はジャンプしていた。

敵はそのままドラえもんに向かった。そして、ドラえもんをキッドの方に吹き飛ばし、その後、キッドがいる岩を壊した。岩が崩れ2人が落ちそうになった時、キッドが片手で岩の残った所を掴み、もう一つの手でドラえもんを掴んでいた。
何とか持ちこたえた。

敵はその2人に攻撃しようとしていた。しかし、ひろきがそれを阻止。剣で敵を斬りつけたのだったが、敵はそれを腕の防具でガードし剣を止めていた。その間に、他の奴に2人を助けるように言うひろき。それを聞いた王ドラは2人の岩へジャンプした。その時、敵のもう片方の手から魔法光線が発射された。ひろきはその隙に敵にそっと掌を添えて魔法を放った。
敵は吹き飛ばされウイルスの中に落ちていった。
敵はもう倒していた。ところが、敵が発射した魔法光線はなんとキッドの岩を掴んでいる手に当たってしまった。その時、王ドラは空中にいた。キッドは手の力が入らなくなり、2人は落ちていった。
その時、キッドはもう片方の手をドラえもんから離さずにいた。そして、もうウイルスが近くなってきた時、キッドがドラえもんを片手で上へ投げ飛ばした。ドラえもんだけ助けたのだ。そして、キッドはそのままウイルスの中へ落ちてしまった。空中に放り出されたドラえもんはマタドーラにキャッチされ事なきを得た。

残った岩に着地した王ドラは何とかキッドをウイルスの中から取り出した。しかし、もう既にキッドはウイルスに感染してしまっていた。ドラえもんは自分の命を救ってくれたキッドに対し改めてキッドとの友情を感じたのだった。

しばらくして檻は外された。ウイルスは岩の中へ戻っていった。
こうして、最初のステージで1人を失ってしまったのだった。

第５２話　ゲーム開始の挑戦状（後書き）

どこから檻がでて、そしてどこに行ったのかは聞かないことにします。
ウイルスも同様です

第５３話　雲の上では

キッドを連れて帰ろうとした時、いきなり空中に雲が現れた。なんと、その雲は乗ることができ、階段状になり上へと続いていた。この先へ行けのことだろうがキッドを運ばないといけないので先へは進めない。その時、ひろきが「１人で連れて帰るから、ドラズは先に行ってろ。」的なことを言ったので、ドラズは先に行くことにした。

ドラズが上に着くと早速敵が出現。敵はロボットで、表面は鉄で覆われていた。ドラズはひろきが来るのを待たずに戦いだした。何とか攻撃しているものの、相手は強くドラズの攻撃ではびくともしなかった。

そして、ついには雲の端に追い詰められてしまった。もう逃げる道はない。どうすることもできなくなった時、マタドーラが前に出て『俺が奴を引きつけるから、その隙に広い所へ移動するんだ。』と言い、自ら敵に向かっていった。

その隙に場所を移動しようとしたが、敵が２人の足元目掛けて魔法を発射した。すると、２人の足元の雲は消えてしまい、２人は落ちてしまった。となると、マタドーラは１人で戦うことになってしまった。

マタドーラ相手の魔法をヒラリマントでかわしながら剣で攻撃していく。そして、ようやく敵の右腕を切り離した。しかし、さらに敵の攻撃は激しくなってしまった。その攻撃をなんとかかわしているが、敵の攻撃によりヒラリマントは破けてしまった。

もう攻撃は避けきれなくなったマタドーラはガムシャラに突っ込んだ。そして、得意の怪力で敵を投げ飛ばすなどしたが、とうとう背

後からの攻撃により吹き飛ばされ、さらにドラリーニョが浴びせられた液体を浴びせられてしまった。

最後に敵はマタドーラにとても重たいゲンコツを浴びせた。すると、その勢いが強すぎて、雲と雲がばらばらになり敵もマタドーラも落ちてしまった。

一方、ドラえもんと王ドラは地面の木に落ちて、葉や枝がクッション代わりになり2人とも無事一命を取り止めた。丁度その頃、ひろきとドラニコフが通りかかり救助された。ひろきは2人にマタドーラの事を聞き、2人は何があったのかを話した。話を聞いたひろきは急いで雲の上に行こうとした。すると、空からマタドーラと敵が降ってくるのを発見した。ひろきはすぐ2人の落下予想場所に走り出した。

しかし、もうすぐマタドーラは地面に激突してしまう。ひろきは『グレー』の水晶を首から取り外し使った。すると、間一髪でマタドーラの真下に行き地面との激突を免れた。しかし、マタドーラはもうウイルスに感染していた。

マタドーラの上からは敵が落ちてきた。そして、ひろきはその敵の下敷きになってしまった。しかし、次の瞬間、敵の腹部が光ったと思うと、敵は真上へ吹き飛ばされ爆発してしまった。ひろきが真下から魔法を放ったのだ。こうして敵は片付いたが、また1人仲間が減ってしまった。しかし、用事を終えたドラニコフが加わり、残りはひろきを含め4人となった。

敵からの次の指示はなかった。その為、一旦村に帰ることにした。

第５３話　雲の上では（後書き）

なぜ雲に乗れるしっ！！

第５４話　宇宙での戦い

しばらくしてひろきの許にまたも挑戦状が届いた。
そこには宇宙に来るように書かれていた。早速ドラえもんはポケットから小型宇宙船を取り出した。ひろきとドラズはこれに乗り宇宙へと出発した。

宇宙に着くと、月の方角に何かを発見した。近づいてみると、それは敵の宇宙船だった。しかし、中には誰もいなく、ただ浮いているだけだった。ひろきが調べに行こうと言うのでドラえもんはテキオー灯を取り出した。宇宙には空気がなくひろきは呼吸ができなくなってしまうからだ。神様の力でも呼吸までは変えることはできなかったのだ。

早速ひろきに放とうとした瞬間、いきなり敵がドラえもんの目の前に現れて、魔法を放った。すると、その魔法はテキオー灯に当たり、テキオー灯は壊れてしまった。すると、敵は姿を消し宇宙空間に現れた。そして、ひろき達の宇宙船目掛けて魔法を放ったのだ。機体は揺れ、まともに立てる状況ではなかった。このままでは壊れる。そう思ったドラズは宇宙空間に出て戦うことを決意した。ひろきは空気が無い為、宇宙船の中で待機ということになってしまった。ドラえもん達はロボットなので空気がなくても大丈夫なのだ。

ドラえもん達は宇宙空間に出て、さっきの敵の前に現れた。そして、戦いが始まった。
敵は宇宙空間に慣れているらしく、すばやく動きながら攻撃してくる。一方でドラズは動きに慣れずに攻撃を食らってしまった。しかし、だんだんと動きに慣れ、攻撃をかわせるようになってきた。すると、敵は魔法をドラズではなく宇宙船に放った。すると、宇宙船

の酸素ボンベに穴が開いてしまい、中の空気はどんどん減っていってしまった。
ひろきのピンチである。
こうなった以上、早く敵を倒して早く地球へ戻るしかなかった。ドラえもんの道具で何とかなるのだが敵に邪魔され、ひろきの所まで行くことができなかったのだ。

焦り始めたドラズだったがドラえもんが行動を起こした。ポケットから閃光弾を出し光らせ、敵の目を塞いだのだ。そして、敵の後ろに回りこみ敵をしっかりと抱え、身動きが取れないようにしたのだった。そして、2人に攻撃するように指示。それを聞いた2人はドラえもんに攻撃を当てないように注意しながら、敵目掛けて攻撃したのだった。それにより敵は倒された。すると、敵の背負っていた酸素ボンベがいきなり爆発を起こした。その衝撃で敵はばらばらになってしまった。そして、ドラえもんも吹き飛ばされた。
しかし、生きているようだ。ドラえもんは動きをなんとか止め、事なきを得たかと思いきや、その直後にドラえもんは目を瞑ってしまった。
2人が近寄って確認すると、機械音はしているのに目を開けないという状況でありウイルスに感染していたのだ。どうやら、爆発が起こったときに敵が持っていたウイルスビンが割れ、ドラえもんに掛かってしまってみたいだ。これで5人目となってしまった。

宇宙船に戻ると、ひろきが苦しそうにしていた。酸素が足りなくなってきているのだ。2人が何とかしようと考えていると、敵の宇宙船が目に入った。すると、2人はその宇宙船に乗っている宇宙船を接近させ、敵の宇宙船に乗り込んだのだ。間一髪でひろきはセーフ。少し横になり、その宇宙船で小型の宇宙船を引っ張り、地球へと帰っていった。

第５４話　宇宙での戦い（後書き）

なぜ、敵はわざわざ宇宙に行ったのか？

第５５話　地上での戦い

宇宙船は無事地上に着いた。しかも、病院の前に着いたのでドラえもんはすばやく運べた。ひろきも回復していき元の体に戻った。もう残されたのは３人になってしまった。いつ終わるのか分からないゲームに対し、だんだんとイラついてきていた。

ひろき達はフォック村に向かって歩き出した。すると、その途中で敵が出現した。しかし、３人ともやる気が出なかった。しかし、やらないといけないので戦うことにした。地上は宇宙と違い動きやすかったので、簡単に倒せると思いきや、なかなかの困難を強いられた。何気に敵は強かった。

イライラしていたひろきはそいつに禁断の魔法を使ってしまった。禁断なのは破壊力が半端なく、撃つ本人にも攻撃が食らってしまうものだったからだ。しかし、そんな攻撃はひろきには痛くも痒くもなかった。

魔法は敵を襲った。もちろん一撃かと思いきや、敵はぎりぎりで立っていた。しかし、攻撃できる体力は残っていなかった。そこへひろきが近づいた。

そして

「いい加減にしろお前ら。いつまでこんなゲーム続けるんだ。いい加減、直す薬出してとっとと引き上げろ。」

とひろきは怒鳴りつけた。それに敵は言葉を返した。

「残りは俺を含め１２人だ。薬は、砂漠にいる奴が秘密を知っている。ここから西へ３００?行った所にいる。」

そう言い残し敵は目を瞑った。そして、煙となって消えていった。

ひろきはそれを見届けた後、２人に行こうと言った。どうやらやる気が出てきたようだ。早速３人は西の砂漠目指して歩き出した。道具を使えばすぐ行けるのだが、偽者を探すという動機もあり歩きになった。

ひろき達は様々なところを歩き続けた。その途中、ジャングルに入り込んだ。歩いているといきなり崖から落っこちた。草で足元が見えなかったのだ。しかも、底には巨大な水溜りがあり、怪我をすることはなかったが泥だらけになってしまった。おまけに目に水が入ってしまい、目も霞んでしまった。

なんとか水溜りから出ると、ひろきの目の前に人影が現れた。しかし、3人とも目が霞んでいて顔が分からなかった。しかし、なんとなく人間らしき者と2人のロボットらしきものが見えたので、ひろき達はそれを鏡だと思い込んでいた。しかし、それは鏡ではなくひろきの偽者だったのだ。しかも、一緒にいるのはなんと王ドラ、ドラニコフそっくりのロボットだった。

偽者3人はひろき達に気づいた。だがしかし、攻撃はしてこなかった。どうやら、偽者は腹が減っていて目が霞んでいたのだ。どうやらあちらも鏡だと思っていたらしい。なぜ偽者がこんな所にいるのかというと、なんとひろきを探してる途中だったのだ。すごい危ない状況だったのだ。

しばらくして、ひろき達の目は元に戻った。そして、砂漠目指して歩き出した。

第５５話　地上での戦い（後書き）

そもそも、ジャングルに鏡はありえない

第５６話　砂漠での戦い

ついに砂漠に着き、ひたすら歩き続けた。
『青』の水晶をフルに使いながら怪しい者を探していた。すると、いきなり足元から敵が襲ってきた。
なんとか3人は避けた。その後、敵はまた砂漠の中に姿を隠した。
どこにいるか分からない敵に戸惑いを隠せないひろき達。そんな3人に敵は攻撃を続けてきた。しかも今度は、ひろき達の足元の砂をどんどん減らしていき、巨大な蟻地獄を作り出した。まんまとそれにはまったひろき達。そして、ついに砂の中に埋もれてしまった。砂に埋もれたひろき達目掛け、敵は攻撃を繰り返した。ひろき達はぼろぼろになっていった。すると、ひろきは足元目掛けて魔法を放った。そして、ようやく砂の中から出ることに成功した。しかし、敵に対しどうやって対処すればいいのか分からない。考えている中でも敵の攻撃は続いた。それとは別に太陽の日差しがひろき達の体力を減らしていた。

その時、ひろきはある物を思い出した。『茶』の水晶の存在だ。この水晶は『土』を司る力を秘めていた。早速ひろきはその水晶を使った。手で円を描きそして『アース』と叫んだ。そして、そのまま掌を地面に付けた。すると、砂漠が一瞬にして泥の地面になった。こうなると、地面にいる敵はどこにいるのかすぐ分かった。ひろきはすかさず、敵に向かって魔法を放った。すると、敵は吹き飛ばされ地面から出てきた。そこへドラニコフが噛み付き、王ドラがカンフーで追い詰めた。敵は諦めて攻撃の態勢を止めた。
そこへひろきが薬の秘密を聞き出した。すると、敵は『金』の水晶があれば治せるという。しかしそれは、偽ひろきが持っているという。その話を聞いて、ひろきはさらに追及した。
「なんで、悪魔族はこんなことするんだ。俺が狙いなら俺だけ狙え

ばいいだろ。なんでこいつらまで被害を受けないといけないんだよ。」

そのことに対し、敵が口を開いた。

「それは、お前ひろきは、仲間がいればいるだけ強くなるからだ。だから俺らは…。」

突然、敵が話している時に魔法が飛んできて敵に当たった。敵はその魔法で消滅してしまった。そこには『銀』の水晶が残されていた。ひろきはそれを拾い、魔法が飛んできた方を見た。すると、そこには偽ひろきの姿があった。

「気安く、敵に情報を教えんじゃねぇよ。このカスが。」

それは、ひろきとそっくりだった。前出てきた奴もそっくりだったが、今回も似ている。しかし、少し肌が若干黒い。そして、目の色が紫色だった。

ひろきは立ち上がって偽者の前に立った。すると、偽者が「お前が本物のひろきか。ハン。思ったより弱そうだな。こんな奴、簡単に倒せるぜ。」と言ってきた。

ひろきはそれに腹が立ち、偽者に攻撃を仕掛けた。すると、ひろきは吹き飛ばされてしまった。

「こんなんじゃ相手になんねぇ。時間をやるから鍛えなおして来い。じゃあな。」

そう言って偽者はその場を後にした。

2人はひろきに近づいた。すると、ひろきは立ち上がり歩き出した。

そして「次行くぞお前ら。アイツ絶対ぶっ飛ばすぞ。」と言って、ひろきは走り出した。2人は慌ててひろきを追いかけた。

第５７話　海の中での事実

ひろき達は海へ辿り着いた。砂漠をずっと歩いてきたので、まさに天国だった。３人は海へ飛び込んだ。そして、涼しさを感じたのだった。

すると、突然水しぶきが海から上がった。すると、そこには魚のような姿をした怪物が姿を現した。すぐそいつは海の中に戻った。と、次の瞬間、ひろき達は吹き飛ばされた。

どうやら敵だったみたいだ。そいつは海の中から攻撃してきたのだった。ドラニコフが潜って見ると、敵はいきなり３人目掛けて勢いよく泳いできた。そして、そいつはひろきの足に噛み付いた。そして、そのまま水中へ引き込んだ。

足を噛み付かれたまま、敵とひろきは沖の方へ行ってしまった。慌てて追いかける２人。そして、何とか追いついた。そして、敵に攻撃を仕掛けた。しかし、水中なので動きがトロイ。

それでもパンチを食らわし、ひろきの足は開放された。しかし、血が大量に流れ出していた。そんな中で、ひろきは敵に向かって魔法を放った。しかし、魔法球では海の水の為、当たる前に消えてしまい攻撃は当たらなかった。

そうしてるうちにひろきの息は持たなくなり、水面から顔を出した。しかし、すぐ水中に潜ってしまった。王ドラがどうしたのか聴くと、なんとひろきは泳げないらしい。健全な体でも５０ｍ位しか泳げないのに、怪我をしてしまったため泳げなくなってしまったという。立ち泳ぎはできないのである。

そんなひろき目掛けて敵は襲ってきた。しかし、ドラニコフがそれを庇ってひろきの代わりに攻撃を受けた。その間にひろきは王ドラに連れられ、水面に顔を出したのである。

なんとか一命を取り止めたひろき。そして、少し休んだ後、すぐドラニコフの助けに向かった。しかし、どうも動けない。そんな中でもドラニコフはやられている。何とか助けたいひろきはあることを閃いた。

ひろきは何とかしてドラニコフに近寄った。その間、王ドラは敵に攻撃し、2人から遠くへ引き離した後で王ドラも2人の所へ来た。すると、ひろきは2人を含めて『魔法バリア』を体全身を包むように張った。その間に敵は3人へ向かって来た。すると、ひろきは『黄』の水晶を取り出し、雷を呼んだのだった。

雷は海へ落ちた。すると、海全体に電気が流れ、見事、敵を痺れさせた。すると、敵は水面へ浮いてしまった。その後、ひろきはドラニコフと王ドラに押してもらい水面から飛び出して空中へ出た。そして、浮いている敵目掛けて魔法を放ったのだ。それにより敵は見事撃破。こうして、海での戦いは終わった。

王ドラが辺りを見渡すと、小さな小島があることを発見した。すぐさま3人はそこへ向かった。ひろきの『グレー』の水晶が役に立った。

第57話　海の中での事実（後書き）

立ち泳ぎ、私もできません

第５８話　小さな島では

小島に着くと、ひろきは『白』水晶で傷を癒した。しかし、ひろきの足の骨に皹が入っていて、白水晶だけでは治すことができなかった。すると、ひろきは砂漠で拾った『銀』の水晶を取り出した。そして使ってみると、いきなりひろきの背中から翼が生えたのだった。

どうやら『銀』は翼が生えるらしい。しかも、ちゃんと飛べるし遠い所でもすぐに行くことができるようになった。しかも、飛んでいるので皹の痛みは感じずに戦いができるようになっていた。

日が暮れてきたので、今日はこの島で泊まることにした。そして、3人は眠りに付いた。

次の朝、ひろき達は目を覚ました。すると、島の周りには雑魚敵に囲まれていた。どうやら夜のうちに囲まれていたようだ。運良くそいつらはウイルスを持っておらず、寝ている間に攻撃はされてはいなかった。どうやら見張りだけ頼まれたようだ。

そうしているうちに、そいつらのボスが3人の前に出現した。そして、早速そいつは攻撃をしてきた。この半径５ｍくらいしかない島では、避けるのは困難だった。しかも、海には雑魚敵が無数にいる為、海に逃げることもできないのだ。その中で攻撃をかわし、相手への攻撃を繰り出しているのだから大変である。

敵は、雑魚敵の頭も陸地として使っている為、広範囲の移動が可能だったのだ。

ひろきは『銀』の水晶を使い翼を広げた。そして、空中からの攻撃に切り替えた。しかし、まだ飛び方に慣れず、空中でバランスを取るのが難しい状態だった。そこへ敵が攻撃を仕掛けてくる。何とか

避けるが、続く攻撃についに当たり海に落ちてしまった。落ちたひろきは雑魚敵の攻撃を受けた。しかし、攻撃が弱くあまり食らわない。そこでひろきは『こげ茶』の水晶を取り出した。

このこげ茶の水晶は、第４０話で『黒』と一緒に見つけた物である。『こげ茶』には打撃攻撃の力を司るもので、放つと広範囲の敵に打撃を食らったような痛みを発生させることができるのだ。『黒』は闇の力を司っていて、相手を悪魔族にすることができるのだが、敵に使っても意味ないのでめったに使うことはなかった。

ひろきは『こげ茶』の水晶を使い、雑魚敵から脱出した。すると、そのまま敵の攻撃を受けている２人を掴んで空中へ逃げ出した。すると、ひろきは２人を背中に移した。その間に敵はひろき達に向かって来た。そこで、ひろきは両手を前に出し、どデカイ魔法光線を放った。すると、敵はそれをかわした。そして、ひろきに攻撃しようとした時、先ほどのかわした魔法光線が小島に当たり、巨大な爆発を起こした。その爆発により雑魚敵はすべて消滅。そして、ひろきに向かっていた敵は爆風に吹きとばされバランスを崩した。その瞬間に３人のトリプルアタックが炸裂。

敵はそれにより消滅する寸前までいった。

水面に浮かぶ敵は最後に「ここから、南へ２０ｋｍ行った所にお前そっくりのボスがいる。もうゲームはそいつらを倒せば終了だ。」と、言った。すると、敵は全身の力が抜けたらしく、ゆっくり瞳を閉じた。そして、しばらくして海の中へ消えていった。

ひろき達は南に向かって飛んでいった。

第５８話　小さな島では（後書き）

『銀』の水晶の当時の能力はまったく違うものでした。

第59話　ゲームの最後

ひろき達はとうとうもう1人のひろきがいる建物に辿り着いた。ひろき達はこの間の借りを返す為、急いで建物の中に入った。
しかし、そこで待ち構えていたのはたくさんの雑魚敵だった。
仕方なくひろき達はそいつらを倒していった。しかし、その中でひろきは2人とはぐれてしまった。その為、ひろきは2人を探し始めた。一方2人は、敵の1人に話しかけられた。どうやら偽者の方と間違えているようだ。2人は訳が分からない状態だったが、とりあえず「ひろきを探してる。」と言ってみた。すると、案の定敵は偽者の所へ案内させられた。そして、とうとう偽者のひろきと再対面することになった。
2人は偽ひろきに近づいた。すると「よく来たな。」的なことを言ってきた。どうやら偽ひろきも間違えているらしい。2人はそんな敵の動きを見ることにした。すると、偽ひろきは突然話し始めた。
「ひろき…か、俺はどうしてこんなことをしているんだろう。なぜ、ひろきという奴を倒さないといけないんだろう。魔王を倒せば、こんな命令無視できるのかなぁ。倒してぇーな。そう思わない。何の恨みもない奴と戦うんだぜ。嫌になるよな。」
突然のこのような発言に2人は戸惑った。この間とぜんぜん人が変わっていたからだ。2人は偽ひろきを見て、戦いをしないほうがいいということを訴えた。その訴えている中、王ドラがあの探し求めている『金』の水晶を見つけ出した。
偽ひろきの首に掛けてあった。

王ドラは偽ひろきに怪しまれようにそれを取ることにした。
「あのーすみません。あなたの首に掛けてあるその水晶、少し見せてもらってもいいですか。」
すると「ああ、これか。いいぞ、別に。使い道分からないし、俺宝

石には興味ねぇからな。魔王からは持ってるように言われてるけど、あいつの指図は受けたくないからな。だけど、なくしたらヤバそーだからな…。そうだ。お前ら、これやる。なくすなよ。」

こうして、王ドラは水晶を手に入れた。するとその時、部屋の扉が開いた。誰だと思って見ると、本物のひろきの姿がそこにはあった。

「やっと見つけたぜ。」

ひろきは息を切らしながら2人に近付いてきた。そして、3人がやっと揃った。それを見た偽ひろきは当然驚いた。その中で、2人はひろきに『金』の水晶を見せた。すると、ひろきは2人に早くみんなの所へ行くように指示した。そして、2人は『どこでもドア』を取り出し、みんなのいる病院へ向かった。それを見届けたひろきは偽者の方を見た。すると偽者は「とうとう、着ちゃったの。俺、お前と戦いたくない。これ以上、悪魔族を潰そうと考えてる奴等と戦いたくない。むしろ、俺も魔王を倒したいんだ。」と言ってきた。

突然の発言に驚きを隠せないひろきだったが、冷静さを取り戻し偽者の様子を伺った。すると、本当に魔王を倒したいと考えていることに気づいたのだった。

ひろきは近づいて話を聞こうとした。すると、突然偽者は倒れこんだ。そして、うなり始めた。

しばらくすると偽者は起き上がった。すると「よく来たな。ひろき。待ってたぞ。少しは腕上げてきたんだろうな。カスが。」と言って来た。

先ほどとは正反対な性格の偽者になっていた。どういうことなんだろうか。

第５９話　ゲームの最後（後書き）

どこでもドアあるなら最初から出せしっ！！

第６０話　決着

偽ひろきは突然攻撃してきた。さっきとはぜんぜん違う。
ひろきは攻撃をかわし、反撃をした。戦いの始まりである。
すると、偽者は話し始めた。

「俺は、悪魔族の心と天使族の心を持っている。周期的に変わるようだ。なぜだかは分からない。気づいたらこうなっていた。」
どうやら二重人格らしい。それに気づいたひろきは攻撃を止めた。
そして「お前は、どっちがいい。」と質問した。すると「悪魔族。」と偽者は答えた。その瞬間、ひろきは攻撃を仕掛けた。

そして、それは偽者に当たり偽者は吹き飛ばされた。すると、偽者はすぐ立ち上がりひろきに攻撃をしてきた。それに受け答えひろきは剣を構えた。そして、剣と剣がぶつかる音と共に２人とも吹き飛ばされた。２人は再度立ち上がり、激しい攻防を繰り返した。戦いは長期戦になっていった。
　するとその時、偽者の後ろから誰かが姿を現した。よく見ると、それはドラえもんズだった。ひろきは勝ちを確信した。『親友テレカ』を使えば、攻撃力も破壊力も上がり、偽者以上の力を出すことができるからである。しかし、それは叶わないものとなっていた。なんと現れたのはひろきの仲間の『ドラえもんズ』ではなく、偽者の仲間の『ドラえもんズ』だったのだ。しかし、偽者の話を聞くと正式には『ドラえもんズ』ではなく、『トラえもんズ』らしい。
そういえば、微妙に虎模様が…（別にどうでもいい）。

どうやらそいつらも『親友テレカ』を持っているらしい。しかし、名前は『友情テレカ』である。（またまたどうでもいい）。話によると、悪魔族の１人の科学者が作り上げたらしい。トラえもんズも

その科学者によって作られたらしい。しかも、本物と何の変わりもないように。

トラえもんズは偽ひろきに友情テレカ使った。すると、偽者はパワーアップ。ひろきのピンチである。そして、偽者は攻撃を放った。ひろきはそれを剣で受け止めるが、魔法の勢いはどんどん増していき、ついには受け止めることができなくなり、ひろきは攻撃を食らってしまった。

ひろきは吹き飛ばされ、とうとう建物の外まで吹き飛ばされてしまった。偽ひろきはさらに魔法をひろき目掛けて連続して放った。空中にいるひろきは意識を失っていて、攻撃をかわすことはできなかった。ひろきは再度吹き飛ばされた。もう建物からは５００ｍくらい離れている所までひろきは飛ばされていた。もはや勝機はないのか。いや、まだドラえもんズがいる。それに賭けるしかない。

その時、ドラえもんズが『どこでもドア』で登場した。

現場を見た7人は驚いた。そこにひろきの姿がなかったからだ。そして、ひろきの事は偽者から聞かされた。その瞬間、ドラメッドがひろきの所へ向かった。それを事前に察知したトラえもんズのトラメッドも、ドラメッド同様ひろきの所へ向かった。その間に残りの6人は偽者と戦おうとしていた。しかし、敵の隙が見つからず攻撃することができなかった。その間に偽ひろきが攻撃してくるので、それらを避けるしかなかった。

ドラメッドは絨毯に乗りながら、偽者の自分と戦っていた。空中で魔法によるバトルが繰り広げられていた。先にひろきを掴んだ方がひろきの運命を変えることになる。絶対に負けられない戦いがここにはあった。

トラメッドは突然ひろきの方に魔法を使った。それを見たドラメッドは猛スピードでひろきの所へ向かった。ひろきの所に着いた時、それは魔法が当たる時だった。トラメッドの魔法が2人を襲った。

煙が立ち込める中、トラメッドはニヤリと笑っていた。そして、煙が消えてくるとその表情は一変した。なんと、ひろきを抱えながらドラメッドが立っていたのだった。しかし、体はぼろぼろ。どうやら、自らひろきを庇って自分だけ攻撃を受けたのだった。

ドラメッドはひろきをそっと絨毯の上に置いた。すると、ドラメッドは絨毯から飛び降りつつ巨大化した。偽者も負けじと巨大化した。そして、2人の巨人対決に発展した。しかし、ドラメッドの方が攻撃力が上だった。なので、戦いは短期間で終わった。ドラメッドの勝利である。偽者は攻撃を食らった瞬間爆発して、粉々になってしまった。その時『友情テレカ』も爆発した。

ドラメッドはすかさず『白』の水晶でひろきを回復させた。ひろきは目を覚まし、ドラメッドと久しぶりに再会したのだった。しかし、話している暇はなく、すぐさま2人は偽者の所へ向かった。

建物内では、激しい攻防が繰り広げられていた。しかし、俄然偽者のほうが有利であった。ひろきは外から偽ひろきを確認した。すると、偽ひろきはドラえもんに攻撃しようとしていた。すかさずひろきが魔法を放った。それは見事偽者に当たり偽者は吹き飛んだ。

その後、ひろきは建物内に入ってきた。そして、偽者目掛けて攻撃を始めたのだった。偽者はすぐに起き上がり、ひろきの攻撃を防いだ。どうやら偽者に友情テレカの力は残ってないみたいで、対等にひろきと戦っていた。ひろきと偽者は親友テレカ、友情テレカの力を求めた。しかし、トラえもんズが友情テレカを掲げるとそれをドラえもんズが邪魔して、ドラえもんズが親友テレカを掲げた時にはトラえもんズが邪魔するという具合になり、ひろき達は力を求めることはできずそのままで戦っていた。すると突然、偽ひろきは手に膨大な魔法力を溜め込んだ。それを見て、ひろきも魔法力を同じように溜め込んだ。そして、2人はその魔法力を一気に相手向けて放った。

2つの魔法は共にぶつかり合い、両者の中間で止まった。どちら

とも魔法力をさらに出した。一歩も引かない戦いの中、ドラズとトラズがそれぞれテレカで加勢した。しかし、この時偽者のほうには偽ドラメッドがいなかったのだ。魔法は少しずつ、偽者のほうに近付いてきた。そして、とうとう魔法は偽者達に当たったのだった。同時に建物は壊れ、上には青空が広がっていた。

煙がなくなると、そこには偽ひろきの姿だけがそこにはあり、その場に倒れていた。ひろきは偽者に近づいた。そして、首元に剣の先を当てた。その後、偽者に話しかけた。

「お前、本当に悪魔族になりたいのか。」

その時、偽者はもう1つの性格になっていた。

「俺は、魔王を恨んでいる。なんで、お前と戦わなければいけないんだろう。俺は戦いたくない。戦うのなら天使族として戦いたい。だけど、もう片方の性格になった時、考えはすべて逆になるんだ。2つの性格なんていらない。今の性格だけで十分だ。」

偽者は語った。すると、ひろきは剣をしまい魔法を右手に魔法球を作った。そして、今度はそれを左手で変形し始めた。しばらくするとそれは、弓矢の形に変えられていた。そして、ひろきはそれを偽者に狙いを定め魔法の矢を放った。それは偽者の腹部に直撃した。すると、それはすぐ消えてしまった。

「今、放ったのは正義感が込められている矢だ。これを食らったお前はもう違う性格になることはない。ずっと今の性格のままだ。」

そう言って、ひろきは『白』水晶を取り出して偽者を回復させた。そして、ひろきは偽者に「一緒に来るか。」的なことを言って誘った。

しかし、偽者は1人で生きていくと言った。そうして偽者は悪魔族を倒す為、武者修行の旅に出たのだった。

こうして、長い戦いは終わったのだった。ひろき達はフォック村に帰ることにした。『どこでもドア』を使えば簡単に帰れるのだが、『銀』の水晶もあり、せっかくなので飛んで帰ることにした。

第６０話　決着（後書き）

トラえもんズとの対決で１話書きたかったけど、めんどいからやめた。

第６１話　牢屋の中での出来事

ひろき達はフォック村に戻ってきた。みんなはへとへとですぐに休みたかった。そんな中、ひろき達の背後に何者かが現れた。そして、ひろき達に攻撃してきた。みんなはそいつに気づくことができなかった為、攻撃を受けたひろき達は気絶してしまった。そして、攻撃したやつはひろき達を運び出した。

王ドラが目を覚ました。すると、そこは牢屋の中だった。すぐ隣にはひろきの姿があった。その他には誰もいなかった。なんとかひろきを起こそうとするが、ひろきは目を覚まさなかった。どうやら深い眠りに入っているらしい。こうなったら起こすのは大変である。仕方なく、壁などを攻撃して脱出を図ったが、全く壊れることはなかった。その時、隣から声が聞こえた。隣にはどうやらキッドがいるらしい。そして、話によるとキッドの空気砲でも壊せないらしい。それを聞いて諦めかけたその時、あることを思い出した。ひろきは寝相が悪いのだ。

今まで書かなかったが、ひろきの寝相が悪いことは、仲間のうち誰でも知っていることだった。浅い眠りだったらそんなに動くことはないのに、深い眠りになった時にそれは発動する。なんと、夢の中で起こっている事をひろきが寝ながら体で表現するのだ。つまり、夢の中で敵が出てきてそれと戦っている夢なら、ひろきは眠ったまま剣を振り回すのだ。時には魔法も出すこともある。この能力は神様によって作られたのだ。

早速王ドラはひろきの耳元で「敵が来た。」と繰り返し言い続けた。すると、ひろきは突然立ち上がり、誰もいない所に剣を振り回し始めた。王ドラはひろきを壁側に向かせた。そして「今です。ひろき君。魔法で攻撃です。」と言った。すると、ひろきは特大の魔

法を壁に向かって放った。それにより次々に壁は壊れていく。そしてとうとう、全ての壁が壊れたのだった。壊れた壁からは、キッドを含めその他のドラズのメンバーとフォック達が顔を出した。こうしてようやく全員が揃ったのだった。

他のみんなは魔法力をほとんど吸い取られていて、魔法で出ることが出来なかったらしい。そこへひろきの魔法が壊したのでやっと出られたのだと言う。そのひろきだがまだ眠っていた。そんな時、フォックが近寄りひろきの耳元で黒板を引っかく音の声真似をした。すると、たちまちひろきは目覚めたのだった。

ひろきは、状況を何とか掴んだ。するとひろきは真上に向かって魔法を放った。窓がなかったので地下だと考えたのだ。案の定、天井からは光がこぼれていた。ひろき達はその穴から出ることにした。

ひろきが先頭に出ると、目の前には敵なのかどうかは分からない牢屋の番みたいな人達に囲まれていた。それに気を取られたひろきは番の後ろで魔法を放とうとしている奴に気づかなかった。すると、そいつはひろき目掛けて魔法光線を放ったのだ。

ひろきが気づいた時にはもう遅かった。

ひろきはその魔法光線に諸に当たってしまった。しかし、その魔法光線は爆発することなくひろきを押したまま空へ消えていった。フォック達はそれを見て穴から飛び出した。そして、番達を敵だと確信して攻撃していった。どんどんと倒していくフォック達。ついにはさっき攻撃した奴だけになっていた。そいつは魔法で攻撃してきた。しかし、フォック達はそれに合体魔法で返した。魔法は勿論フォック達の方が強いので、敵の魔法は合体魔法に呑み込まれ、敵へ向かっていった。これにより敵は倒されたのだった。しかし、ひろきは戻ってこなかった。

とりあえず、みんなは村に帰ることにした。帰ってみると村は荒らされていた。どうやら、フォック達を捕まえたのはこの町を襲うのに邪魔だったからだと思われた。みんなは自分の家に帰って持ち

物を検査した。しかし、何にも盗まれてはいなかったのだ。どうやら盗む物がなかったらしい。『食べ物がなる木』も無事だし、これといって大きな被害はなかった。村人は、森の中に身を隠していて無事だった。ただ、ここにひろきの姿はなかった。

数日経ってもひろきは帰ってこなかった。フォックはまた、ぼーっとしていた。その時、フォックは空から何か降ってくるのを確認した。なんと、それはひろきだった。フォックは慌てて家を飛び出した。

ひろきはゆっくり、まるで雲に乗っているかのように落ちていた。なんと、首にかけてある『銀』の水晶が光っていて、その力によりひろきはゆっくり落ちてきていたのだ。フォックは地面に近づいたひろきを両腕で掴んだ。その瞬間、水晶の光は消えていった。

フォックはひろきを揺らした。すると、ひろきはゆっくり目を開けた。それを見たフォック派思わず抱きついた。ひろきは「よせよせ。」と言って無理やりフォックの腕から降りた。しかし、足の痺を忘れていて両足を突いてしまった。なので、力が入らず倒れ込んでしまった。痛みを感じないので油断していた。ひろきはフォックに足のことを告げると、フォックは急いでひろきを病院へ運んだのだった。

病院ではドラズが休んでいた。ひろきの帰ってきたことに誰もが驚き、そして喜んだ。

こうして、今回の長い戦いは幕を閉じた。ドラズとひろきはゆっくり休んだのだった。

第６１話　牢屋の中での出来事（後書き）

寝相がすごいとかどんなぶっとんだ設定だし！！

ってか、空から人が振ってくるって、もろラピ●タ

第６２話　病院の庭で

ひろきが空から降ってきてから１週間。
ひろきは松葉杖を使って病院の庭で王ドラと一緒に散歩をしていた。
ここは病人のリハビリをする所で、ひろき達の他にもたくさんの人がいた。フォック村の病院は荒らされていて、整理に時間がかかるということでいつもとは違う病院で診てもらっていたのだ。
すると、突然庭の奥の方で爆発音が聞こえてきた。
それはいつも通り敵の出現だったのだ。ひろき達は早速その場所に向かった。しかし、松葉杖がありまともに歩けない。とりあえずひろきは王ドラに先に行くように伝えて先に行かせた。

爆発源に着くと、そこには１人の男が立っていた。そして、その周りには爆発に巻き込まれた人達が倒れていた。
王ドラはすかさず攻撃をした。しかし、かわされて逆に王ドラが飛ばされてしまった。体が鈍っている。その後も王ドラは攻撃を繰り返したが、あまり敵には効いていなかった。そこへ遅れてひろきが到着した。
敵はひろきを発見すると、王ドラと戦いながらひろきに攻撃してきたのだった。怪我をしていてまともに避けられないうえに剣もない。ひろきはそのまま吹き飛ばされてしまった。やっとひろきに気づいた王ドラは、ひろきの側に駆け寄った。
ひろきはなんとか立ち上がった。しかし、次なる攻撃がひろきに向かってきていた。すると、王ドラはひろきの前に飛び、ひろきを庇い攻撃を食らったのだった。王ドラは吹き飛ばされ、立てない状態にまでなってしまった。
ひろきは魔法を作ろうと手に力を溜めた。しかし、魔法力が無くなっていて魔法を放つことは出来なかった。

どうすることも出来なくなり、ひろきは敵をただ見た。敵は魔法を放とうとしていた。その時、どこからともなく魔法球が飛んできた。ひろきが目を向けるとそこにはフォックではなく、なんとここの院長が立っていたのだ。

「怪我人に手を出すとは卑怯な奴ですね。」

そう言って、手に魔法球を作り出した。

ここの院長は王ドラと同じネコ型ロボットで、眼鏡を掛けている人だった。院長は次々に魔法球を敵に当てていく。しかも、敵のスピードに着いていっている。そして、追い詰めた院長は両手に力を溜め、敵に向かって勢いよく放った。それにより敵は気絶してしまった。医者なので倒すまでいかないらしい。

院長は警察を呼び、敵を捕まえさせた。

その後、ひろきは院長になんで魔法が放てるのか聞いてみた。すると、院長は「私の知り合いにとても強い人がいてその人に教えてもらったのです。名は『ドラ・ナターシャ』といいます。」と、言った。

ドラ・ナターシャの新たな情報が来た。

ひろきは院長に聞いたが、個人情報なので教えられないという。だけど、ここの病院に来ることだけ分かったのでひろきはうれしくなった。

院長は怪我人を病室に運んだ。ひろきも手伝おうとしたが院長に止められた。王ドラも無事だった。この戦いにより王ドラは1週間の入院期間が増えてしまったのだった。入院中、ドラ・ナターシャは一度もここには来なかった。

1週間後、ひろきと王ドラは無事退院したのだった。

第６２話　病院の庭で（後書き）

院長の名前は『ドラ教授』といいます。
ナターシャとの関係は後ほど

第６３話　挑戦状からの出来事（前書き）

またシリーズもの

しかし、この物語の中で一番の鍵となるシリーズです

第６３話　挑戦状からの出来事

退院から2週間後、ひろきの許に挑戦状が届いた。ひろき達は早速指定された場所に向かった。

そこは、円柱のように突き出た敷地［テーブルマウンテン］の一番高い所だった。そこには城があり、そこが指定されていた場所だった。下には森が広がっていて、行くにはドラメッドの絨毯と『銀』の水晶の翼でしか行くことはできそうになかった。

ひろき達が中に入ると、そこには敵1人だけしかいなかった。敵はひろき達を見つけると、全員でかかって来いと言ってきた。

早速ひろき達は攻撃を仕掛けた。しかし、敵はにたにた笑いながら腕を組んでいた。不審に思ったひろき達は様子を伺うことにした。すると、突然ひろき達は身動きが取れなくなってしまった。

どうやら敵の罠にはまってしまったらしい。

敵の話によると、この城全体にあらかじめ魔法を仕掛けてあり、敵が入ると金縛りの魔法が発動される仕組みになっていたらしい。まんまとはめられたのだった。

ひろき達がもがいてるうちに、続々と敵が出てきた。しかも、よく見るとそいつらは全員爆弾みたいな体をしていた。次の瞬間、予想通りそいつらが全員一斉に爆発したのだった。さっきまでいた敵はどこかに避難していて、姿は確認できなかった。ひろき達はその爆発に巻き込まれた。爆発は建物も破壊するぐらいの威力であり、爆発によりひろき達は吹き飛ばされた。しかし、運良くテーブルマウンテンから落ちることはなかった。だが、一番爆発源に近かったドラメッドだけが下に落ちてしまったのだった。

ひろき達は気を失い倒れていた。そこにさっきの奴が来て、ひろき達をその円柱の土地の端に設置された処刑台みたいなものに取り付けていったのだった。

一方で、ドラメッドは下の森の中に落ちていった。なんとか枝などがクッションになり地面への衝突は免れた。しかし、ドラメッドも気を失っていた。すると、そこに誰かが通りかかった。その人は手に木の枝を持っていたが、それらを置きドラメッドを運んでいった。

第６４話　夏子との出会い（前書き）

最重要人物登場

第６４話　夏子との出会い

あれから数時間が経ってドラメッドは目を覚ました。すると、目の前には女の子の顔があった。その子は、ドラメッドの目覚めに気づいた。

女の子はドラメッドに話しかけた。

「大丈夫。服とかぼろぼろだけど…。」

ドラメッドは大丈夫と言って、その子の顔を見て話しかけた。

「ここはどこである。君は…誰。我輩はドラメッドといいます。」

「こんにちはドラメッドさん。私、『微風夏子』。ここは私が暮らしている村よ。ところでどうしてあんな森の中で倒れていたの。」

それを聞いてドラメッドは戦いの事を思い出した。そして、それを夏子に話した。すると、夏子は驚いて村長を呼びに行った。

ドラメッドの所には村長の他に村人が多数押し寄せた。そして、みんなドラメッドに「戦いには行くな。殺されちまう。」と口々に言ってきた。それに対してドラメッドは鬱陶しくなって外に飛び出した。しかし、体が重く走ることは愚か、歩くこともままならなかった。

外にいた夏子が慌ててドラメッドを支えた。そして、まだ横になっているようにドラメッドに言った。その時、敵と戦った所から音が聞こえてきた。ふと見ると、そこには酷い光景が広がっていた。

ひろき達は目を覚ましていた。しかし、体がだるかった。そこへ敵が現れた。すると、敵は「お前達の魔法力を全部吸い取った。」とか言い、げらげら笑った。そして「これであのお方が目覚めになれる。」などと意味深なことを言っていた。そんな敵にひろきは口答えした。それに腹を立てた敵は、ひろきの横にあるレバーを引いた。すると、ひろきの処刑台が１８０度回転した。ひろきの目の先には崖しかない状態だった。その状態に固定されると、処刑台の脚

を中心に回転を始めた。
処刑台はひろきの方に倒れていく。そしてそのまま、１８０度回転して崖の側面に叩き付けたのだ。そして、それを繰り返しやり続けた。しばらくすると、フォック達もそれをやられ始めた。
それをドラメッドは目撃していた。
「酷い。あんなことするなんて。ドラメッドさん、行かないで。あんなことされるのよ。」
夏子はドラメッドを止める。しかし、ドラメッドは絨毯を取り出した。
そして
「あそこにいるのは我輩の仲間である。我輩は仲間を助けるである。」
とか言って絨毯に乗ってひろき達の所へ向かったのだった。

第６５話　みんなを助け出せ（前書き）

この頃はドラメッド×夏子を確立させようとしていた。

第６５話　みんなを助け出せ

ドラメッドはひろき達の所へ向かった。そして、絨毯に乗りつつ助けようとしたところ、透明な壁にぶつかった。バリアが張られていたのだ。それに気づいた敵は地下の方に歩いていった。それを追うように絨毯で飛んでいくと、一箇所だけバリアが張られてない所があった。すぐさまドラメッドはそこから侵入した。

そこは建物の地下に繋がっていて湿っぽかった。そこへ先ほどの敵がドラメッドの目の前に現れた。

敵はドラメッドに戦いを挑んできた。ドラメッドはなんとか体を動かしながら、必死で攻撃や防御をしていた。しかし、敵の圧倒的な強さにドラメッドは吹き飛ばされてしまった。そして、地面に叩きつけられたドラメッドは倒れこんだ。すると、敵は高台に移動した。次の瞬間、水が部屋の中に流れ込んできた。

それに気づいたドラメッドは、なんとか立ち上がって絨毯に乗り、水から避難した。しかし、そんなドラメッドを敵は攻撃したのだった。ドラメッドは絨毯から落ちて水の中に落ちてしまった。ドラメッドは水が苦手なため、大ピンチである。

ドラメッドは沈んでいった。気を失っていてどうすることもできなかった。その時、ドラメッドの意識の中に夏子の声が聞こえてきた。ここにいるはずのない夏子の声が。

その言葉にドラメッドは意識を取り戻した。そして、ドラメッドは水中から飛び出した。そして、高台に飛び乗った。

第６６話　ドラメッドと夏子

丁度その頃、なんと夏子がドラメッドのいる部屋にいたのだった。
どうやってここに来たのかは分からないが、本当にここにいた。
夏子は迷っていたらしく、周りをきょろきょろしながら歩いていた。
そしてあろうことか、敵の後ろに辿り着いてしまった。そこで初めて夏子の存在に気づいたドラメッド。しかし、その時は丁度敵の攻撃から身をかわしているときだった。夏子はドラメッドの今おかれている状況を確認した。そして、夏子が突然敵の背後から敵を押さえつけたのだった。

「ドラメッドさん、今のうちに…。」
その時、初めて夏子の存在に気づいた敵は驚いたが、すぐに夏子を振り払い、夏子目掛けて攻撃をしたのだった。すると、夏子は水の中に落ちてしまった。敵はドラメッドの方を向いた。すると、もう既にドラメッドが目の前に迫ってきていた。そして、そのままドラメッドは敵に攻撃したのだった。それにより敵は吹き飛ばされ、壁に激突してそのまま水の中へ落ちていった。
ドラメッドはすぐさま水中に飛び込んだ。そして何とか泳いでいき、夏子を掴むと水面へと急いだ。

水面から出るとすぐ高台に上がって夏子を揺らした。すると、夏子は水を吐き出しながら意識を取り戻した。ホッと一安心するドラメッド。と、その時、敵が水面から飛び出した。それに気づいたドラメッドは巨大化した。そして、迫ってくる敵目掛けてメガトンパンチを繰り出した。すると、敵は吹き飛ばされて星になるくらい飛んでいった。

ドラメッドは元に戻り、夏子に大丈夫か聞いた後、なぜここに来た

のか問いかけた。すると、夏子は「あなたが心配だったから。」といってニコッと笑った。それにどう反応していいか分からないドラメッドは「どうやってここに来たのか。」という質問で話を変えた。すると、このテーブルマウンテンには下に入り口があったことを話した。それを聞いてドラメッドは「とりあえず無事でよかった。」と言い抱きついた。と、次の瞬間、ドラメッドは倒れこんだ。

心配して夏子が声を掛けると、どうやら怪我などの影響で体が動かなくなってしまったらしい。そして、ドラメッドは上に行けば回復できると言って、絨毯を取ってほしいと言った。夏子が絨毯を取りに行き、持ってくるとなんと絨毯は壊れていた。

仕方なくドラメッドは夏子にひろきという男の所に行き、白い水晶を取ってきてほしいと頼んだ。すると、夏子は「私がドラメッドさんを上まで運ぶわ。」と言い、ドラメッドを持ち上げた。しかし、運ぶには大変そうでよたよたしながら上目指して歩いていった。

途中がけ崩れが起こっていて進めない所があったが、ドラメッドが魔法で何とかして道を切り開いた。そして、ようやく地上に着いた夏子は倒れ込んだ。しかし、なんとか立ち上がり、ひろきの首から『白』水晶を取った。その時、ひろきは気を失っていた。

夏子は水晶をドラメッドに渡すとドラメッドは自分で回復して立ち上がった。その後、夏子を回復させて、2人でひろき達を処刑台から外していった。そして、みんなを回復させた。

これにより戦いは終わったと思いきや、いきなりさっきドラメッド達がいた所から怪獣のようなロボットのような怪物が姿を現したのだった。

第６６話　ドラメッドと夏子（後書き）

女の子で１２９．３ｋｇは無理とか言わないで

第67話　究極兵器悪バルト

怪物はゆっくり歩き出し、ひろき達に名を言ってきた。

「ワタシノ、名ハ、悪ばると。オマエタチヲ…消スタメニ、生マレテキタ。全テヲ破壊スルタメニ、作ラレタ。邪魔スルモノは全テ破壊スル。覚悟シロ。」

それを聞いてひろき達は攻撃をしだした。しかし、一瞬のうちにみんなは吹き飛ばされた。攻撃が当たったその場所から爆発が起こったのだ。ひろき達は何とか空中で体勢を変えて着地をした。そしてまた、向かって行った。その間、夏子はドラメッドに連れられ避難していた。

ひろき達は幾度となく吹き飛ばされた。しかも、こちらの攻撃はぜんぜん効いておらず、ただひろき達がぼろぼろになっていくだけだった。魔法が使えないのがとても痛い。しかし、悪バルトは攻撃をしてくる様子はなかった。そのかわり、悪バルトは顔付近に力を溜めていた。次の瞬間、そこからレーザー光線が発射された。その光線はフォックを直撃して体を貫通させた。

フォックが倒れ込むとそこに悪バルトが飛んできた。そして、フォックを蹴り上げ、最後に空中にいるフォックに魔法をぶっ放した。フォックは魔法を諸に食らい、森の中へ落ちていった。それを見ていた犬次郎は、悪バルトが次は自分を狙っている事に気づいた。

案の定、悪バルトは犬次郎の方に向かって来た。犬次郎は刀を構えた。すると、悪バルトは近くにいたミュウさんの尻尾を掴んだ。すると、そのミュウさんを使って犬次郎に攻撃してきた。犬次郎もミュウさんもどうすることもできなくて2人はぶつかり合った。それにより犬次郎は吹き飛ばされた。そして、悪バルトはミュウさん

を地面に何回も叩きつけた。そして、その後森の方へ投げ飛ばした。森に落ちるのを阻止すべく、マリオがミュウさんの後ろに行き支えた。しかし、悪バルトはそんな2人に対し魔法をぶっ放した。そんな、2人を庇うようにひろきが2人の前に立ち塞がった。そして、魔法はひろきを襲った。しかし、ひろきは耐えていた。だが、ひろきは悪バルトを甘く見ていた。なんと、連続して魔法を放ってきたのだった。

ひろきは何とか耐えていたが、とうとう耐えきれなくなり吹き飛んだ。そして、悪バルトは空中にいるひろきに向かって飛んだ。その間、悪バルトはミュウさん達に向かって魔法を放った。その魔法は2人を襲い、2人は吹き飛ばされた。そして、止めにもう一発悪バルトはぶっ放した。そして2人は森へ叩きつけられた。

一方ひろきは空中で気を失っていた。
そこへ悪バルトが攻撃を繰り出した。ひろきはズタズタにやられ、もはやどうすることもできなかった。そして、悪バルトは止めにひろきに踵落としを決め、ひろきを森の中へ叩きつけた。そして、悪バルトはひろきが落ちた場所に向かって無数の魔法を放ったのだった。そして攻撃が止むと、森はひろきの周りだけ木が一本もなくなっていた。それを見届けていた悪バルトは、なにやら光に当てられていることに気づいた。振り返って見てみるとドラズが悪バルト目掛けて『親友テレカ』を掲げていたのだった。

ドラズは力を溜めた。そして、親友テレカを発動させた。その光に包まれた悪バルトはどうすることもできなかった。そして、悪バルトの側で爆発が起こったのだった。やっと倒したかと思っていると、煙の中から魔法が飛んできた。突然の攻撃に動けなかったドラズはその魔法に当たり、吹き飛ばされてしまった。なんとか全員落ちる事はなかったが、もう体はぼろぼろになっていた。すると、悪

バルトは両手を高々と上げ巨大な魔法球を作り上げた。そして、それをみんながいる場所へ放った。

魔法球はドラズを含め、タケル、ハムチィー、カービィにも被害を与えたのだった。しかし、夏子は目の前にドラメッドが盾となり、攻撃は免れたのだった。

その攻撃でドラズ達は全員が倒れてしまった。そして、ハムチィー、タケル、カービィも倒れてしまった。コビィは悪バルトを吸い込む為に様子を伺っていたのだが、吸い込めずに倒されてしまっていた。そんなドラズ達を見て、悪バルトは地面を叩き付けた。すると、地面に魔法が流れ、ドラズやタケル達の側まで流れて爆発をさせた。それによりみんなは森の中へ落ちてしまった。夏子はぎりぎりで落ちずにいた。しかし、悪バルトは夏子に近づいて来たのだった。

夏子は必死で逃げた。しかし、敵の攻撃が足に当たり転んでしまった。そこへだんだんと悪バルトは近づいていき、魔法を放ったのだった。夏子は目を瞑り「やめて。」と叫んだ。その瞬間、夏子の体は光り出し、悪バルトの魔法を横にそらしたのだった。

第６７話　究極兵器悪バルト（後書き）

この頃（まだ、小学生）は主人公達をどう痛めつけるかよーく考えていた。

今はそんなえぐいことしない。

第６８話　夏子の力

夏子は自分の変化に気づかなかった。一方で悪バルトは驚いていた。そして、夏子は「来ないで。」とまた叫んだ。すると、悪バルトは吹き飛ばされてしまった。

その後、夏子は「みんな、助けて…。ドラメッドさん助けて。」と、言った。すると、突然空が光りだした。そして、その光がひろき達を照らし出したのだった。その時、夏子は初めて空気の変化に気づいたのだった。

悪バルトはそんなのお構いなしに夏子に突っ込んできた。と、その時、夏子の前にドラメッドが現れた。そして、悪バルトをパンチで吹き飛ばした。そんなドラメッドをよく見ると青白く光っていた。

飛ばされた悪バルトはなんとか体勢を立て直し足を着けた。その時、後ろには犬次郎の姿があった。そして、悪バルト目掛けて刀を振り下ろした。すると、悪バルトの背中には切り傷が入ったのだった。その隙に今度はミュウさんが魔法で攻撃を繰り出した。なぜか魔法力が回復したらしい。それによって悪バルトは吹き飛んで地面の無い所まで飛んだ。すると、それをフォックが掴み、犬次郎たちがいる所へ投げつけた。

すると、そこにカービィが登場。

そして悪バルトを吸い込んだ。そしてコピーをし、吐き出された悪バルトに向かって自分自身の魔法を食らわせた。

その影響で真上に飛んだ悪バルトにマリオが下に思いっきり蹴り地面へ叩きつけた。そこにハムチィーが魔法で攻撃。すると、悪バルトの視界は煙で遮られた。そこに親友テレカの力を加えたひろきが、今のところ最大の魔法を放ったのだった。そして敵は吹き飛んだ。

そして、そこにタケルがブーメランを投げつけた。すると、悪バルトの体は真っ二つになってしまった。

その後、ひろき達は合体魔法を作り出し、2つになった悪バルト目掛けて放った。これにより悪バルトは破壊され、空中で爆発したのだった。ひろき達は夏子の側に集まり、夏子にお礼を言ったのだった。しかし、夏子は何がなんだか分からなくなっていたのだった。

第６８話　夏子の力（後書き）

まぁ、勝たせないとね。話し進まないからね。

第６９話　呪いの人形

ひろき達は夏子にお礼を言った後、倒れこんだ。夏子は驚きみんなを揺らしたが、みんなは眠っているだけだった。

夏子はそんなみんなをどうにか村まで連れて行こうとした。その時、夏子はひろきが着けてある１２個の水晶を発見した。すると、夏子は何の迷いもなく『グレー』の水晶を取り、寝ているみんなの手を繋がせ、水晶を透かさないで手を動かし「テレポート」と叫び、自分の村の方に目を向けたのだった。そして、村に全員を運ぶことに成功した。

その頃、誰かがさっきまでいた所の地下で何かを作っていた。よく見ると、それはひろき達の人形だった。すると、そいつはその人形に魔法を掛けたのだった。そして、その人形を持って村の方まで下っていったのだった。

一方で悪魔族の本拠地、悪魔城では悪バルトの敗北が伝えられていた。それには、魔王の秘書が出てきて話を聞きいていた。魔王は出かけているという。だから代わりに秘書が話を聞いていたのだ。

その時、秘書が意味深なことを言い出した。

「そこにいるのは分かっています。さっさと出てきなさい。」

そう言って柱を見ると、そこからなんとカイルの姿が出てきたのである。

「話は聞かせてもらったよ。悪バルトが負けるとは思いもしなかったな。」

「なんだ。カイルか。ちょうどいい。お前を必要としていた所だ。まあとりあえずこっちへ来い。」

そう言って秘書はカイルを呼んだ。カイルはすぐに秘書の所に行き用件を聞いた。何でも悪魔族で開発した薬をひろき達の近くにいる悪魔族の1人に渡してほしいという用件だった。カイルは快くそれを受け取り向かうことを言った。

出て行こうとした時、カイルはひろしのことを尋ねてみた。すると、秘書は別の所で修行しているといって、カイルと会わせてはくれなかった。

その後、カイルは言われた所に向かった。

カイルは普通に悪魔族の奴らと話していた。天使族ではなかったのか。

夏子は村に着くと、みんなを家の中に入れてみんなを休ませた。そして、しばらくするとひろき達は目を覚ました。もう、朝になっていた。それに気づいた夏子がひろきに近寄って来た。

「ありがとうございます。あなたたちのおかげでもうひっそりと生活することは無くなりました。今まで、上にいた奴らに監視されていて、まともな生活ができなかったのです。本当にありがとうございました。」

いきなりお礼を言われて戸惑うひろき。こうして、初めての出会いは果たされた。ひろきは、夏子のおかげで倒せたことを改めて思い出した。そして

「お礼を言うのは俺達の方です。ありがとうございました。」

と言った。しかし、夏子自身も何が起こったのか分からない状況だったことを話し、謎を呼んだのだった。

そうこうしているうちにみんなが集まってきた。そして、ようやく全員が揃ったのだった。みんなは戦いのことを話し、みんなで不思議がっていた。すると、突然フォックは腹痛を訴えた。急いで薬を取ってくるといって夏子が家を出た。その時、外で爆発音が聞こえ

たのだった。急いでひろき達が飛び出すと、そこには倒れている夏子の姿があったのだった。

夏子は倒れながらに岩の積み重なっている所を指さした。すると、そこにはひろき達の人形を持った男が立っていたのだった。

早速みんなは、なぜ攻撃したのか尋ねた。すると、悪バルトの手下だったらしく、悪バルトの仇を取りに来たのだという。それを聞いて、ふざけるなとばかりに犬次郎が刀を持ち敵向かって走り出した。すると、敵は犬次郎の人形を取り出すと、その人形に思いっきりパンチを食らわせた。すると、犬次郎は攻撃を当てられていないのに吹き飛ばされた。その後、立ち上がったが腹を擦っていた。犬次郎を見て、今度はタケルがブーメランを投げつけた。すると、敵はタケルの人形を取り出し、ブーメランの方に向かって投げつけた。すると、人形とブーメランはぶつかり人形は吹き飛ばされた。その時、タケルも強い衝撃と共に吹き飛ばされた。

それを見ていてひろきが気づいた。敵の人形とタケル達の動きが一緒のことに。それを敵に聞いてみるとやはりそうだった。なんと、人形と動きが同じになってしまうのだった。

すると、敵は人形を地面へ叩きつけた。そして、そのまま人形の上に乗ったのだった。当然ひろき達は押し潰された。痛みを感じないはずのひろきでさえ何かに潰されている感覚があったのだった。すると、今度敵は立ち上がり、人形の上ですばやく足踏みをしたのだった。

この攻撃はさっきよりの辛く、ひろき達は倒れこんだ。絶体絶命である。

そんな中、夏子だけは無事だった。どうやら、情報が不足していた為作れなかったらしい。夏子はみんなのことを助けなきゃと思い、なんとか立ち上がって敵に見つからないように敵の背後に回ることに成功した。その後、岩を登り敵の背後に立つと、敵に向かってタ

ックルしたのだった。

敵は岩から落っこちた。すかさず夏子は人形を持ち、岩から降りようとした。しかし、敵はそんな夏子に魔法を放った。魔法は夏子に当たり、夏子は吹き飛ばされた。その時に人形も手放してしまった。

敵はそこからドラメッドの人形を持つと、夏子の側に来て人形に魔法球を近づけた。そして「お前も直にこうなるんだぞ。」と言って、魔法球を人形に当てようとした。その時、敵は誰かの魔法により吹き飛ばされた。誰かと思って周りを見渡しても誰も魔法は放っていなかった。しかし、よく見るとなんと夏子体が野青白く光っていた。そして、先ほどの魔法は夏子が放っていたことに気づいた。

敵は立ち上がり夏子の方を向いた。そして、魔法で攻撃してきた。すると、夏子は手に力を溜め、そして魔法を放ったのだった。夏子の魔法は敵の魔法より強く、敵を丸ごと呑み込んでしまった。そして敵を消滅させたのだった。

攻撃が終わると夏子は、青白いのが消えて元の姿に戻ったのだった。

元の姿に戻った夏子の息は上がっていて、肩で呼吸をしていた。そして、呆然とただ立ち尽くしていた。体は固まっていた。

第６９話　呪いの人形（後書き）

ドラズの人形とカービィの人形を頂こうか。

第７０話　カイルと夏子の記憶（前書き）

長い。
だけど、一番の鍵となる話

第７０話　カイルと夏子の記憶

ひろきは何とか立ち上がり、夏子の側に行った。そして、先ほどの魔法について問いかけた。しかし、夏子は答えようとしなかった。そんな時、夏子の側にカイルが姿を現した。

カイルは持ってきた薬をドラメッドに渡した。一言、飲むなよと忠告して。

渡し終わると、カイルは夏子の側に寄ってきた。そして「使ったのか。」と言ってきた。それに対してひろきは何のことだか分からずに２人を見ていた。そこへカイルはひろきに話しかけた。それは夏子の先ほど使った魔法のことだった。

「１７年前、悪魔族と天使族は今よりももっと大変な戦いをしていた。どちらの民族も全員が戦ったぐらいだ。その時、この夏子は…。」

「やめて、言わないで。思い出したくない。忘れたい。」

夏子が涙目になって話を止めた。

「夏子、辛いのは分かっている。だけど、ひろきには真実を知ってもらった方がいいと思うんだ。なぜ、君がそんな力を使えるのか。いずれ分かることなんだよ。」

「…わかった。だけど、自分から言わせて…。」

「そうか。」

その後、夏子は話しかけた。

「私が小さい頃、目に飛び込んできたのは戦いで傷つく人達だった。私の村はカイルさんが言った戦いの戦場になっていたの。親は私を庇っていた。だけど逃げている時、私はいきなり魔法が使えたの。誰にも教わったわけでもなく、まだ１歳位の私が…。親は驚いた。すると，親はそんな私を草の中に置いていったの。『魔法が使える

なら1人で大丈夫だね。それで頑張って生きてね。』とか言って。
そして、去って行ったわ。私は必死で逃げた。攻撃の流れ弾にも当たったりした。すると、敵の天使族か悪魔族か分からないけど、どちらかの誰かが私に攻撃してきたの。私は死を覚悟した。すると，突然目に前にカイルさんが現れたの。そして、攻撃から私を守ってくれたの。すると、カイルさんは私に『これを持っていなさい。助けてと願えば叶えてくれるから。それから君はもう2度と魔法を使ってはいけない。敵は魔法を使う人だけ攻撃して来るんだ。だから、使っちゃだめだ。』って言ってこの首飾りを渡したの。そうするとカイルさんは他の仲間達と一緒に攻撃した奴を攻撃して、そいつを倒すことに成功したの。そしたら平和が訪れたわ。その後、カイルさんもその仲間も消えちゃって、私は1人でどこまでも歩いたの。とにかく、生きている人のいる所に行きたかったの。そして、着いた所がこの村だったの。そこのみんなは私を助けてくれてここまで育ててくれたの。こんな理由があったから私は魔法を使わないようにしてたのに、使っちゃった…。さっきあなた達を運ぶ為に『グレー』水晶を使ったんだけど、使えたのはお父さんが読ませてくれた本に書かれていたの。それを覚えてたから…。」
それを境に口が止まった。
すると、フォックも近づいてきた。
「そのカイルさんと残りの仲間ってか…。」
思わずカイルがフォックの口を塞いだ。知られたくないことがあるらしい。
その後、カイルは夏子に近づいた。

「夏子ちゃん、すっきりしたでしょ。」
「うん。だけど、怖い。敵が来るのが怖い。」
「大丈夫。ひろき達が守ってくれる。どんな敵からも、どんな相手だろうと。」
「ホントに?」

夏子の発言に対してひろきが口走る。
「おう。任せときな。俺らで守ってやる。俺らの仲間になってくれるなら。」
「…なる。ひろき君の仲間になる。」
「その為には、君の魔法も使ってもらうけどいいかい？」
「魔法だけは怖い。使いたくない。」
「そうか…ごめんね。大丈夫。使えなくたって。ちゃんと守ってあげるから。」
「ひろき君。みんな、よろしくお願いします。」
夏子はみんなにお辞儀をしたのだった。

その後、突然カイルがひろきを呼んだ。そして、夏子とは少し離れた所に連れられた。

「お前には言っておいた方がいいと思ってな、お前を呼んだんだ。さっき夏子が話したことはほとんどあっている。親においてかれたことも、俺が首飾りを渡したこともほとんどだ。だけど、ひとつだけ違うところがあった。夏子が見たって言う俺の仲間と一緒に悪魔族を倒したってところだ。実はあの時の敵は悪魔族でも天使族でもない。前にお前が聞いてきた『最強の敵』だった。しかも、奴は夏子の父親に憑依していたんだ。あの時、夏子を捨てた後、父親と母親はできるだけ遠くへ逃げようとしていた。俺と仲間は最強の敵を消滅寸前まで追い詰めた。そんな時、魂だけ抜けて父親に憑依したんだ。すると、そのままそいつは父親の体をのっとり母親を消した。そして、次に夏子に向かって行った。そこへ俺が助けたんだ。その後で最強の敵を仲間と共に封印したんだ。しかし、その封印には代償が必要だった。そして、それは俺から戦いの心を奪った。俺はもう2度と誰かと戦うことはできなくなった。だから、水晶集めをお前に託したんだ。なぜ、集めるように言ったのかというと、最強の

敵は死んだわけじゃない。まだ、封印されているだけなんだ。だから俺は封印を解き、そいつを倒そうと考えているんだ。そうすれば封印をする必要はなくなり、俺はもう一度戦うことができるようになるからだ。だから、俺はお前に託したんだ。その水晶の力が必要だから。」

「それで夏子ちゃんには戦っていた敵の正体を言わなかったのか。」

「ああ、自分の親に殺されそうになったなんて言えねぇよ。」

「そうですよね。ところで、カイルさんの仲間はどうなったんですか。」

「俺の仲間。ああさっき話した人達ね。生きてるよちゃんと。だって『神様』と『魔王』だもの。」

「えっ。魔王!?」

ひろきは驚いた様子でカイルを見た。

「そう、魔王。当時、俺は天使族にいた。悪魔族とは戦っていた。世界大戦規模で。俺らは常に魔王を倒すことだけ考えていた。悪魔族も神様を倒すことだけ考えていた。両者は戦い、そして、ついに少人数だけになってしまった。そんな時、ある1人の何者かが両者の争いを止めた。俺達はそれをこの世界の王だと思っていた。しかし、そいつは天使族、悪魔族関係なしに攻撃してきた。それこそ、最強の敵だった。そいつは強かった。みんな歯が立たなかった。だけど、俺と魔王と神様ともう1人悪魔族の奴はそいつと対等な戦いをしていた。俺らは話し合い、とりあえずあいつから倒そうと考えたんだ。この時、初めて悪魔族と天使族は1つになった。そして、攻撃していって追い詰めた時、そいつは憑依した。憑依した敵は回復し動きも元に戻ってしまった。そんな時、悪魔族の魔王じゃない方がそいつに抱きつき、攻撃をさせないようにした。そして、俺達に攻撃するように言ってきたんだ。俺らはそいつの思いを受け止め、攻撃した。そして、そいつは俺らの魔法で散ってしまった。一方で憑依した敵は見事封印することができたんだ。だけど、魔王は体の

自由を奪われ、走ったりジャンプなどはできなくなり、神様は地上を歩けなくなった。みんな封印の影響だ。その後、魔王と神様はお互いに休戦を要求して、とりあえず戦争は終わりになった。そして、何年か経ったら悪魔族が点々と攻撃するようになり、それを天使族が止めるということになり、また戦いが始まったんだ。そして、俺は天使族を辞めた。そして、両者の戦いを止める仕事に就いた。違った見方をすれば俺は天使族でもあり悪魔族でもあるということになる。今日だって悪魔族からひろき達に飲ませようとした薬を持ってきたところだ。俺は悪魔族でも顔が通るから、直接受け取りに行ってきた。で、もって来たのだが、勿論お前達に飲ませずに捨てるつもりだ。だけど、俺の付近。そして、お前達の付近に悪魔族が用意した小型監視カメラが俺らのことを撮っている。幸い音声は入らないから秘密事項とかは漏れないけど、俺らの行動は全て相手にお見通しってやつだ。だから、薬はまだ捨ててねぇ。ドラメッドとかいう奴が持っているのがそうだ。」

そう言ってドラメッドの方を向いた。ドラメッドは夏子の側で一緒に涙を流していた。

夏子の話を聞いたドラメッドは泣いていた。夏子ちゃんをかわいそうと思ったらしい。すると、突然ドラメッドは手に持っていた薬を喉が渇いたという理由で飲んでしまった。

第７１話　悪魔のドラメッド（前書き）

また、ちょっと長い。
そして、ちょっと重要

第７１話　悪魔のドラメッド

すかさずカイルが止めるように言った。しかし、その時はもう薬を飲み干していた。カイルは慌ててみんなをドラメッドに近寄らないよう指示した。そして、飲んだ薬が悪魔族になってしまう薬だということを伝えた。そこで初めてひろき達は事の大変さに気づいた。

ドラメッドは目の色を変えひろき達に襲い掛かった。すかさずカイルが魔法を出そうとした。しかし、封印のせいでやはり魔法は出ない。出たとしてもひろきが止めていたと思うけど。

ひろき達はどうすればいいのか迷っていた。カイルも戻し方は分からないという。その間にドラメッドはついに巨大化してしまった。

巨大化したドラメッドは暴れだした。破壊力もさっきより格段に上がり、手がつけられない状態だ。そんな時、ドラズが親友テレカを取り出しドラメッドに向けた。友情の力で元に戻ってもらおうとしたらしい。しかし、ドラメッドは戻ることはなかった。

ドラメッドは暴れ回っている。なんとかひろき達が誘導した為、村に被害はないものの、近隣の木はほとんどが壊滅状態だった。しかも、ひろき達の人形はまだ効力を発揮していて、ドラメッドはそれをよく踏んで行った。人知れずひろき達に攻撃を食らわしていた。

もうみんながぼろぼろになりつつあるとき夏子がドラメッドに近付いた。そして「やめてー。」という悲鳴と共に夏子の体が青白く光りだした。そして、そのままドラメッドに抱きついた。すると、ドラメッドの動きが止まった。そして、何秒かするとドラメッドは元の大きさに戻り、天使族のドラメッドに戻ったのだった。

夏子はドラメッドに抱きついた。しかし、ドラメッドは何が起こったのかまったく覚えていなかったのだ。

驚いたのはドラメッドだけではなかった。カイルを含めひろき達は夏子の力に驚いていた。すると、そこにカイルが話しかけてきた。

「ひろき今の見たか。実はあれ、お前らに渡した白と黒の水晶の力なんだ。俺はあの戦いの中、夏子に白水晶の欠片を渡したんだ。首飾りの中に入ってる。夏子は今までずっとつけていたと思う。だからあんなことができたんだ。ひろき、お前の水晶もそれと同じだ。しかも、夏子のより2倍近くでかい。そして、その水晶は最強の敵を倒す時に必ず必要なものだ。絶対はずすなよ。」

そう言って、カイルは夏子に近寄った。そして、なんと首飾りを返してほしいと頼んだのだった。しかし、夏子は拒否したのだった。

「私、まだ怖い。これを着けていないと不安なの。この誰かからもらったこの首飾りはずしたくないの。」

「!?」

カイルは驚いた。夏子が水晶をくれた人、つまり自分のことを忘れていたから。恐る恐るカイルは夏子にどこで生まれたのか聞いてみた。すると「この村。」と答えたのだった。記憶が書き換えられていた。そしてカイルは気づいた。

カイルの中で謎が解けた。

カイルはひろきに話し始めた。

「ひろき、お前に渡した白水晶。どうやら使ったらその使った分だけの記憶が消えてしまうらしい。俺は最強の敵と戦った時、それは着けていなかった。神様と魔王は着けていた。戦いが終わった後、休戦を求めたって言ったが、実はどちらも休戦を求めていなかった。いつの間にか戦いは終わったんだ。それが今まで謎だったけどやっとわかった。2人とも戦いで水晶を使っていたから、両者が戦っていたことを忘れたんだ。だから何も言わずに戦いは終わったんだ。しかし、時が経ち、悪魔族は何かを壊すという快感を知ってしまい、

それで攻撃するようになり、それを天使族が止めるという世界体制が整ったんだ。」
「そうだったのか。ところで俺の着けている水晶ってもしかして。」
「そう神様のだ。そしてもう1つは魔王のだ。そして、夏子が持っているものは神様がもしもの時の為と俺に作ってくれた物。魔王も同じように俺に作ってくれた。それは今俺が持っている。そしてそれが2つとも半分なんだ。だから、夏子の水晶を使えばもう1つ水晶ができるんだ。」
「作ってどうするんですか。って、ひろしっ!!そうだ、!ひろしだ。」
ひろきはこのとき、ひろしの存在を思い出した。
「ど、どうした?」
「あっ、いえ。なんでもありません。続けてください。」
「そうか。続けるぞ。実はもう1人、お前の世界から連れてこようと思ってな。だから、もう1つ必要なんだ。」
「えっ!それじゃあ。そいつはどっちの族に入るんですか。」
「それは分からない。なんせ両者の性質を持った水晶だから。持った本人の考え次第だ。」
「それで、夏子ちゃんに水晶を返してほしいと。」
「そうだ。」
「ところで、水晶は魔法が使える人が持っているけど、使えない人が持ったらどうなるんですか。」
「それは何の変哲もない水晶になる。魔法が使える奴だけ水晶の効力が使えるんだ。だから夏子は魔法が使えるということだ。」
そう言った後、カイルは夏子に交渉を始めた。

「ひろき達がいるんだから大丈夫だって。みんな守ってくれるよ。」
「なんだか分からないけどそれでも怖いの。魔法が怖いの。魔法は全てを破壊し、悲しみを与えるだけのものだって、村のみんな言ってたんだもん。私はそんな魔法使いたくないの。そして、敵が襲っ

てきたらって考えると、怖くてたまらないの。魔法は使っちゃ駄目って小さい頃から言われてるし、守る手段がないから…。だからこれで守ってほしいの。」

覚えている箇所と忘れている箇所が入り混じっている。すると、そんな夏子にひろきが話しかけた。

「魔法は確かに怖い。使い方1つで1つの国がなくなることだってある。たくさんの人が死んでしまう事だってある。だけど魔法はそれだけじゃない。さっき夏子ちゃんがドラメッドに使ったのだって魔法なんだよ。魔法は仲間を癒す事だってできるんだ。それに、この村を襲って来た敵を魔法で倒してごらんよ。確かに敵は消滅してしまう。だけど、それによって夏子ちゃんの大切な村人全員の命を守ることができるんだよ。魔法は悲しみだけ与えるものじゃない。笑顔だって与えてくれるんだ。」

ひろきの言葉に夏子は考え始めた。

「それに、大丈夫だよ。敵は倒しちゃって。この世界が争いが無い平和な世界になった時、俺が…みんなを生き返らせるから…。」

「えっ!?できるの?」

「ああ。」

その一言で夏子は首飾りを持った。

「わかった。私、魔法でみんなを守る。みんなを幸せにしたい。」

そう言って首飾りを外そうとした。しかし、ひろきが止めた。それをはずす前にこの森を元に戻したほうがいいと言ったのだ。それに夏子は答え、水晶の力で森を元に戻したのだった。

森を直した後、夏子は水晶をカイルに渡した。受け取ったカイルはすぐにどこかに行ってしまった。ひろき達も帰ることにした。みんなの顔には笑顔が溢れていた。

こうして、夏子が仲間になったのだった。

ひろき達の人形は夏子の家に飾られることになった。

第７２話　ひろきは勉強少年（前書き）

カービィのマンガ（デデププ）で同じような話しがあります。

第７２話　ひろきは勉強少年

夏子はあれから1週間してフォック村に訪れた。村に入ると、フォックと出会い一緒にひろきの家に行くことになった。

ひろきの家に着くとやたらシーンとしていた。フォックが様子を見に2階に行くと、なんとひろきはそこで勉強していた。

2人は驚いた。勉強が嫌いなひろきが勉強するはずないからである。一方で夏子は関心していた。とんだ勘違いだ。

フォックはひろきに夏子が来たことを告げた。しかし「勉強中だから後で。」と言って机に齧(かじ)りついていた。フォックはそれを聞いて変だとは感じたが、何か考えがあるのだろうと思い、他の奴等の家に行った。

しばらくすると、村に敵が現れた。すかさずフォック達は戦いをすることに。

そこには夏子も一緒に戦うということを言ってくれた。しかし、ひろきの姿はそこにはなかった。フォックは慌ててひろきを呼びに行った。しかし、返事はさっきと同じ。だが、フォックはそんなひろきを無理やり外に出した。

ひろきは渋々剣を取り出した。すると、敵は攻撃をして来た。その時、ひろきは何かぶつぶつと言い始めた。そして、その攻撃を避けたのだった。そして、言い放った。

「お前の攻撃は時速６０ｋｍで動いている。それとお前の筋肉量を合わせた値が……。」

科学的に分析していた。すると、ひろきはフォックに分析したことを伝え、どれくらいの力で攻撃すれば倒せるかを教えた。そして、攻撃をしてみると本当に敵を倒すことができたのだった。

ひろきはまた家に帰ろうとした。その時、ひろきの頭に何か刺さっているのを夏子が発見した。そして、それを取ってみると、ひろきは元の勉強嫌いなひろきに戻ったのだった。どうやら頭に刺さっ

ていた物が脳を刺激し、ひろきを勉強少年にしてしまったようだ。
正気に戻ったひろきは夏子の存在に気づいた。すると、ひろきは歓迎パーティをしようと言い出して準備を始めた。他の人達も無理やり呼び出し、歓迎パーティは始まったのだった。こうして夏子はみんなとの親交を深めたのだった。

第７３話　ひろきの激痛

ある日、夏子はフォック村に来ていた。夏子もひろき達と一緒に修行をして強くなりたいらしい。その為、フォック村に来たという。ひろきは快くそれにオッケーをし、修行をすることになった。しかも、今日はフォック達は出かけていて、村にはひろきだけしかいなかったので、つきっきりで夏子の修行を手伝うことが出来たのだった。

夏子の魔法はこの間の水晶の力と違い、初歩的な魔法しか出せなかった。１７年間魔法を使っていなかったから仕方がない。しかし、それでも夏子の魔法は的に見事命中させていた。命中率はタケルと同じ位の実力があったのだった。

修行は順調に進んでいた。しかし、ひろきの腕が急に痛みだした。痛みは感じないはずなのに痛いなんておかしいと考え、神様に相談してみることにした。しかし、神様にもその原因は分からなかった。仕方なくひろきは夏子に連れられ、病院に行くことになった。

検査の結果は『修行や戦いをやりすぎで疲れが腕に溜まり、炎症を起こした。』という。そして、治るまでは戦ってはいけないと言われたのだった。治るまで一ヶ月必要らしい。ひろきは仕方なく戦わないことを決意した。

村に戻ったひろき達はしょんぼりしていた。そこに夏子はもう帰ると行って、ひろきを気遣ったのだった。

夏子が帰ろうとすると、目の前に敵が出現した。敵は地球外生命体みたいな奴で胸に青色の水晶体が体に埋め込まれていた。夏子の声を聞き、ひろきが飛び出すと敵が夏子に攻撃をしようとしていた。ひろきはすかさず飛び出し、敵の攻撃から夏子を守った。しかし、激痛がひろきを襲い、ひろきは戦える状態ではなかった。すると、夏子がひろきの前に立ち、自分が戦うと言ってきた。

夏子はなんとか避けたり、攻撃したりしていた。しかし、敵は強

く、夏子の攻撃はほとんど食らっていなかった。しかし、ぼろぼろになっても夏子は戦い続けたのだった。

ひろきはその様子を見ていた。気持ちは戦いたいのに、体が邪魔して戦うことができないことにいらだちを抱えていた。

そんな中、ひろきは敵の動きを見ていた。すると、敵が攻撃をする時に胸の水晶体が光ることに気づいた。そして、そこが敵のエネルギー源だと気づき、夏子にそこを攻撃するように言った。すると、敵は速いスピードで動き、狙いを定められないようにした。夏子は必死で魔法を放ったがどれも当たらなかった。すると、ひろきは夏子に「さっきの修行を思い出せ。」と言った。それを聞いた夏子は集中し、相手の動きを見続けた。そして、魔法を放つと水晶体に見事当てることができたのだった。これにより敵は消滅したのだった。

夏子はこの時、初めて魔法で誰かを守ることができたのだった。ひろきの腕はなおも痛みを訴えていた。

フォック達にもひろきのことを話した。すると「俺らが守ってやる。」と言ってひろきを安心させたのだった。

第７４話　小さい島での出来事

ひろきがこの世界に来て、一年が経とうとしていた。そんなある日、ひろきは『銀』の水晶を使って空の散歩をしていた。すると、フォック村より小さい島に子供の姿があるのをひろきは発見した。そしてひろきは、その島に降りてみることにした。

ひろきが島に着くと、たくさんの小学生くらいの子供達がひろきの事を物陰から見ていた。しばらくすると、木の棒を持った子供がひろきに近づいてきた。すると、ひろき目掛けて攻撃してきた。とっさに避けるひろき。そして、棒を掴んだ。そして、なんで攻撃してきたのか聞いてみた。すると、敵が襲って来たと思い攻撃してきたのだと言ってきた。

ひろきは、なんとか誤解であることを理解させ、子供達を安心させたのだった。そして、子供達は心を打ち明けてくれるようになった。しかし、ひろきはあることに気付いた。なんとここにいるのは子供達の姿だけで、大人の姿が何処にもなかったのだ。

ひろきはなぜ、親がいないのか聞いてみた。すると、子供達は親は戦いで死んでしまっていて、子供だけしか残っていないのと言ってきた。その為、食事や洗濯などは子供達がやっていたのだ。

ひろきは感心して子供達を見ていた。すると、子供達の体が細いことを発見した。見た感じ、食べ物に困っているようだ。

それを見かねたひろきは、一端村に戻った。そして、『食べ物がなる木』の枝を切り、子供達がいる島に戻ったのだ。ひろきは木を子供達に分け与えようとしたのだ。

木を持っていって説明をすると子供達は大喜びをした。しかし、先程攻撃をしてきた奴はひろきに近付き「木は受け取れない。」と言ったのだ。

話を聞くとこんな物を貰ってもお礼ができないし、こんな木をすぐに渡されたら、今まで頑張って育ててきた野菜だとかが意味がな

くなると言ったのだ。それもそうである。子供達の努力が意味の無いものになってしまう。ひろきは反省し、その木を持ち帰ろうとすると、いらないと主張した奴が引き止めた。そして「別に持って帰らなくてもいい。」と言ったのだった。
先程あんな事を言ったが、心やの中ではこの木が欲しかったのだった。こう言われたので、ひろきは木を植えたのだった。
ひろきが木を植えているとさっきの奴が近付いて来た。先程から出てないが名前は『ダイキ』という。
ダイキは突然、ひろきに「強くなるにはどうしたらいい。」と聞いてきた。とりあえずひろきはダイキの話を聞くことにした。

ダイキは自分が中心となってみんなを仕切って来ているけど、みんなを守る力が足りなくて、この間来た敵にも負けてしまったという。その為、食料が不足していたのだ。だから強くなりたいらしい。その為、ひろきに頼んだのだ。
そう話していると、他の子供達が集まってきた。そして、ひろきの剣を見せてほしいと言ってきた。ひろきは剣を取り出しみんなに見せた。すると、今度は魔法が見たいと言い出したのでひろきは手に魔法球を出した。ダイキはひろきの剣やら魔法やらを強い眼差しで見ていた。この時、ひろきの体は順調に回復していて、簡単な修行なら出来る位になっていた。
終わった後、みんなは剣を持ちたいと言ってきた。ひろきは危なくないように鞘ごと子供達に渡したのだった。
次々に子供達の手へ渡って行く。そして、ダイキの手元まで剣が回ってきた。そして、ダイキが剣を持つと、電流がダイキの手と剣の間で流れて一瞬光り、剣を持つ手を離してしまった。その様子を見たひろきは、すぐダイキの所へ駆け寄って無事かどうか確かめた。
実はひろきの剣には魔法がかかっていて、本人以外の魔法を使える奴が剣を持つと電流が流れる仕組みになっていたのだ。つまり、ダイキは魔法が使えるのだ。

ひろきはその事をダイキに伝えると、他の子供達はダイキから少し距離をおいた。どうやら怖かったようだ。ひろきはその様子を見ると「魔法が使えることは悪い事じゃない。」と言って、子供達に警戒するのを止めるように言った。

ダイキは自分がどうなっているのか、訳が分からなくなっていた。ダイキは今まで魔法を使った事もないし、使いたいとは思っていても使えずにいたからだ。ひろきはそんなダイキの側に行き「魔法を使いたいか。」と聞いてみた。

ダイキは頷いた。すると、ひろきはダイキを誰もいない所に連れていき、魔法の使い方、出し方などを教え始めたのだ。しかし、練習してもダイキからは魔法が出なかった。ダイキは次第にやる気がなくなって、とうとう座りこんでしまった。その様子を見てひろきはダイキに「強くなりたくないのか。」と聞いた。するとダイキは「強くなりたい。」と言って、もう一度修行し始めた。

突然子供達が作った村の方で爆発音が聞こえてきた。ひろきとダイキはすかさずその場所に向かった。

村に着くと、そこには破壊された家と怪我をした子供達。そして、敵がひろき達の目の中に飛込んできた。すると、ダイキは「この間来た敵だ。」と言った。どうやら、また食料を盗みに来たみたいだ。ダイキはすかさず敵の前に行き勝負を挑んだ。しかし、すぐに吹き飛ばされてしまった。そして、敵はひろきの存在に気づいた。すると、敵はひろきに向かって攻撃してきた。

ひろきは敵の攻撃を受け止め、攻撃を繰り出した。そして、2人の攻防が始まった。しかし、ひろきの方が上で敵を追い詰めた。すると、敵はひろきの隙を見つけると、子供達がいる方に魔法放ったのだった。

ひろきはすかさず子供達の前に立ち、魔法から子供達を守った。すると、敵はその隙にひろきに突っ込み、ひろきの動きを塞いだ。

ひろきは身動きがとれずに捕まっていた。敵の体はひろきの2倍

位あり、両手でひろきを捕まえていたので動けなかったのだ。その状態の中で敵は魔法を放ったのだった。勿論ひろきがいるので魔法はひろきに諸に食らったのだった。

敵はさらに攻撃を続けた。ひろきはボロボロになっていた。ダイキはその様子をずっと見ていた。すると、突然ダイキは再度敵の前に立った。そして、同じように吹き飛ばされた。しかし、ダイキは立ち上がり、父親が残したという短剣を構えた。そして、今までの怒りを短剣に籠めると、短剣が光り始めた。そして、短剣を敵目掛けて振り下ろした。すると、剣の先から魔法が出て、敵に向かって飛んでいった。敵は突然の攻撃に驚き、思わず両手でガードしてしまった。

攻撃は敵に当たったが威力は強くなく、敵にはほとんど効いていなかった。そして、敵はダイキに向かって攻撃しようとすると、目の前にひろきの姿が現れた。ひろきはダイキの魔法のおかげで、敵の手の中から出ることに成功したのだった。そしてひろきは、敵目掛けて魔法を放ち、敵を退治したのだった。

敵を倒し終わるとひろきはダイキの側に行って「助かったよ。ありがとう。出せたじゃん魔法。よかったな。」といって祝福をしたのだった。

そしてひろきは帰ることにした。ダイキに「一緒に来るか。」と誘ってみると、ダイキは「みんなを守らなきゃいけない。」と言って断った。

そしてひろきはダイキを置いてフォック村に帰っていった。

第７４話　小さい島での出来事（後書き）

全員フォック村に連れてくるという選択肢はなかったのか

第７５話　初めての花火大会

ひろきの体はほとんど治っていた。しかし、安全を考慮し、極力戦いはしないようにするつもりだったが、幸いにも敵が現れなかった。

そんな生活の為、ひろきは物足りなさを感じていた。そんな時、ひろきは花火が見たくなってきた。その為、フォックに花火はどこでやっているか聞いてみると、フォックは花火の存在を知らなかった。

仕方がないので他の奴らに聞いてみると、やはりみんな知らない。どうやらこの世界には花火というものが存在しないらしい。

そんな中で、ひろきは花火をどうにかみんなに見せてやりたいということで、自ら花火を作り始めたのだった。

ひろきは花火を作り続けた。神様の力を借りているのですぐに出来上がる。（ひろきが作っているのは打ち上げ花火）さすがに凄い能力である。そして、とうとう完成することができたのだった。およそ一万発。ひろきがすべて作ったのだった。

打ち上げ当日、ひろきは発射台をフォック村の近くにある小島に設置した。そして、その夜、打ち上げを開始したのだった。しかし、フォックはその日に村長会議というものがあるらしく、村で花火を見ることはできなかった。

花火はいろんな所から見ることができた。村にはいろんな奴が集まってきていた。

花火を打ち上げている時、あのドラ・ナターシャがフォック村の上空を『空飛ぶ絨毯』で通っていた。ナターシャも花火には興味を示していた。そして、ゆっくり見ようとフォック村に降り立った。さらに、近くにいた犬次郎と会話をしたのだった。しかし、犬次郎はナターシャの名前を聞いたことはあるが姿を見たことがないので気づかない。ナターシャもまた、犬次郎がひろきの仲間であることを知らない為、お互いに知ることはなかった。

そうしているうちに、またナターシャの携帯に緊急出動命令が来た。ナターシャはすかさず絨毯に乗り、現場に向かおうとした。そして「いいもん見せてもらったな。」と呟くと、犬次郎も「そうでござるな。さすがひろき殿である。」と言った。その言葉にナターシャは驚いた。ひろきの名が出たからだ。

すると、ナターシャはひろきはどこにいるのかを犬次郎に聞いた。そして、犬次郎は小島にいることを教えた。すると、ナターシャはひろきのいる小島に向かったのだった。丁度その時、ひろきは最後の一発を打ち上げていた。それと同時にナターシャは小島に着き、ひろきに話しかけようとしていた。その時、最後の花火を打ち上げた。すると、その衝撃で2人とも吹き飛ばされてしまったのだった。

ドラ・ナターシャは絨毯をうまく操作して何とか持ちこたえた。そして、ひろきを探し始めた。しかし、どこにも見当たらず、時間も押していた為、ナターシャは諦めて現場に行ってしまった。ひろきはこの時、海の中にいた。最後の花火は奇麗に夜空を飾った。

犬次郎はひろきに誰かと会ったか聞いてきた。しかし、ひろきは会ってないという。犬次郎はひろきのことを探していた奴がいると言った。ひろきはそれを聞き『ドラ・ナターシャ』だと感づいた。そして、ひろきは悔しがったのだった。

第７５話　初めての花火大会（後書き）

季節物の話なんかをいれたくて

第７６話　過酷な大運動会

今日は毎年恒例の運動会。ひろき達は競技をする為『不思議の村』に行くことになった。

不思議の村に行くと、そこには過酷な景色が広がっていた。なんと運動会で使う道具が爆弾やらトゲボールなどであったのだ。

ひろき達は事情を聞く為、村長の所に行ってみた。すると、そこには『イナバ』と言う兎と、『アリス』と言う人間の女の子がいたのだ。不思議の村という場所はあらゆる動物が人間と同じように生活している所であり、まさに不思議な村なのだ。人間もある程度いるがそれでも動物の方が多かった。村長の所にいたのはその中の２人だった。

この２人は探偵をしていて、今までたくさんの事件を解決してきたのだ。その為、今回の運動会の事も解決するために調査をしているところだった。

そんな２人は、訪ねて来たひろき達を見て感激していた。ひろきの噂が不思議の村まできていたのだった。すると、イナバは何故このような事態になってしまったのかという調査の結果を話し始めた。どういう訳だか、朝起きたらこうなったらしい。真夜中に摩り替えたらしいのだ。

村長は運動会をやめようと考えていた。しかし、様々な所から来ている人がいる為、結局やることになった。

この運動会は地区予選から始まり国体へと繋がる大会で、今日やっているのはその地方大会であり、中部地方の代表者が集まっていた。（ちなみに第１５話での運動会は地区予選の時のでした）。この運動会は毎年やっている為、昨年出れなかったひろきも今年勝ち進み、みごと地方大会にでることが出来たのだった。

運動会は幕を開けた。

みんなは痛みなどを耐えながら競技をやっていた。しかし、怪我

人は出るなど大変な騒ぎになったりもしていた。イナバとひろきは競技をしながら、犯人を見つけようとしていた。もう逃げているかもしれないが。

2人は長距離をやっていた。そして、走っていくとフォック達が給水所にいた。なぜかというと、フォック達は大会の役員の仕事をしていたのだ。犬次郎は用事があってこれなかったらしいが、用事が終わり来ることができたらしい。

水は安全性を考慮し『青』水晶から入れることにした。しかも選手が来てから入れるので安全な水を提供していた。

フォックは2人が来ると、無作為に紙コップを取り出し水を入れ、そして、それを犬次郎が2人に差し出した。そして、ひろき達はそれを飲んだ。すると、ひろきは突然苦しみだした。そして、ひろき達はそのまま倒れて病院へ運ばれた。しかし、イナバの方は何も問題は起きなかった。

ひろきが去った後、現場検証が始まった。ここで怪しいのは紛れもなくフォックと犬次郎であった。しかし、犬次郎は水晶を持っていたし、水を入れた紙コップを差し出しただけであり、怪しい様子は見られなかった。かと言ってフォックを疑うと、フォックは俺じゃないと供述。事件は謎めいたままだった。

ひろきの検査が終わってイナバ達に報告された。倒れた原因は毒によるもので、体に急激なダメージを与えるものだった。命に別状はないらしい。しかし、一般人だったらこれを飲まされた場合は死んでいるらしいことから、この事件は殺人未遂事件として調べられることになった。

ここで話を整理してみよう。まず、この運動会はおかしくなっていて、ひろきとイナバが長距離の競技をしながら調査をしていた。その途中の給水所で犬次郎が『青』水晶を持っていて呪文を唱えた。

そして、出た水をフォックが無作為に選んだ紙コップで汲み、それを犬次郎がひろきとイナバに渡したところ、ひろきだけ苦しみ始めた。だが、イナバを含め他の競技者にはそのような症状は表れていなかった。

そして調べた結果、ひろきの飲んだ水から毒物が検出されたのだった。いったいどうやってひろきのだけ毒を入れられたのだろう。謎は深まっていった。

イナバが悩んでいた。すると、そこにアリスが差し入れのジュースを入れてくれて、イナバに渡そうとしていた。その時、イナバはアリスの紙コップの持ち方に目がいった。するとその時、イナバはトリックを発見したのだった。

イナバの見解はこうである。紙コップに水を入れるまでその水に毒は入っていなかった。毒が混入したのは渡す時で、毒は飲み淵についていたのだった。イナバの記憶を辿ると、犬次郎が2人に水を渡した時、イナバの方は側面を持っていた。しかし、ひろきの方は飲み淵の部分を持っていたのだ。指先に毒を付けておけば飲み淵に毒が付き、飲む時に水と一緒に体の中に入るということだ。つまり犯人は紙コップを渡した犬次郎だった。

みんなが一斉に犬次郎を見た。すると「よく見破ったな。」と言って正体を現した。犬次郎は偽者だった。しかもそいつが道具を摩り替えた奴だった。

敵はみんなに攻撃してきた。フォック達は魔法を放ちながらかわし敵に魔法を当てた。しかし、魔法は効かずに敵はぴんぴんしていた。その時、イナバは敵の様子を見ていた。すると「フォックさん。『顎』を狙ってください。敵の弱点です。」と言ってきた。フォック達はすかさず顎に向かって集中攻撃をした。これにより敵は消滅してしまった。

敵を倒した後、フォックはイナバになんで弱点が分かったのか聞

いた。イナバの話によると、相手の動きを見てると不思議と弱点が分かるらしい。そして、なんでそんなことができるのか聞くと、ひろきと一緒に戦いたくて、どうにか力になれないかと考えた時、得意の推理力で敵の弱点を教えてあげられれば力になるのではと考えて、弱点を見抜く練習をしたらしい。

それを聞いたフォックは「一緒に戦おうぜ。」的なことを言った。その言葉を聞いて、イナバは泣いてしまった。よほどうれしかったのだ。こうして、運動会は幕を閉じた。そして、新しくイナバが仲間になった。フォック達の間では…。

第７６話　過酷な大運動会（後書き）

イナバ君とアリス。この２人は９５年から９７年まで『天才テレビくん』という番組の中でやっていた『アリス探偵局』からのキャラです。

第７７話　夏に出る天敵

あの運動会から1週間が経ち、ひろきは元気を取り戻した。結果的にひろきは地方予選落ちとなってしまい、また来年になってしまった。イナバの事はまだひろきに話していなかった。イナバも不思議の村で暮らすことになった為、仲間になったことに気づかなかったのだ。

ひろきは家にいた。すると、あの不快な音と共にアイツがやって来た。そいつは人の体に乗り血を吸う。そう『蚊』だ。

蚊はひろきの体を狙っていた。しかし、ひろきはそれに気づき、退治した。何よりも早く反応していた。ひろきは蚊が嫌いだったのだ。

なぜ嫌いなのかというと、あのかゆみが嫌いらしい。しかし、この世界では痛みとか感じないから、刺されても何ともないが、どうやら反射的に叩いてしまうらしい。そうしてしまう自分にもいら立ちを立てていた。そうした理由からひろきは夏があんまり好きでなかった。ちょうどこの時期にどこからか飛んでくるのだ。

そんなある日、フォック村に敵が現れた。それは巨大な蚊のような姿をしていた。そんな敵をひろきとフォックが相手をしていた。名前は『カカ』という。

敵はすばしっこく、なかなか攻撃に当たらない。そうこうしているうちに、敵はひろきの背後に回ってきた。そして、ひろきの背中を刺して血を吸い込みだした。しかし、いつもの蚊とは違いデカさが半端ない。ひろきの体の血は半分くらい吸い込まれてしまった。それによりひろきは貧血になってしまい、ふらふらで座り込んでしまった。（普通の人間なら血を半分も採られたら死にます。）

カカはフォックの方に向って来た。しかし、先ほどより動きが遅

い。どうやら血を吸い過ぎて体が重くなってしなったらしい。フォックはそんなカカに魔法を放ち、見事倒すことができた。カカも蚊同様、脆かった。カカを倒した時にはひろきの血が溢れるよ…（書いてて気分悪くなったので書きません。とりあえず子供に見せられない状態になりました。）

ひろきはすぐ病院に運ばれ、輸血してもらい一命は取り止めた。これによりひろきは夏がさらに嫌いになってしまった。

第７７話　夏に出る天敵（後書き）

私は夏は好きです。しかし、蚊は嫌いです。

第７８話　操られた仲間達（前書き）

また、操られたのかよっ！って言われそうだけど。
この仲間が敵になるっていうシチュエーション。大好きなんです。

第７８話　操られた仲間達

ある日、ひろきは散歩から帰ってきた。すると、村の様子が変わっていた。ひろきが様子を確認していると、どこからか魔法が飛んで来た。ひろきはすかさず避けて、飛んできた方を見た。すると、なんとそこにはフォックの姿があったのだ。

ひろきは不審に思いフォックに近づいた。すると、フォックはいきなりひろきに攻撃してきた。ひろきはフォックの顔をよく見た。すると、目つきが悪魔族みたいになっていた。

なんとか攻撃をかわしながら、フォックの様子を伺っていると、家の裏から犬次郎が姿を現した。ひろきはすぐ犬次郎の側に行き、フォックを戻そう的なことを言うと、犬次郎は突然攻撃してきた。犬次郎も操られていたのだった。

ひろきは2人の攻撃をかわしながら、操っている奴を探していた。と、その時、ブーメランがひろきを直撃した。そのブーメランはまさしくタケルのブーメランだった。タケルも操られていた。その後も、次々に仲間が登場してはひろきに攻撃してくる。みんな操られていたのだった。ドラズも全員操られていた。

その時、夏子が歩いてきた。ひろきは、夏子なら無事と考え夏子の側に行った。そして、夏子の顔を見るといつも通りの顔だった。ひろきは安心して夏子の前に立って、夏子を守ろうとしていた。その時、夏子が抱きついた。ひろきは驚いたがよく見ると、腹の所に短剣が刺さっていた。どうやら騙されたらしい。夏子も操られていたのだった。

夏子はひろきを刺した後、ひろきに魔法で攻撃した。威力は無いが地味に効く魔法になんとか耐えていた。しかし、その時背後では、フォック達が合体魔法を作り出していた。そして、そのままひろき

に放ったのだった。
　ひろきは吹き飛ばされた。そして、地面に叩きつけられた。ひろきは莫大なダメージを受けてしまい、意識が朦朧としてきた。フォック達はゆっくりひろきに近付いて来ていた。
　絶対絶命だ。
もう、仲間は残っていないのか…。フォック達はさらに合体魔法を準備し始めた。するとその時、どこからか魔法球が飛んできた。そしてフォックに当たり、合体魔法は失敗していた。

　魔法を放った奴はひろきに近寄り、大丈夫かどうか聞いてきた。ひろきは誰だか分からない状態だった。しばらくすると、そいつが誰なのか分かり始めた。それはチョックとバズだった。2人は操られていなかった。

2人は故郷から帰ってきたところで、帰ってきてひろきがピンチだったからこうして助けたという。運がよかった。そして、2人はフォック達に攻撃していった。倒さなくても気絶まですれば襲ってくることはないからだ。こうして2人はどんどん攻撃していった。

　丁度その頃、魔王の城ではカイルが訪れていた。カイルがモニター室を覗くと画面を見ながらにたにた笑う奴がいた。『ヲタ』という。そいつがフォック達を操っていたのだった。
　カイルはヲタに話しかけた。すると、ヲタは驚きカイルの方を見た。すると「なんか用。」的なことを言って再び画面に目を向けた。カイルが画面を見ると、そこで始めてヲタがひろきの仲間を操っていることに気づいた。すると、カイルはヲタに向かって「男だったら正々堂々勝負しろ。」とか言って、剣を取り出した。
しかしヲタは「知っているんだぞ。お前は戦えないってこと。」などと言い、カイルを挑発した。すると、カイルはヲタが持っているコントローラーから出てるコードを切った。すると、画面はすべて

消え、フォック達を操ることはできなくなってしまった。
それに怒ったヲタはカイルに襲い掛かってきた。

カイルはさっき切ったコンセントに差し込んであるコードの先をヲタに当てた。するとヲタは感電してしまった。そして、そのまま気絶した。カイルはその様子を見届けると、モニター室から出ずそこらじゅうの機械を壊し始めた。これは戦いではなく、『遊び』としてやっている為、攻撃はぜんぜんできたのだった。
そして、大体壊し終えると、すぐさま魔王の城を後にした。

その頃、フォック村では急にみんなの動きが止まったので動揺していた。しばらくすると、フォック達はいつも通り話しかけてきた。どうやら、操りは解けたみたいだった。３人はほっとして倒れこんだ。

フォック達はチョックとバズの存在に気づいた。そして、故郷のことをあれこれ聞いてきた。チョックの故郷は復旧していて、花や木がいっぱいある所になっていたという。チョックはうれしそうにそれを話していた。

そんな中、バズが話しかけた。なんでも、ここから１０００ｋｍ行った所で、ひろきが探している水晶に関する情報が発見されたらしい。だからそれを確認する為、またチョックと一緒に行こうと考えているのだった。ひろきは「お願いします。」と言って、２人に託したのだった。

その夜、ひろきの家でパーティーが開かれた。やたらパーティー好きである。そして、新しく加わった仲間を紹介したり、歌を歌ったりと楽しい夜になった。

次の日、２人は旅立って行った。ひろき達はそれを見送ったのでした。

第７９話　月見へのご招待（前書き）

また、季節もの

第７９話　月見へのご招待

今日は十五夜である。この世界にも元の地球みたいに月が存在していた。しかも、地球とこの世界の星は大きさが違うのと、公転周期が遅いだけで、自然はほとんど地球と同じだった。
ひろき達は不思議の村の月見に招待されたので、さっそく不思議の村に行くことにした。
村に着くと、イナバが出迎えてくれた。そして、まだ時間があるということで、イナバはひろき達を連れて村を案内していった。
案内中、イナバはひろきをちらちらと見ていた。仲間にしてほしいことを言いたがっているのだ。しかし、案内中は言うことはできなかった。そうこうしているうちに日が暮れて、今回お邪魔する家を訪れた。
その家は『ヒカリさん』という猫が住んでいる所だ。その家は大きくて、大人数で何かをするのに丁度よかったのだ。それとは別にここに来た理由があったのだ。実はイナバはヒカリさんの事が好きだったのだ。
月見は始まった。今日は雲一つなかったので月は綺麗に見えていた。そんな月をひろきはずっと見ていた。そんなひろきにイナバは話しかけた。そして、とうとう仲間にしてほしいことを告げたのだった。その質問にひろきは少し考えてからイナバに「お前、ヒカリさんの事が好きみたいだから、ヒカリさんに告白したら仲間にしてやるよ。」と言ってみた。すると、イナバは顔を赤らめながらヒカリさんの所に向かったのだった。
フォックはひろきにイナバを仲間にするのか聞いてみた。すると、ひろきは「するよ。」と返したのだった。どうやら、もう仲間になることが決まっているのにひろきがふざけて告白するように言っただけだったのだ。

イナバはヒカリさんに近づくと、噛みながらにヒカリさんに告白したのだった。ヒカリさんはしばらく考えた後「私でよければ、お願いいたします。」と言ってくれたのだった。こうしてイナバは彼女もでき、ひろきの仲間になることができたという。２つの喜びを味わったのだった。

第８０話　ヒカリさんの熱

ある日、イナバはフォック村にやって来た。話を聞くとヒカリさんが高い熱により倒れてしまったという。原因はわからず医者も手をつけられない状態だった。そして、前に採ってきた植物も効かなかった。　丁度その頃、フォックも同じような症状が出て、ベットで寝ているところだった。ひろき達はあの魔法が使える医者がいるあの病院に行った。確か名前は『ドラ教授』という人だった。

教授に見せたところ、この症状はウイルスの仕業だと言った。このウイルスは滅多に人に危害を加えない為、医者の中でもこのウイルスによる症状を知らない人がいるらしい。その為、医療現場や学校でも教えることは無かったのだ。だから不思議の村やフォック村の医者は知らなかったのだ。

この症状は時間が経てば治るらしい。それを聞いて安心するひろき達。しかし、教授がウイルスに関する事を話した時、ひろきは何かに引っ掛かった。ひろきはこのウイルスは悪魔族の仕業と考えたのだ。そう考えているうちにドラメッドが夏子を連れて病院を訪れた。夏子も同じ症状だった。

ウイルスの感染は広い地域に拡大している。夏子がいる村（かぐれ村）はフォック村から北に行った所にあり、不思議の村は西に行った所にあるのだ。ウイルスはここまで一斉に違う所で感染することはなく、しかも、伝染病でないので教授も怪しいと思っていた。

ひろき達は感染源を調査することになった。ここでもイナバの推理力が発揮された。どうやらイナバは鼻がよく利くらしい。そして、臭いを辿ったところ、小さな小屋に辿り着いた。

中に入ってみると、そこにはたくさんのビーカーと共にたくさん

のウイルスが存在していた。そして、その近くに巨大な換気扇みたいな機械が置いてあった。

ひろき達はここが感染源だと断定した。ここからウイルスが空気中に漂っていたのだ。

ひろき達が確認していると、奥の方から人影が現れた。そいつはひろき達に気づくと、慌てて小屋の外に出た。しかし、すぐひろきに捕まりそいつは全てを白状した。

こいつは悪魔族を追い出された科学者で、どうにか悪魔族に戻りたかった為、ひろきを倒せば戻してくれると思い、ウイルスを使ってダウンさせようとしたのだった。しかもその為にウイルスに特別の薬を与え、人に感染するように進化させたという。なんて最悪な野郎だ。

こいつはそのまま現行犯逮捕となった。1週間後、フォック達は回復した。ヒカリさんも笑顔を取り戻し、犯人を捕まえることができたイナバに対し「好きになった。」と言ったのだった。

第８０話　ヒカリさんの熱（後書き）

リア獣、爆発しろ！！

第８１話　ひろきの恐怖感

ある日、ひろきが目覚めると、今までに感じたことがない感覚に陥った。そして、ひろきはベッドから降りようとすると、体が非常にだるい状態で起き上がるのもやっとだった。
何かがいつもと違う。ひろきはふらふらして壁に激突した。すると、なんと痛みを感じてしまったのだった。
痛みは感じないはずなのに、痛みを感じてしまう。おかしいと思ったひろきは神様に相談することに。しかし、いくら呼んでも神様は返事をしてくれなかった。神様の身に何かあったのかもしれないと思ったひろきだったが、どうすることもできないのでとりあえず様子を見ることにした。

数分後、イナバがひろきの家に訪れた。ひろきはイナバを家の中に入るように誘って手を持った時、ひろきはその時初めてイナバの毛並みの良さに気づいたのだった。今まで感覚がなくて分からなかったのだ。しかも、不思議の村は冬に向かっている為、兎のイナバは毛が生え変わっていたのだ。（触ってみてぇ。）

ひろきとイナバが話している時、ひろきは敵の気配を感じ取った。すぐに外に出ると、そこには悪魔族の奴が立っていたのだった。
早速ひろきは攻撃しようとした。しかしその時、ひろきの脳裏に『痛みを感じる』ということが思い出させた。これによりひろきは戦うのが怖くなってしまった。ひろきはその場に座り込んだ。イナバは驚いてどうしたのか聞いてきたが、ひろきは恐怖に負けていた。仕方なくイナバはそんなひろきを守る為、１人戦いに行った。しかし、魔法を使えないので倒すことはできなかった。結局、後から来たフォックに助けられた。

イナバはひろきのことをフォックに話した。すると、フォックはひろきを家に連れて行き、話を聞くことにした。ひろきの体は震えが止まらなかった。

ひろきは敵の攻撃が怖いとフォックに打ち明けた。しかし、フォックは「うちらも怖い。だからそれを避けるため修行してんだろ。」と言って、どうにかひろきの恐怖感を取ろうとしていた。しかし、ひろきに治る気配はなかった。

しばらくすると、先ほどの敵に似た奴がフォック村に来た。どうやらさっきの奴の親らしく仇をとりに来たのだった。

フォックとイナバは戦い始めた。しかし、敵は強く2人は吹き飛ばされてしまう。しかし、それでも2人は立ち上がり再度敵に攻撃しに行った。

その様子を見たひろきは

「あいつらは痛みを感じるのに、戦いに行くなんて…、俺はどうしてこう逃げてしまうんだろう。みんなと一緒なのに。情けねぇ。」

と考えていた。すると、ひろきはいきなり敵に向かって走り出した。しかし、すぐ吹き飛ばされた。とても痛い。しかし、ひろきは立ち上がり、敵に向かっていったのだった。そして、魔法をぶっ放し見事敵を倒すことができたのだった。

ひろきが復活したことに2人は喜んだ。ひろきはこうして恐怖を乗り越えたのだった。

次の日、ひろきが目覚めると痛みは感じないようになっていた。しかし、もっと大変なことになっていたのだった。

第８１話　ひろきの恐怖感（後書き）

たしかに、いきなりは怖いよね

第８２話　弱くなったひろき

次の日、痛みは感じなくなっていた。その為、いつも通り修行に向かった。しかし、そこで異変に気づいた。なんと、今度は魔法が使えなくなっていたのだ。しかも、運動能力も元の世界の体と同じようになっていた。しかし、外見は変わらなかった。

みんなはどうしたのか聞いてきたがひろきにも分からない。そんでもって神様との通信も取れない。ひろきが考えるに、神様の身に何かが起こっていることは確かだった。

とりあえず、その体で修行をしてみた。しかし、全然ついていけない。もはやひろきは村人と同じくらいにしか戦えない状態だった。

午後になり、散歩の時間になったがひろきは行かなかった。フォック達に止められたのだった。もし敵と出会ってしまったら勝てないからである。その為、ひろきは家で日向ぼっこをすることにした。すると、その最中に敵がフォック村に来たのだった。やたら敵が来る島だ。

ひろきはフォックに隠れているように言われた。そして、ひろきを除いたメンバーで戦い始めた。しかし敵は強く、フォック達は手こずっていた。

ひろき達が強くなるにつれて、悪魔族の連中も強くなってきていたのだ。そして、とうとうフォック達はぼろぼろになり、立ち上がれない位にまでになってしまった。そして、敵がそんなフォック達に止めを刺そうとした時、ひろきが敵に突っ込んだ。

フォックはすかさずひろきに逃げるように言った。しかし、ひろきは「仲間が傷つけられているのに、黙って見ていられねぇ。」と言って、逃げようとしなかった。そんなひろきを敵は攻撃してきた。ひろきは避けようとしたが、体が動かずに当たってしまった。一

撃の攻撃でひろきは死ぬ寸前まで行ってしまった。そして、止めを刺そうと敵がひろきに近づき拳を振り下ろした。その時、ひろきの体は変化していった。

ひろきは咄嗟に剣でガードした。すると、体の内側から力が溢れ出してきた。ひろきはガードしていた剣で敵を押し返して吹き飛ばした。ひろきは元の強いひろきに戻った。

敵はひろきに向かって来た。しかし、ひろきはそれをかわし、逆にひろきが攻撃をした。敵は吹き飛ばされた。すると、ひろきは合体魔法の準備を始めた。フォック達も何とか魔法力を送りこんだ。そして、合体魔法は完成し敵に向かって放たれたのだった。これにより敵は消滅したのだった。

戦いが終わった後、ひろきの頭の中で誰かがひろきを呼んでいた。ひろきが確認すると、それは神様だった。

神様は今回の弱くなった原因を打ち明けた。話によると、もう1人元の世界から連れてきた奴がいて、そいつを連れてきた時に一時的にひろきに対する魔法が弱まってしまったらしい。その為、痛みを感じたり魔法が使えなくなったりしたのだった。

ひろきは連れてきた奴の事を聞いた。しかし、神様は教えてはくれなかった。ただ1つ教えてくれたのは悪魔族でも、天使族でもないということだけだった。

こうして今回の事件は幕を閉じた。

第８２話　弱くなったひろき（後書き）

魔法使えないと体が丈夫な一般人です

第８３話　フォックの弟（前書き）

微妙にこの話も大切…かな。とりあえず、過去に触れます

第８３話　フォックの弟

ある日の朝、ひろきの家に誰かが訪れた。ひろきが出ると、そこには生意気な子供がいたのだった。

生意気な態度にひろきはキレそうになっていた。名前は『クベリアス』という。すると、しばらくしてフォックがその子供を追ってひろきの家に来た。そして、フォックはひろきに謝り、クベリアスは自分の弟だと言って来た。

ひろきは驚いた。今までフォックの親も見た事がないうえに弟までいたからだ。

フォックの話によると、クベリアスはフォック村とは別の所に住んでいるのだった。ひろきが見た事がないのも無理はない。

突然、クベリアスは話し始めた。

「お兄さんね、昔、戦争があった時ね、あ…。」

いきなりフォックが弟の口を塞いだ。クベリアスの出した話題は１７年前の戦争の事、フォックはその戦争についてなにか秘密を持っているみたいだ。そういえば、ひろきはフォックの過去を１つも知らなかった。

「なんで言っちゃいけないの。」

クベリアスはフォックに質問していた。

「ひろきは大切な仲間だから、逆に言いたくないんだ。気を遣わせたくないんだ。」

「いいじゃん言っちゃえば。大切な仲間なんでしょ。」

「そうたぜ、言っちゃえよ。」

突然、誰かが話しかけて来た。ひろき達が見ると、そこにはカイルの姿かあった。

「夏子ちゃんも言ったんだし、打ち明けちゃうと楽だよ。フォック・

アルガハド。」
ひろきはこの時、初めてフォックの本名を聞いた。

フォックは少し悩んだ後、過去を話し始めた。今まで仲間の誰にも言ってこなかった秘密をとうとう打ち明けた。

「俺は『ゼバル』という村で産まれた。この時、もうすでに父親はいなかった。そして、世界ではあの戦争が始まっていた。俺らの村に被害はまったくなかった。１７年前までは。１７年前、ゼバルの村は戦場になった。村人は逃げた。俺の母親も俺を連れて逃げた。その時、魔王が俺らを攻撃してきた。攻撃は強い突風を出す魔法で俺らは吹き飛ばされてしまった。その時、母親とは別の所まで吹き飛ばされた。そして、それが母親を見た最後だった。吹き飛ばされた俺は、海に落ちて一命を取り留めた。どこだか分からない所に飛ばされた５歳の俺は必死で生きた。自分で食材を集めて料理して必死で生きた。それと同時進行で俺は村を目指して歩き続けた。そして２年後、ようやく見慣れた所に着いた。俺は村に帰れると思った。だけど、目の前にゼバルの村はなかった。跡形もなく消えていた。」
「えっ。消えた。村が。」
「そうだよ。ひろきも見えるだろ、ここ（フォック村）と向こう側の大陸を分けているこの海。」
「！？」
「ここにあったんだよ。俺の村。これを見た時、絶望したよ。残ったのは大陸の先端にあったフォック村だけだったんだ。その時、戦争はもう終わっていた。」

なんとフォック村が島になったのは地震の影響でなかったのだ。

「仕方なく俺はフォック村に向かった。そして村に着くと、ゼバルの住人が少数住んでいた。俺はその人達に驚かれた。そして、母親

の死を告げられた。そして、俺はペリスという人に育てられることになったんだ。そこには一歳になるクベリアスがいたんだ。そして８年後、ペリスと俺は別の場所に住むことになって、俺はフォック村に残った。そして、もう自分の村は消させないということを強く考えた結果、俺はフォック村の村長に立候補したんだ。１５歳から立候補できたからね。その時、俺は名前にフォックを付けたんだ。この村の長になった時の定めだったからね。」

ここまで話の結論からいうとフォックとクベリアスは兄弟ではないのだ。

「カイルさんとは俺が１０歳の時に出会った。フォック村にカイルさんが訪れたんだ。そしていきなり謝ってきた。『自分のせいで村がなくなってしまって、申し訳ない。』と何回も謝罪をした後、『君が生きててくれてよかった。』と言って、俺を抱き締めた。カイルさんは温かかった。」

フォックはゆっくりと話していた。

「それ以来、俺は魔王に対する怒りが強まっていったんだ。魔王のせいでこうなったのだと知らされたから。そうしてその７年後、ひろきと出会ったんだ。」

フォックは話し終わった時、気持ちが楽になっていた。全てをひろきに暴露した。ひろきはフォックに近づき、魔王を必ず倒すことを誓ったのだった。

カイルはそんなフォックに、まだ言ってない事があるだろと言ってきた。それを聞いてフォックは思い出した。夏子の事だ。

フォックはまた話し始めた。そして、夏子とフォックが同じ村に住んでいたことを言ってきた。なんと、フォックが小さい頃に村に子供が産まれた事があり、それを見に行ったという。そして１年後、戦争で消息を絶っていた。みんなは死んだと思っていて、フォックもそう思っていたらしい。だけどそれは間違いであり、この間、夏

子に会った時は驚いたらしい。夏子がその時の子供だったのだ。しかし、夏子自身は忘れていた。なので、昔の話を話そうとした時、夏子の話を聞いて思い出したくないと言っていたのと、せっかく忘れた嫌な記憶を思い出させてしまう可能性がある為、ずっと言えていないのだった。その後、フォックは夏子の本当の名前を言い出した。『ナミラク』というらしい。

明かされた過去。2人にこんな接点があったなんて…。ひろきはさらに驚いたのだった。

ひろきは話を聞き、どうしてもフォックと夏子を守らなければと考えていた。そして一刻も早く魔王を倒して平和を取り戻したいと考えたのだった。

話が終わった後、カイルはフォックの肩を叩いて「よく言ったな。」と言ったのだった。

その後、カイルは帰って行った。そういえば、ひろきはカイルの家を知らなかった。最初に修行した時に使った小屋は借りていると言っていたし、第三十一話の時の修行では、まだ借りた家にいた。あそこが家でいいのだろうか。とりあえず、そう解釈してひろきは家に帰っていった。

クベリアスはその後、2日ばかしフォックの所に住み着いた。ペリスの仕事があり、どうしてもクベリアスの面倒を見ることができない為、フォックの所で預かってほしいという事だったのだ。

この2日間の中でクベリアスは様々なフォックの秘密を暴露していた。ひろき達はそれを笑いながら聞いて楽しんだのだった。

辛い過去があったなんて思わないほどフォックも笑っていたのだった。

第８４話　３人からの挑戦状（前書き）

また挑戦状だよ…というつっこみはなしで

第８４話　３人からの挑戦状

ある日、ひろきの許に挑戦状が届いた。内容を見ると、そこには『３人で来い』と書かれていた。ひろきはフォック、それから犬次郎を誘い戦いに向かった。

指定された場所は洞窟の中だった。ひろき達が入っていくと道が３つに分かれていた。どうやらここで分かれるらしい。そういうことなので、ひろきは真ん中、フォックは右、犬次郎は左とそれぞれ入って行った。

ひろきの道はまっすぐ進んでいた。フォックの道は上に向かって行った。逆に犬次郎は下って行った。道は一本道になっていた。そして、しばらく歩いていくと、大きな空間の所にそれぞれ３人は出たのだった。

そこに入ると、敵が３人の前に出現した。いずれも悪魔族。敵もそれぞれ１人ずつで、戦いは一対一方式だった。

ひろき達は早速取り掛かった。ひろきと犬次郎は剣、刀を抜き敵に向かっていく。フォックは杖を取り出し、魔力を溜めながら敵に向かって走って行った。違う部屋にいるはずなのにほとんど攻撃するタイミングは一緒だった。敵の３人も動き出し、両者の攻撃はぶつかり合った。

互角の勝負をしているひろきは魔法と剣と水晶（探している方）を巧みに使いながら攻めてた。その攻撃をかわしながら敵も攻撃を仕掛けてきていた。すると、一発の魔法球がひろきの足に当たった。それに一瞬気を取られたひろきは、次の敵の攻撃をかわすことができずに吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。敵はそのままひろきの側に行き、首を掴んで壁に押し当てた。

一方フォックは、魔法をうまく使いながら攻めていっていた。そして、敵を壁際に追い込み止めを刺そうとしたその時、敵は姿を消

しフォックの裏に回りこんでいた。フォックは慌てて振り向くがもう遅く、敵の攻撃により吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。その後フォックのひろき同様首を掴まれ、壁を背にして押さえつけられていた。

そして犬次郎は、得意の刀捌きで攻撃を繰り返していた。そして、敵の隙を付き、敵の腕目掛けて刀を振り下ろした。すると、腕は切れず刀を受け止めていた。手にガード板を着けていたのだ。犬次郎は斬れない事に驚いていまい、敵に隙を見せてしまった。すると、敵は犬次郎に剣で切りつけたのだった。犬次郎の腹は斬られ、血が出ていたが立ち上がり、敵と戦い続けた。しかしスピードが出ず、敵に攻撃されてしまった。それにより吹き飛ばされた犬次郎は敵に頭を掴まれ、そしてそのまま壁に顔面から叩きつけられた。

3人は壁際から動けず、ぼろぼろにされていた。すると、敵はそんなひろき達に直で魔法を浴びせたのだった。3人は後ろに押され、壁を破壊しながら後ろに下がっていった。しかもひろきはそのまま真っ直ぐに、フォックは下に、犬次郎は上に向かって押されたため、3人は1つの地点でぶつかり合った。ひろきは2人の状態を確認し、『白』水晶で回復させた。そして、ひろきも回復し敵の所へ向かおうとした時、ひろき達が掘ってきた穴の奥から魔法が飛んできた。敵は最初からこれが狙いだったらしく、ぴたりと息を合わして攻撃していた。

3人の魔法は丁度ひろき達のところでぶつかり合い、大きな1つと魔法となってひろき達を襲った。そして、爆発音と共に洞窟は崩れ落ちた。この時、敵は避難をしていて洞窟の中に閉じ込められることはなかった。

敵はひろき達の死を確信していた。3人は喜び合い笑っていた。すると、瓦礫の中から手が出てきて1人の足を掴んだ。敵が驚き動揺していると、その足を支えにしてひろき達が瓦礫の中から飛び出

した。それに驚いた敵はどうすることもできなかった。すると、ひろきはその飛び出したまま足を持っていた奴に攻撃をした。その様子を見て、唖然としている他の2人にフォックと犬次郎が攻撃をしだした。

敵は何とか冷静さを取り戻し、ひろき達に向かって行った。すると、さっきフォックと戦った奴は犬次郎が相手になり、犬次郎が戦っていた奴はフォックが戦うという風に戦う相手が変更されていた。しかし、ひろきはそのままの敵で戦うことになった。

フォックの敵は剣士専用みたいで、刀や剣の防御は完璧なのに、魔法に対する防御はなっておらず、フォックは楽に倒すことができたのだった。そして、犬次郎の敵も魔法防御だけ完璧で刀に対する防御が甘く、犬次郎も楽に倒すことができたのだった。

残ったひろきは激しい攻防を繰り広げていた。すると、今度はひろきの魔法球が敵の足に直撃した。すると、敵はそんなの気にも止めず攻撃してきた。しかし、さっきの足への魔法が効いたみたいで敵はよろけてしまった。それをみたひろきは敵に向かって攻撃を繰り出し、見事的を倒すことができたのだった。

第８４話　３人からの挑戦状（後書き）

ただ単に、ひろきたちをぼろぼろにしたかった話だと思います。グダグダになっているが…

第８５話　ひろきの子供姿（前書き）

高校生もまだ、子供の分類だよね

第８５話　ひろきの子供姿

ひろきはある日、ドラえもんの所に遊びに行っていた。ドラえもんはその時、道具の整理をしていた。しかし、ひろきが突然訪れた為、急いで片付けて菓子類の準備を始めた。
ドラえもんの家というのは『セワシ』という青年の家だ。
　ドラえもんはジュースを持って来た。すると、セワシが慌ててドラえもんの所に入って来た。そして、自分のジュースを知らないかと聞いてきた。だが、そのジュースはひろきが飲んでいた。
　慌ててセワシはジュースの説明をしだした。話によると、このジュースはセワシが学校の自由研究で作った特別の薬で飲むと体が縮んでしまうらしい。それを聞いた後、ひろきの体は縮んでしまった。ひろきの体は小学生位の体になってしまった。

ドラえもんは『タイムふろしき』で戻そうとしてみたが戻らない。セワシが特別な調合をしたため、戻らなくなったのだ。
仕方なくひろきはそのまま帰る事になった。ドラえもんは責任を感じて一緒について行く事になった。ひろきは神様に姿を変えられたまま小さくなった為、それなりの顔になっていた。
　村に着くとそこには夏子が来ていた。夏子はひろきに気づいた。しかし、それがひろきだと気づかない。その為、頭を撫でたり笑いかけたりしてきた。しかし、ドラえもんが正体を明かした。夏子は驚き、激しく動揺した。そして、冷静さを取り戻しどうするかどうかを一緒に考えてくれた。しかし、ひろきの方を見ると、５歳位の子供が真剣に会議をしてるという観点で見てしまって、夏子は笑ってしまっていた。セワシは時間が経てば戻ると言っていたが、どれ程の時間なのか分からないといっていた。
しばらくしてフォックがやって来た。フォックはひろきを見るやい

なや世話口調になった。さすが義兄としての意識が残っているらしく、子供を見ると世話をしたくなるらしい。それがひろきと分かってからも、その行動は継続していた。しばらくして会議は終わった。結論は『なんとかなる』で終わった。

ひろき達はとりあえず、腹が空いたのでひろきが準備をする為、家を出た。すると、突然敵がひろきを攫(さら)っていってしまった。フォック達が気づいて慌てて外に出たが間に合わず、そのままひろきを連れ何処かに行ってしまった。

第８６話　捕まったひろき

ひろきが捕まってから1日が経過した。フォック達は必死でひろきを探していた。しかし、いくら探してもみつからなかった。

その頃ひろきは、気を失った状態で倉庫に閉じ込められていた。体はまだ子供のままだった。

しばらくすると、ひろきに誰かが近づいてきた。そして、目覚めるように言ったのだった。目覚めたひろきは早くはずすように言った。しかし、そいつは縄をはずさず、ひろきにフォック村の電話番号を聞いてきた。しかし、フォック村には電話というものが無い為、答えることができない。仕方なくひろきは住所だけ言っといた。

どうやらこいつは、この子供がひろきだということを知らないらしい。その為、この子供を使ってひろきをおびき寄せようとしていたのだった。

仕方なくひろきを連れ去った奴（次から敵）は、手紙で『取り戻したければ来い』的な文章をかいて送っていたのだった。数日後、手紙はフォック村に届けられた。フォック達は早速、指定された場所に向かった。

フォック達は倉庫の中に入った。すると、突然魔法バリアがフォック達の周りを張り巡らされた。どうやら敵の作戦に掛かったらしい。フォック達はそこから出ることができなくなってしまった。

敵はそんなフォック達を見て、ひろきがいないことに気づいた。そして、そこで初めて子供がひろきだということに気づいたのだった。

敵はすぐさまひろきの所に向かい、始末してやろうと攻撃を繰り出した。すると、突然ひろきの体は光りだした。そして、小爆発が起こり、その中から元に戻ったひろきの姿が現れたのだった。そして、ひろきはそのまま敵を攻撃し消滅させたのだった。これにより魔法バリアも解けて、フォック達は解放された。そして、ひろきは

フォック達にお礼を言ってみんなで村に帰っていった。

第８６話　捕まったひろき（後書き）

よく、数日も敵もひろきも待ったな…

第87話　ドラメッドとタロットカード

ある日、ひろきは散歩中にドラメッドを発見した。ドラメッドは道端で占い屋をやっていた。すると、ひろきはそんなドラメッドの所に行き、一緒に占いをやりだした。

ドラメッドの占いはタロット占いであり、当たると評判らしく、客足は上々で繁盛していた。そして、しばらくして客足が止むと、ひろきを占ってみようということになりひろきを占うことになった。

占いによると『平凡な一日であるが、苦しいことが待っていることがある』という結果が出た。ひろきは戦いがあることを察知し心構えをしていた。

また客足が増えてきた。そして、普通通り占いをしていると、いきなりカードの中からそのカードに描かれてた物が実体化してしまった。そいつは次々に客を襲った。ひろき達は客の安全を守りながら消す方法を考えていた。そして、やっと客を安全な所まで運ぶことができたのだった。

ドラメッドはカードの配置を確認していた。すると、ドラメッドは見知らぬうちに、魔物召喚の配置にカードを並べてしまったらしい。そして消すには、魔物が入っていたカードを見つけ出し、呪文を言ってもう一度カードに戻すしか方法はなかった。

魔物はひろき達に攻撃をしてきた。魔物は鷹みたいなコンドルのような姿をしていて、羽根を動かし強い風をおくることもできた。

魔物の相手はひろきがすることになった。その隙にドラメッドがカードを変えようとしていた。だが、魔物に気づかれ、ドラメッドは吹き飛ばされた。その後、魔物はカードの前に立ち、ひろき達に突風を浴びせ続けた。

カードの傍に行かせない気だ。『グレー』の水晶があれば簡単に行

けるのに、今日は持ってきていなかった。

仕方なく、真正面から行くことになった。しかし、魔物の突風により前に進めない状態だった。そして、ひろきが魔法で攻撃しようとしても風のせいで魔物に当たらなかった。一方でドラメッドは巨大化することができるが、ここは建物が多く、巨大化すると壊す恐れがあるので巨大化はできない状態だった。

そんな中、ひろきはあることを思いだした。すると、ひろきはドラメッドに自分の体を支えているように言った。その後、ひろきは真上に魔法球を放った。すると、突然その魔法は飛ぶ方向を変えた。操り魔法を使ったのだ。

ひろきは魔法を巧みに操りながら魔法球を魔物の後ろに運んだ。その瞬間、魔物がそれに気づいた。作戦は失敗かと思いきや、ひろきは力を溜め、そして、手で分裂するように指示を出した。すると、魔法球は分裂して魔物に向かってきた。魔物はその攻撃を受け止めようと向きを変え、片方の羽根でひろき達を、そしてもう1つの羽根で魔法を吹き飛ばそうとしていた。その瞬間、ひろきが片方の魔法をフォークボールみたいに下に下げた。

下にいった魔法は、風の影響を受けずに魔物に向かっていった。もう1つの魔法は吹き飛ばされていた。下の魔法は魔物のやや下を通った。失敗かと思いきやその魔法はカードが乗せてある机に当たった。すると、机は吹き飛び魔物の前に来た。すると、突風のおかげでカードがひろき達の所に飛ばされてきた。そして、その中から魔物が入っていたカードを見つけ出し、呪文を唱え、魔物を元に戻すことができたのだった。

魔物を戻した後、ひろきは倒れこんだ。操り魔法を分裂させたからである。1個でも精神を集中させないとできないのに、2個を一緒に操作したからである。占い通り、ひろきは苦しい戦いをしたのだ

った。

第87話　ドラメッドとタロットカード（後書き）

この頃、よく分からない話が多いね

第８８話　都会に行くひろき達

ひろきはある日、みんなに面白そうな所があると言って連れ出した。ひろき達が向かったのは、都会地帯と言われるところだった。

都会地帯とはビルディングが多数建てられている所で、世界各国の物が集められる所だった（東京だと思って下さい）。そんな所にひろき達は向かったのだった。

ひろき達が来たのは都会地帯でも端の方に位置する所だった（羽田空港みたいに突き出ている所）。人はいっぱいいて、フォック達は唖然としていた。

ひろきは元の世界で見慣れているのでそれほどではないが、この世界にもこんな人がいたんだということに関して驚いていた。そして、その中を見渡す限り若い人が沢山見られた。どうやらここは若者が多く集まる所らしい。（渋谷だと思ってください。）そして、とりあえず立っててもしょうがないので、ひろき達は歩き始めたのだった。

ひろき達は歩き回っていた。しかし、その中で道行く人がひろき達を見て笑っていた。いつもの格好で来たからしょうがない。

しばらくすると、若い男達が絡んできた。

「へへ。お前ら、服も買う金もねぇのかよ。いまどきそんなダッセー服、はやんないって、ちょっと馬鹿なんでねぇかい。ハハハ。」

まあ腹が立つ。犬次郎は殴りかかった。しかし、ひろきがそれを止めた。

「なんだ。やるのか。いいぜ、来いよ。相手してやるぜ。」

「死にたくなかったらさっさと失せろ。」

ひろきは言い放った。

「ハァ。なめてんじゃねぇぞ。」

そう言って男達は殴りかかってきた。ひろき達はそれを軽くかわし、

そして、腹に軽くパンチを仕掛けてやった。それにより男達は蹲った。いつも戦っている敵よりぜんぜん弱かった。

ひろき達はまた歩き出した。しかし、都会地帯の空気は不味く、犬次郎達は咳き込んだりしていた。そして、遠くの方が霞んで見えていた。あまりいい場所ではない。

そういえばひろき達は金を持っていない。ここでは『パル』という単位が使われていた。実はこの世界にも通貨が存在するのだ。しかも、ほとんどが『パル』という単位だった。しかし、フォック村近辺は店という店が無い為、お金はほとんど使っていなかった。あのドラ教授の所でも、教授がフォック村のことを知っていて、支払いは食べ物でいいということになっていたのだ。そんなことなのでフォック以外は金を持ったことが無かったのだ。それにより、金はフォックが村の資金から出してくれることになっていた。村の開発のために金が地区団体から渡されるのだが、村には使い道が無い為、他の事で使えたのだった。

ひろき達はこの金で携帯電話を購入した。とうとうフォック村に通信機器が導入されたのだった。

買い物をしていると、遠くの方で地響きが聞こえてきた。ひろき達が確認すると、そこには巨大な怪獣が姿を現していた。この世界にとうとう怪獣まで登場してしまった。

町の人は一斉に逃げ惑っていた。空にはヘリが飛んでいて怪獣の姿をカメラで撮っていた。

しばらくすると、自衛隊などが出動していて怪獣目掛けて攻撃を繰り返していた。しかし、敵は破壊光線を放ち、自衛隊は全滅してしまった。

町はどんどん破壊されていった。そこへひろき達が向かっていった。途中警官に止められたりしたが、それでもひろき達は怪獣目指して走り続けた。テレビカメラはそんなひろき達を捕らえた。

「なんということでしょう。まだ、取り残された人達がいます。変わった服装をしている多数の人達です。もう、怪獣は間近に迫ってきています。おや、なんということでしょう。残った人達は怪獣を見ています。まったく逃げる様子はありません。」

ひろき達は力を溜め始めた。合体魔法をやろうとしているのだ。そして、犬次郎がひろきを乗せ、高いビルの上からジャンプし、怪獣の目の前まで上り詰めた。そして、溜めた魔法を放とうとした瞬間、怪獣の破壊光線がひろきを襲った。ひろきは吹き飛ばされた。一撃で体中がぼろぼろになりひろきの意識は一瞬無くなったが、すぐに取り戻し『銀』の水晶を使って空中で止まった。

「なんということでしょう。攻撃を食らってもなお立ち上がっています。しかも、羽根です。羽根が生えています!?あれは人間なんでしょうか?姿形は人間です。しかし、何でしょうあの羽根は!?まったく分かりません。そして、なんで剣を持っているのでしょうか。銃刀法違反で捕まります。だけど、彼は怪獣と戦っています。皆さん。彼の勇士を見届けてください。彼に希望を託しましょう。この世界の平和は彼にかかっています。」

この放送は都会地帯全域に流された。避難したみんなはテレビの前で見ていた。そして、テレビに向かって声援を送っていた。

ひろきは怪獣に向かっていった。怪獣はひろきを破壊光線で打ち落とそうとしていた。その時、足元でフォック達が一斉に攻撃を繰り出した。どうやら修行をして、合体魔法後でも魔法が撃てるようになったらしい。これにより怪獣はバランスを崩して倒れこんだ。そこにひろきが先ほど溜めた魔法力を全部使い、魔法を怪獣に向けぶっ放した。

「見てください。みなさん。魔法を、魔法を使いました。私、阿部

は以前魔法を使える民族がいると聞いたことがありますが、その話は本当だった模様です。今、私の目の前では奇麗な青白い魔法が怪獣に向かって飛んでいきます。感動です。感動しています。本当に私、生きててよかった。魔法が見れてよかった。そんな心境です。さあ、みなさん、私達の希望を乗せた魔法が間もなく、間もなく当たります。その瞬間を、しかと焼き付けてください。彼が私達を守ってくれる救世主だということを見届けてください。」

魔法は怪獣に当たった。その瞬間、凄い光と音があらゆる方向に飛んでいった。都会地帯は深い煙に呑まれていた。そして、煙がなくなるとそこには立っている怪獣の姿があった。

「何ということでしょう。怪獣はまだ立っています。あれほどの攻撃を受けてなお立っています。やはり彼も勝てないのでしょうか。私達は死を待つしかないのでしょうか。まったく残念です。…！皆さん。まだ希望を捨ててはいけません。さっきの彼が、そしてその仲間が、怪獣に向かって行きます。」

ひろき達は再度怪獣に近寄った。そして、一斉攻撃を開始した。怪獣はもう動けない状態であり攻撃はしてこなかった。

ひろきは空中にいる状態で剣を魔法と合体させ長い剣を作り上げた。そして、そのまま怪獣に向かい、デカい剣を振り下ろした。すると、怪獣は奇麗に肩の部分から足の付け根らへんまで切れて、体は真っ二つになった。すると、怪獣は爆発し、跡形もなく吹き飛んだ。その後、その中から『水色』の水晶が出てきた。どうやら怪獣が飲み込んだらしい。ひろきはそれを取り首に掛けた。こうして水晶がまた増えたのだった。

「やりました。ついに彼らがやりました。怪獣を倒しました。」

テレビの前では歓声が上がっていた。ひろき達は笑いながら歩いていた。そこへヘリに乗っていた阿部はひろきに近付きマイクを向け、

一言言うように言われた。

「皆さん、怪獣は倒しました。安心ください。それから、この服装は戦い易い服装なのです。どうか笑わないでください。」

言ってやった。すると、今度は名前を聞かれた。ひろきはすんなり答えた。すると、テレビの前ではひろきコールが起こっていた。

しばらくして、ひろき達は帰る時間になったので帰ることにした。

「待ってください。まだ聞きたいことが…。」

すると、ひろきは「また来ます。」と言って帰っていった。

第８８話　都会に行くひろき達（後書き）

あとで、世界観的なこと書きます

阿部は、私のお気に入りです。あと、何回か出てきます。

第８９話　フォック村のサンタクロース（前書き）

季節物の話ですね

第89話　フォック村のサンタクロース

今日はクリスマスのはずだが、この世界にはクリスマスというお祝い事は存在しない。その為、サンタのことなんて知るはずがない。しかし、ひろきはそんなフォック達にパーティをやろうと当然言い出し、無理やりお祝い事にした。飾りつけは勿論のこと、食事から何まですべてひろきが準備をしたのだった。

パーティにはほぼ全員呼んだ。ドラズからダイキ達まで様々な面々が揃った。そして、食事や飾り付けを見てみんなは驚き「奇麗。」と言っていた。

パーティは終わりを迎えた。みんなはそのままフォック村に泊まることになった。

その夜、誰かがフォック村上空を飛んでいた。そいつはフォックの家に入ると箱を置いて出て行った。それから、次から次へと家に入っては箱を置いていった。そして、そいつはそのまま村を後にした。その頃、ひろきは布団の中で寝ていた。ということは、さっきのは誰。もしかしてこの世界には本当にサンタクロースがいたのかもしれない。

次の日の朝、みんなは目を覚ましてびっくりした。突然目の前に箱が置いてあったからである。みんなはその箱を開けてみた。すると、そこには奇麗な水晶を模った首飾りが全員に入っていた。そして、首飾りと一緒に手紙も入っていて、その手紙には『この首飾りは平和を願って作ったものだ。首に掛けておけばいつか平和が訪れるだろう。』という文章が書かれていた。

ひろき達は早速それを着け、姿も誰なのかも分からない贈り主に対し、お礼を言ったのだった。

これがフォック村で起こった不思議なプレゼントの話でした。

第９０話　本気でキレたひろき

その日は夏子が遊びに来ていた。すると、敵がフォック村に現れた。いつも通りひろき達が外に出ると、そこにはタバコをふかした敵が立っていた。そして、敵はひろきが出てきたのを見るとタバコを地面に捨てて攻撃をしてきた。

ひろきと夏子は攻撃をかわしながら戦ってた。そして、ひろきの攻撃がクリーンヒットして敵は吹き飛んだ。すると、敵は足に力を溜め始めた。すると、次の瞬間、今まで溜めていた力を瞬間的に使い、ひろきの目の前まで飛んできた。すると、敵はそのままひろきを押し壁に突っ込んだ。ひろきは壁に叩き付けられた。その後、敵はそのままひろきの足と腕を壁に魔法で貼り付けて動けないようにしたのだった。

すると、敵は夏子の方に向かって来て攻撃を繰り出した。夏子は何とか避けていたが、ついに敵の攻撃に当たってしまった。これにより夏子は吹き飛ばされて仰向けに倒れ込んだ。すると、敵はそんな夏子に跨って乗っかり、タバコに火をつけて夏子の顔を攻撃してきた。

夏子はどうすることもできなくただ殴られていた。だが、、夏子も何とか反撃した。しかし、敵はそれにキレて、銜ていた火の付いたタバコを夏子の顔に押し付けた。その様子をひろきは見ていた。

その後も夏子をぼろぼろにした後、敵は夏子の髪の毛を持ち、ひろきの目の前で髪の毛を切ってしまった。これによりセミロングだった夏子の髪はショートになってしまった。そして、倒れこんだ夏子に対し

「そんな魔法で倒せるわけねぇだろ。お母さんにでもおっぱいもらってな。それからお父さんに慰めてもらうのか。ハハハ。お父さんお母さんに…」

その時、ひろきが敵の顔面を殴った。
そして「それ以上、何も言うんじゃねぇ。」と言って来た。
その時のひろきの目つきは今まで見たことがないものだった。

「お前どう…」またしてもひろきの攻撃が放たれた。
「黙ってろって言っただろうが。よくもこんなに夏子を殴りやがって。しかも顔に…。傷でも残ったらどうすんだよ。タバコまで押し付けやがって。ふざけんじゃねぇぞ。それと髪の毛。女性は命の次に大切なモンなんだぞ。それをあんあ簡単に切るなんて。ゼッテーに許さねぇ。」

ひろきは睨みつけながらゆっくり言った後、ひろきは魔法を放ちまくった。敵はなんとかその魔法に耐えていたが、連続して降り注ぐ魔法に反撃の余地はなかった。最大クラスの魔法を放ち続けるひろき。その目は敵しか見てなかった。そして、とうとう敵を倒したのだった。

倒した後、ひろきは夏子に近づき静かに『白』水晶を取り出し回復させた。幸い顔には傷や火傷の跡は残らずに済んだ。しかし、髪の毛は戻すことができなかった。ひろきは夏子に謝った。もうあの時の目つきはしてないが、いつもと雰囲気が違っていた。
夏子は「私のために顔のこととか心配してくれて、そして怒ったことが嬉しかった。髪の毛はまた生えるから大丈夫だよ。」と言ってひろきを安心させた。しかし、ひろきはそのまま何も言わず夏子を負ぶって病院まで歩いていった。どうやら、壁際から抜け出すために腕の関節をはずして出た為、その治療である。そういえば攻撃は片方の手でやっていた。

この時、夏子は敵が言った言葉の中の何かに引っかかっていた。

第９０話　本気でキレたひろき（後書き）

俺はメールの返信が遅いとイラつきます。

第９１話　ひろき家で飼うペット（前書き）

犬とハムスターを飼ってました。名前はコタロウとハム子でした。

第９１話　ひろき家で飼うペット

次の日、ひろきの機嫌はまだよろしくなかった。すごいイライラしていて、みんな近寄り難くなっていた。しかし、夏子は自分の為にあんなに怒ってくれたのはとても嬉しいと思っていた。ひろきの腕はミュウさんにより回復させてもらった。

しかし、いつまでも怒ったひろきを見たくなかったので夏子はひろきに近づき、話をしだした。最初笑い話から始まって、だんだんとひろきの心を和ましていった。そして、次に夏子が一番聞きたかったことを聞いた。

「私のお母さんやお父さんで誰？」

その質問にひろきは驚いた。夏子の記憶は第７１話で書き換えられていたからだ。しかも、夏子の親は『夏子を捨てた』という経歴があり、ずっと夏子は親を恨んでいた。その記憶が書き換えられて『かぐれ村の誰かに育てられて、親はもう死んでしまった』という記憶があるのだ。そこに敵が親親言うものだから、本当の親のことを少し思い出してしまったのだ。

「私、かぐれ村じゃなくて、別の場所で生まれたような気が…。」

ひろきは必死で夏子を止めた。そして、「それ以上、言うな。」と言って、夏子を黙らせた。

そして

「君の親は死んでしまっているんだ。だから思い出さないでほしい。あの時、俺がいればって、そう考えてしまって、悔しくて悔しくて、いてもたってもいられなくなってしまうから。だから、思いださないでくれ、俺の心は締め付けられるんだ。」と、うまく言葉を選び、『戦争』とか『捨てる』とかの言葉を言わないで、半強制的に忘れさせようとしていた。そのおかげで夏子は思い出さないようにしたのだった。

ひろきは外に出た。頭を冷やす為に行ったのだろう。そして、ひろきは森の中へ行き深呼吸をしていた。気持ちを落ち着かせていたのだった。すると、突然茂みの中から犬が出てきた。

ひろきは驚いた。この世界にも犬がいたのだ。すると、その犬はひろきに近づき頬擦りをして来た。それを見たひろきの心は穏やかになっていった。

ひろきはその犬を家に連れてきた。予想通り夏子に好評だった。すると、それを見たフォックが「その犬、どうするんだ。」と言って来た。すると、ひろきは「飼う。」ときっぱり言ってきた。すると、夏子が何かを発見した。

「この子、首輪が着いてるわ。『ハナ』って書いてある。」ということで飼い犬らしい。すると、ひろきは「飼い主を探そう。」と言う事を言い出した。フォック達は仕方なくひろきに付き合うことになった。

ひろきはフォック村いったいを探した。しかし、飼い主は見つからなかった。すると、突然ハナは吠え出して走り出した。ひろき達が追いかけてみると、ハナが男に噛み付いていた。ひろき達はすぐに謝ると、男はすぐ去っていった。

ひろき達はハナを叱った。すると、ハナはまた走り出した。そして、今度は小さな小屋に向かって行った。ひろきはなんとかハナを捕まえ、どうしたのか聞いてみた。しかし、ハナは幾度となく小屋に向かって吠えていた。ひろきが何かあるのか確かめる為行こうとすると、誰かがその小屋に入っていった。それはさっきの男だった。

ハナはひろきの腕から抜け出し、小屋に向かって走り出した。すると、小屋から物音と共に「助けてー。」という声が聞こえてきた。すかさずひろき達が小屋に突入すると、先ほどの男が少女を襲おうとしていた。

ハナは男に噛み付いた。それに驚いた男は持っていた包丁を落とした。その隙にひろき達が少女の縄を解いていた。男はハナを蹴り飛ばした。それを見ていたひろき。やばい状態を誰もが予想した。そして、ひろきが爆発しそうになった時、夏子が男を吹き飛ばした。その行動に誰もが驚き、ひろきの怒りは冷めてしまった。

「こんな小さい子だって一生懸命生きているんです。そんな命を粗末にするなんて許しません。」

怖い…。今まで見たことがない一面を見てしまった。

ひろきはすぐに正気に戻り、吹き飛ばされた敵に対し攻撃をし、捕まえることができたのだった。夏子は言葉を言った後、フリーズしていた。ハナは捕まえた後、ひろきが回復させ元気を取り戻した。

少女はひろき達にお礼を言ってきた。

しかし、ひろきは「助けたのはハナだよ。お礼はハナに言ってあげて。」と言って、ハナにお礼を言わせたのだった。そして「いつまでもハナを大切にね。」と言った。すると、少女は頷き、ハナと一緒に帰っていったのだった。

第９２話　ロボットの襲撃（前書き）

また、シリーズ物です

第92話　ロボットの襲撃

ある日、ひろきはマリオから電話を受けた。マリオは故郷に帰っていて、フォック村にいなかった。すると、マリオは意味不明な事を言いつつ電話を切った。しかし、その中に『助けて』という声が入っていた。それが気になったひろきは早速みんなを連れマリオを助けに向かった。

マリオの故郷は『ヨースター島』という所だ。ひろき達はそこに向かっていた。そして、そこに着くと、そこは廃墟になっていた。そこには壊れた家があるだけで誰もいなかった。その中でひろき達が誰かいないか探していると、目の前に3体のロボットが現れた。

ここにはドラズはいないが、ドラズとは別の種類のロボットでゴツイロボットだった。そいつらはいきなりひろき達に攻撃してきた。ひろき達は攻撃をかわし、ロボットを攻撃した。しかし、ひろき達の攻撃はまったく効いていなかった。すると、ロボットは再度攻撃してきた。ひろき達はなんとかかわして攻撃をしたのだが、ひろき達の攻撃はまったく効いていなかった。すると、ひろき達は合体魔法をやることにした。そして、いざ決行すると、攻撃は見事にロボットに当たった。そして煙が止むとロボットは1体だけしか倒せていなかった。どうやら1体が他の奴を守ったらしいのだ。

ひろき達は合体魔法で体力をほとんど使ってしまって、魔法は打てない状態になってしまった。そんなひろき達にロボットは攻撃をしてきたのだった。

ひろき達はロボットの攻撃を受けてしまい、もうぼろぼろになってしまっていた。すると、その中でイナバがとうとうロボットの弱

点を見抜いた。なんと『電撃』だという。ひろきは早速ぼろぼろになりながら『黄』の水晶を取り出し雷を呼んだ。そして、ロボットの1体に当てたのだ。すると、ロボットはショートし動きを止めたのだった。

残るロボットはあと1体。ひろきは再度『黄』の水晶で雷を呼んだ。すると、雷は現れなかった。その為、ひろきが水晶を確認すると、なんと今まで黄色だった水晶が透明になっていたのだった。その後もひろきは、何度も呼んだが雷が来ることはなかった。

次の瞬間、ロボットが特大の攻撃をして来た。これによりひろき達はそれぞればらばらに遠くへ吹き飛ばされてしまった。ヨースター島にはロボット1体だけ残った。そして、ロボットは何処かへ飛んでいった。

第９３話　出会った２匹のハムスター

ひろきは何処かの町の草原に飛ばされていて、気を失っていた。すると、そこに２匹のハムスターが通りかかった。２匹はひろきに気づき近寄って来た。そして、体を揺らし始めた。すると、ひろきは意識を取り戻した。そして、目を開くとそこにはひろきを起こした２匹のハムスターがいた。

「やあ。ぼくハム太郎なのだ。どうして君はここに倒れていたのだ。」

いきなり会話が始まった。

「ハム太郎くん。人間がわたしたちの言葉が聞こえるわけないでちょ。」

「それもそうなのだ。リボンちゃんの言うとおりなのだ。」

ひろきはきょとんとしていた。そして「ハム太郎…？リボンちゃん…？」と呟いた。その言葉に２匹は反応した。そして「ぼくたちの言葉わかるの。」と聞いてきた。それにひろきはこくっと頷いた。

ひろきはとりあえず自己紹介をした。すると、２匹は笑ってひろきに挨拶したのだった。すると、２匹はなんで倒れていたのかひろきに聞いてきた。その為、ひろきは今までのことを話し出した。そんな中、リボンちゃんがひろきの足の怪我を発見した。すると、ハム太郎は突然「魔法が使えるひろき君ならぼくたちの能力も分かるかもしれないのだ。」といってリボンちゃんと話していた。

ひろきが不思議に思っていると、２匹は傷口に近付くと目を閉じて掌を傷口に向けた。すると、傷口はみるみる治ってしまったのだ。

ひろきは驚き、なぜできるのか聞いてみた。すると、2匹は「突然できるようになった。」と言ってきた。すると、ひろきはハム太郎達に剣を触らせてみた。すると、ダイキ同様手と剣の間で光が放たれた。ハム太郎も魔法が使えるのだ。さっきの治療も魔法に違いない。（勝手な設定つけてすみません。）

2匹は共に喜んでいた。魔法を使えることが嬉しいらしい。ひろきはそんな2匹を見ていた。すると突然「ぼくたちも仲間にしてほしいのだ。」と言ってきた。当然断るひろき。小さいうえに2匹にはそれぞれ大切に思っている飼い主がいるからだ。その飼い主を心配させたくないひろきは断じて断った。

しかし、2匹は自分達が使える魔法を平和の為に使いたいらしいのだ。それでもひろきは仲間にはしなかった。すると、2匹は仲間を探すのだけでも手伝うと言ってきた。すると、ひろきが飼い主は君たちがいなくなってどうするのか聞くと「飼い主は今旅行に行っているらしく、1週間ぐらい帰ってこない。」と言ってきた。

珍しいことだった。

そして、どうするか考えているところだったのだ。だから問題はなかった。それを聞いたひろきは2匹の熱意に答え、探すのだけを手伝ってもらおうことにしたのだった。

そして、ひろきは2匹を連れて、ばらばらになったみんなを探し始めた。

第９３話　出会った２匹のハムスター（後書き）

私、ハム太郎、大好きです。

第９４話　都会での人気

ひろきはとりあえずここがどこなのか２匹聞いてみた。すると、ひろきが落ちた所は『町民地帯』で、都会地帯に近い位置にあった。（埼玉県だと思ってください。）なのでひろき達は都会に行くことにした。

そもそもこの世界の大陸は、アジア・ヨーロッパのあのでかい大陸があるだけだった。その大陸の中で様々な地帯に分かれているのだ。まず、元の世界でいうロシア・モンゴルらへん。ここは草原地帯になっている。ちなみに、ここは北極圏に近い為、寒い地域である。そして、少し離れてインドらへんも草原地帯である。ちなみにフォック村は丁度スリランカと同じ所に位置する。次に、ネパール付近からイラン・カザフスタンまでは森林地帯である。ここにかぐれ村がある。そして、台湾らへん。ここは村民地帯となっていて、人がちらほら住んでいる。ここに不思議の村がある。そして韓国・朝鮮・中国付近は都会地帯となっている。その中で中国とモンゴルの境目には山脈地帯となっていて、都会と草原に分かれていた。それから日本。ここは町民地帯となっている。ここにハム太郎達が暮らしている町がある。今ひろきはここにいる。そして、サウジアラビアからトルコまでが砂漠地帯。ここで注意すべきはアフリカの所は無い為エジプトはない。最後にヨーロッパ全般が商業地帯となっている。これでこの世界の全貌を分かってもらえただろうか。ちなみに北半球すべて大陸である。それほど小さい星なのだ。

ひろき達は都会地帯に行った。すると、１人の女性がひろきのことに気づいた。すると、ひろきのことは町中に広まってしまい、ひろきは囲まれてしまった。すると、その中で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「来ました。来ました。ひろきさんです。あの怪獣からわれわれを

守ってくれた。あのひろきさんです。テレビの前の皆さん見てますか。生です。生ひろきです。今、この町のブームとなっているひろきさんです。グッズは社会現象を引き起こすまでのヒットになり、あの青の服は売り切れ店が続出しています。」阿部だ。あの名物リポーターが来たのだった。いつもの通りカメラマンの中野も一緒だった。

ひろきはとりあえず逃げた。そして、逃げていると、ビルとビルの隙間からいきなり手が出てひろきを引っ張った。それによりひろきは阿部達から振り切ることに成功した。ひろきが「ありがとう。」と言って助けてくれた人の顔を見るとなんとそれはフォックだった。

フォックはひろきにあまり外に出ない方がいいと言って来た。どうやらこの地帯で、あのロボットの仲間がフォック達を探しているらしい。だからこうして隠れていたという。すると、ひろきはフォックの傷が治っていることに気づいた。なぜかと尋ねると、ここの人達に歓迎され治療してもらったらしい。しかも、魔法も使えるようになったという。

そんな話をしている時、フォックはハム太郎達に気づいた。すると、ハム太郎達はフォックに挨拶した。しかし、ハム太郎達の声はフォックには分からなかった。仕方がないのでひろきが通訳となり会話し、どういう経緯でここにいるのか説明した。そして、納得してもらった。

ひろき達はとりあえず移動することにした。ビルとビルの間をうまく通り、どうにか敵に見つからずに移動することができた。すると、突然後ろの方で夏子の声が聞こえた。ひろき達は思わず振り向いた。しかし、後ろにいたのはロボットの仲間だった。そういえば夏子は今回、危険な為に戦いに連れてきてないのだ。

ひろきはそいつに吹き飛ばされた。同時にハム太郎達も吹き飛ばされてしまった。しかしひろきは、吹き飛ばされる中でハム太郎達をなんとか助けようと手を伸ばし地面への衝突を防いだ。

フォックはそんな敵に攻撃をした。しかし、敵は避けて逆に攻撃してきた。フォックは魔法でそれを受け止めてひろき達を守った。しかし、その攻撃と魔法の衝撃により、近くにあったビルが倒れてきた。幸い中に人はおらず、怪我人は無し。フォック達も間一髪で避けて無事だった。その騒ぎにより、町の人達に見つかってしまった。ひろき達は何とかこの場から退くように言った。しかし、町人には興奮していて聞こえない。すると、敵が人の中からいきなり出て攻撃してきた。しかし、ひろきが思うにこのままでは人に当たる計算になり、ひろきは慌てて攻撃を剣で受け止めたのだった。すると、ひろきは近くにいた女性にハム太郎達を預けた。そして、敵と本気で戦い始めた。

ひろきは敵を追い詰めていた。すると、敵はいきなり近くにいた女性を人質にとってしまった。すると、敵はひろきに剣を置くように言う。しぶしぶ置くひろき。フォックも杖を置いた。すると、敵はそんなひろきに攻撃して来た。ひろきは人がいて避けるに避けられず、攻撃に当たり吹き飛んでしまった。続けてフォックも攻撃を受けてしまった。それを見ていたハム太郎は女性の手の上から飛び降りた。

ハム太郎は敵に向かって走っていった。そして次の瞬間、ハム太郎は敵に突っ込んだ。ロボットの体なのにそのボディは凹み、衝撃で倒れこんだ。その隙にひろきが剣を持ち敵に斬りつけた。これにより敵は壊れ、爆発してしまった。女性は爆発に巻き込まれそうになるが、ひろきは間一髪で助け出した。そして、ひろきはその女性を安全な場所で降ろして、「迷惑かけてごめんなさい。」と言って謝った。しかし、女性は顔を赤らめ「いいえ。…こちらこそ。」と言っていた。

次にひろきはハム太郎達を持ってもらった女性に近づき、手を握ってリボンちゃんを返してもらった。この女性も顔を赤らめていた。すると、ハム太郎がひろきの所へ走ってきた。そして、ひろきはハム太郎に「お前のおかげで助かったよ。ありがとう。」と言った。

ハム太郎はテレていたのだった。

第９４話　都会での人気（後書き）

あとで、詳しい設定を書きますので…

第９５話　イナバ君との再会

ひろきは都会地帯を出て、草原地帯を歩いていた。すると、草原の中に集落があった。日も暮れていたので、ひろき達はここに泊めてもらうことにした。

そこの人達は温かく、ひろき達を歓迎してくれた。そして、パーティを開いてくれた。ひろきと似ている。そして、そのまま夜は更けていった。

その頃、イナバは走っていた。なんと、あのロボットの仲間に追いかけられていたのだ。イナバはこれといって魔法を使えるわけではないので、ただ逃げるしかなかったのだ。幾度となく攻撃で吹き飛ばされようとも必死で逃げていた。しかも、ちゃんとひろきの匂いを嗅ぎながら走っていたのだった。

次の日、ひろきは目を覚ました。すると、ハム太郎達がひろきを慌てて呼んでいた。ひろきは眠たい目をこすりながらハム太郎が指差す方向を見た。すると、そこにはぼろぼろの姿のイナバの姿があった。ひろきは慌ててイナバを回復させ休ませた。その時、ひろきが水晶を見ると、なんと『白』水晶も透明になりつつあったのだった。

しばらくしてイナバは目を覚ました。すると、イナバはひろきに飛びついてきた。怖かったらしい。そして、ひろきはどんなことがあったのか聞いてみた。イナバの話によると、ひろき達を探している時に、いきなり攻撃されてきたらしい。それで慌てて逃げて、ここまで逃げてきたという。

ひろきはその話を聞き、都会地帯で会った敵のことを思い出した。

どうやらひろき達を標的としているようだ。とりあえずひろき達は、これからどうするか考えることにした。すると、突然外にいたここの人達が騒ぎ始めた。

ひろき達は外に出た。すると、そこにはイナバを追っていたロボットが集落に突っ込んできていた。ひろき達は水晶でスピードを落とそうとしたが、敵は避けながら突っ込んできていた。そして、ついにロボットは集落に突っ込んできた。その衝撃でひろき達は吹き飛んだ。ここの人達はひろきの指示であらかじめ逃げていたので無事だった。

ひろき達はそんなロボットに攻撃を繰り出した。しかし、敵は頑丈なロボットの為、ぜんぜん攻撃は効いているように見えなかった。そして、それをいいことに、敵はひろき達に突っ込んで自分自身が体をはって攻撃してきていたのだ。

そもそもこの敵はヨースター島で戦ったロボットに似ているが、防御力や攻撃力なんかが多少怠っていた。どうやら不良品らしい。そして、やはりこのロボットは悪魔族が作り上げた物だった。これはひろきが発見した物で、背中のところに『ｍａｄｅ　ｉｎ　ｍａｏｕｊｏｕ』とかかれていたのだ。この国にも英語は存在していた。

敵は幾度となく攻撃してくる。ひろきはどうにか動きを止めようと考えていた。すると，ひろきはこの前都会に行った時に見つけた『水』色の水晶の存在を思い出した。今まで使ったことがなかったのだ。

ひろきは早速使ってみることにした。手の動きは六角形だった。そして、叫んだ言葉は『ブリザード』だった。『水』色は雪・氷系の攻撃だったのだ。ひろきは早速ロボットに向かって放った。すると、雪が水晶からでてロボットに吹き付けた。

ロボットはその攻撃に耐えていた。そして、魔法で雪を溶かそうとしていた。すると、ひろきはさらに雪を多くだした。すると、敵はだんだんと動きが遅くなってきていた。その後、ひろきはフォックに、魔法力を分け与えてくれるように頼んだ。そして、フォックはひろきに魔法力を与えた。すると、ひろきは水晶での攻撃を止め、その水晶に魔力を送った。そして、そのまま水晶でまた攻撃したのだった。すると、今度は一瞬にして敵は凍ってしまった。すごい技を編み出した。魔法力を送って力を増大させたのだった。

ロボットは凍ってしまい、まったく動かなくなっていた。そこへひろきは剣で斬りつけた。しかし、敵は斬れなかった。どうやらそれぞれ性能が違うらしい。どうするか考えたがひろきに解決策は見つからなかった。するとその時、イナバが相手を観察し始めた。弱点を探していたのだ。そして、ロボットの弱点を見つけ出した。本来なら電撃のはずだが、欠陥のロボットの為、もう1つ弱点があったのだ。なんと、首の所だという。それを聞いたひろきとフォックは、首目掛けて攻撃したのだった。すると、首はもげて、ロボットは爆発したのだった。これにより、やっとロボットを倒したのだった。ひろきたちはホッと肩を撫で下ろしたのだった。

その頃、フォック村では誰かが入り口に立っていた。よく見ると、それはあのドラ・ナターシャだった。やっとこの間の花火大会で場所を覚え、来ることができたのだった。

ナターシャは村に入ると、村長（フォック）の家を訪れた。挨拶をしようとしているらしい。そして、家の前に着き、ノックした。しかし、返事はなかった。すると、村人がナターシャに近づき、フォックはいないことを伝えた。すると、ナターシャはひろきの所在を聞いてきた。村人はひろきの家を教えるが、いないということをいうとナターシャはがっくりと肩をおろした。その時、ナターシャの無線にまた緊

急出動命令が出されてしまった。ナターシャはしぶしぶフォック村を後にしたのだった。

第９５話　イナバ君との再会（後書き）

水晶の手の動きはテキトーです。

第９６話　大ピンチの３人

ひろき達は他の仲間を探すため集落を後にした。イナバとハム太郎達の鼻を頼りにして、ひろき達は歩き出した。

しばらく歩いていくと、変な建物に辿り着いた。仲間の匂いはこの建物の中からしているらしい。早速ひろき達は建物内に入ることにした。

建物内に入ると、そこは豪華なバロック建築のような部屋がたくさんあった。外見は変なのに、中身はこっている。すると、１つの部屋から物音が聞こえてきた。

怪しいと思ったひろきは、部屋を調べるべく中に一歩踏み入れた。すると、いきなりレーザー光線が飛んできた。ひろきは間一髪で避けて助かった。するとその時、廊下に壁が出てきてひろき達のゆく手はレーザーが飛んでくる部屋だけになってしまった。

すると、１人の男が部屋の奥から出てきた。その男はひろき達を見ると「最高の獲物が罠にかかりおったわい。」とか言ってひろき達に笑みを見せた。

なんとこの部屋は床にセンサーが取り付けられていて、床を踏むとレーザーが自動的に発射される仕組みになっているらしい。

そんな、説明をしつつ、敵はひろきたちに攻撃してきた。

ひろきとフォックはそれぞれハム太郎とリボンちゃん、イナバを抱えながら着地してすぐにジャンプして、レーザーを避けながら前へ進んでいった。そして、男を殴ろうとした時、ひろきの拳が何かにぶつかった。なんと、男の前には透明なガラスがあったのだ。しかも、そこには電流が流れていて、ひろきは感電してしまった。肩に乗っていたハム太郎達は少し感電したがすぐフォックが助け出した為、なんとか無事だった。しかし、ひろきは無事ではなかった。感電したひろきは意識を失って床に倒れこんだ。その瞬間、レーザ

ーがひろきに向かって放たれた。そして、レーザーはひろきに当たり爆発を起こした。その衝撃でフォック達も吹き飛ばされ、床に着いてしまった。すると、フォック、イナバもレーザーの餌食になった。ハム太郎達は小さすぎて当たらなかった。

爆発後、ひろき達は意識を失っていた。すると、男がレーザーのスイッチを止め、ガラスを開けてひろき達に近づいてきた。ハム太郎達は物陰に隠れ、なんとか見つからずに済んだ。男はひろき達を持ち上げると、さっき出てきた所からまた入ってしまった。慌ててハム太郎達も行こうとしたが、扉は閉まってしまい、追いかけることはできなかった。2匹はこの部屋に残されてしまった。

何とか出口を探していると、花壇の後ろに小さな穴が開いていた。2匹はそこから穴を広げ脱出することに成功したのだった。ハム太郎達が穴を抜けると、そこには髑髏(どくろ)がいっぱい転がっていた。

驚く2匹。そして、走り出した。すると、何かにぶつかった。ハム太郎が確認すると、そこにいたのは犬次郎だった。しかし、ハム太郎は犬次郎の事を知らない。ハム太郎達は匂いを確かめてみた。すると、それはここまで辿ってきた匂いだった。それによりハム太郎達は仲間だと認識した。

2匹は何とか自分達の存在を見つけてもらう為、叩いたりしていた。そして、やっと犬次郎は2匹の存在に気づいた。そうすると2匹は、犬次郎の手を縛っている紐を噛み切ってとりあえず犬次郎に自由を与えた。やっと手が自由になった犬次郎は2匹にお礼を言った。すると、2匹はボディランゲージでひろきが捕まったことを説明した。そして、それは犬次郎にちゃんと伝わった。ここで動物と人間の言葉の壁を越えたのだった。

犬次郎は早速壁を壊し、ひろきを助けるべく走り出した。

その頃、ひろき達は1人ずつ巨大な円柱の筒の中で両手両足を固定された状態でいた。その時、ひろきは目を覚ました。そして、今おかれている状態を見て、近くにいた男に問いかけた。すると、男は「私は人が苦しむのが見るのが楽しくてねぇ。今、君達が入っている筒にこれから水が入る。水は10分で顔まで浸かる。しかもちゃんと計算してみんな一斉に顔まで行くようになっている。だから死ぬときは一緒だ。どうだ、やさしいだろう。」
そう言って男はスイッチを入れた。すると、ひろきとフォックの筒に水が入ってきた。

「おいウサギ。おまえは5分後だ。ま、せいぜい、仲間の慌てふためく姿を見ていろ。」
そう言って男は椅子に座ってそれらを観察していた。

まだ犬次郎は到着していなかった。3人がピンチの状態なのはいうまでもない。

第９６話　大ピンチの３人（後書き）

私もバロック建築大好きです。あと、レトロな雰囲気の建物が大好きです。

第97話　道具への思い

ひろき達の筒の水はもう臍(へそ)ぐらいまで来ていた。その時、男がスイッチを押し、イナバの筒にも水が入ってきた。もう3人の命は、5分ほどでなくなってしまう状態だった。その時、壁からなにやら音が聞こえてきた。と、次の瞬間、犬次郎が壁を壊してひろき達のいる部屋に入ってきた。

犬次郎はすぐさまひろき達を見つけると、筒に向かって攻撃しようとしていた。しかし、敵は犬次郎に攻撃し、犬次郎は隣の部屋まで吹き飛ばされた。そして、男もそのまま隣の部屋に行き、犬次郎に攻撃してきた。その間、ハム太郎達はひろき達のいる部屋にいた。そして、どうにか助けようと筒を攻撃していた。しかし、まったく歯が立たず、助けることはできなかった。そうしている間にも水は胸の近くまで水位が上がっていた。

犬次郎は素手で男と戦っていた。犬次郎がいつも持っていた刀は男の手のうちにあり、この戦いに使っていた。それを悔しくてたまらない犬次郎だった。男の刀の使い方は乱暴で、刃を傷めていた。犬次郎はなんとか刀を取り返そうとしたが男は手強く、なかなか取り返せない状態だった。

すると、男は刀を振り翳(かざ)してきた。すると、犬次郎はそれをチャンスだと思い、素手でそれを受け止めた。そして、強く握り、何とか刀を取り返した。犬次郎の手は真っ赤になっていた。それほど大事な刀なのだ。

犬次郎は剣を持ち攻撃していった。さっきよりぜんぜん攻撃力が違うことに対し男は驚いた。しかし、少しずつ犬次郎の刀は力が入ってこなくなってきた。どうやらさっきの手の怪我が原因だ。そして

次の瞬間、男は犬次郎の刀を吹き飛ばした。すると男は、犬次郎を後ろから掴み固め技を掛けた。そして、そのまま男は犬次郎に止めを刺そうとしていた。

そして敵は攻撃をした。しかし、吹き飛ばされたのは男の方だった。犬次郎が見ると、そこにはハムチィーの姿があった。

敵はすぐ起き上がり、2人に攻撃してきた。すると、ハムチィーは犬次郎に刀を投げて渡した。すると、ハムチィーも自分の剣を取り出し2人で構えた。そこへ男は突っ込んできた。その時、2人の技が炸裂した。ハムチィーも技が使えるようになったのだ。これにより敵はこの世を去ったのだった。

犬次郎は慌ててひろき達の所に向かった。しかし、そこで見た光景はもう既に顔まで水に浸かっている3人の姿だった。犬次郎とハムチィーは慌てて筒を壊した。筒から水と共にひろき達が出てきた。みんな息をしていない。すると、犬次郎は心臓マッサージを始めた。そこへハムチィーが人工呼吸はしなくていいのか聞いてきた。すると、犬次郎は「人工呼吸はしなくてもいいと聞いたことがある。心臓マッサージだけでいいと。」と言ってずっと続けていた。すると、ひろき達は水を吐き出し、意識を取り戻した。犬次郎達はほっとして座り込んだ。そして、ともに喜び合っていた。ひろき達は犬次郎達にお礼を言った。そして、ようやく仲間の無事を確かめ合ったのだった。

第９７話　道具への思い（後書き）

ＡＥＤの講習会で聞いたところ、人工呼吸をしづらかったら（女性に男性が人工呼吸など）、しなくてもいいので、気道確保と心臓マッサージは確実にしてくださいといわれました。

間違っていたらすいません。
だけど、できるだけしたほうがいいと思う。

第９８話　左腕の痛み（前書き）

あっ、ひろき、左利きです。

第９８話　左腕の痛み

ようやく仲間が揃ってきた。あと残るは『タケル』と『マリオ』と『ミュウさん』である。（カービィは参戦してません）

ひろき達は「一刻も早く見つけないと」と思っていた。あのロボット。若しくはそのロボットの仲間にやられてしまう可能性があるからだ。その為、ひろき達は足早になっていた。

ハムチィーはハム太郎達を頭に乗せていた。どうやら同じハムスターなので気が合うらしい。ひろきは喧嘩すると思っていたが心配はないようだ。そして、ハムチィーもハム太郎達の言葉がわかるのだった。

ひろき達は草原地帯を歩いていた。すると、また建物に辿り着いた。そして、入ってみると、なんと入り口の側でタケルが倒れていた。どうやらもう敵にやられたらしく、酷く傷を負っていた。ひろきはすぐ回復させて話を伺った。すると、この建物の奴に連れてこられて、ここのオーナーを倒せば人質を助けてやると言われたので挑戦したところ、オーナーが強すぎて負けてしまい、人質になりかけたけどなんとか逃げ切りここまで逃げて来たという。

オーナーは建物の地下から出られない為、ここまでこれないから、大丈夫だったのだ。その話を聞いて、ひろきは俺が挑戦すると行って建物内に入っていこうとした。すると、フォックが止めた。そして「魔法が使えなきゃ、危ねぇだろ。」と言って魔法力をひろきに託したのだった。そして、ひろきは地下に入っていった。

戦いは他の人が観戦することはできない為、フォック達は残ることにした。しかし、心配だったフォック達はハム太郎達にこっそり見てくるように言って行かせたのだった。

地下に降りたひろきの目の前に、ロボットが姿を現した。どうやら不良品の方らしい。ひろきは早速「挑戦者だ。」と名乗り戦いを申し込んだ。すると、ロボットはいきなり攻撃を繰り出したのだった。ひろきはその攻撃を避けて剣で斬りつけた。するとボディに傷が付いた。最初の戦ったロボットは超合金製のボディだったため傷も付かなかったのだが、付いたため不良品だと改めて感じたのだった。

ひろきは着実に攻撃を繰り出していた。ハム太郎達は安心してその様子を見ていた。「確かに強いがなんとか勝てる。」そんなことをひろきは考えていた。するとその時、ひろきの左腕が痛み出した。ひろきはハッとした。あの第７３話でのあの痛みと似ていたのだ。

ひろきはあまりに痛さに蹲ってしまった。そこにロボットが近づいてきた。そして「ソロソロ本気ヲ出シテヤルカ。」と言ってひろきを吹き飛ばした。すると、そのまま空中でひろきはどうすることもできなくなっていた。

そこにロボットが攻撃を繰り出した。すると、ひろきの体のどこかで『ボキッ』という音が聞こえてきた。どこかが折れた。ひろきはそのまま地面に叩きつけられた。そこにロボットは突っ込んできて、ひろきの腹にタックルした。ハム太郎達はそんなひろきを見て震えが止まらなくなっていた。

その後もひろきへの見るに耐え難い攻撃は続いた。もうロボットは、ひろきを人ではなく物として扱っているように見えてしまっていた。ひろきはもう意識を失っていて、反撃はできなかった。

そして、最後にロボットはひろきを投げ飛ばし、フィニッシュにしたのだった。ロボットは勝利を確信し、人質にアピールしていた。

そして、ひろきに最後の魔法を放った。その攻撃は諸に当たり、ひ

ろきはうつ伏せに倒れていた。そこにハム太郎達が近づいてひろきを起こしていた。しかし、ひろきは目を開けなかった。

そうしているうちにロボットがハム太郎達に気づいた。すると、ロボットは「次ハオマエガ挑戦者カ。カカッテコイ。」と言ってきた。すると、ハム太郎はロボットの前に立ったのだった。リボンちゃんの声を無視して、ハム太郎は立っていた。すると、ひろきが目を覚ました。そして、ハム太郎に「行くな。」と言って止めたのだがこれも無視。すると、ハム太郎はロボットに向かって「よくもひろきくんを…。ぼく、絶対に許せないのだー。」と叫んだ。すると、ハム太郎の体が光りだした。

その光は1つの丸にまとまりそしてハム太郎の頭に集まった。すると、ハム太郎の頭の上で雷がバチバチと音を立てて、電流が流れだした。そして、ハム太郎の頭の上で常に雷が流れている状態になったのだった。

その光景は誰もが驚いた。ひろきも唖然としていた。すると、ハム太郎はロボットに向かって「雷よ。落ちるのだー。」と言って腕を下に下ろした。すると、ハム太郎の頭の上の雷が大きくなり、ロボットに落ちたのだった。すると、ロボットはショートして動きを止めたのだった。

その後、そこにハム太郎は頭から突っ込んだ。すると、頭の雷が大きくなり、ハム太郎を包み込んだ。そして、そのまま突っ込むと、ボディから徐々に金属が溶けていき、そしてとうとう貫通したのだった。すると、ロボットは爆発したのだった。

戦いが終わった後、ハム太郎の雷は消えていった。すると、ハム太郎は今まで何があったのか聞いてきた。どうやら覚えていないらしい。そして、ハム太郎はこの時初めてひろきが目覚めているのに

気がついたのだった。
ハム太郎達はひろきをどうにか運ぼうと考えていた。リボンちゃんがフォック達を呼びに行こうとすると、目の前にミュウさんが現れた。どうやら人質の中にいたらしい。

ミュウさんはひろきをできる限り回復させた。そして、どうにかひろきは歩けるようになったのだった。そして、なんとミュウさんはひろきの左腕の痛みまで取り除いたのだった。その後、人質を解放して戦いは終わった。

ハム太郎はしばらくすると動けなくなってしまった。どうやら先ほどの攻撃の反動が今頃きたらしい。そういうことになってしまったので、ハム太郎はミュウさんが運ぶことになった。

外に出ると、フォック達は驚いた。いきなりミュウさんがいたからだ。そして、戦いのことを話すと、さらに驚かれたのだった。新たな力を手に入れ、これであのロボットにも勝てる可能性が増えてきて、希望を掴んだのだった。

そして、ひろき達はマラオを見つけるべく歩き出した。ひろきは安全性を考慮し、犬次郎が運ぶことになった。

第９８話　左腕の痛み（後書き）

ハム太郎にへんな設定つけてすいません。

第９９話　決着

ひろき達は山脈地帯を歩いていた。どうやら雨が降ったらしく、匂いは分かりにくくなっていた。その為、ひろき達はまだ行ってない山脈地帯に行くことにしたのだった。

山脈地帯に行くまでに、２日ほど時間がかかった。なんと『銀』の水晶も透明になってしまったのだ。その為、やむなく歩いていくことになったのだった。だが、途中で村があり休憩をさせてもらい、ひろき達の魔法力は少しではあるが回復することができた。ひろきの痛みのなんともなく、あれから症状がでることはなかった。

今日で旅も５日目である。そろそろハム太郎達を帰さないとやばい状態になる。ひろき達は一刻も早くマリオを見つけロボットを倒し、家へ帰さなければと思っていた。

しばらく山脈地帯を歩いていくと、マラオの帽子が落ちていた。ひろきはここにマリオがいることを確信し探し始めた。

ひろき達が探していると、フォックの前にいきなりロボットが現れた。フォックはすかさず攻撃しようとすると、それはなんと壊れて動かなくなったロボットだった。一安心して杖をしまうと、いきなり何者かに攻撃され吹き飛んだ。なんと、真後ろにロボットがいたのだ。どうやら、動かなくなったロボットは囮だったらしい。

ひろき達はすぐに駆けつけた。そし、て攻撃態勢に揃った。すると、今度はひろきが吹き飛ばされた。なんと、ひろき達の後ろのもロボットがいたのだった。

ひろきとフォックは立ち上がり、二手に分かれて戦うことにした。すると、いきなりロボットが次から次へと出てきて、ひろき達を囲

んでしまった。どうやらここはロボットの本拠地だったらしい。四方八方にいるロボットに対し、ひろき達は焦りの色を見せていた。

ロボットは一斉に攻撃してきた。ひろき達はそれを避けて、それぞれ1人ずつロボットに向かっていき攻撃を食らわした。しかし、敵にはぜんぜん効いていなく、ボディには傷さえ付かなかった。全部不良品ではなかったのだ。

ひろき達は必死で避けながら攻撃したのだが敵はびくともせず、逆にひろき達が吹き飛ばされてしまう状態だった。すると、そんな状況を見ていたハム太郎がついにあの技を発動した。

ハム太郎は次々にロボットに攻撃していった。すると、ロボットは動きを止め攻撃をしてこなくなった。そして、ハム太郎はついに全部のロボットに電撃を食らわしたのだった。

みんなはハム太郎の活躍に驚いていた。そんなハム太郎は動けない状態になってしまっていた。それでも、戦いは終わったと誰もが思い込んだ。すると、一体のロボットが動き出した。そして、他のロボットも次々と動き出した。どうやら電撃の力が足らなかったらしい。小さい体なので無理もない。そして、全てのロボットがまた攻撃してきたのだった。

ハム太郎は当分動ける状態ではなかった。ひろき達は解決策を考えながら攻防を繰り返していた。しかし、ロボットの圧倒的な強さにみんなはぼろぼろになっていってしまった。

ロボット達は先ほどのハム太郎の攻撃でボディに小さい穴が開いていた。すると、タケルが吹き飛ばされながらそこを攻撃した。すると、そこの穴は大きくなり、中の機械が少しだけ見えるようになった。その時、イナバが閃いた。電撃も撃てない状態なのに解決策を見つけたのだった。

イナバはひろきにタケルの側にいるロボットの穴に『茶』の水晶で

砂を入れるように指示した。ひろきは言われた通り砂を入れてみた。すると、敵の動きはだんだん鈍くなり、ついには動かなくなってしまった。どういう事かというと、ロボットの関節部分に砂が詰まり、動かなくなったのだった。

新たな弱点を発見したひろき達は俄然強気になってきた。しかし、体があまり動かない。そんな中で、タケルがブーメランを投げた。すると、ブーメランは次々にロボットの穴の所に当っていった。すると、穴は少し大きくなった。そこにフォック達が魔法で攻撃。すると穴は大きく開いた。そして、ひろきがその穴目掛けて砂を放った。これによりロボットは次々に動きを止めてった。そして、最後の1体になった。ひろきはそいつに水晶を向けた。そして、発射…と思いきや、なんと水晶は透明になっていた。

あと1体なのに砂が出ない。どうすることもできなくなってしまった。するとイナバがまた閃いた。今度は水をかけるようにいったのだった。ひろきは水晶を取り出し、水を出そうとした。するとその時、足に力が入らずバランスを崩した。ひろきは魔法と水晶を組み合わせていたのに、魔法加えた水はロボットとは別の方向に放ってしまった。しかも、その方向にリボンちゃんの姿があったのだ。

ひろきは慌てて回復魔法に切り替えてリボンちゃんに放った。すると、水と回復魔法が合体してリボンちゃんに当たった。すると、その魔法によりリボンちゃんの体は青白く光りだした。すると、リボンちゃんはハム太郎と同じように頭の上で今度は電流ではなく、水を纏わせた。それを見てひろき達は驚いた。しかし、リボンちゃんは何事もなかったように立っていたのを見てひろきはホッとした。

リボンちゃんの無事を確認したひろきは、ロボットに水をかけようとした。しかし、『青』の水晶も透明になっていた為水は出なか

った。すると、リボンちゃんが前に出て「わたしがやりまちゅわ。」と言ってひろきの肩の上に乗った。そして、ロボットに発泡したのだった。すると、ロボットは避けた。ひろきは狙いを定めるように言うのだが、速すぎて狙いが定まらない。そして、ついには空中に飛んでいってしまった。と、その時、誰かがロボットを叩きつけた。それによりロボットは落ちてきた。ひろき達は驚き上を見た。すると、そこにはマリオの姿があった。

マリオはひろき達の所へ降りてきた。そして、今のうちに攻撃するように言った。そして、リボンちゃんは放水。ついにロボットに直撃した。すると、そこにハム太郎が最後の力を振り絞り電撃を放った。すると、ロボットは水で機械がショートし、そこに電撃がきて内部のコンピュータは破壊したのだった。イナバの狙いは水でコンピュータを破壊することだったのだ。

ひろき達はその後、動きの止まっているロボットを破壊しだした。何とか穴の所から破壊していった。そしてとうとう全てのロボットを破壊したのだった。そしてその後、マリオとの再会を喜んだのだった。

しかし、まだ気は抜けなかった。ここがロボットの本拠地なら、ロボットを製造している所があると考えていたのだ。すると、マリオがそのことに関しもう壊したと言ってきた。どうやら、本拠地に今まで捕まっていて、そこを脱出する際に壊してきたという。ということで今回の戦いは全て終わったのだった。

ひろき達は早速ハム太郎達の町に向かった。町までは1日かかってしまった。都会地帯から町民地帯までは『グレー』の水晶でぎりぎり届いた。そして、町民地帯に着くと『グレー』の水晶も透明になってしまった。そこから歩くこと半日。とうとうハム太郎達と出会った場所に辿り着いた。そして、そこでハム太郎達と別れること

になった。

別れ際にハム太郎は、ひろきにもう一度一緒に戦いたいことを言った。すると、ひろきは「ダメ。」と言った。しょんぼりとする2匹。ひろきはそんな様子を見て「遊びにならきてもいいぞ。」と言ってあげた。すると、ハム太郎達は喜び、必ず行くことを言ったのだった。そして、来る手段としてミュウさんが後でワープゾーンを作ってくれると言ってくれた。これを聞いた2匹は喜んで帰っていったのだった。

ひろき達も帰ることにした。そして、とうとう村に着いた。すると、そんなひろき達に村人が近づいてきて、ドラ・ナターシャが来たことを話した。それを聞いてひろきはショックを受けた。すると、村人はひろきに電話番号を書いた紙を渡してきた。そこにはドラ・ナターシャの電話番号が書かれていた。早速ひろきは電話することに。しかし、電話は通じなかった。仕方なく後で掛けることにして、みんなはそれぞれ帰っていった。そしてゆっくり休んだのだった。

第９９話　決着（後書き）

リボンちゃんに変な能力つけてすみません。

第１００話　１１個の水晶の謎（前書き）

祝１００話＆教育実習終了！！

この話も過去に触れます。

第１００話　１１個の水晶の謎

ひろきは翌日、ドラ・ナターシャに電話を掛けた。すると今度は通じたのだった。電話の向こうからナターシャが誰か聞いてきた。どうやら急いでいるみたいで、早口で喋っていた。ひろきは自分の名前を言った。すると、ナターシャは驚き、本当なのか聞いてきた。ひろきは「本当だ。」と言って、ナターシャをさらに驚かした。すると、ナターシャは今現在のおかれている状況を言ってきた。どうやら世界的犯罪者を追っかけているところらしい。そして、しばらくフォック村にはいけないことを伝えてきた。ひろきはそれを理解し、村でずっと待っていることを告げて電話を切ったのだった。こうして、初めてナターシャと会話ができたのだった。

電話を切った後、ひろきは『黄』の水晶を見た。しかし、まだ透明なままだった。そして、雷を呼んだが、やはり雷はこなかった。どうするかも分からないひろきは仕方なく家の片付けをすることにした。

ひろきが家の整理をしていると1枚の紙が出てきた。これは第３１話でひろきが掘った穴から出てきた物で『水晶ノ力、失ウ時、１１ノ水晶集メレバ、ソノ力、戻ルコトアリ。』と書かれていた。ひろきが水晶の数を確認すると、ひろきが持っている水晶は今のところ１３個であり、余裕で１１個を越えていた。ひろきは早速、どう回復するのか考え始めた。しかし、どうも考えつかない。と、その時、誰かが戸を叩いた。

ひろきが出てみると、なんとそこにはチョックとバズの姿があった。どうやら2人は水晶に関する情報を集めて来てくれたらしい。すると、ひろきは早速みんなに招集をかけたのだった。その時、チ

ョックが携帯に気づいた。ひろきが説明すると、なんとこの2人も携帯を持っていたのだ。早速ひろきはアドレスを交換し、連絡手段を取ったのだった。

みんなが集まり話は始まった。話の内容は水晶の力についてだった。調べて来た情報によると、水晶の力は限界があり、力が無くなると水晶は透明になるらしい。この話を聞いてひろきは水晶を見た。どうやら『黄』『銀』などの水晶は力がなくなっただけらしいのだ。次に、チョック達はその力の回復方法について話し出した。話によると、どうやら別世界に回復する場所があるらしい。そして、そこに行くには『赤』『青』『黄』『緑』『白』『黒』『紫』『水』『グレー』『茶』『銀』の水晶が必要だと言う。それを聞いてひろきは指定された水晶を取り出した。すると、バズは水晶を覗くように言った。ひろきがいつものように太陽で透かすと、バズは「違う。」と言い、真下から透かすのだと言ってきた。そして、真下から覗いて見ると、なんともう一つの呪文と動きが存在したのだ。バズはそれが回復するための方法だと言ってきた。そして『赤』『青』『黄』『緑』『白』『黒』『紫』『水』『グレー』『茶』『銀』の順に動かすように言ってきた。ひろきは早速書かれている通り水晶を動かしてみた。一つ一つの水晶の動かし方はまったく理解できないものだが、１１個すべてつなぐと円の中に星が入ってるような形になった。しかも書かれていた呪文を言いながらやると、動いた線が光として見えるようになっていた。

全てが動かし終わり、奇麗な星と円ができた時、突然空中に異次元空間の入口みたいな物が出てきた。早速ひろき達は入ってみることにした。

中に入ってしばらく歩くと、視界が徐々に開いてきた。そして、ようやく辿り着いた。そこは、自然が溢れんばかりに広がっていて空気が澄んでいた。辿り着いた場所は丁度ジャングルだったらしく、

周りには木しかなかった。そんな中、犬次郎が水の噴出していることを発見した。

ひろきがそこを見ると、その近くの石造に文字が書かれていた。しかし、ひろきには読めない。すると、イナバが解読し始めた。イナバが解読した内容は『ここに、青水晶を入れよ。さもまくば、水晶の力帰らん。』ということだった。それを聞いたひろきは早速『青』の水晶を入れてみた。すると、その水溜りの水が水晶の中に入っていったのだ。すると、今まで透明だった『青』の水晶は、元の青色に戻っていったのだった。それを見たひろき達は驚いた。

そして、手分けして他の水晶の所を見つける為、みんなに水晶を配ったのだった。文字は分からないが、そこにある物でどの水晶のなのか分かると思い、ひろきも1人で探し始めた。すると、次々に水晶の給力場所が見つかったのだった。

ひろきはしばらく歩いていた。すると、洞窟を発見した。その洞窟に入ってみると、なんとそこにはあの最強の敵に関することが記されていたのだった。

ひろきはすぐにイナバを呼んで解読させた。すると、そこには過去のことが書かれていた。

「われわれは火や、水や雷などの精である。われわれはそれぞれ秘めた力を持っていた。とある者は『火』。とある者は『翼』というようにそれぞれひとつの力を秘めていた。そしてある日、それぞれの命を融合させ、全ての能力を持つ者を作ろうと考えたのだ。しかし、そこで『黒』の精は力を出し過ぎてしまった。そのため作られた奴は破壊を好む生物となってしまった。そして、私達の意志に反してあいつは地上（フォック達の世界）へ行ってしまった。われわれは地上の破壊を食い止めるべく、それぞれの能力の水晶を作ってあいつから力を離すことを考えた。そして、水晶を作り上げたのだ

が、水晶はあいつの体の表面に張り付いていて力は離れなかった。
それから1年後。あいつを封印した旅人が現れた。その時、水晶はあいつの体から取られ、旅人の手に渡った。すると、その旅人はあいつが2度と破壊をさせないようにと、水晶を世界中にばら撒いた。そして、旅人は水晶を1つ持って旅立って行った。世界中にばら撒かれたわれわれは水晶から抜け出すことをそれぞれ決意した。そして、われわれは異次元世界に帰ろうとした。その時、われわれは最悪の状態を想定した。あいつが復活するという考えだ。もし、あいつが復活した場合、あの旅人が水晶を使ってあいつと戦うと考えた。しかし、水晶はわれわれが宿っていないと使えないのだ。その為、われわれは水晶に生命エネルギーを半分注ぎ、ある程度水晶を使えるようにした。しかし、それだけでは水晶の力に限界が来てしまう。その為、われわれは給力の場所を異次元世界に、あと半分の生命エネルギーを使って作ることにした。しかも、あいつが2度とこの世界に来れないように地上とこの世界を繋ぐ所に結界を張った。そして、旅人だけ来れるように水晶の真下から覗くと結界をとく方法が分かる仕組みにしたのだ。あいつはそんな頭の回転が速くないので分からないと思ったからだ…」とそこには書かれていた。そしてここで終わっている。（わかりづらくてすみません）
ひろき達は最強の敵の過去を知ることができた。

ひろきはその文章が書かれている上を見た。すると、そこには最強の敵の絵が描かれていた。そこで初めてひろきは最強の敵の姿を見ることになったのだった。

夏子が外で呼んでいた。ひろきは夏子にあの絵を見せてはいけないと思い、慌てて外に出て「何にもなかった。」と言ったのだった。ひろき達が解読している間に、みんなは水晶の力を入れ終わっていたのだった。すると、ひろきは慌てて自分の持っている水晶に力を入れてこの世界を後にしたのだった。

村に戻ったひろきは、夏子が外にいる時にみんなにその話をした。すると、みんなは驚いた。すると、チョック達は更なる情報を集める為に、旅を続けると言ってきた。目的は封印した人の存在だ。どうやらあそこに書かれていたのはカイル達のことではないと推測したのだった。そして、ある程度誰なのかを把握していた。その旅人こそ、『ギガス』だということに。

そして、ギガスの情報を得るべく2人は旅立っていった。
こうして少しずつではあるが、水晶の秘密を解明していったのだった。

第１００話　１１個の水晶の謎（後書き）

過去の書かれた石盤の内容、わかりずらくてすみません。

第１０１話　ひろきとピカチュウ

ある日、ひろきが散歩をしていると、道端で倒れてるピカチュウを発見した。ひろきはすかさずそのピカチュウをミュウさんの所に運んだ。

ミュウさんはすぐ手当てをして、どうにか一命は取り留めた。そしてぐっすり眠っていた。そんな中、ミュウさんは驚くべき発言をした。なんとこのピカチュウ、ポケモン村にいたのではないらしい。どうやら野生のピカチュウのようだ。

しばらくしてピカチュウは目を覚ました。そこにはミュウさんがいて看病をしていた。すると、ピカチュウはいきなりミュウさんに攻撃してきた。そして、その隙にピカチュウは逃げ出したのだった。

ピカチュウはフォック村に向かった。フォック村ではひろきが日向ぼっこをしていた。そこにピカチュウは来た。ひろきは元気になったことを喜び、ピカチュウに近づいた。すると、ピカチュウは突然ひろきに攻撃してきた。ひろきはその攻撃を受けてしまった。

ピカチュウは電気ねずみのポケモンなので、電撃で攻撃して来る。ひろきは感電したが耐えて、そして、なぜこんなことをするのか問かけた。言葉が通じるかわからないが…。

ひろきが説得していると、ピカチュウが何かに脅えていることに気づいた。その為、ひろきはどうにかその不安を取ろうとしたのだが困難を強いられた。しかし、ひろきが説得していくと少しずつではあるが、ピカチュウはひろきに好意を持ち始めた。

その時、爆音と共に敵がフォック村にやって来た。すると、敵はピカチュウを見つけると「やっと見つけたぜ。」と言って近づいてきた。すると、ピカチュウは目の色を変え敵を睨みつけた。どうやら、こいつがピカチュウに怪我を負わせた奴だったのだ。

ピカチュウは『１０万ボルト』で敵を攻撃した。しかし、敵はまったく効いておらず、逆に敵は攻撃してきた。これによりピカチュウは吹き飛ばされた。そして、敵はそんなピカチュウに近づき耳を持とうとしていた。すると、そこにひろきの魔法が飛んできた。

敵は吹き飛ばされた。ひろきはピカチュウに近づき、大丈夫が聞いていた。すると、敵はそんなひろきに攻撃してきた。その攻撃は途中で網目状になり、２人に向かって来た。どうやら２人まとめて捕まえようとしているらしい。そう考えたひろきは、ピカチュウの前に立ち、その網を自分だけで受け止めようとしていた。そして、攻撃はひろきを捕まえ、ひろきは身動きが取れなくなってしまった。

そんな状態のひろきは、ピカチュウに逃げるように言った。しかし、ピカチュウはなんとひろきの前に立ち、ひろきを守る態勢をとった。敵はそれをいいことに、２人目掛けて攻撃を繰り返して来た。すると、ピカチュウは電撃を攻撃に当て打ち消していた。そして、全部打ち消し終わると、ピカチュウは敵に向かって電撃の攻撃をした。しかし、敵に電撃は食らわない。それでもピカチュウは攻撃を続けていた。

しばらくすると、敵の体に電気が流れるようになってきた。そして、ピカチュウが最大電気量を敵にぶつけると、敵は感電して消滅してしまった。

攻撃の後、ピカチュウはひろきを心配して近付いて来た。そんなピカチュウにひろきは大丈夫だと言って、ピカチュウを安心させたのだった。

その後、ひろきはピカチュウを『白』の水晶で回復させ、自分の森へ帰るように言った。するとピカチュウは帰ろうとせず、ひろきをじーっと見ていた。そしてひろきが「一緒にいたいのか。」と聞くと、ピカチュウは頷いた。仕方なくひろきはピカチュウと一緒に暮らす事になったのだった。

第１０１話　ひろきとピカチュウ（後書き）

俺も家にピカチュウが１匹ほしい。

第１０２話　名前を奪われた勇者（前書き）

千と千尋～にちょっと影響を受けました。

第１０２話　名前を奪われた勇者

ある日、ひろきはピカチュウに起こされた。ピカチュウが来てからというもの、ひろきはピカチュウに毎朝起こされていた。これによりひろきの生活は規則正しいものになっていた。

早く起きすぎたひろきは散歩するようになった。そして、いつものようにピカチュウを連れ散歩に出かけた。すると、行く道端で年老いた男性が木の側で座っていた。

ひろきは挨拶をして去ろうとした。すると、男性はひろきを止めた。そして、こちらへ来るように言ってきた。ひろきは仕方なく近づいた。すると、男性は紙とペンを差し出した。その後、男性は紙に名前を書くように言ってきた。すると、ひろきは紙に『ヒロキ』と書いたのだった。すると、男性は「本名を書かんか。」と言ってきた。仕方なくひろきは『菅谷紘輝』と書いた。ここに来て初めて本名を打ち明けた。すると、男性は「菅谷紘輝か…。」というと、紙に魔力を送った。すると、『菅谷紘輝』の字が紙から離れた。そして、消えてしまった。すると、男性は笑い始めた。

そして「かかったな。」とひろきに言ってきた。

ひろきが驚くと、男性は正体を現した。なんと、男性はキリトという悪魔族の手下だった。

ひろきは早速魔法で攻撃しようとした。しかし、魔法が出なかった。おかしいと思ったひろきはキリトに聞いてみた。すると、キリトはひろきに話し始めた。話によると、ひろきは名前を奪われてしまって、それにより魔法も自分の名も忘れてしまったという。そして、それを治すにはキリトがひろきの名前を言うか、ひろき自身が思い出すしかないのだという。そう言ってキリトは姿を消していった。

仕方なくひろきは村に帰ることにした。その為、ピカチュウを呼ぶ

と、ピカチュウは突然逃げてしまった。ひろきはすかさず追った。
すると、ピカチュウはフォック村に入っていった。そして、近くにいたフォックの後ろに身を隠した。
ひろきはピカチュウにどうしたのか聞いてみた。しかし、ピカチュウは一向にフォックの裏から出ようとしなかった。すると、フォックがひろきに話しかけた。
「おまえ誰だ。」
その言葉にひろきは驚いた。フォックが自分の事を忘れていたからだ。ひろきはすかさず説明しようとした。しかし、名前が出てこない。その為、自分がフォックの仲間だということは伝えられなかった。

しばらくすると、犬次郎もやってきた。ひろきは「犬次郎。」と叫んだ。すると「おぬし、何者でござるか。」と言ってきた。それを聞いてひろきは感づいた。どうやら名前を奪われた事により、みんなからひろきの記憶が消えてしまっていたのだ。これは大変だ。

フォック達はひろきを不振に思い、攻撃をしてこようとしていた。すかさずひろきは「天使族の旅人だ。」と言って攻撃を免れた。そして、ひろきはフォックの家に招待された。
フォックはひろきの名前を聞いてきた。しかし、ひろきはまだ思い出してなかった。仕方なくひろきは『カケル』という偽名を使った。その後もフォックはいろいろ聞いてきた。そして、ひろきは今までフォック村で起こった事を入れながら話し、どうにか自分の事を思い出してほしいと願っていた。
その時、外で爆発音が聞こえてきた。フォックはひろきにここで待っているように言って外に飛び出した。しかし、ひろきは気になり外に出た。すると、そこにはキリトの姿があった。

すかさずひろきが「そいつが俺の本当の名を盗んだ犯人だ。」と言

って、フォック達に注意を呼びかけた。しかし、フォック達には意味が分からず、シカトをした。

フォック達は攻撃をしだした。しかし、キリトはすばやくかわし逆に攻撃してきた。しかもひろきの方にも攻撃してきた。すると、犬次郎がひろきの前に立ち、攻撃を庇ってくれた。そして「外に出るなって行っただろ。」と怒られた。その為、渋々ひろきは家に入ろうとした。すると、キリトがついに口を滑らし、ひろきの名前を言ってしまった。その瞬間、ひろきの体は光り、自分の名前をはっきりと思い出した。そして、フォック達もひろきの事を思い出した。

ひろきはすかさずキリトの前に立ち攻撃を開始した。魔法はちゃんと出た。そして、魔法はキリトに向かっていった。すると、キリトはかわした。しかし、今度はフォックが攻撃した。だが、その攻撃もかわされた。

そんな中、ピカチュウが雷を落とした。すると、それはキリトに当たり、キリトを痺れさせた。そこにひろきが突っ込んだ。そして、攻撃を食らわした。キリトは吹き飛んだ。そこにひろき、フォック、ピカチュウ、そして、犬次郎が攻撃を放った。その攻撃は1つになってキリトを襲った。その後消滅してしまった。

戦いが終わった後、フォック達はひろきに、本名が『菅谷紘輝』なんだということを聞いてきた。ひろきはしぶしぶ頷いた。こうして、ひろきの本名は世界中に広がっていった。

第１０２話　名前を奪われた勇者（後書き）

この物語はフィクションです。実際の人物、建物、団体には一切関係ありません。

第１０３話　恐怖のバレンタインデー（前書き）

これを載せるかどうか１０分悩みました。
できるのであれば、読んでほしくない。
欲望が満載で、ちょっとイタイ。

第１０３話　恐怖のバレンタインデー

ひろきはある日、フリーザーさんと話していた。（忘れているかもしれないが、フリーザーさんは配達の仕事をしています。）

ひろきは前に住んでいた所（元の世界）では、来週の今日（２月１４日）に女性が、大切な人に甘い物をあげていたということを話していた。すると、フリーザーはそれを面白がってみんなに伝えると言って飛び立った。そして、その話は世界中に広まっていった。

そして２月１４日。ひろきはそんな話をした事を全く忘れていた。そして、今日はなんと都会地帯に買い物に行くことになっている日で、ひろき達は準備をして向かって行ってしまった。

その頃、都会地帯では大変なことになっていた。町の女性が、お菓子屋の前に行列を作っていたのだ。そして、あちこちで女性が男性に甘い物を渡していた。この町にもバレンタインは広まっていた。

町の端ではあのリポーターの阿部がバレンタインのニュースを生で中継していた。ひろきはそんな阿部を空中で発見した。

すかさずひろき達は阿部の上を飛んで、別の場所に降りようとしていた。すると、阿部の近くにいた奴がひろきの存在を叫んでしまった。すると、阿部はその話に耳傾けると、本番中にもかかわらず、カメラマンの中野にひろきの方を映すように言ってカメラを向けさせた。そして、発見者がひろきのいる方を言ってカメラを向けさせると、そこには確かにひろきの存在があった。そして、その姿をカメラは捕らえた。そして、町中のテレビにそれは映し出された。そして、とうとう始まった。

「皆さん。緊急ニュースです。あのひろきさんが、このバレンタイ

ンという日に、我が町に訪れました。テレビの前の皆さん。特に女性の方、甘い物をあげるチャンスです。もしかしたら、渡してくれた人に愛が芽生えるなんてことも…。あーっ、もう中継なんてしてる場合ではありません。私、実はこのことを予想して、あらかじめ甘い物を買っておきました。恥ずかしながら私、四十歳、出撃したいと思います。では。」そう言って走っていってしまった。

ひろき達はなんとか人のいないところに降り立った。しかし、フォック達はすぐに帰ろう的なことを言ってきた。しかしひろきは「必要な物を買いに来たのに、買わないのは駄目だろう。」的な事を言って、ここに残ると言ってきた。仕方なくフォックと犬次郎は付き合うことにした。するとその時、犬次郎の服を誰かが引っ張っていた。犬次郎が見るとそこには小さな女の子がいた。3人は驚き、逃げようとした。

しかし、女の子はひろき達の存在をばらそうとしていた。すかさず犬次郎はそれを止めた。すると、女の子は犬次郎に砂糖菓子を渡してきた。どうやらこの女の子、犬次郎のことが好きらしく、甘い物を渡しに来たのだという。犬次郎はそれを受け取ると「ありがとう。」といって、女の子の手を握ってあげた。すると、女の子の顔は真っ赤になり、照れを隠せない状態になっていた。

そんな女の子に犬次郎は「拙者達がここにいることを言ってはならぬぞ。」と言った。すると、女の子は走っていってしまった。その後、犬次郎は砂糖菓子を見つめながら「案外、うれしいものでござるな。」と呟いた。しかし、ひろきは外に出たら、それが一気に押し寄せることを告げて、犬次郎に警戒するように言った。

そして、移動すべくひろき達は路地から道へ出た。すると、即効で町人に気づかれた。仕方なくひろき達は飛んで逃げようとした。しかし、フォックが捕まった。それを助けようとひろき達が戻ると、ひろき達も捕まった。そして、周りを囲まれてしまった。すると、ひろきは『グレー』の水晶があったことを思い出した。ひろき達は

それを早速使い、ビルの上に移動し脱出に成功した。かと思いきや、ひろき達は誰かに捕まった。

ひろきが確認すると、それは阿部だった。すると、阿部は「町の人から逃げたいんなら、私の所へ来てください。」とか言うと、近くにあったヘリにひろき達を乗せた。そして、どこかに向かって飛び立った。

ひろき達が降りると、そこにはテレビ局があった。そして、中に入るように言われたので中に入ると、スタジオに案内された。そして、いつの間にか本番になってしまった。こうしてひろき達はテレビ出演を果たした。

この番組はトーク番組らしく、ひろきの横でおしゃべり好きなサッチーこと鈴木幸子がひろき達に質問を投げかけていた。ひろき達はその質問に、適当に返していた。すると、今度は魔法を見せてほしいと頼んできた。ひろきは早速手に魔法球を作るとスタジオにいるみんなが驚いた。

番組は最後の方になっていた。そこで幸子は「テレビの前の皆さんに一言。」という振りで番組を終わらせようとしていた。すると、ひろきは「テレビの前の皆さん。それから、この放送をお聞きのみなさん。あなた達の甘い物を渡したいという気持ちは分かります。しかし、それは受け取れません。気持ちだけで十分です。本当、俺らのためにありがとうございました。みんな大好きです。」と言った。すると、スタジオ内に拍手が鳴り響いた。そして、番組は終わったのでひろき達は帰ろうとした。すると、阿部が近づいてきて、3人に甘菓子を渡して来た。ひろき達は受け取れないと言って帰ろうとした。しかし、阿部は「受け取りなさいよ。」とか言って渡してきた。ひろき達は渋々受け取った。

テレビ局の前に出ると、たくさんの人がひろきを待っていた。こ

の放送は街中にある巨大なテレビで映し出されていて、テレビ局にいることは知っていたのだ。ひろき達が慌てると、警官が抑えているのを発見した。どうやら近づくのを遮断したらしい。その為、ひろきたちは安心した。

　すると、突然放送が入って3人の女性がひろき達に近づいてきた。どうやらこの子達は応募で選ばれた人らしく、甘い物を渡せることができる唯一の3人だった。しかも、ひろき、フォック、犬次郎にそれぞれ1人ずつ、みんなそれぞれの好きな人の前に立っていた。そして、3人は放送と共にひろき達に甘い物を渡した。すると、ひろきに渡した女性が「この間は助けてくれてありがとうございました。」と言ってきた。その言葉に最初ひろきは訳が分からなかったが次第に思い出していった。なんと、この女性は第六十五話四章で敵に捕まってしまった女性だったのだ。

　そのことでお礼が言いたかったとずっと思っていたらしい。しかも、彼女が渡した甘い物は2つだった。どうやらもう1つはハム太郎達を持っていてくれた女性の物だという。ここに立てなくて残念だったが彼女に甘い物を渡してほしいと頼んだらしい。それを聞いたひろきは人ごみの中からその人を探し、来るように言った。すると、彼女は小走りで近づいてきた。すると、ひろきはそんな彼女達に「迷惑かけたね。」とか言って2人を抱いたのだった。それを見たフォックも目の前の女性をお姫様抱っこした。すると、犬次郎は女性の手にキスをした。会場からは悲鳴が聞こえていた。

　そんなイベントが終わると、ひろき達は帰っていった。そして、村に着くと夏子が待っていた。すると、夏子は3人に甘い物を渡した。渡してきたのは2つで、どうやらもう1つはミュウさんのらしい。3人は貰った物の中でそれが一番うれしく思えたのだった。

　そして次の日、ミュウさんと夏子の甘い物意外は全て、ダイキ達に配ったのだった。

数日後、フォックの所に外灯が届いた。これを買いに行ったのに阿

部に連れ去られて買えなかった為、テレビ局にギャラの代わりに買ってもらい、贈ってもらったのだった。

第１０３話　恐怖のバレンタインデー（後書き）

俺が女だったら、犬次郎に惚れます。
もらったチョコレートを子供にあげるなんて…ひどーい。とか思わないでね。

第１０４話　ハムスターになるひろき

ある日、ひろきは町民地帯に来ていた。どうやらハム太郎達に会いに来たらしい。しかし、ひろきはハム太郎の暮らしている家が分からなかった。

ハム太郎達は、ミュウさんの作ってくれたワープ通路によって『地下ハウス』という所からフォック村に来ていた。しかし、ひろきはそのワープ通路が小さ過ぎて通れなかった為分からないのだ。その為、今日はそんな住まいを探しに来たのだ。

ひろきは最初にハム太郎達に会った場所で待つ事にした。すると、眠くなり近くにあった原っぱで仮眠をとることにした。その最中、ひろきの体は異変が生じていた。なんと、姿形がハムスターになってしまったのだ。

しばらくして、ハム太郎が近くを通った。すると、ハム太郎は近づいて来て、寝ているひろきを起こした。そして、ひろきが目覚めるとハム太郎は「きみ、どこから来たのだ。」と言ってきた。ひろきは意味が分からず言葉を失っていた。すると、ハム太郎は自分の名を言ってひろきの名前を聞いてきた。

ひろきは自分の名を言おうとした。その時、ひろきは自分の体がおかしい事に気づいた。そして、近くにあった池でとうとう姿を知ってしまった

ひろきはハム太郎に『ひろき』という名前を言って気づいてもらおうとした。しかし、鈍感なハム太郎が気づくことはなかった。そして、ハム太郎はひろきを地下ハウスに連れていった。

地下ハウスではハム太郎の仲間（こうし君達）が歓迎してくれた。そして、様々な事をひろきに聞いてきた。ひろきはなんとか考えて質問に答えていた。剣も服もハムスターサイズになっていたのでとりあえず『マルク』という旅人という設定にした。その事だけで女

の子達（リボンちゃん、マフラーちゃん、トラハムちゃん、ちび丸ちゃん）の興味をそそっていたのに、顔が神様に変えられままハム顔になったので人気が急上昇していた。

しばらくして、ひろきが再度ハム太郎に自分が『ひろき』であることを伝えた。すると、やっとハム太郎は気づいたのだった。しかし、ひろきは他のみんなには言わないで欲しいことを伝え口止をした。ハム太郎はそれを了解した。

しばらくして外で遊ぶ事になった。その為、外に出ると猫がひろき達の前に現れた。すると、ひろきはみんなに逃げるように言ってひろきだけが猫に向かって行った。そして、魔法を猫に向かって放ち猫を撃退させた。その様子をハム太郎達は見ていた。

猫が去った後、ハム太郎達はひろきに近づき喜びを露にしていた。女の子達はそんなマルク（ひろき）に惚れてしまった。

日が暮れて来てみんなは帰る時間になった。ひろきはハム太郎の家に泊まって、明日またみんなと遊んでから旅立つということにした。ひろきは地下ハウスからフォック村に帰れるのだが、帰ったら帰ったで、フォック達に説明しないといけないので、面倒くさくなり泊めてもらうことにしたのだ。そして、ハム太郎に案内され、ひろきはハム太郎の家（ロコちゃんの家）に着いた。

ハム太郎とひろきは樋を伝って2階に行き、ハム太郎はゲージの中に入った。ひろきはカーテンの裏でロコちゃんの帰りを待つことにした。

数分後、ロコちゃんが帰って来た。そして、部屋に入りベッドに座り、ハム太郎に挨拶をした。そんな時、ひろきがカーテンの裏から顔を出した。それにロコちゃんは気づいた。

最初は驚いたロコちゃんだったが、ひろきがロコちゃんの指に顔

をなすりつけていると、しだいにロコちゃんはそんなひろきをかわいいと思うようになり、そして、ひろきを手に乗せ親の所に持って行った。すると、親は驚き「ハム太郎に会いに来たのね。」と言ってハム太郎に会わせてみるように言ってきた。すると、ロコちゃんは「ハム太郎と一緒に寝かせていいかな。」と言った。すると、親は「それはハム太郎が決める事じゃないかな。」と言ってなんとなくだがオッケーしてくれた。

早速ロコちゃんはハム太郎のいるゲージにひろきを入れてみた。ひろきとハム太郎は仲良く見せる為にじゃれ合ったりして、ロコちゃんをホッとさせた。

寝る時間になり、ロコちゃんは日記を書いていた。その前にはハム太郎とひろきが座っていた。そんな中、ひろきがとうとうロコちゃんに喋りかけた。ひろきが喋るとロコちゃんは何かに気づいたらしく、辺りをキョロキョロした。すると、ひろきは自分の方を向くように言って向かせたのだった。

ロコちゃんは驚き、意味が分からなくなっていたが、なんとかひろきがこれは夢だと言うことを伝え、冷静さを取り戻させた。そして、ロコちゃんは夢ならばといろいろ話しかけて来た。ひろきもハム太郎の通訳として喋ったりしていた。そして、ついにはハム太郎がロコちゃんの事を好きということまで暴露したのだった。

そんな話にロコちゃんも「私もハム太郎のこと大好きだよ。」とか言ってハム太郎を照れさせたのだった。

しばらくして、ひろきは「もう起きる時間だから布団に入って。」と言って寝かしたのだった。その後、ハム太郎とひろきはずっと朝まで話をしていた。

朝になりひろきは外に出ていた。ロコちゃんに夢だったと思わせるためだ。そして、ロコちゃんは目覚め、楽しい夢だったと言ったので作戦は成功した。親の記憶もロコちゃんが寝た後「これは夢である。」と言いながらお喋りをして、マルクの存在を夢だと思わせ

ていた。
　ロコちゃんが学校に行くと、ハム太郎達は庭に出てきた。その時、ひろきの体は光り元の人間の姿に戻ったのだった。
　すると、ひろきはそのまま地下ハウスの入口まで行き、みんなに挨拶をした後で村に帰って行った。ハム太郎はみんなに「マルクは朝早くに旅にでてしまったのだ。」と言ってみんなに説明したのだった。しかし、マルクの存在はみんなの頭の中に残ったのだった。

　その頃、ある事故現場にドラ・ナターシャの姿があった。どうやら事件を解決させたようだ。すると、ナターシャはフォック村に向かって歩き始めた。

第１０４話　ハムスターになるひろき（後書き）

これで、第２章も終わりです。お疲れ様です。
次、第３章になりますが、ここでいったん、連載を休止します。
理由は多々ありますが、一番の理由が、７月３日に行われる教員採用試験のためです。テスト勉強のために休みます。
明日、キャラの設定を簡単にまとめたものを書きますので、それにていったん休止します。

で、ここまで読んで気づいた人はいるかも知れませんが、実はこの小説、今現在、同時進行で書いている『ドラえもんズ　幻の宝物』につながります！！

なので、そちらが終わり次第の連載になるかもです。
予定としては１０月１日からこちらの小説、第３章の連載再開したいと考えています。それまでにドラズの方を終わらせないといけません。

その為、この物語を整理しておくか、ドラズの方を読んでない人はそちらを読んでおく等して待っていてください。

また、第３章をはじめる前、つまりは１０月１日前に、幻の宝物の要約文。及び、設定資料と題して、物語の世界観を伝えていきたいと思いますので、よろしくお願いします。いつになるかは、分かりませんが、とりあえず、９月です。
でわ、次が出るまでさようなら。

設定資料1（前書き）

簡単な登場人物の説明

設定資料1

菅谷紘輝（すがやひろき）
高校2年生
勉強は嫌いで運動は大好き。
家が大工であり、ノコギリなどはお手のもの。しかし、物語中で出てくる事はない。
帰宅途中に異世界へ飛ばされる。そして、カイルという謎の人物に会い。天使族を助けるように命じられる。
拉致の犯人（神様）に特別な力を授けてもらっていて、人間離れした身体能力を持つ。修行すれば身体能力も上がるらしく。努力と力が比例するらしい。また、特別な力により、痛みを感じなくできる。意識をすることによって感覚が分かる。最初は生活は大変だったらしいが、カイルとの修行で慣れたらしい。
白色の水晶を保持していて、何かを守りたいという、天使族の心を持っている

河嶋博（かわじまひろし）
高校2年生
勉強はそこそこでき、スポーツも人並みにできる
冷静に物事を見て、問題もすんなり解ける
家は花屋とかわいらしいが、本人はゲームデザイナーになりたいと思っている
　ひろきと共に自転車の2人乗りをしている最中に異世界へ飛ばされた。
修行まではと共に過ごしていたが、修行が終わった直後に黒水晶を受け取り、悪魔族の加勢をすることになりとは別々の道に別れていった。
　ひろき同様、特別な力を授けてもらっていて、人間離れした身体

能力を持つ。
また、黒色の水晶を保持していて、何かを壊したいとかという、悪魔族の心を持っている

金谷淳（かねやあつし）
高校2年生
勉強、スポーツともに優れている
父親が警察官の影響で自分の将来の夢も警察官だとか。
ひろき達とは違う場所で世界に飛ばされた。
いつ登場するのか等は不明

駆陸海渡（かけりくかいと）
25歳　彼女なし
ひろき達のクラスの担任
やたらテンションの高い授業をする。紘輝達にはなんやかんや言われているが、信頼関係は築かれている。
大雑把な性格で他の人とは何かが違い、教師に見えない。
自称「タイミングがいい教師」

カイル
42歳
ひろき達を修行させ、異世界での生活のことをサポートしてくれた。
今でも、何かと助けてくれる。
悪魔族、天使族どちらにも顔が通る。
　とある理由で攻撃をすることができない。
過去にフォックや夏子とかかわりを持っている。
なぜか地球のことをしっている。

フォック・アルガハド
２２才
フォック村の村長をしている。両親がいなく、父親に至っては生まれた時からいなかった。母親は戦争のさなかに魔王によって殺された。それ以来魔王をうらんでいる（詳しくは第８３話参照）
責任感を十分に持ち、日々フォック村の発展を目指して努力している。
彼女はいないようで１人で暮らしている。
ひろきを村に住むように提案した人で、人情に溢れている。
誰からも頼りにされるお兄さん的存在になっている。

ギル・チョック
１７才
幼少時代に自分の村が戦争の激戦区になってしまい、両親と別れた後、フォックに助けられそれ以来、フォック村に住むようになった。
姿や性格は人間そのものだが、１００パーセント人間というわけではなく、体内にクリスタルを宿し、それが命の源になっている。

バズ・チョック
年齢不詳
ギル・チョックの父
戦いに巻き込ませない為にギルを島流しにした。
その後、妻（ギルの母）と探すはずだったが、妻は死んでしまい、ギルを守って欲しいという母親の願いを抱きギルと再会した。
今はギルと一緒に旅にでている。
また、ギルと同じようにクリスタルが命となっている。

カービィ

年齢不詳、性別、多分男
プププランドに住む星の戦士（現在はフォック村在住）
相手を吸い込むことで相手の技や能力をコピーできる。
カービィにはリックやクーといった仲間がいるが本編では登場しない。
彼女はいるのかどうか不明だが、『星のカービィ６４』においてリボンという妖精にキスをされていた。
カーピィという妹を勝手に俺が作ったが、本編に登場することはそんなにない

ミュウさん
とりあえず、女性
フォック村の近くにある島をポケモン村を作り、そこの城に住んでいる女王さま。
ポケモン村にいるポケモン全ての管理に務めていて、村のポケモンを傷つけられると怒る。
回復魔法が得意でひろき達のよいサポート役になっている。また、平和にする為、自ら剣を持ち、ひろき達と共に戦っている。

ハムチィー
１４歳（人間換算で）
ひろきの強さに憧れて、ひろきの弟子になった巨大ハムスター（まぁ３０ｃｍくらい）
あまり強いとはいえないが、諦めない心は誰よりも強い。
ハム子という彼女がいる設定だが、本編では出さない。

ちなみに作者の俺も『ハムチィー』という名前だが、全くの別人として考えてほしい

マリオ

配管工の仕事をしていたが、とある拉致事件をきっかけに冒険家になった赤い帽子を被り、オーバーオールを来たおじさん?
年齢は１８才ということにしている。
驚異的な脚力を持ち、だれよりも高く跳ぶことができる。

タケル
１６才
小柄な体型だが、自分と同じくらいのブーメランを自在に操る。
命中率が抜群によく、狙った所に攻撃を当てることができる。

ちなみにモデルは『ビックリマン２０００』のタケルです。

犬次郎（けんじろう）
２０才
ひろきに命を救われ、恩返しがしたいということで仲間になった。
剣士というか侍。刀にいたってはひろき達の中で一番強い。しかし、魔法が少ししか使えない
『神楽』という彼女がいるらしい。
両親はどちらもいなく、兄もいたのだが行方不明になっている。
現在、フォック村在住

ドラえもんズ
物語中は全員１５歳（製造１５年目）という設定にしてある。
ドラえもんをリーダーとして集まった7人のネコ型ロボットの集団
親友テレカという道具を使い、悪事を働くものを退治していく。
それぞれに特徴があるのでここから別々に説明する

ドラえもん
ドラえもんズのリーダー。性格は優しく悪人も改心させてしまうことがある。さらにはいざという時に力を発揮できる。

しかし、ネズミが嫌い故にハムチィーにもあまり近づこうとしない。

ドラ・ザ・キッド
右手に空気砲を装備した保安官代理。
早打ちには自信があり空気砲を用いて次々に敵を倒していく。
しかし、高所恐怖症で高い所にはいけない。

王ドラ
Ｗｉｋｉｐｅｄｉａではロボット学校一番の秀才となっているが、この物語の中では、一番ではない。
常に丁寧語で話し、性格は優しい。
カンフーが得意で敵と戦うときも、ヌンチャクといった道具で戦う。
足が短い事を気にしている

ドラニコフ
言葉を発する事は少なく、喋ったとしても「ガオ」などオオカミの鳴き声のような言葉しか話さない。
丸い物を見るとオオカミのような姿になる。同時に辛い物を食べると火炎放射を吹く。
寒いのが嫌い。

エル・マタドーラ
プレイボーイで昼寝（シェスタ）好き。シェスタしないとパワーがでない。しかし、ドラえもんズ一の力持ちである。
蛇などのひょろひょろと細長いものと女装した男が嫌い。

ドラメッド?世
魔法（ひみつ道具）を用いて敵と戦う。怒ると巨大化し暴れ回る。
水が苦手で泳げない上に巨大化した体も元に戻る。

ドラリーニョ
運動神経が抜群でありながら物忘れが激しい。１１人のミニドラ軍団を連れているということだが、ここでの物語中では出てこない。

微風　夏子〔ナミラク〕
１７歳
かぐれ村に住む少女。
幼き頃、戦争の最中に魔法が使えるという理由で捨てられたらしい。カイルから水晶を貰い、お守り代わりに持っていたが魔法が使える為、力を発動。それによりひろき達の危機を救ってきたが、使ったことにより記憶が抹消し、捨てられたことや水晶の事などを忘れてしまった。
今は守ってもらうという理由でひろき達の仲間になっている。

ダイキ
１２才　男
子供村でリーダーをつとめる男の子
１７年前の戦争で無事に親は生き残ったのだか、ダイキが生まれてすぐ悪魔族の襲撃にあい殺されてしまった。その為、１人で生きて行くことになるが、旅に出た時に今住んでいる島に流れ着き、そこで生活するようになった。
魔法が少し使え、ひろきのことを尊敬している

イナバ
１５くらいかな？　男
不思議村に住むウサギの探偵助手。
以前まで写六という探偵の助手をしていたのだが、写六が旅立ち一人で探偵活動をすることに。しかし、アリスという花屋の娘と一緒に事件解決することが多い。
　ひろきの仲間になりたくて、推理の際身につけた洞察力を遺憾な

く発揮させ、敵の弱点を見つけ出すというスキルを身につけた。しかし、戦いなどは好まず、力も弱い。ハムチィーよりも多分下。

モデルってか出身は天才テレビくんで昔やっていた『アリス探偵局』

ピカチュウ

オス

頬に電気を溜め、放電することができる。

傷だらけになっていたところをひろきに助けられ、ひろきの仲間になった。

ひろきと生活を共にしていて、いろんな面でひろきをサポートしている。

設定資料1（後書き）

それでは、よい夏休みを送ってください。
9月に会いましょう。

では、

特別編1　戦いの始まり（前書き）

こんにちは、お久しぶりです。

今日から再開したいと思います。
で、この特別編は『小説家になろう』で書いてるドラズ小説『ドラえもんズ　幻の宝物』の要約文になっています。

ぶっちゃけ、要約文ではさまざまなところをはしょっていて、内容が薄いモノになっています。私自身、ちゃんとした方の小説を読んでほしいと思っています。物語が、何気につながっているからです。

なお、これが終わったあと、水晶伝説　第3章を始めていきたいと思うのでよろしくお願いします。

特別編1　戦いの始まり

ある日、ドラズは手紙を貰った。そこには、ある場所に集まるように書かれていた。そして、7人はその場所に集まった。
しばらくすると、そこに誰かが訪ねてきた。その人は『ドラ姫』と言う名前で、ある国のお姫様らしい。そして昨日、幼馴染みで一緒に暮らしている『デビル・ザ・ドラゴンフェニックス』（デビドラ）と仕事をしていた時、『クリスタル・ザ・エレファント』（クリエレ）という敵に襲撃されたという。そして、ドラ姫の母の形見でもある宝石を狙ってきたのでここまで逃げてきたという。その途中でデビドラが囮になり、ドラ姫だけ逃げることになったらしい。そして、クリエレは国をのっとり、城に住み着いたという。町の人達はいなく人体的被害はないらしい。その為、国を取り戻すのとデビドラを助ける為。ドラズに助けて欲しいと頼んできたのだ。
ドラズは早速、ドラ姫の暮らしている国に行くことにした。そして、ドラ姫の国に着くと，とりあえずデビドラを探す為，ばらばらに探す事にした。
ドラズがそれぞれ探していると、それぞれの前にクリエレの仲間が襲撃してきた。それぞれ『ルビー・ザ・サスペンス』（ルビサス）『サファイヤル・スプリング』（サファスプ）『アース・デ・クリントル』（アース）『トルネード・バースト』（トルバー）『イナズマ・スペクタクルー』（イナスペ）『エメラル・グリーンズ』（エメラル）『シャーベットル・サンクロズ』（シャーサン）そして、補助に『弓引弥生』（弥生）と言う名前で、こいつらの圧倒的な強さによりドラズは城に連れて行かれた。しかも、こいつらは魔法が使えて、それぞれルビサスは『火』、サファスプは『水』、イナスペは『雷』、アースは『土』、トルバーは『風』、シャーサンは『氷』エメラルは『草』というように分かれていた。それから弥生は、魔法は使えないのだが弓道の腕はトップクラスであり、命中率が半

端なかった。そんな戦いの中、誰かが国に入って来た。なんとそれは、あのドラ・ナターシャだった。そのドラ・ナターシャは城に向かって行った。

特別編2　新たな仲間

城は崖の上に立てられていて、崖の下には森が広がっていた。そんな城の中では、クリエレの前に気を失ったドラズの姿があった。そんな時、誰かが側の廊下を通りみんながいる部屋を覗いた。それはドラ姫だった。そして、そこで初めてドラズの存在に気づいたのだった。なんと，ドラズを連れて来たのは偽者だったのだ。

ドラ姫が覗いていると、クリエレが部屋から出ようとドラ姫の方に向かって来た。ドラ姫がどうするか悩んでいると、誰かがドラ姫を連れ天井裏に行った。ドラ姫が確認すると、それはドラ・ナターシャだった。ナターシャはドラ姫に仲間だということを告げ、クリエレが去った後、一緒にドラズを助けようと言ってきた。

部屋に突入した2人はドラズを助けようとした。しかし、クリエレの仲間が気づき攻撃してきた。すると、その攻撃はナターシャが打ち消した。ナターシャも魔法が使えたのだ。

その間にドラ姫がドラズを助けようとしていた。しかし、いきなりドラ姫はイナスペに捕まってしまった。そこでナターシャは何かに気づいたのだった。

イナスペはドラ姫に大丈夫と言い続けていた。なんと、イナスペはタイムパトロールの1人で、ナターシャと仲間だったのだ。イナスペはクリエレの集団に潜入していたのだ。

ナターシャは激しい攻防を繰り返していた。そんな中で、サファスプがイナスペの正体を知ってしまった。すると、他の奴らはイナスペに向かって攻撃してきた。すると、弥生がイナスペの前に立ちイナスペを守ろうとした。すると、イナスペは弥生を退かし、自分から攻撃に当たりに行ったのだった。そして、攻撃が当たる瞬間、イナスペは腕を振り下ろした。その後、イナスペは吹き飛ばされ、壁に当たり壁に穴を開けた後、崖下に落ちていった。

ナターシャはその様子を見て激怒した。それに対抗しようと敵も攻

撃してきた。と、次の瞬間、いきなり雷が敵に落ちたのだった。
イナスペは好きな時に好きなだけの電圧を持つ雷を呼ぶことが出来て、この雷は時間差でイナスペが出した雷だったのだ。そして、雷によりトルバー、シャーサン、サファスプ、エメラルは命を落としてしまった。残ったアースとルビサスは倒れていく仲間からトランプを受け取った。その後、ナターシャやドラズを攻撃してきた。
ここでトランプが出てきたがこのトランプは実はドラ姫が持っている魔法の宝石のもう1つで、誰かに気づかれないようにトランプにした物だった。そしてそれは14枚あり、全て『ハート』であり、残った1枚は『ジョーカー』になっていた。そして、そのトランプは1人1枚ずつ持っていたのだった。
ナターシャはルビサスの火からみんなを守った。しかし、アースの攻撃により床に亀裂が入り、ドラズやナターシャがいる方が崖の上から落ちていってしまった。しかし、みんなはなんとか生きていた。すると、イナスペと弥生が仲間になることを言ってきた。どうやら弥生は操られていたらしく、落下の衝撃で解けたらしい。その為、仲間になったのだった。

特別編2　新たな仲間（後書き）

小説の方だとここまでの話までに十章使ってます。

特別編3　操られた仲間

みんなは日も暮れそうなので移動することなった。すると、ナターシャは頭に被っていたターバンを取るとそれを広げた。そして指（ネコ型ロボットに指はある）を鳴らすと、そのターバンは浮いたのだった。なんとそれは、ターバンではなく『空飛ぶ絨毯』だった。みんなはそれに乗り移動した。すると、洞穴を見つけたのでそこで泊まることになった。

みんなが降りて最後にナターシャが降りようとした時、ナターシャは倒れてしまった。イナスペがどうしたのか調べると、ナターシャは熱がでていた。どうやらルビサスの火により熱が出てしまったらしい。みんなは急いでナターシャを洞窟で休ませることにした。

しばらくして、ドラ姫が『熱を下げる草』があることを思い出した。それを聞いたドラズは探しに行くことにした。そして、ドラ姫もついて行くことになり、イナスペと弥生にナターシャを頼み、みんなは探しにいった。

しばらく様子を見ていると、突然誰かがイナスペと弥生を襲って来た。突然の攻撃にイナスペと弥生はどうすることもできず、攻撃により気を失ってしまった。すると、攻撃してきた奴はナターシャを連れてどこかに行ってしまった。

ドラズ達は帰って来てナターシャがいないことに驚いた。急いでイナスペ達を起こし事情を聞いた。

ある程度状況を掴んだドラズ達はナターシャを探し始めた。すると、ドラえもんが地面に血が垂れているのを発見した。それは森の中に続いていたのでみんなは追ってみることにした。

しばらく行くと、そこにはナターシャが立っていた。みんなは近づき、無事かどうか聞こうとした。すると、ナターシャはドラズ達に攻撃してきた。

ドラズ達は驚き、なんでこんなことをするのか聞いた。すると、ナ

ターシャは「俺はクリエレの仲間だ。」と、とんでもないことを言い出した。そして操られているのだと察知した。そして、どうにか元に戻そうとしたが、ナターシャは強すぎて攻撃をかわすことだけで精一杯だった。もうどうしようもないと誰もが思った時、ドラ姫は小さい時に母親に言われた事を思い出した。

ドラ姫はクリエレが狙っている宝石を持っていた。これは代々守られてきた貴重な魔法の宝石で、この世に2つ存在していた。そして、もう1つはクリエレの手に渡っていた。そして、それとは別にもう1つ魔法の宝石を持っていた。これが母親の形見だった。

ドラ姫の両親はドラ姫が小さい時に死んでしまっていたのだ。もともとこの城は親達のもので、死んでしまった為、子供であるドラ姫が受け継ぐことになったのだ。しかし、子供では国を守れないということで、国民は国から出て行ってしまったという。しかし、ドラ姫は城から出ることはなく、1人で暮らしてきたのだ。そして、デビドラとの関係だが、デビドラも両親が死んでしまっていて、施設から逃げ出してここの城に来た子供だった。そして、ここに着たデビドラをドラ姫が発見し、一緒に暮らすことになったのだ。それから、ドラ姫、デビドラの他に4人のドラえもんと同じネコ型ロボットが城に迷いこんだことがあり、それ以来、一緒に暮らすようになったという。このようにクリエレが来るまで6人で暮らしていたという。

そんな母親の形見の宝石は、母親に『どうしようもない時に使え』と言われていた。ドラ姫はナターシャとの戦いの中でそのことを思い出していた。そして、今使う時だと考えた。そして、ドラ姫は使おうとした。しかし、使う為の呪文を忘れてしまっていた。

ドラ姫はなんとか思い出そうとしていた。そして、ナターシャとの戦いの中でヒントを見つけ、ついに宝石を発動させる呪文『カラフル・デ・コバデカラ・スペクタ・オブ・スター』を思い出したのだった。

ドラ姫は宝石をナターシャに向けて呪文を唱えた。すると、宝石か

ら光が放たれてナターシャを包んだ。すると、ナターシャの体から黒いオーラが抜けていき、ナターシャは元の正義感に溢れた姿に戻ったのだった。しかも、熱も下がっていて体も元に戻っていた。

特別編3　操られた仲間（後書き）

ちなみにこの小説を作ったのは中学生のときです

特別編４　星空の下で

みんなは洞穴で寝ることにした。しかし、不用心なので見張りを換わりながら寝ることになった。最初はキッドとマタ・ドーラ。その後、イナスペとドラ姫と変えていった。

ドラ姫はイナスペにナターシャとの過去の事を聞いた。そして、ナターシャの過去を知ってしまった。その後、ドラ姫達はナターシャとドラメッドの２人と見張りを換わった。

２人は共に夢や出身地などを話していた。すると、ドラメッドはナターシャになんで旅に出たのか聞いてみた。すると、ナターシャは自分の過去を話し始めた。

話によると、ナターシャは『お茶飲水』という人に作られたロボットで、普通のロボットとは違っていたそうだ。そんなナターシャがロボット養成学校から帰ってテレビをつけてみると、お茶飲水が乗っているはずの飛行機がピラミッドに突っ込んだという。それを見て、２度とこんなことを起こさない為に自分自身が旅に出て、世界中の悪人を捕まえようとしたのだという。そして、旅立ちの時に村の人から金色の剣を貰ったらしい。

しかし、ナターシャはさらなることを言い出した。なんと、飛行機を突っ込ませた犯人はクリエレだという。あの事件の日、ナターシャは一度クリエレと戦っていた事を暴露した。そして、結局その勝負はナターシャが負けて、死を覚悟したがクリエレはナターシャに止めを刺さずに去っていったという。その為、ナターシャはクリエレに対し必ず倒してやると思っていたのだ。それから数分後、イナスペがナターシャを治療してくれて、そこでイナスペがタイムパトロールの１人であることを知ったそうだ。

その後、ナターシャはクリエレの知っている限りの情報を話し始めた。なんと、クリエレの体は空気で作られているらしく、打撃攻撃を食らわないという。そして、その体への攻撃をどのようにするの

か分からないということだった。
ナターシャの話が終わると、ドラメッドはナターシャにドラ焼きを渡して、一緒に食べ始めた。しかし、ナターシャは半分を食べたところでしまってしまった。戦いの後、味わって食べる為らしい。ドラメッドが食べ終わると、ドラメッドはナターシャの弱点を聞いてきた。すると、ナターシャは小声で『寒さ』と『酒』と答えた。しかし、ナターシャの声はクリエレの仲間に届いていた。なんと、洞穴の近くに新たな敵がいたのだった。
そいつが姿を表すと2人は驚いた。なんと、死んだはずのシャーサンの姿があったのだ。しかし、そいつの話によると、目の前にいるのはシャーサンの双子の兄であり『シャーベットル・ザンクロス』（シャーザン）というらしい。
シャーザンは2人に『氷』系の攻撃してきた。ナターシャは素早く反応し避けた。しかし、ドラメッドは反応が遅れ、攻撃を受けて足を凍らせてしまった。そして敵は、そんなドラメッドに『氷』系攻撃してきた。それを見たナターシャはドラメッドの前に立ち、自ら攻撃に当たりに行ってドラメッドを守ったのだった。
ナターシャは寒さに弱く、だんだんと攻撃を受けているうちに力が無くなってきてしまった。そこにシャーザンは『氷』系の攻撃を連続してナターシャに当てたのだった。これにより、ナターシャは全身を凍らされてしまったのだった。

特別編４　星空の下で（後書き）

こここそ本文で見てもらいたいところです。

特別編5　絆

騒ぎを聞き付けドラズが洞穴から出てきた。そして、悲惨な光景を見て驚いた。

そんなドラズにシャーザンが話かけてきて、悪いのはドラメッドだということを言ってきた。キッド達はドラメッドに聞くがドラメッドは自分のせいじゃないことを訴えた。そんな時、シャーザンは7枚のテレカを落とした。

ドラズ達は『親友テレカ』をクリエレに取られていて持っていなかった。そんな中でシャーザンが落とした時に「親友テレカ落としちゃった。」と言ったのでドラズはすぐにそのテレカを拾いに行ったのだった。

しかし、それは『親友テレカ』ではなく、『絶交テレカ』というどんな堅い友情を持っている者でも、そのテレカを持つと絶交してしまう物だった。それにドラズは気づかずに拾ってしまった。その為、ドラズは喧嘩を始めてしまい、そして、とうとうその場所に王ドラ、ドラニコフ、ドラえもん、ドラメッドを残し、それぞればらばらの方向に歩いて行ってしまったのだ。

しばらくしてドラ姫達も起きてきた。そして、やはり驚いた。すると、ドラ姫達は事情を聞きとりあえずナターシャとドラメッドの氷を溶かすことになった。そこで、ドラニコフが火を浴びせてみた。しかし、火で氷は溶けなかった。すると、シャーザンが来て、その氷は火では溶けないことを言ってきた。すると、その隙を狙ってシャーザンはドラ姫から水晶を奪った。そして、シャーザンは去って行った。

ドラ姫は水晶を心配したが、今は2人が優先だと思い、2人の為に頑張った。溶けないことを知ったので、ドラ姫達は削ることにした。丁度弥生が持っていた弓矢が役にたった。

ナターシャとドラメッドの氷を溶かすには6時間という時間を費や

し、やっと2人の氷をすべて取り除く事が出来たのだった。そして、慌ててナターシャを火の側に寝かせ、体を温めた。そして、ようやくナターシャは目を覚ました。

ナターシャはドラズが減っていることに気づいた。そこで、ドラえもん達は何があったか説明をした。

話を聞いたナターシャはすぐに絨毯を取り出し、キッド達を探しに行こうとした。すると、ドラメッド達も行くと言って絨毯に乗り込んだ。

ナターシャ達はみんなを探し始めた。しかし、見つけることは出来ずとりあえず洞穴に戻ることにした。すると、洞穴の前にキッド、マタドーラ、ドラリーニョの姿があった。

ドラメッドはみんなに近づき、戻ってきてほしいことを告げた。しかし、キッド達は「ふざけんな。」的なことを言って帰ろうとした。すると、ナターシャはそんなキッド達に近づき、「ふざけんな。何がもう絶交しただ。何が帰るだ。ふざけんじゃねぇよ。いい加減にしろよ。お前ら、強い力ってなんだと思う。それは仲間同士が一体となって出す力が一番強いんだよ。今のお前らにそれが出せるのか、出せねぇよな。喧嘩してんだからよ。クリエレを倒す為にはお前らの力が必要なんだよ。だから…喧嘩なんかしてんじゃねぇよ。」と言ってきた。すると、キッド達はその言葉を聞いてドラメッドと仲直りしたのだった。その瞬間、ドラズが持っていた『絶交テレカ』が爆発したのだった。

仲直りしたドラズはナターシャ達と共にクリエレのいる城に向かって出発した。

その頃、シャーザンはクリエレと会っていた。そして、シャーザンもクリエレの為に戦うことを言ってきた。すると、クリエレは喜び、ナターシャ達が来るまでに城の入口に行くように言って、シャーザンを向かわせたのだった。そして、ナターシャ達は城の中には入ってきた。それを確認したシャーザンはナターシャの前に踊り出た。

特別編5　絆（後書き）

小説の方はもっとシビアです。

特別編6　新たな敵

ナターシャは攻撃をした。しかし、ナターシャの魔法球は凍らされてしまって攻撃は食らわなかった。そして、その隙を見てナターシャに攻撃した。その時、シャーザンの体は魔法で氷になっていた。しかも、触れた物をすべて凍らさるという能力も兼ね揃えていた。その為、ナターシャは再度凍らされてしまった。すると、ドラニコフがシャーザンに火を浴びせた。しかし、シャーザンの体もナターシャの氷同様火では溶けなかった。もはや攻撃のしようがなかった。そんな中、ドラ姫は母の宝石のことを思い出した。そして、ドラ姫はこの場面で宝石を使った。すると、宝石は光を放ってナターシャを照らした。すると、ナターシャの氷はどんどん溶けていき全ての氷を溶かした。そして、ナターシャは意識を取り戻した。

その後、宝石はシャーザンの方に光を向けた。すると、シャーザンの体は溶けていき、ついにシャーザンの体は全て溶けてしまった。それと同時にシャーザンは命を落とした。すると、そこには『8』のトランプが残り、それをドラ姫が拾って服の中にしまった。

ナターシャ達は最初ドラズが捕まっていた部屋に行くことにした。すると、そこにはアースとルビサスの姿があった。

イナスペは攻撃しようとした。しかし、弥生がそれを止めた。なんと、アース達はクリエレに操られているという。それを聞いたイナスペ達は苦戦を強いられた。そんな中　、ナターシャは2人を元に戻す為に2人に向かって行った。イナスペはそんなナターシャを援護する形をとっていた。すると、いきなりナターシャとイナスペは攻撃された。なんと、もう2人新たな敵がこの部屋にいたのだった。そいつらは『カン』『サン』といい、クリエレの力と同じ位の力を持つ2人だった。カン、サンはナターシャとイナスペを捕まえ、関節技を決めていた。その為、2人は身動きが取れない状態だった。

そんな2人にカンとサンは魔法を放った。そして、ナターシャ達は

諸にその魔法を食らってしまった。
攻撃した後、カン、サンはナターシャとイナスペから離れた。そして、ドラズにかかってくるように言った。ドラズはそれを受け、戦いが始まった。しかし、アース、ルビサス、カン、サンは強く、ドラズ達は攻められていた。そんな中、ナターシャは立ち上がった。
　すると、ナターシャは「強制保護だ。」とか言って、アース達に特大魔法を放った。すると、アース達は倒れて攻撃をできる状態ではなくなった。
やっと一安心したかと思いきや、なんと、そこにクリエレが姿を現した。
アース達はクリエレに近寄った。すると、クリエレは「お前ら、もういいよ。」と言って指を鳴らした。すると、アース達の操りは解けて思考の自由を取り戻した。
アース達はクリエレに怒りをぶつけた。すると、クリエレは「うるさい。」とか言ってアースの頭をピストルで撃ち抜いた。
カン、サン、ルビサスはナターシャ達に一緒に戦うことを言ってきた。どうしてもクリエレに恨みを晴らしたいらしい。ナターシャ達は勿論オッケーをし、新たな戦力として3人を受け入れた。
クリエレへの攻撃は始まった。しかし、ナターシャ達の攻撃は全てクリエレに効かなかった。そして、ナターシャ達は返り討ちにあった。すると、クリエレは城にあった剣を取り出した。そして、ナターシャ達に攻撃してきた。すると、ナターシャはその攻撃をかわしクリエレに攻撃をした。すると、ナターシャの攻撃はクリエレの体に当たったのだった。そして、ナターシャはクリエレの体に攻撃を当てる方法が分かったのだった。どうやらクリエレは何か持つと体を空気にすることができないらしい。それを聞いたクリエレは笑いだした。そして「なんで俺が服を着てるのに空気になれるか知ってるか。実はなぁ、俺がしばらく触れた物は俺と同じ空気になることができるんだ。だからほら、お前（ドラ姫）から奪ったこの宝石も、もう空気になれるんだなぁ。」とか言って、伝説の魔法の宝石を見

せて来た。原理を知ったナターシャ達は、考えながら攻撃することにした。

すると、ナターシャは『真空魔法』というものを使い、この部屋を真空にした。そして、その中でクリエレに向かっていった。クリエレは空気になろうとした。しかし、真空の為空気になることはできなかった。そんなクリエレにナターシャは『水・金・地・火・木・土・天・海・冥』というナターシャの最高威力の魔法をクリエレにぶつけたのだった。これによりクリエレは吹き飛んだ。

その後、ナターシャがドラ姫達の方を向くと、みんなはヤバイ状態になっていた。空気が無いため窒息しそうになっていたのだ。ナターシャは慌てて魔法を解き、空気を戻した。

なんとかみんなは死を免れた。そして、クリエレを倒したことに喜んだ。しかし、その喜びは2分程しか持たなかった。クリエレが再び立ち上がったのだ。

クリエレは攻撃を食らわしたことに腹を立てていた。すると「俺の体の能力を見せてやるぜ。」とか言い出した。すると、クリエレの体は一瞬にして元の怪我をしていない体に戻ってしまった。なんとクリエレは、体の傷ついた部分と周りにある空気を取り替えることで体を回復させていたのだ。

ナターシャはなぜそんなことができるのか聞いた。すると、クリエレは「宇宙の彼方から来た悪魔だからさ。」と言ってきた。その発言には誰もが驚いた。すると、ナターシャは『無線通信型テレビ』を取り出し、タイムパトロールの長、落合標三郎と通信をとった。

そして、クリエレが悪魔であることを伝えた。

タイムパトロールでは、どんな悪党でも人間であるならば生け捕にしなければいけないのだ。しかし、地球外生命体の場合はその規定は無視できるのだ。その為、ナターシャはクリエレを倒す為の許可を申請していたのだ。そして、その許可は承諾された。その為、ナターシャはクリエレを倒すことに決めたのだった。

すると、クリエレはナターシャに何かを投げて来た。それはナター

シャの口に入ってしまった。すると、クリエレはナターシャを抑えつけた。しばらくして、ナターシャは倒れた。その様子を見たドラズ達は何をしたのか聞いた。すると、クリエレは「酒を飲ませてやったんだ。」と言ってきた。

ナターシャはしばらくして立ち上がった。しかし、様子が変わっていた。なんとベロンベロンに酔っていたのだ。

ナターシャの酔いは激しく、泣いたり、笑ったり、説教したり、怒ったりと次々に様子を変えていた。

そんなナターシャにクリエレはとうとうキレた。そして、クリエレは酒ビンをナターシャに叩きつけた。イナスペはすかさず攻撃体勢に入った。しかし、クリエレが「近づいたら割れたビンの先でナターシャを刺す。」と言った為、攻撃はできなかった。しかし、イナスペは「その汚い足を退けろ。」と言った。すると、クリエレは足を退かした。しかし、ビンはナターシャに降り下ろされた。すると、ナターシャはかわした。そして、イナスペ達の所に着地した。どうやら酔いが覚めたようだ。そして、何が起こったのか聞いてきた。どうやら覚えていないようだ。こうして、酒が弱点の理由が分かったのだった。

ナターシャはドラズ、イナスペ、弥生にデビドラを探してきてほしいと頼んで行かせた。すると、クリエレはナターシャに変な光線を放ってきた。その光線はナターシャの右腕に当たった。すると、右腕は錆びて動かなくなってしまった。ナターシャは戸惑っていた。そこへ、クリエレがナターシャの腹に掌を添えた。そして、『火水草氷雷地風…気功法』とか言った瞬間、ナターシャは吹き飛ばされて壁に叩きつけられて倒れた。すると、カン、サンが攻撃に入った。しかし、クリエレは2人の顔を押さえつけた。その隙にドラ姫はナターシャの所へ向かった。すると、クリエレはドラ姫の前に現れて、ドラ姫に先ほどの攻撃を食らわした。そして、ドラ姫も壁に叩きつけられた。カン、サン、ルビサスはドラ姫に向かおうとした。しかし、目の前にクリエレが姿を現し、3人を吹き飛ばした。すると、

3人は大きな機械にぶつかった。それは『超ハイテク処刑台』というクリエレが作り出した物だった。

この処刑台は、『死ぬ』若しくは『処刑台が壊れる』まではずせないらしく、3人がいくら頑張っても外れることはなかった。

3人を捕まえた後、クリエレはドラ姫を処刑台に付けようとした。

すると、どこからか魔法が飛んできた。クリエレが見るとそこにはデビドラが立っていた。

特別編６　新たな敵（後書き）

実は昨日は俺の誕生日

特別編7　デビドラ登場

クリエレはドラ姫を放した。すると、デビドラはそんなドラ姫をキャッチしてドラ姫を起こした。そして、ドラ姫は再会を喜んだ。後から遅れて4人のネコ型ロボット（忍ドラ）達もやってきた。すると、クリエレはそんな6人に攻撃してきた。すると、デビドラが前に出て、クリエレの攻撃を止めたのだった。そして、デビドラはクリエレに向かっていった。そんな中、ドラ姫は忍ドラ達にナターシャの所へ行くように言って行かせて、ナターシャを支えて起こしてあげた。すると、クリエレがそんな5人に近づき、ナターシャに攻撃しようとした。すると、その攻撃を忍ドラ達が止めたのだった。すると、デビドラ、ドラ姫、ナターシャは、攻撃を止められたクリエレに攻撃したのだった。

煙が上がり、クリエレは見えなくなった。すると、突然手が出てドラ姫の顔を掴んだ。そして、動いたら攻撃すると言って動きを封じてドラ姫を処刑台に取り付けた。

捕まったドラ姫はクリエレに放すように言った。すると、クリエレは「うるさい女だ。」とか言って、ドラ姫に気功法を放ったのだった。それによりドラ姫は気絶してしまった。それを見たデビドラはクリエレに攻撃した。すると、クリエレはその攻撃を逆に利用し、デビドラに返した。すると、デビドラは吹き飛ばされ、処刑台にぶつかって捕まってしまった。

クリエレはナターシャに攻撃してきた。ナターシャは攻撃をかわせず吹き飛ばされた。すると、忍ドラ達がクリエレに攻撃してきた。しかし、クリエレはそんな4人を軽く吹き飛ばし、それぞれ処刑台に叩きつけた。

最後にクリエレはナターシャに矛先を向け振り下ろした。そして、矛先が少し当たった瞬間、雷がクリエレを襲った。これによりクリエレは吹き飛ばされた。ドラズ達が帰ってきたのだった。

ドラズ達は部屋の状況を見て驚いた。さらに、デビドラらしき人物がいることにも驚いた。すると、クリエレはそんなドラズ達に『親友テレカ』を見せてきた。そして、動いたらナターシャを攻撃すると言ってナターシャの所に近づいてきた。すると、イナスペがそんなクリエレに雷を落としたのだった。これにより親友テレカは手放された。そして、すかさずドラズが親友テレカを手に取ったのだった。

その後、クリエレが倒れているうちにドラ姫達を助けようということになり、処刑台に向かった。しかし、いくら攻撃しても処刑台は壊れなかった。そうしている時、何かが弥生の体を貫いた。なんと、クリエレが立ち上がり、剣で弥生を刺していたのだ。これにより弥生は死んでしまった。そして、クリエレはカン、サン、ルビサスも殺っておいたと言ってきた。そして、今度はドラ姫を狙っていた。すかさずデビドラが「殺るなら、俺からやれ。」と言って自分を狙わせた。そんな中、イナスペがそんなクリエレに攻撃してきた。すると、クリエレはその攻撃に耐え、イナスペに『光のパイプオルガン』という技を放ち、イナスペの命を奪ったのだった。

その様子を見たドラメッドが怒って巨大化した。すると、クリエレはそんなドラメッドの頭に乗っかり、ナターシャの右腕を錆らさせた技で、ドラメッドの体を錆らさせてしまった。それと同時にドラメッドは命を落としてしまった。

すると、今度はナターシャに錆らせる攻撃をしてきた。まだ動けないナターシャはどうすることもできなかった。すると、そんなナターシャの前にドラリーニョが立ち、攻撃を受け止めた。そして、ドラリーニョの体は全て錆びてしまい、ドラメッド同様命を落としてしまった。すると、ナターシャはクリエレに腹を立て、クリエレに向かって特大の魔法を放ったのだった。すると、クリエレはその魔法に当たり吹き飛ばされた。しかし、すぐクリエレは立ち上がった。そして、体の空気を入れ替えて全回復してしまった。すると、クリエレはナターシャに攻撃してきた。すると、その攻撃をマタドーラ

が『ヒラリマント』でかわそうとした。しかし、クリエレの攻撃はヒラリマントを破りマタドーラに攻撃を食らわしたのだった。そして、マタドーラもまた死んでしまったのだ。

その後クリエレは、ナターシャに必殺技を放った。ナターシャはバリアで守ろうとするが、その攻撃はバリアを破りナターシャに当たってしまった。そして、ナターシャは吹き飛ばされて倒れたまま動かなくなってしまった。

次にクリエレはデビドラを指名。そして、デビドラを葬り去った。すると、処刑台からデビドラが話された。やはり死ぬと外れるようだ。

その後もクリエレは忍ドラ、ドラえもん、ドラニコフ、キッド、王ドラを葬り去った。そして、とうとうドラ姫だけになった時、誰かがクリエレを攻撃した。クリエレが見るとそれはナターシャだった。クリエレはナターシャに攻撃をした。しかし、何度吹き飛ばされてもナターシャは立ち上がった。すると、クリエレはナターシャの所に行き、首に巻いてあるマフラーを掴んだ。その後、持ち上げてナターシャの腹に気功法を放った。しかし、それでもナターシャは生き続けた。そんなナターシャを見て、クリエレは何かを思い出した。それはあの飛行機ジャックをした日の事だった。そして「お前は俺に勝てない。」と言ってきたが、ナターシャは勝てると反論。すると、クリエレは「空気である俺は倒せない。」と主張。しかし。ナターシャは「『形あるものいつか壊れる。』という理論から、悪魔の『体』という物を持つお前もいつか死ぬ時が来る。」と力説。すると、クリエレは「地球も壊れる。」と言って、そこから地球の自然破壊の現状を話し出し、その破壊を止めようとしたことまで話してきた。

クリエレの地球に対する話に、ナターシャは反論ができずただ訴えを聞くしかできなかった。そして、最後にクリエレは「俺の目的は地球を元に戻すために地球人を奴隷にして、復興作業をやらせようとしていた。」と話してきた。その言葉にナターシャはキレた。そ

して、奴隷にする必要なんてないことを訴えた。すると、クリエレは自分の過ち(あやま)に気づき、今までの刑罰を受けると言ってナターシャを下ろして剣を渡した。そして、自分を刺すように言ってきた。その為、ナターシャが剣で刺そうとすると、クリエレはナターシャに攻撃してきた。なんと今までのは芝居だったのだ。

ナターシャは吹き飛ばされ、もう立てる気力は残されていなかった。すると、クリエレはそんなナターシャを掴んで城の外に投げ飛ばした。投げ飛ばされたナターシャはどうすることもできずにただ飛ばされていた。すると、次の瞬間、ナターシャの右足に激痛が走った。なんと建物から出た鉄筋が右足を貫通していたのだ。すると、クリエレはそんなナターシャの所に行き、ナターシャをそこから突き落とした。すると、真下には兵士の像があり、その像の剣先が真上に向いていて、丁度ナターシャはその剣先の上に落ちてしまった。

クリエレはその後のナターシャを連れ、ドラ姫の前にやってきた。ドラ姫が見ると、そこには腹にぽっかりと穴を開けられたナターシャの姿があった。しかし、そんな状態でもナターシャは生きていた。すると、クリエレはそんなナターシャの腹に手を入れ、心臓部の機械を剥ぎ取ってしまった。そして、その機械を壊した。これによりとうとうナターシャは命を落としてしまった。

特別編7　デビドラ登場（後書き）

デビドラの本名：デビル・ドラゴン・ザ・フェニックス

テラ厨二病＼（＾ｏ＾）／

特別編8　奇跡の瞬間（前書き）

なんて都合がいい

特別編８　奇跡の瞬間

残ったドラ姫は死を覚悟した。そして、クリエレの攻撃が当たる瞬間、いきなりドラ姫の処刑台は爆発を起こし、ドラ姫は処刑台から外された。そして、クリエレの攻撃を避けることができたのだった。多分、ナターシャが死ぬ間際に何かをやったらしい。

解放されたドラ姫は、町の時計台が３時を知らせる鐘を鳴らしていることに気づき、目をやった。すると、時計台は不思議な光を放っていた。その事が気になったドラ姫は、クリエレの攻撃をかわしながら時計台に向かって走りだした。クリエレも後から追おうとするが、倒れているみんなの方を見てニヤつき、何かをしだした。なんと、みんなが持っていたトランプを奪ってしまったのだった。

時計台に辿り着いたドラ姫は、時計台を登り始めた。この時計台は展望台になっていて、登ることができたのだ。

頂上に着くと、そこに置いてあった植木鉢に目がいった。なんと、植物が光っていたのだ。

この植物はここにずっとあるもので、毎日ドラ姫が水をあげているのだが、ぜんぜん育たなく、花を咲かせない植物だった。その植物が光を放ち、蕾（つぼみ）をつけていたのだ。

ドラ姫はすかさず水をあげようとした。しかし、そこに水はなかった。しかし、諦めかけていた時に雨が降り出した。そして、植木鉢に水が溜まったのだった。丁度その時、クリエレが時計台の下まで迫ってきていた。そして、水をあげ終わると、その植物はぐんぐん成長し巨大な大木になった。この光景はドラ姫クリエレ共に驚いていた。

すると、突然木がドラ姫に話しかけてきた。「今まで水をくれてありがとう。おかげでこんな大きな木になることができた。わたしは、５０年に一度育つ伝説の木である。私は不思議な能力を持っていて、私に成っている実を死んだ人に食べさせると、なんと、死んだ人を

生き返らせることができるのだ。さあ、実を取るがいい、と言いたいところだが、私は今までのことを見ていた。だから誰を生き返らしたいのかも分かる。だから今回は特別に根元で生き返らしたい人を言ってくれれば生き返らしてやる。さあ、願うがいい。」その話を聞いてドラ姫は、みんなの生き返りを願った。すると、木はまばゆく光り、空一面を光で覆った。そして数秒後、光と木は消えてまた元の苗に戻ったのだった。するとその時、クリエレがドラ姫の前に現れた。そして、ドラ姫は攻撃され時計台から落ちてしまった。するとその時、誰かが飛んできてドラ姫をキャッチした。それは紛れもなくデビドラだった。デビドラはドラ姫をみんながいる部屋に運ぼうとした。しかし、クリエレが攻撃して吹き飛ばされた。しかもその時、ドラ姫は最後のトランプを落としてしまい、クリエレの手に渡ってしまった。

特別編9　フィニッシュにしよう

ドラ姫はみんなに謝ったが、みんなは取り返せばいいと言って励ました。すると、クリエレは首に掛けてあった宝石を取り、ナターシャに向けて宝石から魔法を放った。すると、ナターシャは3？ぐらい吹き飛ばされ湖の中に落ちてしまった。これが宝石の力だった。ナターシャを助けに行ったのはドラメッドだった。そして、ドラメッドは湖の前になって自分は泳げないことを思い出した。しかし、ナターシャを助けたいという思いから、ドラメッドは湖に飛び込んでナターシャの救出に向かった。

湖の中でナターシャは気を失っていた。そんなナターシャをドラメッドは見つけだし、水面へ向かって泳いでいった。途中体力の限界が来たが限界突破をしてナターシャを陸に上げた。ドラメッドはそこで力尽き、湖に沈んでいってしまった。

陸に上げられたナターシャは意識を取り戻した。そして、なぜ陸にいるのか不思議になり湖を覗くと、ドラメッドの姿があることを発見した。ナターシャは急いで湖に飛び込み、ドラメッドを救出した。ドラメッドは気を失っていて、話しかけても返事はなかった。ナターシャはそんなドラメッドに「苦手な水に飛び込んで、俺を助けてくれてありがとな。」と言って絨毯を広げると、そこにドラメッドを乗せた。そして自分も乗り、クリエレの所にマッハスピードで向かった。そして、クリエレのところに突っ込み、クリエレの首に掛けてある宝石を掴み、スピードに乗せて引っ張った。すると、宝石はクリエレの首から取れ、ナターシャの手に渡った。すると、ナターシャはそのままクリエレに宝石で攻撃したのだった。すると、クリエレは吹き飛ばされて時計台に突っ込んだ。そして時計台を破壊した。

ドラ姫はみんなの無事を確認した。するとその時、ナターシャがいきなり倒れた。なんとクリエレがナターシャに攻撃していたのだっ

た。そして、クリエレは宝石を取ろうとした。しかし、ナターシャはすぐそれを投げて弥生の手に渡らした。すると、クリエレは弥生のほうに向かってきた。しかし、弥生は宝石をイナスペに投げた。そして、キャッチしたイナスペはクリエレに向かって宝石の力を放ったのだった。そして、クリエレは吹き飛ばされた。しかし、クリエレはすぐに立ち上がり手に魔力を溜め始めた。そして、クリエレが天に高々と腕を伸ばすと、クリエレの真上に巨大な魔法球が現れたのだった。

やがてそれは大きくなり、空が見えなくなるほどまで大きくなった。そして、クリエレはそれをナターシャ達がいる方へ放ったのだった。もの凄い爆発音と光がみんなを包んだ。しかし、攻撃を食らった感覚がみんなにはなかった。なんと、ナターシャが巨大なバリアを張ってみんなを守っていたのだ。

爆発が止んで静かになった時、ナターシャは力尽きてふらふらになってしまった。そんなナターシャを支えようとドラ姫がナターシャの側に行った。すると、ドラ姫は変貌(へんぼう)した町の姿を見て言葉を失った。なんと、今まで無数にあった家などが全て壊れていて、ナターシャが守ったこの城以外は全て廃墟と化していたのだ。そのうちにデビドラ、忍ドラも見てそれぞれ言葉を失った。そんなみんなに、クリエレは城の上から呼んだのだった。しかし、ドラ姫はそれに気づかなかった。弥生がドラ姫にクリエレが話しかけていることを告げるとドラ姫は振り返ってクリエレを見た。すると、ドラ姫は「あんた、よくもやってくれたわね…。せっかく今まで頑張って守ってきたのに…壊しやがって…ざけんじゃねぇよ。」とキレた。その様子にみんなは驚いた。すると、ドラ姫はイナスペから宝石を取ると、クリエレに向かっては宝石の力を出したのだった。あっけに取られていたクリエレは、その攻撃に当たって吹き飛んだ。その後、ドラ姫は倒れこんだ。どうやら血圧が上がりすぎて立ちくらみを起こしたらしい。そんなドラ姫をデビドラが支えていた。そんな中、ナターシャが立ち上がろうとしていた。しかし、足がぼろぼろになって

いて簡単に立つことはできなかった。それでもナターシャは踏ん張り、なんとか立ち上がった。しかし、そんなナターシャにクリエレは容赦なく攻撃してきた。そして、ナターシャは吹き飛ばされて崖の下に落ちていってしまった。クリエレはナターシャの死を確かめるため崖から覗こうとした。すると、ナターシャは崖下から上がってきたのだった。絨毯に乗ったのだ。そして、ナターシャは驚いているクリエレに攻撃しようとした。すると、ナターシャの手からは魔法が出なかった。なんと、ここに来て魔法力が尽きてしまったのだ。

そんなナターシャにクリエレは攻撃をした。しかし、王ドラがナターシャを庇い、自ら攻撃に当たりに行ったのだった。そして、王ドラは吹き飛ばされた。そんな様子を見てクリエレは「庇う必要なんてないのに。もう誰も俺に勝てないんだから宝石を渡せ、お前らが持っていてもただの宝石にしかならない。それなら俺が最大限に宝石の力を使ってやるから。」その言葉にみんなは、宝石のままでいいということを訴えた。ドラ姫もこの時回復していて立ち上がっていた。そして、宝石の気持ちを聞くということになり、ドラえもんが『物体生命機』という、物に生命を与える道具を取り出して宝石に使った。すると、宝石は話し始めた。

宝石はナターシャ達に使われたいと言ってきた。それを聞いたクリエレは宝石を取ろうとした。すると、宝石は自らの意思で光り、クリエレを吹き飛ばしたのだった。その後、宝石はナターシャに光を当てた。すると、ナターシャの足は動くようになったのだった。

その後、宝石は元の喋らない宝石に戻ったのだった。

そうしているうちにクリエレが向かってきた。すかさずナターシャが前に出て、魔法で受け止めようとした。しかし、手から魔法は出なかった。魔法力は回復してなかったのだ。クリエレはそれをいいことにナターシャに向かった。すると、カンとサンがクリエレを魔法で吹き飛ばしたのだった。

吹き飛ばされたクリエレはみんなに向かって魔法を放った。すると、

その魔法は攻撃をしてくるのではなく、みんなを包み込む物だった。
そして、何の違和感もないままその魔法は消えた。みんなは魔法が失敗したと思い、クリエレに攻撃しようとした。しかし、みんなは魔法が出せなくなっていたのだ。なんと、クリエレはさっきの魔法で、みんなの魔法力を吸い込んでしまったのだった。
圧倒的不利になったナターシャ達は攻撃を避けるしかなかった。しかし、ドラ姫が母親の形見の宝石の存在を思い出した。そして、使ったのだった。この宝石には魔法力は必要なかったのだ。
宝石は辺りを光で包んだ。そして、王ドラが眩しくて瞑っていた目を開けてみた。すると、クリエレを含め、みんなの動きが止まっていたのだ。どうやら『時』を止めたらしい。
そうすると王ドラは、クリエレに近づき、全てのトランプを取ったのだった。その瞬間、時はまた動き出した。王ドラはトランプを取り返したことをみんなに告げた。すると、カンがみんなにそれぞれ配ってくれと頼んだ。どうやらトランプを宝石に戻そうとしているらしい。
そして、トランプはみんなの手に戻った。しかし、3枚残ってしまった。すると、ドラ姫、デビドラ、ナターシャが残りの3枚をやることになった。残されたドラズと忍ドラは、クリエレの足止めをしてくれるように頼まれ、クリエレの所に向かっていった。
そして、トランプから宝石に戻す儀式が始まった。それぞれのトランプに書かれている数字の『月』の誕生石を言うものだった。そして、『13』と『ジョーカー』は誕生石以外の宝石を叫んでくれと言った。そして、儀式は始まった。
「1月のガーネット。」「2月のアメシスト。」「3月のブラックストーン。」「4月のダイヤモンド。」「5月のエメラルド。」「6月のパール。」「7月のルビー。」「8月のサードニック。」「9月のサファイヤ。」「10月のオパール。」「11月のトパーズ。」「12月のトルコ石。」「13のトルマリン。」「ジョーカーのクリスタル。」

みんなが叫んだ後、トランプは光りその言った宝石に形を変えた。
そして、それらは1つに集まり、2つ目の魔法の宝石になったのだった。
儀式が終わった後、ドラズ達の方を見た。すると、そこにはぼろぼろになって倒れているドラズと忍ドラ達の姿があったのだ。その光景を見て、ナターシャ達は専守交代しクリエレに向かっていった。
すると、クリエレは『サークル・マジック』という魔法を使った。
すると、ナターシャ達は動けなくなってしまった。なんとこの魔法は、クリエレを中心に半径１０m以内にいる奴の動きを止めてしまうものだった。その為、ナターシャ達は動きが止まってしまったのだ。ドラ姫はぎりぎりでその魔法にかかっていなかった。
そんな動きを止めたナターシャにクリエレは攻撃をしだした。身動きが取れないナターシャはぼこぼこにやられていた。そして、最後にクリエレが回し蹴りを決め、ナターシャはその勢いで半径１０mの円から出たのだった。そして、次はデビドラに攻撃を始めた。
そんな中、ナターシャの携帯が鳴り響いた。ナターシャは何とか電話に出て、相手を確かめた。すると、相手はナターシャの故郷にいる『トール』と『メイル』という双子からだった。2人はナターシャに「約束していた物がやっとできた。」と言って、今から送ることを言ってきた。
ナターシャは村を旅立つ時、トールとメイルから約束を聞いた。それは『クリエレのような敵を倒せる杖を作る』という約束だった。
当時2人が5歳の時にした約束が、１7年という月日を経て、完成させることにより果たされたのだった。
しばらくして、ナターシャの側に杖が届いた。ナターシャはそれを掴んだ。そして、クリエレに挑発して攻撃してくるように言った。
すると、クリエレはナターシャに攻撃してきた。しかし、ナターシャが杖を一振りすると、魔法は消え去った。触り心地だけで使い方が自然に分かってきた。しかも、魔法力を一切使わずに魔法が使えたのだった。

すると、ナターシャは杖にいくつかの穴が開いていることに気づき、そして、この杖が横笛になることに発見された。そして、ナターシャは自分の知っている歌を吹いてみた。すると、みんなの魔法力が回復したのだった。しかし、自分は回復しなかった。

クリエレは魔法力が回復していることに気づき、もう一度魔法力を吸い取ろうとした。しかし、ナターシャが別の歌を吹いてみると、クリエレの魔法は消え去った。どうやら歌によって効力が違うらしい。

クリエレは不安になってきていた。しかし、自分が空気になれることを思い出すと「空気に攻撃は食らわないから倒せない。」と言ってきた。しかし、ナターシャは動じなかった。杖の力を信じていたのだった。杖を作った2人はクリエレの体のことを知っていて、そして、それを攻略する為にこの杖を作っていたのだ。その事をナターシャは知っていた。そして、その歌もナターシャには分かっていた。小さい頃にトールとメイルに歌ってあげた歌だということを…。ナターシャはその歌を吹き始めた。すると、クリエレの体は痺(しび)れだし空気になることができなくなっていた。それと同時に『サークル・マジック』の魔法は解けた。すると、ナターシャは忍ドラにクリエレを捕まえていてほしいと言って捕まらした。そして、ナターシャはドラ姫やカン達に攻撃を一斉にすることを伝えた。そして、みんなは一斉に攻撃した。デビドラ、ドラ姫は魔法の水晶。ドラズは親友テレカ。アース達は合体魔法。ナターシャは杖での魔法でそれぞれ攻撃をした。攻撃が当たる瞬間、忍ドラ達はクリエレから離れた。そして、クリエレだけ攻撃に当たったのだった。そして、クリエレは跡形もなく消えてしまったのだった。

みんなは勝ちを喜んだ。するとその時、ナターシャは倒れてしまった。みんなが慌ててナターシャに近づくと、ナターシャは眠っているだけだった。その時、丁度雨が止んで光が差し込んだ。これにより、空には虹ができたのだった。

みんなは城の中に入ることにした。ナターシャはイナスペが負ぶって運んだ。そして、みんなはゆっくり休んだのだった。ナターシャは寝室に運ばれてそこで眠っていた。

次の日の朝、ドラ姫は朝食を作っていた。その音でナターシャは目を覚ました。そして、初めてクリエレを倒したという実感が湧いてきたのだった。そうしているうちにみんなが集まった。そして、ナターシャの目覚めを喜んだのだった。

少しして朝食ができた。ダイニングと寝室が隣同士だったので、ナターシャはベッドの上で食べることになった。これによりナターシャの魔法力は回復した。そして、その途中、アース達はドラ姫に生き返らせてくれた事のお礼を言ってきた。ドラ姫は「いいのよ、当然のことをしただけなんだから。」と言って、照れていたのだった。

特別編9　フィニッシュにしよう（後書き）

原作（大学ノート）では「フィニッシュにしよう」というせりふが何回も出てくる。

特別編１０　最後の戦い

朝食が食べ終わった後、みんなは雑談をしていた。すると、突然ドアが開いた。みんなが見ると、そこには『ドラ・ナターシャ』の姿があった。部屋にはもうナターシャはいるのに、もう1人のナターシャの登場に誰もが驚いた。しかも、ドアを開けたナターシャはぼろぼろの状態だった。

2人のナターシャはどちらも自分が本物だと訴えた。しかし、みんなにはどちらが本物か分からなかった。すると、ナターシャはドラ姫の名前を呼んだ。片方は『ドラ姫』と言い、もう片方は『サンタマリア』と言った。この瞬間、どちらが本物か分かった。ドラ姫の本名は『姫ドラ・サンタマリア』というのだが、ナターシャやみんなには愛称である『ドラ姫』とでしか教えてなかったのだ。その為、すぐに偽者に気づいたのだった。

みんなはナターシャを支えた。すると偽者の方は正体を現した。なんと、それはクリエレの仲間の『カタリーナ・ペペラッパー』という最強のモノマネができる奴だった。そして、こいつも悪魔だった。こいつのモノマネは最強で、一度見た人の『性格』や『能力』、そして『思い出』まで全て真似できるという。しかも、こいつの狙いは世界征服ではなく『ドラ姫』だという。それを聞いたドラ姫は冷たくあしらった。すると、次は弥生に向かった。しかし弥生も拒否。次にエメラルの所に行くと、エメラルに吹き飛ばされた。どうやら彼女が欲しいらしい。しかし、女子全員に断られたカタペペは勝負をして、自分が勝ったら3人を貰うと言ってきた。その挑戦をデビドラやイナスペは3人に無断で受けてしまった。

そして戦いは始まった。デビドラがいきなり攻撃すると、カタペペは吹き飛ばされた。これによりみんなは勝利を確信した。しかし、カンとサンが「カタペペはクリエレより強い。」と言ってきた。みんなが不思議に思っていると、カタペペが立ち上がった。しかし、

その姿はイナスペだった。それにはみんなが驚いた。イナスペが2人になったからだ。その中でカタペペは雷を出してきた。そしてみんなは、カタペペの能力を理解したのだった。

その様子を見てナターシャは立ち上がり、戦うとを言ってきた。すると、カタペペはクリエレに変身した。すると、ドラ姫が『杖がないと倒せない』と言って、ここで初めてナターシャは杖の存在を知った。

ナターシャは杖を渡すように言ってきた。すると、カタペペはナターシャの姿になり杖を取り出した。しかし、カタペペは「こんな杖、いらねぇ。」と言って杖を床に叩きつけ、杖を折ってしまった。その様子を見たナターシャは激怒して、カタペペに次々に攻撃を繰り出していった。そして、城の外に吹き飛ばした。そして、ナターシャは空中にいるカタペペに突っ込んで攻撃しようとした。しかし、カタペペはクリエレの姿になり攻撃をかわした。クリエレに変身すると体は空気になるのだった。

カタペペは攻撃をかわした後、ナターシャに攻撃してナターシャは逆に吹き飛ばされた。すると、カタペペは連続して攻撃を繰り出し、ナターシャは気絶してしまった。

そんな様子を見て、デビドラ達はカタペペに向かった。しかし、カタペペは『サークル・マジック』を使い、デビドラ達の動きを封じたのだった。すると、カタペペはイナスペを連続して攻撃した。そして、最後にイナスペに魔法で作った光の剣を貫通させた。

次にカタペペはデビドラに向かっていった。そして、攻撃しようとした瞬間、カタペペは誰かの魔法で吹き飛ばされた。そして次の瞬間、カタペペは刺された。なんと、それはナターシャだった。カタペペは倒れながらさりげなく掌をナターシャの腹に向けていた。そして「お前も一緒だ。」とか言って魔法を放った。すると、ナターシャは吹き飛ばされた。そして、カタペペも倒れた。その瞬間、サークル・マジックは解かれた。

みんなはナターシャの側に近寄った。しかし目を開けない。一方で

イナスペは弥生の言葉に反応して目を開けたのだった。しかし、そんな中、カタペペが立ち上がっていた。なんとクリエレ同様回復してしまったのだ。

すると、カタペペの言葉にナターシャが反応して目を覚ました。すると、その様子を見たカタペペはナターシャの姿になった。そして、「けりをつけようぜ、ナターシャ。どちらのナターシャが強いかよ。」と言ってナターシャに向かってきた。すると、ナターシャはみんなに「手を出すな。」と言ってカタペペとぶつかり合った。すると、ナターシャの勢いに負け、カタペペは押し返された。そこに、ナターシャは剣を刺した。しかし、ナターシャは「そんなもんじゃ俺は死なない。」とか言ってもう片方の手で魔法を出そうとした。しかし、腕は錆びていて動かなかった。

そういえば、いつの間に2人は入れ替わったのかというと、ドラ姫が時計台に向かった時である。そこでカタペペは、ナターシャが万が一生き返ることがあった時大変だと思い、柱に縛り付けていたのだ。するとその時、ナターシャは生き返り目を開けたのだった。しかし、身動きが取れないナターシャにカタペペは攻撃を繰り返したのだった。しかも、もし縄から抜け出しても戦えないように、体を錆びさせようとしたところ、左腕をやった時に、」アース達がナターシャがいないことに不思議がっていたので、慌ててナターシャになり代わりみんなの前にでたという。その為、ナターシャが寝室に入ってきた時ぼろぼろになっていたのだ。

カタペペはそんなナターシャに攻撃してきた。そして、ナターシャは吹き飛ばされた。すると、ナターシャは立ち上がり、頭につけていた宝石を取ると、そこから魔法が放たれて攻撃を出した。突然の攻撃にカタペペは真正面で受けてしまった。すると、ナターシャは魔法に食らっているカタペペに向かい攻撃しようとした。すると、カタペペはナターシャにかろうじて魔法を放ったのだった。すると、ナターシャの体は動かなくなってしまったのだ。カタペペが使った魔法はナターシャが唯一相手の動きを止めることができる魔法だっ

た。この魔法に当たると、３０分間身動きが取れなくなるらしい。
その攻撃をナターシャは自分自身に受けてしまったのだ。
カタペペはそんなナターシャを空中へ蹴り上げた。すると、カタペペはジャンプして空中にいるナターシャにバレーボールを打つみたいにスパイクを打った。すると、ナターシャは城に突っ込んだ。それにより城の一部が壊れ、ナターシャは下敷きになってしまった。
ナターシャ同士の戦いはカタペペが勝ってしまったのだ。
　シャーザンとシャーサンはカタペペに吹雪攻撃をした。ナターシャの体になっているカタペペは、だんだんと力が出なくなってきた。そこにみんなは攻撃をした。しかし、カタペペはクリエレに変身して攻撃を避けたのだった。すると、カタペペは『針山の矢』というもので攻撃してきた。この攻撃は針みたいな物が無数に飛んでくるものだった。そして、その攻撃はドラ姫の方に向かってきた。すると、デビドラがドラ姫の前に立って全ての針を受け止めたのだった。そして、デビドラは倒れてしまった。すると、カタペペが近づいてきて、ドラ姫に蹴りを入れようとした。すると、カタペペの足を誰かが掴んだ。それは倒れていたデビドラだった。すると、カタペペはそんなデビドラを蹴り飛ばした。すると、デビドラは地面の無い所まで飛ばされてしまった。それを確認したドラ姫は、急いでデビドラの所に向け走り出した。すると、カタペペは追いかけてきた。しかし、途中で忍ドラが足止めをしてくれて、追いつかれずに済んだ。そんな中、ドラメッドが絨毯で助けに向かった。それに気づいたカタペペは絨毯に向け錆らせる光線を放った。すると、絨毯は錆びてしまい墜落してしまった。ドラ姫はそんなドラメッドを心配した。すると、ドラえもん達が「ドラメッドは任せろ。」と言って、ドラ姫をデビドラに向かわせた。
　デビドラはかろうじて突き出していた石に掴まり落ちていなかった。しかし、その石は地面から外れてしまった。すると、ドラ姫の手が間一髪でデビドラの手を掴んだのだった。しかし、デビドラが重いらしくドラ姫の体も落ちそうになっていた。それを察知したデ

ビドラは手を離すように言ってきた。しかし、ドラ姫は離さなかった。デビドラが理由を聞くと、ドラ姫は「あなたが好きだから。あなたと人生を共にしたいから。」と言ってきた。その瞬間、2人は落ちてしまった。

特別編１０　最後の戦い（後書き）

カタリーナ・ペペラッパー：中学時代の国語の先生（女性）が考えた名前です。

特別編11　最大の二択

空中でデビドラはドラ姫を抱えるような体制を取り、ドラ姫を守ろうとした。そして、地面に当たりそうになる時、何かが2人を持ち上げた。ドラ姫が確認すると、それはナターシャの絨毯だった。しかし、ナターシャはその場にいなかった。

2人を乗せた絨毯はみんながいる所まで上がってきていた。そして、それを見たドラズは、ナターシャがいないのに絨毯が動いてることを不思議に思いナターシャを連れてくることになった。これはドラメッドが代表で行くことになった。

そんな中、カタペペの攻撃は続いていた。そこにドラ姫達が地面まで上がってきていた。するとその時、2人の方に魔法が飛んできていた。2人は避けきれずにガードをしていた。するとその時「右に動け。」という声と共に絨毯が右に動き、魔法を避けたのだった。声のする方を見ると、そこにはナターシャを負ぶったドラメッドの姿があった。それに気づいたカタペペは、ドラメッド達に攻撃してきた。すると、ナターシャはドラメッドに口で避けるように言って避けさせた。その後、ナターシャは絨毯にこちらへ来るように言った。すると、絨毯はドラ姫達を降ろし、ナターシャの所へ向かってきた。なんと声に反応して絨毯が動いていたのだ。

ナターシャはドラメッドに絨毯に乗せて貰った。するとその時、カタペペが攻撃してきた。しかし、ナターシャは間一髪で避けた。だが、その攻撃はドラメッドに当たってしまった。そして、今度はドラメッドが落ちてしまった。ナターシャが向かおうとするが、マタドーラが「ドラメッドは俺達に任せろ。」と言ってドラメッドを助けに行った。その為、ナターシャはカタペペに向かっていった。するとその時、ナターシャは雷の攻撃を受けてしまった。何が起こったわからないナターシャはカタペペを確認した。すると、カタペペの側にイナスペがいて、なんと、イナスペが攻撃してきたのだっ

た。みんな操られていたのだった。
　ドラ姫は弥生に近づいた。すると、弥生は弓でドラ姫を狙ってきた。そして、ドラ姫の顔を翳(かす)めて矢が飛んでいった。しかし、ドラ姫はそんな事お構いなしに弥生を説得した。しかし、弥生は「誰だ、あんた。それ以上近づいたら、今度は心臓狙うよ。」と言ってきた。その為、ドラ姫は弥生から距離を置いた。
　ナターシャは元に戻すように言ってカタペペに突っ込んだ。すると、カタペペの前にシャーザン、シャーサンが現れて、ナターシャに『氷』系の魔法を放った。すると、ナターシャはその攻撃を受け、絨毯から落ちてしまった。すると、そこへ他のみんなが一斉に攻撃してきた。そんな状況を見てデビドラは攻撃をした。すると、その魔法の前にカタペペが現れて魔法をかき消した。そして、カタペペはデビドラ達に攻撃しようと迫ってきていた。そんな中、ナターシャはみんなにぼろぼろにされていた。
　カタペペは攻撃を放とうとした。そして、呪文を言って放とうとすると、魔法は出てこなかった。カタペペは不振に思い、違う魔法を使ってみたが魔法は出なかった。なんとカタペペは魔法力を使い切ってしまったのだ。その為、イナスペ達の魔法は解け、カタペペも元の姿に戻った。この時、ドラメッド達も戻ってきた。
　意識を取り戻したみんなは、ナターシャを攻撃させたことに怒り、カタペペを囲うように集まった。そして、イナスペはカタペペを殴り飛ばした。そして、みんなは追い詰めた。すると、カタペペはいきなりダッシュして、ナターシャを持って城の中に入っていった。すかさずみんなは追いかけた。すると、カタペペはみんながクリエレと戦った部屋に入っていった。そして、みんなも追いかけるようにして中に入った。
　中に入ると、処刑台に捕まった2人のナターシャの姿があった。それを見てみんなが戸惑っていると、上から手紙が降ってきた。それを読むとそこには『この処刑台に捕まっているのは俺、カタリーナ・ペペラッパーとドラ・ナターシャだ。ドラ・ナターシャを助け

たければ俺を攻撃しろ。俺を生かしたいんなら、ドラ・ナターシャを攻撃しろ。チャンスは1回。弱い力で攻撃したらどちらも死ぬ。この機械には原子爆弾と同じくらいの威力を持つ爆弾が両方にセットされている。片方が死ねばもう片方は爆発しない。だから、もしドラ・ナターシャを助けたければ、俺に一番威力のある魔法を食らわして俺を消せばいい。ただし攻撃しなかった場合も爆発する。制限時間は10分、さあどちらのナターシャか選べ。』と書かれていた。

みんなは文句を言いながらもどちらが本物か推理しだした。すると、2人のナターシャはそれぞれ目を覚まし、自分自身が本物であることをアピールした。しかし、違いは分からなかった。制限時間10分の中で問題を出したり、絨毯を使ってみたりしたがどれもいい結果は出せなかった。すると、そんなドラ姫達の所にまた手紙が降ってきた。ドラ姫が確認すると、そこには『分からないようだな。それだったら降伏しろ。そして俺に従え。俺と手を結べば世界が手に入るぞ。』と書かれていた。その内容を読み上げたドラ姫達は絶対に降伏なんてしないと訴えた。すると、それに便乗して片方のナターシャが意見を述べた。「おい、カタペペ。俺達お世話ロボットは『希望』を生むために産まれてきたんだ。『絶望』しか生まねぇお前に降伏なんてぜってーしねぇよ。たとえ死んでもな。」

その言葉を聞いてみんなはこちらが本物だと確定した。そして、みんなは魔法力を全てつぎ込んだ合体魔法を意見を述べなかった方に放ったのだった。するとその時、ドラメッドが何かに気づいた。そして、攻撃を放った方はナターシャだと言ってきた。みんなは驚き慌てた。しかし、魔法はナターシャに向かっていっていた。するとその時、マタドーラが走っていき、ナターシャの前に現れた。そして、持っていた新しい『ヒラリマント』で攻撃を横に逸らせて、魔法をカタペペに向かわせたのだった。そして、攻撃はカタペペに当たった。

そして、カタペペは処刑台から外され倒れた。すると、カタペペは

最後の力を振り絞ってナターシャの方の爆弾のスイッチを入れた。
すると、あろうことかナターシャの方の処刑台はナターシャを付けたまま爆発してしまった。
爆発の衝撃で処刑台は壊れ、ナターシャは床に落ちた。みんなが近づくと、ナターシャは喋りだした。生きていた。すると、ナターシャはドラメッドにどうして違いが分かったのか聞いてきた。すると、ドラメッドはナターシャの胸ポケットから真っ黒になったドラ焼きを取り出した。これはあの見張りの時にドラメッドが渡したドラ焼きだった。これがナターシャの方だけ見えたので分かったらしい。
すると、ナターシャは焦がしてしまったことを謝った。それから、ナターシャはみんなに声を掛けていった。そして、最後にクリエレ達を倒したことを再確認した後、ナターシャは動かなくなってしまった。
みんなは何度も呼びかけるがナターシャは目を開けなかった。ナターシャは寝ているわけでもなく、本当に死んでしまっていたのだ。

特別編11　最大の二択（後書き）

やっぱり、みかたに攻撃されるシチュエーションっていいね

特別編１２　出会いと別れ

みんなはなんとかしようとしたが全てダメだった。ドラズは『ドラ教授』の所へ電話し助けてもらおうとしたが、教授は患者の病態が悪化してしまい、それを直すためこちらに来られる状態ではない事を言ってきた。その為、みんなは諦めかけていた。すると、そこに『お茶飲水』と名乗る人が来て「ナターシャを直す。」と言ってくれた。

このお茶飲水だが、ナターシャを作った本人である。なんと、ドラ姫はイナスペの話でナターシャを作った人が死んでしまっているという事を聞いていて、みんなを生き返らせる時に、教授も一緒に生き返らしたらしいのだ。そんなお茶飲水が、偶然この城を通りかかったのだ。

お茶飲水はナターシャの状態を調べ始めた。そして、結果が出てドラ姫達に伝えられた。しかし、みんなはショックを受けた。なんと、直せる可能性が１％しかないらしい。その為、お茶飲水はみんなに手術をしてもいいのか聞いてきた。勿論みんなは手術を希望し、ナターシャを手術することになった。

手術は着々と進んでいた。しかしその時、地震が城を襲った。そのせいでお茶飲水が持っていた高電圧機器をナターシャの体に当ててしまい、ナターシャの体に高電圧の電流が流れてしまった。

その後、お茶飲水はみんなに手術が終わったことを話した。そして、結果を言おうとした時、ドラ姫達が「いいんです。失敗してしまっても。無理なんですよね。１％なんて。」と言い出した。すると、お茶飲水はナターシャを見てきていいということを告げ、みんなをナターシャの所へ行かした。１人残ったお茶飲水は手紙を書き出した。

ナターシャの所に行ったドラ姫達は泣いていた。そして、抱きついたりしていた。すると、その時「いつまでのビービー泣いてんじゃ

ねぇよ。」という声が聞こえてきた。みんながシーンと静まり返ると、また「戦いは終わったんだぜ。」という声が聞こえてきた。ドラ姫が確認すると、ナターシャが寝言で喋っていたのだった。ナターシャは生きていたのだった。

みんなはお茶飲水のいた部屋へ急いだ。しかし、そこにお茶飲水はいなく、手紙だけ残していた。その手紙には手術成功までの経緯と、目が覚めたらナターシャにしてあげてほしいことが書かれていた。

その手紙を読んだみんなは急いで城の外に出た。しかし、もうお茶飲水の姿は見えなくなっていて、代わりに夕日がドラ姫達を照らしていた。

特別編１２　出会いと別れ（後書き）

そりゃあ、作った人だしね

特別編13　告白

次の日の昼、ナターシャは目覚めた。それに気づいたドラ姫は、お茶飲水の事を話した。すると、ナターシャは驚き、ベッドから降りようとした。しかし、ナターシャの体は痛み出してナターシャは倒れ込んだ。すぐさまドラ姫がまだ寝ているように言って、ベッドにナターシャを戻した。

しばらくして、イナスペ達が駆けつけた。そして、クリエレ達に勝ったことを共に喜んだ。すると、次にドラズ達が来てナターシャに杖を渡した。なんと杖は直っていたのだ。話によると、ドラえもんの持っている『復元光線銃』で直したらしい。それを聞いてナターシャはドラえもんにお礼を言ったのだった。

すると、ドラ姫がナターシャにどうしてここに来たのか聞いてみた。すると、ナターシャは泥棒を追いかけていてここに来たという事を思い出した。早速みんなはここのどこかにいる可能性がある泥棒を探し始めた。すると、ドラ姫の推理力と忍ドラの瞬発力により、城の地下室で発見された泥棒2人は捕まえられた。

泥棒は2人でどちらもナターシャの弁当を盗んだらしい。そして、そいつらに説教する為ナターシャは追いかけたらしい。

そんな2人はナターシャの前に突き出された。そして、ナターシャの説教が始まった。

その途中、泥棒2人の腹が鳴った。すると、ドラ姫はそんな2人にカレーを差し出したのだった。カレーはナターシャ達の昼食でもあった。

そして、ナターシャの説教が終わり2人は釈放された。ナターシャは最後に「もう2度とこんな事をするな。」と言って注意を促したのだった。

その後、2人は走って自分の村に帰っていった。

夕暮れになった時、ナターシャの体は歩けるくらいにまで回復して

いた。そんなナターシャにデビドラが「夕日が奇麗だから見ておいた方がいい。」と言って外に誘った。外に出ると、奇麗な夕日が2人を照らしていた。

すると、その中でデビドラが話しかけた。なんと、ナターシャに告白の仕方を聞いてきた。どうやらドラ姫に告白するらしい。その為、ナターシャは知っている限りのテクニックをデビドラに教えたのだった。

ある程度知識を得たデビドラはナターシャに「ドラ姫を呼んできてほしい。」と頼んで連れてきてもらった。ドラ姫を連れてきたナターシャは、「夕日、奇麗だよな。…あっ、いけねぇ。用事があるの忘れてた。」と言って城の方に行き、デビドラとドラ姫を2人きりにした。そしてデビドラは、夕日の見つめる中でドラ姫に指輪を差し出し、自分の気持ちを告白したのだった。それを聞いたドラ姫は「何言ってんのよ。今までずっと一緒だったじゃない。今更結婚なんて……いいわよ。よろしくね。デビドラ。」と言って、指輪を受け取ってくれたのだった。こうして2人は結ばれたのだった。

特別編13　告白（後書き）

原作（ノート）では痛々しい、セリフがいっぱい。

特別編１４　それぞれの帰路

その後、夕食を食べたナターシャ達は帰るということを言い出した。そして、みんなはドラ姫やデビドラ、そしてナターシャにお礼を言って、帰っていった。最後にナターシャとドラズが残った。ドラズはナターシャにひろきの所に案内すると言ったが、ナターシャは場所が分かるということで、自分のペースで行くといって断った。その為、ナターシャとドラズは別々の方向に帰っていった。それをドラ姫、デビドラ、忍ドラは見送っていた。

こうして戦いは終わった。そして、アース達は故郷に。ドラズはそれぞれの家に。ナターシャはフォック村を目指して歩き出した。

特別編１４　それぞれの帰路（後書き）

読んだ人、お疲れさまです。明日から、また毎日更新していきます。
あと３章、４章残っていますが、１章と２章の足した文字数の２倍くらいの量がありますので、よろしくお願いします。

第１０５話　ドラ・ナターシャと仲間達（前書き）

前作（幻の宝物）を書いてたら書きたくなったものです。オリキャラしかでてきません。

※幻の宝物の続きはこの次の話になります。

第１０５話　ドラ・ナターシャと仲間達

今から２１年前のある日、エジプトのとある研究所で１人の研究者がネコ型ロボットを作っていた。これこそが『ドラ・ナターシャ』だった。
そして、４月１日とうとう研究者は完成させた。そして、そのロボットに『ドラ・ナターシャ』という名前を付けたのだった。
　ナターシャは、研究者（教授）にあれこれ教わって、生きている感覚を感じるようになった。
そうこうしているうちに、ナターシャは『世界研究発表会』に出ることになった。

じつはこの世界にはまだ、１人のネコ型ロボットしかいなかった。
その為、教授は２人目のネコ型ロボットを作ろうとしていたのである。

教授の研究所には村の端にあり、怪しいからと誰も近づかなかった。しかし、発表をしてからは、たくさんの人達がナターシャを見に来たのであった。ナターシャもまた人がよく、誰からも愛されていた。その中でも特に『トール』『メイル』という双子の子供には大変なつかれていた。

しばらくして、教授はナターシャを連れ、１人目のネコ型ロボットを作った人の所を訪れた。すると、その人は教授を歓迎してくれた。そして、ネコ型ロボットをナターシャと会わせたのだった。そして、２人の間に友情関係が生じたのだった。これが後の『ドラ教授』である。この『感情を持つ』ということはロボットを作る上で１番重要な課題になっていた。しかし、ネコ型ロボットにはこれ以外に規定があり『嗅覚は人の２０倍』『目は暗いところでも見える赤外線

つきカメラ』などというものがあった。しかし、ナターシャはそれ以上の能力を兼ね備えていた。
教授は世界にネコ型ロボットの作り方を教えた。その為、世界各国の学者にネコ型ロボットが普及し始めた。

しばらくして、ナターシャはロボット養成学校に通い始めた。ロボット養成学校は全寮制だが、まだクラスにはネコ型ロボットはナターシャ1人だったことと、発明者がいたことにより通いとなっていた。地間に荷ドラ教授はとっくに学校を卒業していた。
学校でネコ型は1人なので、学校中の注目を集めていた。それでいて頭がよく、成績が優秀でスポーツ万能であった為、さらに目立つ存在になっていた。
しばらく時が経ち、ナターシャが家に帰る途中、河岸で釣りをしているネコ型ロボットを見かけたので話しかけた。そいつは『ドラシック・ダンサーズ』という名前であり、すぐにうちとけた。すると、ドラシックはナターシャを自分の家に連れていき、自分を作った人に紹介した。

その人はナターシャを歓迎して、ドラシックと仲良くしてくれるように言ってきた。勿論ナターシャはオッケーをした。すると、ドラシックも学校に通うようになった。クラスは同じクラスになることができた。
しばらくして、ナターシャのクラスにネコ型ロボットが入学してきた。そいつは『ドラスケート』といい、眠そうな顔をしていた。ナターシャとドラシックはなんとか話しかけたが、そいつは返事をせずに席に着いた。ナターシャ達は唖然としていた。

スケートの授業中の態度は寝ているだけだった。すると、そんなスケートに先生が指した。すると、スケートはすぐに起きて難問を即答した。そして、すぐにまた寝だした。その奇妙な行動にナターシ

ャとドラシックは気に入り、仲間に誘ったのだった。すると、スケートは軽く返事をして仲間になったのだった。

学校が終わると3人で帰っていた。すると、道で歌を唄っているネコ型ロボットを見かけたので3人は話しかけた。するとそいつは、同じネコ型ロボットに会えたということで喜んでいた。そして、『ミュージック・ドラ』と名乗ってきた。

そんな中、ドラシックはなんで学校に行かないのか聞いてみた。すると、ミュージックは『自分を作ってくれた人が死んでしまい学校への学費が払えない為、学校に行きたくても行けない』ということを話し出した。そんな話を聞いた3人は、どうしてもミュージックを学校に行かせたくなり校長先生に頼んだのだ。すると、校長はミュージックを学校に入学してもいいと言ってきた。しかし、入るには条件があると言ってきた。それは『放送室の機械が壊れてしまい音が出なくなっていたので、その代わりにミュージックが歌を唄ってほしい』ということだった。勿論ミュージックは喜び、入学を決めたのだった。

しばらくすると、文化祭の準備が始まった。ナターシャ達は買い出しに出かけていた。するとその最中、1人で歩いているネコ型ロボットを見かけた。すると、ナターシャ達は話しかけた。すると、そいつは1人でいることが楽しいということを言い、みんなといても楽しくないため学校にも行かないと言い出した。そいつは心に闇を持った『ウエイト・ドラ』というネコ型ロボットだったのだ。すると、ドラシックがウエイトを学校に連れていった。そこでは、様々な奴等がテンションを上げていて馬鹿騒ぎしていた。そんな様子を見てもウエイトは心を開かなかった。

すると、今度はスケートが「熱中できるものがあれば楽しくなるのでは。」と提案し、様々な活動を見せて回った。その中ではミュージックが唄ったり、スケートがスケートしたり、していた。すると今度は、ドラシックがＤＪになり盛り上げていた。

ドラシックは名前からすると、『クラシック』関係の何かをするかと思うが、ドラシックはダンスやロック、ヒップ・ホップなどの激しい音楽が好きだった。ドラシックを作った人はクラシックが好きなので、クラシック音楽が唄えるロボットを作っていたのだか、途中で手元が狂い、ロック好きのロボットになってしまったらしい。そんな博士を気遣ったドラシックは、クラシックを練習し、なんとか唄えるぐらいになって博士を喜ばしたが、ドラシックの内心ではクラシックを好きになることは出来なかった。そんな時、博士がドラシックに「自分のやりたいようにしなさい。」と言ってくれたので、ラップへの道に進もうと考えていたのだ。そんなこともあり、得意のＤＪでウエイトを楽しく思わせようとしたのだ。しかし、ウエイトはそれでも楽しめないらしく笑顔は無かった。

どうするか悩んでいると、他の生徒がスケートボードに乗りナターシャ達の側を通って行った。すると、ウエイトは「スケートボードをやってみたい。」と言い出した。その為、ナターシャはウエイトを連れてスケボークラブの所に行き、やらせてもらうことにした。すると、ウエイトは次々に大技を成功させていった。その様子を見て、クラブの人達もナターシャ達も驚いていた。そして、競技し終わったウエイトはみんなに近づき「俺、学校入ってスケボー極めたい。」と言ってきた。こうしてウエイトは生きがいをみつけ、学校にも入ることができたのだった。

しばらくして、ネコ型ロボットはたくさん入学してくるようになった。しかし、ナターシャ達は最初に出会った５人でいつも過ごしていた。

そんなある日、ナターシャが外を見ると、学校の入口でネコ型ロボットが学校の絵を描いているのを発見した。そして、そいつはナターシャが帰る時まで絵を描いていた。ナターシャはそんな奴に話しかけた。すると、そいつは驚いて後退りしながらナターシャを見た。そして、ナターシャに謝ってきた。内気な性格のようだ。その為ナ

ターシャは、絵が描いてあるスケッチブックを取り、絵を見てそこから話題を作り話しかけた。すると、そいつは自分の名を言ってある程度の自己紹介をしてきた。『ドラ・デ・ピカムンク』という名前で、絵を描くのが好きらしい。そして、ロボット学校がすごく綺麗な為、描いていたという。その後もナターシャはピカムンクの様々なことを聞いて、学校に入らないかと誘った。すると、ピカムンクは「それはできない。」と言って帰って行ってしまった。そんなピカムンクの事をナターシャは気になった。

次の日もピカムンクは学校の入口で絵を描いていた。そして、次の日もそのまた次の日も絵を描きに来ていた。気になったナターシャは校長先生に相談した。すると、校長先生はピカムンクを学校に入るように言って学内に連れてきた。他の生徒達は、そんなピカムンクに注目を集めていた。

ナターシャ達は作られてもうすぐ1年になろうとしていて、卒業が間近に迫っていた。その為、ドラシック達は就職活動で忙しかった。ナターシャは進路を決めてなく、教授の手伝いをするつもりでいた。校長先生はピカムンクに学校に入るように言ってきた。しかし、ピカムンクは入れないという。どうやらミュージックと同じで学費が払えないらしい。すると、その話を聞いた校長先生はピカムンクに『学校の天井一面に絵を描いてほしい』と頼んできた。そして、その代わりに学費を免除をしてやると言ってきたのだった。その話を聞きピカムンクは嬉しくなって校長に抱きついた。そして、学校への入学を決めたのだった。すると、校長先生はナターシャを呼んだ。そして、校長先生はナターシャにピカムンクの講師として「もう1年学校にいてくれ。」と頼んできたのだ。もちろん学費も学校が払ってくれるという。それを聞いたナターシャは、「喜んでやらせていただきます。」と言ってピカムンクの講師を引き受けたのだった。

そうしているうちにドラシック達の卒業の日がやってきた。ナター

シャもこの日、卒業式に出た。そして、学生という身分を卒業したのだった。ドラシック達はそれぞれ自分の進みたい進路に決まり歩んで行ったのだった。

新しい年になり、ピカムンクの学校生活が始まった。それと同時に、天井への絵を描き始めた。そして、ナターシャも講師というか教師になって、1つ下の生徒達に勉強を教えていた。知識が優れていたため教えることができたのだ。

そして、1年という日はあっという間に終わり、ナターシャは2回目の卒業式に出席したのだった。

ピカムンクの進路は、ある画家の所に行くことが決まっていた。ナターシャは、相変わらず教授の手伝いをするとの事で就職活動はしなかった。

卒業式が終わると、みんなは天井を見た。今までシートで覆っていて、ピカムンクしか知らない絵がとうとう披露されるのだ。

そしてシートは退かされた。ピカムンクの描いた絵はみんなを感動させた。そして、校長先生はピカムンクにお礼を言ってきたのだった。

こうして学校は終わり、ナターシャとピカムンクは2人で帰って行き、途中で別々にわかれたのだった。

ここまでがナターシャの生まれた時からの経緯でした。

この半年後、お茶飲水教授がクリエレによって命を奪われ、ナターシャは旅に出ることになったのだった。

第１０５話　ドラ・ナターシャと仲間達（後書き）

名前そのまま。
ウエイト→バランス感覚がよく、ウエイトレスの仕事をしている。
スケート→スケートが得意。ドラリンピック代表選手
ミュージック→その名の通り音楽が好き
ドラシック→ダンスが好き
ピカムンク（＝ピカソ＋ムンク）→絵画を得意とする

教授→大学の先生をやっているという設定があったような。

ドラ・ナターシャ→体育の女性教師が考えた名前です。

第１０６話　コロシアム会場で（前書き）

三章、いきなり長編から始まります。

第１０６話　コロシアム会場で

ナターシャは自分の故郷を訪れていた。
メイルとの約束を守る為、そして、お茶飲水に会う為に行ったのだ。
そして、無事にメイルとの約束を果たした。その時にはトールはいなかった。明日には帰ってくるという。その為、明日も残る事を決め、その後、一旦別れを告げ、お茶飲水に会いにいった。ナターシャは涙ながらに教授に抱きつき、喜びを露にしていた。その後、教授はナターシャを再度直し始めた。
　今日はそのまま直った後もここで一泊し、教授に今までのことを話したりしていた。途中、教授はナターシャの絨毯に目がいき「直してやる。」と言って直し始めた。その修理中でもナターシャと教授の話は続けられた。そして、絨毯が直り終わると、１７年ぶりにナターシャと教授二人でひとつ屋根の下、眠り始めた。

次の日、ナターシャはエルバフさんやセコンダさんがいる。メイルとトールの家に行った。まだ、メイルとトールは実家で暮らしているという。そして、ナターシャがドアを開けた瞬間、トールとメイルに抱きつかれた。
　その後、トールとメイル、そして、ナターシャは共に話を楽しんだ。彼らはもう２２歳になっていた。しかし、どちらも彼氏彼女はいないらしい。メイルにいたっては、ナターシャと結婚したいと言っている。それほどナターシャが好きなのだ。
　ナターシャは、杖の能力について話し出した。ドラ姫からどのような能力があるのか聞いていたので、ある程度の事は知っていた。そして、魔法力の回復についてのことで話すと、吹いた本人が回復しないのはおかしいということになり、作り直すと言ったのだった。その為杖は、まだ、メイルとトールに預ける形となった。そして、その後、広場に行ったり、市場に行ったりして、ナターシャが帰っ

てきたことを村中に伝えた。みんなナターシャのことは覚えていてナターシャと村人共々再会を喜んだ。
その後、家に帰っても3人のお喋りは夜遅くまで続いたのだった。

次の日、ナターシャは旅立った。新しくなった絨毯を受け取り家を後にした。杖はまだ時間が掛かるということで渡せなかった。それでも、今後はいつでも好きな時に戻ってくると伝えた為、完成したら連絡くれるように行ってメイル達に携帯の番号を教えた。
そして、みんなに別れを告げたナターシャはひろきに会う為にフォック村に急いだ。

その途中、なにやら武道会が行われているのを見つけた。ナターシャが覗くと、そこにはひろき達がエントリーしていた。
すぐさまナターシャはその会場の選手控え室に行った。しかし、そこにひろきの姿はなかった。しかも、他のフォック達も出場しているのに全員控え室にいなかった。ナターシャは不振に思ったが遅れているのだと思い、観客席で待ってみることにした。

しばらくして戦いは始まってしまった。しかし、ひろき達は現れなかった。その為、他の選手達は楽に勝ちあがっていた。その中で、唯一の女性選手にナターシャは注目をした。その女性というか少女は他の人達より強く、決勝まで勝ち上がった。しかし、その姿はあの夏子だった。なんと夏子だけこの会場に来ていたのだ。
そして、ついに決勝は始まった。両者一歩も引かない戦いをしていた。ふいに夏子がリングから落ちそうになるが頑張って持ちこたえていた。

この武道会のルールは、縦、横それぞれ１０ｍの正方形のリングから落ちたり、倒れて２０秒が経っても立てなかった場合負けとなる。しかし、魔法、水晶、刀、剣全ての武器の使用が認められてい

る。そんな条件の中で夏子は戦っていた。
対戦相手も夏子同様強く、余裕で決勝まで勝ち上がってきた兵(つわもの)だった。その為、夏子は微妙に押され気味になっていた。そして、ついに相手の魔法により夏子は吹き飛ばされてしまった。しかし、夏子は立ち上がりまた戦い始めた。しかし、次に相手は夏子の首を持って持ち上げた。そして、そのまま夏子の腹部に攻撃を繰り返した。酷い光景が広がっていた。観客からは悲鳴が聞こえてきていた。すると、敵は夏子に魔法を放ち夏子を吹き飛ばした。これにより夏子は凄まじいダメージを受けてしまい、２０秒がカウントされ、負けとなってしまった。

勝負は終わった。しかし、敵は暴れだした。そして、夏子にさらなる魔法を放とうとしていた。その光景を見て、すかさずナターシャがリングに上がり、夏子の変わりに魔法を受けた。すると、会場は歓喜の声を上げた。すると、その中で夏子が誰だか聞いてきた。ナターシャは自分の名を言って夏子をビックリさせた。ひろきの探していた人(ロボット)が目の前にいたからだ。すると、夏子はナターシャに話しかけてきた。

「助けてください。ひろき君達の行方が分からなくなってしまったんです。家にはいませんでした。それに携帯も通じません。多分敵に連れ去られたのだと思うのです。どうか助けてください。」
それを聞いたナターシャは探すことを決意した。すると、そんな２人にさっきの相手が剣で攻撃してきた。ナターシャはそれを受け止めた。すると、敵はもう片方の手で夏子に攻撃をした。すると、夏子は吹き飛ばされた。
相手はナターシャの一瞬の隙をつき、空中にいる夏子の所に向かって行き、そして夏子を掴んで遥か遠くへ投げ飛ばしてしまった。そして、夏子は見えなくなってしまった。

その光景を見たナターシャは怒り出し、そいつに戦いを申し込んだ。すると、相手はナターシャに言ってきた

「いいぜ。かかって来いよ。言っとくけど俺は悪魔族だぜ。それにさっきあの小娘が話していたひろきの事、あれは俺らの仕業だ。ひろきの仲間を世界中に飛ばした。お前も知っているだろ?あのフォック村のひろきだ。そんな奴を倒した俺でいいなら相手になるぜ。」

なんとこいつは悪魔族だった。その話を聞いてナターシャはさらに怒りだした。そして「俺は負けねぇ。」と言って、敵に向かっていった。

第１０６話　コロシアム会場で（後書き）

メイルとの約束については、ドラズの小説を読んでください

第１０７話　新たな冒険

ナターシャと敵は戦い始めた。ナターシャは敵を攻め続けた。しかし次の瞬間、ナターシャの体は一瞬動かなくなった。それに気づいた敵は攻撃をして、ナターシャを吹き飛ばした。どうやら教授に直してもらったものの、ナターシャの体にクリエレ達との疲れが残っているらしい。その為、いつもより動きにキレがなかった。

飛ばされて倒れ込んだナターシャに、敵は魔法を放ってきた。しかし、ナターシャはそれをかわし、敵に向かっていった。すると、今度は敵が吹き飛ばされた。しかし、その攻撃をした後、ナターシャは息切れをしていた。そうとう疲れているのだ。

倒された敵は立ち上がり、ナターシャに向かって行った。すると、ナターシャは魔法力を手に溜めて魔法を放った。しかし、その攻撃を敵はぎりぎりで避けた。そして、ナターシャに攻撃を食らわした。その攻撃は威力があり、ナターシャは気を失ってしまった。そして、リングに倒れ込んだ。そこへ敵はさらに攻撃を繰り出した。その攻撃はナターシャに当たってしまった。

煙が立ちこめ、ナターシャの姿は見えなくなった。しかし、煙が退くとそこにナターシャは立っていた。そして、敵に向かって勝利宣言をして手に力を籠め始めた。そんなナターシャに敵は走っていった。すると、ナターシャは腕をリングに叩き込んだ。ナターシャの腕はリングに穴を開けて、腕は埋もれていた。そこに敵が攻撃しようとした時、いきなりリングの真下から爆発が起こり、リングは敵もろとも吹き飛んだ。ナターシャの真下だけリングは残っていた。そして、空中にいる敵目掛けてナターシャの最強魔法を放ったのだった。それにより敵は滅んだ。

リングを爆発させた技は地面に魔法力を注ぎ、一気に爆発させる大技だった。クリエレとの戦いで使わなかったのは、ドラ姫達の城が壊れてしまう可能性があった為だ。

ナターシャはすぐ大会役員に、リングを壊してしまったことを謝った。すると役員達は「想定の範囲内です。」と言って許してくれた。

会場はナターシャコールが響いていた。その中をナターシャは立ち去った。一刻も早くひろき達や、怪我を負っている夏子を捜す為だ。その為、急いでいたのだ。

ナターシャはとりあえずフォック村に向かって絨毯で飛びだした。そして、絨毯に行き先を伝えると突然絨毯が話し出した。どうやらお茶飲水教授が修理の時に付けてくれた機能らしい。こうして、生きる絨毯となった。

ナターシャはそんな絨毯と話し始めた。そして、絨毯はフォック村の場所を聞いてきた。するとナターシャは「テレパシーでお前に場所を教える。」と言って、魔法使ったテレパシーで絨毯にフォック村を教えたのだった。その後、ナターシャは倒れ込んだ。体力が限界になり、立つことができなくなったらしい。すると、絨毯は「大丈夫ですかい、兄さん。」と言ってナターシャを心配した。すると、ナターシャはなんとか「このままフォック村に行ってくれ。」と言って、絨毯にフォック村に向かわせたのだった。

第１０７話　新たな冒険（後書き）

「想定内です。」
この発言ももう懐かしい。

第１０８話　フォック村で

ナターシャが村に着くと、普通の生活を送っている村人がちらほら見えた。ナターシャはその中で、ひろきの家だと思われる家に行ってみることにした。そして、ドアを開けた時ナターシャは倒れ込んだ。すると、家の中から何かが出てきて、ナターシャを揺らしていた。まさしくそれはひろきの家にいるピカチュウだった。

ピカチュウはナターシャの体の状態を確かめると、急いで海水をくみ上げて『食べ物がなる木』で食料を作り食べさせた。そのおかげでナターシャは意識を取り戻した。

ナターシャはピカチュウにひろきの事を聞いた。すると、ピカチュウはひろきの事は知らないと言ってきた。どうやらナターシャも言葉が分かるようだ。

ナターシャはひろきを探しに行くということをピカチュウに言った。すると、ピカチュウは「そんな体では無理だ。」と言って行かせなかった。しかし、ナターシャはここに来るまでに起こった夏子との事を話し、早めに行かないといけないことを告げた。それを聞いたピカチュウは、自分も行くことを告げた。

しかし、ナターシャはそれを拒否した。危険なので行かせたくなかったのだ。しかし、ピカチュウは行くと言って聞かなかった。

そんなやり取りをしている時、家の外から悲鳴が聞こえてきた。慌ててナターシャとピカチュウは飛び出した。すると、そこには敵の姿があり、村人に襲い掛かっていた。

ナターシャはすかさず止めるように言って、自分の存在を敵に知

らせた。そして、なぜここに来たのか聞いてきた。すると、敵はひろきの仲間であるピカチュウを捕まえに来たと言い出した。それを聞いたナターシャは、ひろき達を連れ去った奴等の仲間だと認識して、ひろき達がどこにいるのか聞いてきた。すると、敵は前回の敵同様「世界中に飛ばした。」と言ってきた。その言葉を聞いたナターシャは敵に攻撃を始めた。

敵はその攻撃をかわし、ナターシャに攻撃を仕掛けた。すると、ナターシャはその攻撃に当たり吹き飛ばされた。体力がまだ回復していないナターシャは、その攻撃だけで呼吸を乱した。そんなナターシャに敵は向かっていき攻撃をしようとした。しかし、ナターシャはなんとか剣で受け止め、攻撃を凌(しの)いだ。

ナターシャは一旦敵から距離を置こうと移動した。しかし、その移動の着地でナターシャはバランスを崩し地面に手を着いた。すると、そこに敵は攻撃を仕掛けようとした。ナターシャは反応が遅れ、攻撃に当たりそうになっていた。するとその時、敵に雷が落ちて敵を感電させた。ナターシャは何が起こったかわからなくなっていた。すると、そんなナターシャの前にピカチュウが現れて再度敵に電撃を放った。そこで始めてナターシャはピカチュウの強さを知った。

ナターシャはピカチュウが敵を感電させている間に体勢を立て直し、感電している敵に攻撃した。すると、敵は消滅した。

ナターシャはピカチュウの強さを知った為、一緒に旅に行くかどうか聞いてみた。勿論ピカチュウは「行く。」と言って、ナターシャの絨毯に乗り込んだ。

そして、ナターシャとピカチュウはみんなを探し始めた。

第１０８話　フォック村で（後書き）

喋る絨毯。

キッドとエドと同じような関係にしたかっただけです。

第１０９話　２匹の心強い仲間

ナターシャ達は空中から仲間を探していた。ナターシャは目がよく、空中からでも探すことができたのだった。

しかし、次第に日が暮れていき、ナターシャ達はある村へ泊まることにした。村の入口には『アイビスタウン』と書かれていた。

ナターシャ達は宿を探し始めた。通り過ぎる人に声を掛けて宿がないか聞いて回った。しかし、宿は無いという。それとは別に、ひろき達の目撃情報を聞いたが、みんなは口々に「帰って来ていない。」と言って来た。その言葉を聞いて、ナターシャはひろきが昔ここに住んでいたという事を知った。

聞き込みも難攻し、次の村に行こうとした時、突然誰かがナターシャ達に話しかけてきた。ナターシャが振り向くと、そこには１人の男性が立っていた。

それはまさしくカイルだった。

すると、カイルはナターシャに話しかけた。

「お前ら、宿探してんのか。だったら俺が住んでた所使っていいぞ。この道まっすぐ行って突き当たりだ。」

そう言って村から出ようとしていた。ナターシャは慌ててお礼を言った後、ひろき達のことを聞いてみた。すると、カイルは足を止めナターシャの方へ向かってきた。そして「ひろきを探しているのか。」と聞いてきた。その為、ナターシャは今までのひろき達に関する情報を言った。カイルを天使族だと認識したからだ。すると、カイルはひろきの探し方を教えてくれた。

どうやらひろきは体から出す『気（オーラ）』を隠すことができないらしい。その為、『気』を感知すれば簡単に見つかるという。その話を聞い

たナターシャは再度お礼を言った。

カイルは、そんなナターシャを見るとあることを思い出したような表情になった。すると、カイルはいきなりナターシャの両腕を掴んだ。

ナターシャは驚き、何をするのか聞いてみた。すると、カイルは「お前、相当疲れているだろ。魔法力がほとんど残ってねぇぞ。俺の少し分けてやるから、じっとしてろ。」と言って、ナターシャに魔法力を送った。すると、ナターシャの体は軽くなった。

その後カイルは、ナターシャに飴みたいな物を渡してきた。そして「それは魔法の飴玉だ。舐めると魔法力が全回復する。」と言って去っていった。その間、カイルは１８年前（１年たった。）の事を思い出していた。そういえばナターシャが旅立ったのも１８年前だ…。

ナターシャはそれをしまい、言われた家に向かった。

その途中、ピカチュウが叫んでナターシャをある方向に向かせた。すると、そこにはハム太郎とリボンちゃんの姿があった。しかし、ハム太郎の体はぼろぼろになっていて、それをリボンちゃんが支えている状態だった。

ピカチュウは慌てて駆け寄り、２匹の無事を確かめた。そして、ピカチュウはナターシャに助けを求めた。その為、ナターシャは慌ててハム太郎を回復させた。その後でリボンちゃんも回復させた。カイルの魔法力が役に立った。その後、カイルの家に連れていった。

家の中でナターシャはハム太郎達を寝かせ、体力の回復を図った。その後、ナターシャとピカチュウも眠りに付いた。

次の日、ハム太郎達はナターシャとピカチュウが見つめる中で目を覚ました。すると、２匹はナターシャとピカチュウにお礼を言ってきた。すると、そんな２匹にナターシャはひろき達に何が起こった

のか聞いてみた。すると、２匹は今までの事を話し始めた。話によると、ひろき達が武道会に行く途中、いきなり敵が現れてひろき達と戦い始めたらしい。その中で敵はひろき達に「武道会の会場を爆発させたくなかったら、おとなしく来てもらおうか。」と言って、ひろき達をある場所まで連れて来た時、睡眠ガスをひろき達に浴びせてみんなを眠らしたらしい。ハム太郎達も眠ってしまったらしい。その為、それ以上のひろき達のことは覚えていないらしい。それを話したハム太郎達はというと、目が覚めた時には敵の手の中にいたのを頑張って抜け出して、敵に気づかれて魔法で攻撃されながらもこの町まで逃げてきたという。

　少しではあるが情報を得たナターシャは、早速次の町に行くことを言った。すると、ハム太郎達も一緒に行くことを伝えた。しかし、ナターシャは危ないとの理由からそれを拒否。２匹に帰るように言った。そんなナターシャを見て、ピカチュウがハム太郎達の凄いところを説明しだした。しかし、それでもナターシャは連れて行けないといってきた。そんなもんだから２匹はがっくりと肩を落としてしまった。

そんな時、突如としてロボットの敵がナターシャ達の前に現れた。しかもこの敵は、ハム太郎達が脱出をした敵だった。

ナターシャはすぐにハム太郎達を服のポケットの中に入れ、ロボットと戦い始めた。ロボットは幾度となくナターシャに攻撃してきた。しかし、ナターシャはそれをかわし攻撃をするチャンスを窺(うかが)っていた。そして、チャンスを見つけてロボットを吹き飛ばした。しかし、吹き飛ばされたロボットはすぐに立ち上がり、再度ナターシャに向かってきていた。

　その中でピカチュウもロボットに攻撃し始めた。そして、ナターシャとピカチュウのコンボによりロボットは吹き飛ばされた。しか

し、ロボットは再度立ち上がった。そして、またナターシャ達に向かってきていた。どうやら硬いボディをしているらしい。

その後もロボットは何度倒されようとも立ち上がり、ナターシャ達に向かってきていた。ナターシャ達はだんだんと疲れてきて、動きにキレがなくなってきていた。そうしているうちに、なんとピカチュウが雷を撃てなくなってしまった。そして、ナターシャも足に攻撃を食らって怪我をしてしまい、動きが格段に遅くなってしまった。そんなナターシャにロボットは向かっていった。ナターシャはなんとか片方の足でかわしていたがついにロボットに隙を見つけられてしまい、ナターシャの腹目掛けて魔法を放った。ナターシャはバリアを張ることもできず、攻撃を食らうと考えていた。するとその時、ハム太郎が服から出てきて、その魔法目掛けて電撃を発射した。すると、見事に2つの攻撃はかき消されてナターシャが魔法を食らうことはなかった。

そんなかいあって、ナターシャはロボットを再度吹き飛ばすことができた。その時、ハム太郎が何かを発見した。なんと、ロボットの股の所にスイッチのような物があったのだ。そう言われてナターシャもそれに気づいた。戦いに夢中で気づかなかったらしい。

ナターシャとピカチュウそれにハム太郎は、そのスイッチ目掛けて攻撃しようとした。しかし、ロボットは立ち上がり、スイッチに攻撃することはできなくなってしまった。そこでナターシャは、もう一度ロボットを飛ばして倒れさせようとした。そして、ナターシャはロボットに向かって行った。

ナターシャの攻撃は続けられたがロボットはしぶとく、なかなか倒れなかった。しかも、ナターシャはこの戦いで魔法を1回も使わずに戦っていたので、吹き飛ばすには相当な力が必要だった。魔法を使わないのは、これからの戦いの事を考えたナターシャの行動だった。

ロボットとナターシャが争っている間にハム太郎達は服から出て、

ロボットに気づかれないようにロボットの後ろまで言った。そして、ロボットの真下に行き『ウォーターサンダー』というリボンちゃんとハム太郎の合体魔法をスイッチ目掛けて放った。すると、ロボットの体に電気が流れた。すると、ボディは脆(もろ)くなり、ロボットは動きを止めた。

ナターシャはその様子を見てハム太郎達に気づいた。そして、状況を察したナターシャはロボットに踵落(かかとお)としを決め、ロボットを真二つにした。そして、ロボットは爆発し、跡形もなく消えてしまった。

その後、ハム太郎とリボンちゃんはナターシャの足を治療した。そして、それが終わると、ハム太郎達は再度連れて行ってほしいことを頼んだ。すると、ナターシャは「今回はお前らのおかげで助かったありがとう。そして、お前らの強さも見せてもらった。だけど連れて行けない。と思ったけど、よく考えたらここから2匹だけで帰らせるのも危ないよな。だから、ついて来いよ。」と言ってきた。それを聞いた2匹は嬉しくなり、ナターシャに飛びついたのだった。しかし、ナターシャはハム太郎達に飼い主の事を聞いてみた。すると、今回もまた旅行に行っているらしく、5日間は帰らないらしい。それを聞いたナターシャは安心して絨毯を広げて飛び乗り、次なる仲間を探し始めた。

第１０９話　２匹の心強い仲間（後書き）

ハム太郎達の設定がだんだんおかしくなっていってるような気がする。

第１１０話　フォックとの出会い

ナターシャは絨毯の上で必死に『気』を探っていた。するとその時、誰かの『気』かは分からないが強力な気を読み取った。そして、そこに向かうことにした。

向かっていくと、そこには塔が立っていた。その中にナターシャ達は入ってみた。すると、ハム太郎達とピカチュウが「仲間の匂いがする。」と言って、走って匂いのする方に向かった。慌ててナターシャはそれを追った。すると、塔の奥には誰かがいた。ピカチュウはそいつに抱きついた。そこにいたのはフォックだった。

フォックはみんなとの再会を喜んだ。ピカチュウ達も喜んだ。その中でフォックはナターシャに「誰だ。」的なことを聞いてきたので、ここまでの事を説明した。すると、フォックは喜び、今後も一緒に探してほしい事を頼んだ。勿論ナターシャはオッケーをし、フォックを連れ塔の近くにある町に向かったのだった。

町に着いたナターシャ達は、とりあえず町長に挨拶をして、フォックの話を聞くべく飲食店に入った。そして、席に着き話を始めた。すると、フォックはハム太郎達と違うことを言ってきた。不振に思ったナターシャ達は、さりげなくひろきはどこだと聞いてみた。すると、フォックは場所を話し始めた。

「ここから西に行ったところに…。」その時、フォックは口を慌てて押さえた。その様子を見たナターシャは、剣先をフォックに向け正体を問い詰めた。すると、フォックは笑い出した。そして、ナターシャに言い放った。

「よく見破ったな。だが状況が違うんだよねえ。追い詰められてい

るのはお前らだぜ。周りを見てみろ。」
そう言われたナターシャ達は周りを見た。すると、そこには周りを銃口（じゅうこう）で囲まれていた自分達の姿が映し出された。そして、フォックいや敵に「死にたくなかったら剣をしまいな。」と言われた。ナターシャはゆっくり剣を腰に戻した。その瞬間、囲んでいた銃口が火を噴いた。しかし、ナターシャは剣を腰にしまうと同時に魔法を使って敵の視界を遮り、窓からピカチュウハム太郎リボンちゃんを連れ脱出していた。

店の外に出たナターシャ達は慌てて店から逃げ出した。しかし、町の彼方此方（あちこち）から狙われた。どうやら、この町全体が敵のアジトらしい。ナターシャ達はとりあえず物陰に隠れた。そこでナターシャはハム太郎達に、内ポケットに入っているように言った。なんと、ナターシャの内ポケットは『四次元ポケット』になっているのだ。その中に入っていれば安全なのでハム太郎達を入れさせたのだった。ピカチュウにも入るように言ったが、ピカチュウは入らなかった。そして、一緒に戦うと言ってきた。しかし、ナターシャは入るように言った。これは、電気が出せない状態なのに戦っても危ないという配慮だった。
そんなやり取りをしている間に敵に見つかってしまった。しかし、ナターシャはピカチュウを説得させるのに夢中になっていて、気づかなかった。

敵はナターシャに発砲した。その音でナターシャは気づいた。そして間一髪で弾をかわした。そして、再度逃げようとしたが周りはもう既に敵に囲まれていた。そんな中、フォックになっていた敵が建物の上から魔法を放った。ナターシャはそれに気づいた。しかし、その魔法が速いのと周りを敵に囲まれていたということもあり、避けられずに攻撃に当たり吹き飛ばされた。その瞬間、ナターシャに向かって敵は発砲した。そして、それはナターシャに当たった。

ナターシャは１０ｍくらいの所まで吹き飛ばされて地面に落ちた。ピカチュウはその様子を見て怒り、力を振り絞って魔法を放った敵（次からイドワード）に雷を落とした。しかし、イドワードに雷は効かなかった。なんと、体全身に特製薄ゴムを纏（まと）っていたのだ。すると、敵はピカチュウにも魔法を放った。そして、ピカチュウも吹き飛ばされた。しかし、それをナターシャはキャッチした。そして、そのままピカチュウを内ポケットに入れた。なんとナターシャは生きていた。

ナターシャは歩き出した。そんな中、敵の誰かがナターシャを撃った。しかし、弾はナターシャの体に当たると弾は潰れてしまい、ナターシャの体を貫かなかった。それほどナターシャの体は硬い物でできていた。その為、先ほどの無数の弾では死ななかったのだ。

ナターシャは突然止まり、力を体中に籠め始めた。そして次の瞬間、いきなりナターシャの体から衝撃波が出て、周りにいた敵を全て吹き飛ばした。そして、残りはイドワードだけになってしまった。

イドワードは直接ナターシャに向かってきたかと思いきや、いきなりナターシャの前で何かを光らせた。それは閃光弾だった。この光によりナターシャは、しばらくの間目が見えなくなってしまった。そんなナターシャにイドワードは攻撃を食らわし始めた。

ナターシャは最初、攻撃を受け続けた。しかし、しばらくしてから『音』と『気』だけで敵の位置を読み取ることができるようになり攻撃をかわしていた。しかし、敵は『気』を消した。なんと、『気』を消せたのだ。これによりナターシャは音だけが頼りになってしまった。すると、ピカチュウとハム太郎達がポケットから出てきて、敵の居場所を教え始めた。しかし、イドワードはそんなピカチュウ達を掴み服から出した。ピカチュウ達はこれがチャンスだと思い、自分の存在がこっちであることを叫んだ。

ナターシャはその声を頼りに攻撃をした。しかし、イドワードはそれを余裕でかわしナターシャの裏に行った。そして「動くな。動いたらこいつらを攻撃するぞ。」と言ってナターシャの動きを止めた。すると、イドワードはそんなナターシャに攻撃した。それによりナターシャは倒れた。

すると、敵は「動いたな。動いたからこいつらはいいということだな。」とかふざけた事を言って、ピカチュウ達に魔法を放とうとした。するとその瞬間、誰かがイドワードに魔法を放ちイドワードを吹き飛ばした。それによりピカチュウ達は解放され、ナターシャの所へ向かった。そして、ハム太郎達はナターシャの目を魔法で回復させて見えるようにした。

その後、ナターシャは魔法を放った奴を見て「やはり、いたんだな。」と言った。すると、そこにはぼろぼろのフォックの姿があった。

イドワードは立ち上がり、フォックに「なぜここにお前がいる。塔の中で縛られているはずなのに。」と言った。すると、フォックは「いきなり塔が壊れて、脱出できた。」と言ってきた。すると、ナターシャが口を開いた。なんと、ナターシャがフォックを脱出させたという。

ナターシャはイドワードに最初に会った時から変だと思っていたらしく、ずっと塔を注目していた。そして、視力を奪われて気と音だけ頼りになった時、イドワードが気を消した時、塔の方から強い気を感じ取った為、そこに本物のフォックがいることを確信したらしい。そして、ナターシャはあらかじめピカチュウ達に『イドワードに捕まりそうになった場合は塔の方へ逃げろ』と言っていて、捕ま

ってもイドワードの背後には塔がある状態にしておいたのだと言う。
そして、魔法を放てば当然ながらイドワードは避けると思い、魔法を放ったのだった。そして、案の定イドワード避けたが、魔法はそのまま塔に向かっていき、塔を破壊して捕まっていると予想したフォックを開放させたのだった。

すばらしい作戦を聞いたイドワードはナターシャ達に攻撃してきた。しかし、ナターシャとフォックは共に魔法を放ち、イドワードを消滅させたのだった。
その後、ナターシャとフォックは共に手を取り合い、一緒に戦うことを誓(ちか)ったのだった。

第１１０話　フォックとの出会い（後書き）

鉄砲で当たっても死なない。
精密機械が詰まっているため、外側も頑丈にできてます。

第１１１話　悪バルトの執念

フォックの話によると、やはりハム太郎たち同様に目を覚ましたら塔にいたと言う。それ以外の情報は分からないということで、次なる町を目指すことになった。すると、フォックは近くに『かぐれ村』があると言ってそこに向かわせた。もしかしたら夏子が帰ってきているかもという推測があったからだ。

かぐれ村に着くと、村長がフォックに挨拶を交わした。夏子がお世話になっていることを知っていたからだ。

挨拶が済んだ後、村長は夏子が帰ってきて来ないことを伝えた。その為、ナターシャは夏子に起こった出来事を話した。その話を聞いた村長はショックを受けてしまった。しかし「ひろき殿が助けてくれるじゃろ。」と言って開き直った。しかし、ひろきが行方不明のことを聞いて村長は落ち込んでしまった。

そんな中、「最近になって後ろの山で変な物音が聞こえてくる。」と村長が言った。その言葉にフォックはハッとした。後ろの山というのはテーブルマウンテンのこと。そしてそこには、かつて悪バルトという怪物がいた場所だ。フォックはまさか悪バルトが復活したのかと思ってしまったのだ。そして、真相を確かめるべく、ナターシャ達はテーブルマウンテンに向かった。

テーブルマウンテンの内部はあの頃のままらしく、様々な機械が彼方此方に散乱していた。とある場所では水も残っていたし、上にあった城は壊されたままだった。

最後に城を見て、これといって怪しい所はなかったのでフォック達は帰ろうとした。その時、ナターシャが微かな音を拾った。そして、フォック達にジャンプするように言ってきた。その為、フォッ

クはハム太郎達を抱え、ナターシャはピカチュウを抱きジャンプした。すると、今まで立っていた所から手が出てきた。その手にフォックが見覚えがあった。それは悪バルトの手だった。そうしているうちに、悪バルトの体が全て露になった。

悪バルトはフォックを見つけると話しかけてきた。

「久シブリダナ。ふぉっく。私ハコノ山ノ中デ、悪魔族ノ科学者ガ治シテクレルノヲ、ズット待ッテイタ、ソシテ先日、見事ニ復活シテモラッタ。深イ眠リノ中、オ前ラノコトヲ、ズット怨(うら)ンデイタ。ソシテ今、オ前ガ目ノ前ニイル。私ノ怨ミハ、1人ダケデハ足リン。スデニ倒シタ小僧1人ダケデハ…。ソンナ時、オ前ガ現レタ。シカモ、新タニ4匹モ連レテ。」

そんな言葉を聞いた。フォックは誰か他にいるのか聞いてみた。すると、悪バルトは何かをフォック達に投げつけた。フォックが見るとそれはぼろぼろにされたタケルだった。

ハム太郎達は慌ててタケルを回復させた。どうやらまだ生きているらしく、体は動いていた。そんなタケルをフォックは端の方に寝かせた後、悪バルトに向かっていった。ナターシャもそれを追うように攻撃しだした。

悪バルトは当時以上の破壊力とスピードを持っていて、フォック達を苦戦させた。そして、ついに2人は吹き飛ばされてしまった。そして、ナターシャも悪バルトの圧倒的な強さを感じ取った。しかし、2人は諦めず果敢(かかん)に悪バルトに向かっていった。

悪バルトの攻撃は2人の攻撃力が上がるに連れて激しくなっていった。そして、ついにナターシャが悪バルトに捕まった。首を掴まれ宙吊りになっている状態だ。ナターシャはなんとか抜け出そうとするが、悪バルトの力が強すぎてできなかった。そして、悪バルトはそんなナターシャに魔法球を連打した。しかし、ナターシャは魔

法でバリアを張り、魔法から身を守った。しかし、悪バルトはそれを感知すると、ナターシャを思いっきり地面に叩きつけた。そして、首を持ったまま悪バルトはナターシャを踏み潰した。
フォックはその間に悪バルトに向かっていき、魔法を放っていた。しかし、悪バルトに食らっている様子はなく、ナターシャの攻撃を止めなかった。すると、突然悪バルトはナターシャの足を持つと、そのまま振り回しフォックの方へ投げ飛ばした。突然の行動に戸惑ったフォックはそのままナターシャを腹に当てられ、ナターシャと一緒に吹き飛んだ。しかし、フォックがぎりぎり踏ん張って崖から落ちることはなかった。すると、悪バルトはそんな2人に特大の魔法球を放ってきた。その攻撃は2人に当たり、2人の姿は煙に呑まれた。

煙が退くと、そこには傷だらけの2人が倒れこんでいった。それを確認した悪バルトはさらに魔法を放ってきた。そして、2人はまた煙に消えた。そして、それを10回くらい繰り返した後、悪バルトは攻撃を止めた。
2人はピクリとも動かなかった。すると、悪バルトはタケルの側にいたピカチュウ達に標的を定めてきた。
悪バルトは攻撃をしようとした。すると、どこからが魔法が飛んできて、悪バルトの顔にあった。悪バルトが攻撃してきた方を見ると、ナターシャが立ち上がっていた。そして「お前の相手は俺らだろ。」と言って再度魔法を放った。そして、悪バルトとナターシャの第2ラウンドが始まった。しかし、悪バルトの強さは変わらず、すぐにナターシャは吹き飛ばされた。すると、そんなナターシャを見てタケルが立ち上がった。そして、なんと悪バルトの背中に核爆弾並の爆発物が付いているという事を言ってきた。どうやらタケルが戦った時に付けた物らしい。それを聞いたナターシャは早速後ろに回ろうとした。しかし、悪バルトの攻撃が激しく、後ろに行くことができなかった。すると、ナターシャはタケルのブーメランに注目した。

すると、「それを使えば爆発させることができる。」と言ってきた。なんと、ナターシャは物に魔法力を送っておけば、好きな時にそれから魔法が出せるという荒業を持っていたのだ。そして、それをブーメランに使えば丁度の所で爆弾に着火することができると言うことだ。ただし、魔法力を相当使う為、できれば使いたくはない戦法だった。しかし、やるしかなかった。

そして、それを早速実行することになった。しかし、2人共体力が限界に来ていてブーメランを投げる力が残っていなかった。その為、2人の人手が必要だった。しかし、ナターシャとタケルがブーメランを持つと悪バルトに攻撃を打たれてしまうためどうすることもできなかった。するとその時「俺が、アイツの相手になる。」と言ってフォックが立ち上がった。その為、この作戦が使えるようになった。

3人はそれぞれ分かれ作戦を実行した。すると、うまい具合に導火線に火が着き、悪バルトの体は爆発と同時にばらばらになった。

こうして、苦戦したが悪バルトとの戦いに勝つことができたのだった。

第１１１話　悪バルトの執念（後書き）

どうやって爆発物をつけたか…

タケルが、テーブルマウンテン内部の部屋から爆発物を持ってきて、
ぼろぼろになりながらもつけたということにしておきましょう。

第１１２話　イナバ君の名推理

フォック達はかぐれ村に運ばれた。怪我が相当酷く、一刻も早く手当てが必要だったからだ。そして、一晩掛けて回復した。

ナターシャ達は、次の町に急ぐことにした。これもハム太郎達の飼い主の問題があるからだ。あと４日で帰さないといけないのだ。

ナターシャ達は絨毯に乗って探していた。すると、ある村の上で『黒い気』を感知した。

『黒い気』というのは、悪魔族の悪さをしているという『気』である。ナターシャはそれが見逃せなくなり、その村に降り立った。なんと降り立った村は『リンゴ村』という、ハムチィーの故郷だった。その為、村にはハムチィーに似た生物がたくさんいて、フォック達を驚かされた。

フォックはそんな村人に、この中にハムチィーがいるかどうか聞いてみた。しかし、この中にハムチィーはいないという。仕方なく仲間は諦めて敵を探すことになった。すると、村の中心にある山から爆発音と共に悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴を聞いたみんなは行ってみることにした。

『気』を頼りに悲鳴があった場所に着いた。すると、そこには傷だらけのイナバの姿とそれを掴んでいる敵の姿があった。早速みんなはそれを助けるべく敵の所へ言った。ナターシャにはフォックからイナバが仲間であることを伝えられていた。

フォック達に気づいた敵は魔法で攻撃してきた。すぐにみんなは

避けて、逆に攻撃を返した。すると、敵は避けて、フォック達と距離を置いて着地した。その時イナバはみんながいることに気づいた。

敵は「攻撃すればこいつ（イナバ）を攻撃する。」と言ってきた。その為、ナターシャ達はじっと敵を見つめてどうするか考えた。その中でナターシャは、すぐに魔法が出せるように手に魔法力を溜めていた。そんな中、イナバは敵に気づかれないように辺りを見渡した。すると、イナバは何かを発見した。そして、フォック達に向かって山の高峰（こうほう）にある岩に魔法を放つように言ってきた。それを聞いたナターシャは瞬時に魔法を放った。

敵はイナバに攻撃しようとした。するとその時、敵の後方から先ほど魔法を当てた岩が転がってきていた。敵は思わず両手で岩を受け止めた。その隙にイナバは敵から離れ、フォック達の所へ向かった。そして、人質がいなくなったフォック達は敵に攻撃を食らわした。しかし、敵はそれらの攻撃を先ほどの岩で防いでいた。

すると、イナバはそんな敵の弱点を探り出した。すると、敵の弱点は泳げない事だった。その為、そんな使えない弱点はシカトして、フォック達は攻撃を繰り返した。しかし、敵も反撃してきた。すると、その流れ弾がイナバの近くに当たり、イナバは吹き飛ばされた。

イナバは地面に落とされた。その時、地面が暖かいことに気づいた。そして辺りを見渡し、地面の岩などを調べ始めた。そして、ついにイナバは気づいた。この山が活火山であることを…。

イナバはフォック達に敵の足元を魔法で狙うように言ってきた。しかし、その時にはもうナターシャは魔法を敵の足元へ放っていた。ナターシャも気づいたようだ。すると、敵はジャンプして魔法から避けた。しかし、魔法はちゃんと標的を捉えていた。そして、イナ

バとナターシャの予想通り、山肌に穴が開いたと思ったら、そこからマグマが噴出したのだった。

敵はそのマグマに呑み込まれ消滅した。こうして、敵に勝つことができた。が、マグマをこのままにしておくことはできない。どうするかをナターシャは考えていなかった。疲れていて頭が回らなかったらしい。すると、地響きと共に何かが転がってきた。ナターシャ達が見ると、そこには巨大な岩が転がって来ていた。

ナターシャ達はすぐそれを破壊しようとした。しかし、イナバがそれを止めて、そのままにしておくように言った。その為、そのまま見ていると、岩が魔法により開いた穴にはまって動かなくなった。しかも、その岩のおかげでマグマ噴出しも止まったのだった。しかし、これは偶然ではなかった。なんとイナバが全て仕組んだのだった。

最初抜け出す時に放ってもらった魔法により、魔法が当たった所を弱くしておいた。しかも岩は複数あり、その時は1つだけ落として、いくつか残るようにしておき、後で何かに使おうとしたらしい。そして活火山だと気づいた時、マグマで敵を倒した後、そのマグマを止めるために上で残っている岩を落として塞ごうとしたのだ。

その為、マグマを噴火させることにより山に振動を与えて、その振動で岩を落としたと言う。しかし、落ちる前にあれほどドカドカやっていたのに落ちないのは不思議であるとナターシャ達は疑問に思ったが、それもちゃんと計算したらしい。もし、それで落ちてしまってももう1つ岩が存在していてそれが落ちてくるということなのだ。この説明を聞いてみんなは驚いた。凄まじい推理力にみんなは関心した。（わかりづらくてすみません）

すると、イナバはタケルにもう1つの岩をブーメランで壊すように言って岩を壊させた。こうして、リンゴ村の人達に危害を加えるこ

となく戦いは終わったのだった。

その後、ナターシャ達はイナバに今まで起こったことを聞いてきた。すると、イナバは敵のことを話し始めた。どうやらさっきの奴が色々話したらしい。話によると、みんなを眠らした後、敵の軍団は誰がみんなを消すか悩んだらしい。

それで喧嘩(けんか)になり争っていた時、誰かが強力な魔法を放ってしまい、捕まえたみんなを世界各国にばら撒(ま)いてしまったらしい。そして、仕方なく『見つけた奴をそれぞれが消す』ということになり、敵は世界各国に散らばったらしい。その話を聞いたナターシャ達は、敵より早くみんなを見つけることが必要だと考え、慌てて探すことにした。しかし、みんなの体は酷く疲れていて、絨毯の上で少し休むことにした。そして、みんなはいつの間にか寝てしまった。

第１１２話　イナバ君の名推理（後書き）

推理？いいえ、敵を倒すためのこじつけです。

第１１３話　プププランドでの出会い

ナターシャ達は目を覚ました。そして、不思議な所に着いていたので驚いた。どうやら絨毯が怪しかったからと言って連れてきたらしい。

みんなは今までカービィの故郷を訪れたことが無い為、この場所がカービィの故郷だと分からなかった。その為、この国を探検することになった。すると、そのうちにカービィがみんなの前に現れたのでここがカービィの故郷だと気づいたのだった。

フォック達はカーピィにカービィの存在を聞いてみた。しかし、兄貴（カービィ）はここにはいないと言う。しかし、代わりに人間の女の子が飛ばされて来たことを教えてきた。ナターシャはそれが夏子だと確信し、眠っているという場所に急いだ。

そこに着くと、夏子が布団の中で眠っていた。その様子を見たナターシャは、とりあえず一安心した。ずっと夏子の事を心配していたのだ。そして、しばらくして夏子は目覚めた。そして、ナターシャとの再会を喜んだのだった。そして、みんなとの再会も喜んだ。

夏子は自分も一緒に戦うことを言った。しかし、みんなはそれを止めた。危険だし、ましてや女の子だし、それに酷く怪我をしていたからだ。しかし、夏子は「今までひろき君に助けてもらっていたので、今回はその恩返しがしたいの。」と言って、連れて行ってくれるように頼んだのだ。その話を聞いたみんなは仕方なく連れて行くことになった。

そして仲間も見つかり次の所へ向かおうとした時、プププランドのデデデ城の方で爆発音が聞こえてきた。その為、ナターシャ達は

向かっていった。

行ってみると、大きい怪物が城を壊しつつ暴れていたのだった。そして、近くにデデデ大王が倒れていた。フォックはすかさず手を貸しデデデを立ち上がらせた。フォックとデデデは村長会議の時に知り合いになっていたのだ。その為、デデデはすぐにフォックと傍にいる人達が、平和の為に戦っている仲間だと気づいたのだった。

デデデは怪物の説明をしてきた。なんと、手違いで転送装置から出てきてしまったらしい。しかもあいつは、転送装置を壊してしまって戻すことができなくなってしまったという。その話を聞いたみんなは、倒すしか方法がないと思い怪物に向かっていった。

みんなは攻撃を開始した。しかし、怪物が大きすぎて攻撃がぜんぜん食らってなかった。そんな中、イナバが怪物の弱点を調べていた。そして、ついに弱点を発見した。

口だという。

しかし、怪物は口から光線を放っていて、近づいて攻撃ということができなかった。その為、魔法でやろうとしたが、すぐに怪物に気づかれてしまい当てることはできなかった。しかも、ナターシャの絨毯はバッテリーが上がってしまい、しばらく休めないといけない状態に陥(おちい)っていたのだ。

どうするか悩んでいるとデデデが「お前らを投げてやる。」と言ってきた。どうやら力があるらしく、２５０ｋｇ位までなら投げ飛ばすことができるらしい。その為、ナターシャ達は投げてもらうことにした。そして、イナバがあれこれ計算して、デデデの腕にはナターシャ（１３０ｋｇ）と、夏子（？ｋｇ）と、タケル（５０ｋｇ）と、ハム太郎達を掴んだピカチュウ（計１０ｋｇ）が乗っかった。なぜこのメンバーが選ばれたのかというと。まず、タケルはデデデに投げ飛ばされた後、再度方向を空中で変えることが必要の為、腕の力が強いと思われるタケルが選ばれたのだ。そして、夏子は口に

攻撃する大切な人材だ。そして、ナターシャがロボットで一番重いはずなのに選ばれたのは、魔法でバリアを張れるからであった。これで、タケルが怪物の口にナターシャ達を投げ飛ばした時、怪物が光線を放って来ても夏子を守れるのだ。ピカチュウとハム太郎達はもしもの時の為の助っ人だった。

そして、それは実行に移された。デデデが投げた後、怪物はナターシャ達でなくデデデの方に光線を放ってきた。しかし、下で待っていたフォック達によって、デデデは光線から免れた。このことも想定してフォックは地上に残ったのだった。

空中でタケルは2人＋3匹を投げた。その後、タケルはデデデにキャッチしてもらった。すると、怪物は投げられたナターシャ達に光線を放ってきた。ナターシャはすかさずバリアを張った。そして、夏子は攻撃しようとした。しかし、ここで計算違いが生まれてしまった。なんと、怪物が光線を長く続けたのだ。そして、それを防ぐバリアが長引いてしまった。その為、夏子が魔法を放っても、バリアは内側にも効力を発揮する為、夏子は魔法を打つことができない状態だった。しかし、ナターシャは夏子に最大魔法を放つように言ってきた。しかし、ナターシャが作り上げたバリアにはまだ光線が当たっていた。それでも夏子はナターシャを信じて魔法を放った。すると、ナターシャはバリアを解いてしまった。すると、夏子の攻撃と怪物の光線がぶつかり合った。

夏子はいきなりの持久戦に驚いたが、ナターシャに何か考えがあるものだと思い、光線を魔法で耐えていた。するとその時、ナターシャはピカチュウ達に今のうちに攻撃するように言ってきた。その間ナターシャは下向きに衝撃波を打ち続けて空中で夏子を支えていた。

ピカチュウ達は怪物に向かって攻撃した。ピカチュウは休憩した

おかげで雷が打てるようになっていたのだった。

攻撃が当たった怪物は光線を止めた。すると、今まで光線を受け止めていた夏子の魔法が怪物の口に直撃した。そして、怪物はその影響で倒れたのだった。その後、フォックやタケルが魔法やブーメランで攻撃し怪物を消滅させたのだった。

倒した後、ナターシャ達はゆっくりと地面に降り立った。そして、倒したことに喜んだのだった。すると、ナターシャは夏子に「よく頑張ったな。凄かった。これなら一緒にきても安心だ。」と言って、夏子の手を掴んだのだった。夏子は自分が役に立ったことを嬉しく思ったのだった。

こうしてプププランドでの戦いは終わり、次の町に行こうとしたが、もう夕暮れになっていた為、ここに泊まることになった。しかも、デデデがちゃんと家を貸してくれたのだ。さらに、壊された城の修理があるのにそれは手伝わなくていいと言ってきた。旅をしている事情をフォックから聞いたらしく、デデデなりの心遣いだった。その為、みんなはゆっくり休むことにしたのだった。

第１１３話　プププランドでの出会い（後書き）

ここでのデデデは６４のデデデを参考にしています。

第１１４話　ドラえもんズとドラ・ナターシャ

次の日、ナターシャ達は旅立った。絨毯も直り、再び飛んでいけることになった。

空中でみんなは何かを発見した。なんと森の中から強い光が空目掛けて放たれているのだ。そして、怪しいので発光元に行ってみた。そして、その場所に着くと、ドラズが親友テレカで光らせていたのだった。

早速みんなはドラズの傍に行き再会を喜んだ。その中でナターシャを見つけたドラズは驚いた。ついこの間出会って、そしてそれぞれの道に帰って行ったのに、この仲間がばらばらになったという状況の中で、そのばらばらになった仲間達とナターシャが一緒にいたからだ。その為、ドラズはナターシャにあれこれ聞いてきた。ここまでのことだ。

ドラズはどうやら一度ばらばらになったのだが、親友テレカで呼び合い、見事合流することができたらしい。それから、誰かに自分達の存在を気づいてもらおうと、親友テレカで光らせていたのだという。もちろん敵が来ることも覚悟して。しかも、身につけている秘密道具以外は置いてきてしまったらしく、すぐに帰ることができなかったのだと言う。しかも、ドラメッドの絨毯は壊れてしまっていたのだ。

再会の喜びを分かち合ったドラズも一緒に残りの人達を探すことになり、ナターシャの絨毯に乗ろうとした。しかしその時、突然敵が茂(しげ)みから現れた。しかも、ドラズ達を囲むように飛び出した。どうやら親友テレカの光に集まった敵の作戦にかかってしまったようだ。

それらを見たナターシャはフォックに魔法力を分けてくれるように頼んだ。そして、分けてもらったナターシャは武道会の時使った技（地面に腕を叩き込むやつ）を放った。すると、周りの敵は全て吹き飛ばされ消滅した。どうやら雑魚敵だったらしい。

敵を倒したナターシャ達は今度こそ絨毯で飛び立とうとした。すると、そんなナターシャ達に誰かが攻撃してきた。みんなはそれを避けて撃たれた方を見ると、そこには1人の男が立っていた。

その男は先ほどの雑魚敵の親分らしく怒っていた。そして、みんなに攻撃してきた。すぐさまみんなは避けて反撃に出た。しかし、男はぜんぜん避けることをしなかった。その為、攻撃は諸に男に食らったのだった。しかし、男は笑ったまま立っていた。なんとみんなの攻撃が全く効いてなかったのだ。すると男はみんなに言い放った。

「俺、シクトにそこらの弱い攻撃じゃ食らわないぜ。一撃で俺倒せる攻撃って言ったら、ひろきがやる合体魔法ぐらいだぜ。放って来いよ…あっ、いないんだっけひろき。それじゃあ、残念、お前らの負けだわ。」

それを聞いたみんなは怒り、ひろきの居場所を言うように言ってきた。しかし、敵は言うはずもなく「俺を死の前まで追い詰めたら教えてやるよ。」と言ってきた。

それを聞いたみんなは一斉に攻撃を開始した。しかし、みんなの攻撃はまったく効かず吹き飛ばされた。そんな中、イナバが弱点を探っていた。しかしなんと、シクトに弱点は存在しなかった。しいて言うなら『野菜が嫌い』らしいがここに野菜はない。

それはそうと、イナバの弱点を見抜く技がだんだん凄くなっているように思える。『野菜嫌い』って見ただけでわかる物ではない。

魔法が備わっているとしか見えない。しかし、イナバは魔法は使えないと言っている。不思議な能力だ。

みんなは苦戦を強いられていた。攻撃が食らわないうえにシクトの攻撃が強く、みんなはその攻撃を耐えるだけで精一杯だった。そんな中、シクトは先が鋭利（えいり）な剣を取り出した。すると、それで攻撃をしてきた。

みんなは避けていたが、とうとうナターシャの腹部に剣先を刺されてしまった。ナターシャのボディには穴が開き、中の機械を傷つけていた。そして、ナターシャは倒れ込んだ。

その後、シクトは剣をナターシャから抜いた。そして、他の奴等に向かってきた。ナターシャのボディも穴を開けてしまうのだから、そんな物で刺されたらひとたまりもないと思ったみんなは必死で避けた。

夏子とハム太郎達は倒れたナターシャの所に行き、傷口を回復させていた。なんと、ハム太郎達の魔法は機械も直してしまったのだ。その為、ナターシャは夏子の肩を借りてすぐに立ち上がることができたのだった。すると、ナターシャは夏子に魔法力を送ってくれるように頼んだ。勿論夏子は承諾して、ナターシャに魔法力を送った。すると、ナターシャはみんなに魔法力を請求した。なんと、ナターシャは合体魔法をナターシャ1人でやろうとしていたのだ。それをアイコンタクトで知らせると、みんなはある程度理解して、敵の目を見計らって魔法力を少しづつナターシャに送った。しかし、その途中敵に気づかれ、ナターシャに向かって攻撃した。しかし、夏子が盾となり攻撃からナターシャを守った。その間にナターシャは合体魔法の準備を始めた。

みんなはようやく魔法力を送り終わった。みんなは今後の戦いのことも考え、少し自分の体に魔法力を残した。そして、ついに合体

魔法の準備は整ったのだった。そして、最後にドラズが親友テレカでナターシャの攻撃力を上げたのだった。

ナターシャは夏子の前に立ち、向かってくる攻撃に向かって合体魔法を放ったのだった。すると、合体魔法はシクトの魔法を呑み込みながらシクトに向かっていった。そして、シクトに当たった。しかし、シクトは笑っていた。なんと合体魔法でもシクトを倒すことはできなかった。しかし、そんな状況でもナターシャは魔法を放ち続けた。

ナターシャの合体魔法はひろきのと違い、１つの大きな魔法球ではなく魔法光線だった。その為、ずっと続けられていた。

ナターシャは魔法を放ちながらシクトに近づいていった。しかし、攻撃は食らっていなかった。しかし、ナターシャはそのまま放ち続けついにシクトの目の前まで来た。すると、ナターシャは合体魔法の太さをだんだんと細くしていった。すると、シクトの顔がだんだんと引きつってきた。そして、太さ５０ｃｍ位あった魔法光線を１ｃｍまで細くした。これは先ほどのシクトの剣を応用させたのだ。攻撃の箇所をある１点に集中させれば、硬い物でも貫通するというのだ。その為、ナターシャは細めていったのだ。

シクトの顔はきつそうな顔になっていた。しかし、貫通しそうにはなってなかった。するとその時、ドラズが再度親友テレカをナターシャに掲げた。すると、合体魔法の威力が上がり、ついにシクトの体を貫通した。

貫通した場所はシクトの心臓だった。その為、貫通するとシクトは倒れた。それと同時にナターシャの合体魔法は止んだ。そして、ナターシャも倒れ込んだ。

ナターシャは倒れているシクトにひろきの居場所を聞いた。するとシクトは「うちらのアジトにいる。」と言ってきた。すると、ナターシャがアジトはどこにあるのか聞いてみた。しかし、その時は

もう遅く、シクトはこの世を去っていた。結局、ひろきの居場所を聞くことはできなかった。

ナターシャはフォック達に支えられ立ち上がった。その時には、夏子も支えられて立っていた。シクトの魔法からナターシャを守った為だ。そんなナターシャも、どうやら体全体に力が入らないらしい。

合体魔法を放ったのだから無理もない。

そして絨毯を広げてもらいその上に乗った。そして、後から全員乗り込み次の町に出発した。

その途中、ナターシャはカイルに貰った飴を舐め始めた。すると、たちまちナターシャの体は軽くなり力が漲(みなぎ)って来た。

それを見てみんなは驚いた。

ナターシャは他のみんなに魔法力を分け与えた。すると、みんな少し元気になった。夏子も立てるぐらいにまで回復し、いい状態で次の町に向かった。

第１１４話　ドラえもんズとドラ・ナターシャ（後書き）

刺されても、ある程度なら、大丈夫。
機械の外側の損傷だったら、大丈夫。
やたらしぶとい、それが、ドラ・ナターシャ

第115話　ヨースター島での再会

ナターシャ達はヨースター島に辿り着いた。ここはロボット襲撃の時、壊滅状態に陥っていたが、住民の協力もあり少しづつ復興していっていた。ナターシャはそんなこと知らなかったので敵に壊されたと思いこの島に降り立ったのだった。

後からその話を聞かされたナターシャは驚いた。それと同時に安心したナターシャはとりあえずここで聞き込みをすることにした。

しばらく聞き込みをしていると何かがナターシャ達の方に向かってきた。ナターシャがそれを見るとそれは犬次郎だった。そんな犬次郎にフォックは向かっていった。しかし、犬次郎の様子が違った。悪魔族のオーラを感じ取った。

すると、犬次郎は刀を取り出し、フォック目掛けて振りかぶってきた。すかさずフォックは避けて、犬次郎を吹き飛ばした。すると、犬次郎は立ち上がりフォック達に矛先を向けた。

みんなは犬次郎が変だと感づいた。その中でナターシャが『気』を確かめると、犬次郎は悪魔族の『気』を持っていた。するとその時、誰かがフォック達の前に現れた。そして、なんとそいつは「俺が犬次郎を操った。」と言って来た。

敵の名はネシという奴で、なんと敵を操ることができるらしい。それを言ってきた敵はいきなり夏子に光線を放ってきた。すると、夏子はその光線に当たってしまい夏子は倒れてしまった。ナターシャが慌てて体を揺らすと、夏子は目覚めた。しかし次の瞬間、夏子はナターシャに攻撃してきた。夏子も操られてしまったのだ。

フォック達はどうすれば直るのか聞いて見た。するとネシは「俺

を倒せば元に戻る。」と言ってきた。それを聞いたフォック達はネシに攻撃を開始した。同時にネシと犬次郎もフォック達に向かってきた。その頃、ナターシャは夏子をどうにか戻そうと考えながら夏子の攻撃をかわしていた。

みんなの攻撃はネシにかわされていた。動きが速い。そして、避けられたところに犬次郎が攻撃をしてくるというコンボを決められていて、フォック達は苦戦していた。しかも、犬次郎の体には酷い傷があり、攻撃をしたら死んでしまいそうな状態の為、攻撃ができなかった。

すると、イナバが光線に当たってしまった。その為、イナバは敵の手の内に入ってしまい、フォック達の弱点を見つけるように言われた。そして、とうとうみんなの弱点がばれてしまった。フォックは『火』タケルは『雷』ハム太郎達は『水』（ハムスターを深い水に入れたら溺れるので入れないように）ピカチュウは『地面攻撃』、ナターシャは『寒さ』『酒』、ドラえもんは『ネズミ』、キッドは『高所恐怖症』、王ドラは『女の子』、マタドーラは『蛇』、ドラメッドは『水』、ドラリーニョは『オバケ』、ドラニコフは『寒さ』そして夏子は、ほぼ全部だが特に『恋愛』と出た。

それを聞いたネシは次々にそれらの攻撃を繰り出してみんなを苦しめた。そして、みんな倒れてしまった。その中で、ナターシャが意を決して夏子に峰打ちを放った。すると、夏子は気を失い倒れこんだ。その後、ナターシャはみんなの方に向かった。すると、ネシはナターシャに冷凍ビームを放ってきた。しかし、ナターシャはそれを避けた。

すると、犬次郎が刀を振りかぶった。しかし、ナターシャは犬次郎の腹にパンチを食らわした。すると、犬次郎は出血して倒れこんだ。その後、ナターシャはネシに向かっていった。

ネシはナターシャに攻撃してきた。
ナターシャはそれをかわし、攻撃を打ち返したりしていた。するとそんな中、ネシから細い糸のような物があることを発見した。そして、それは犬次郎達操られた人達に繋がっていた。その為、その糸が操っている物だと分かったのだった。
ナターシャは糸目掛けて攻撃しだした。しかし、ネシはそんな攻撃から糸を守ってきた。ナターシャが糸を狙ってきているのを分かったようだ。すると、ネシは一瞬の隙をつきナターシャに冷凍ビームを当てた。すると、ナターシャは倒れ込んだ。
しかし、ナターシャは攻撃が当たる直前に一発だけ魔法を放っていて、その魔法は糸を切っていた。
ナターシャは倒れ込んだ。そこへネシは止めを刺そうとした。するとその時、誰かがネシの攻撃を止めた。ネシが確認するとそれは、血だらけの犬次郎だった。

犬次郎はネシに攻撃をした。しかし、ネシはその攻撃を避けた。だが犬次郎は怒りに燃えていた。そして、犬次郎の攻撃は激しさを増していった。そしてついに、犬次郎の刀はネシの心臓を捕らえた。そして、ネシを消滅することに成功した。

その後、犬次郎は倒れた。しかし、ナターシャが立ち上がり、そんな犬次郎を回復させて立ち上がらせた。その後みんなも回復して立ち上がった。夏子も目を覚まし、みんな無事に生還（せいかん）した。

犬次郎はみんなに謝ってきた。しかし、みんなは逆に「助かった。」と言って、犬次郎を許したのだった。
その後、みんなは村の宿で休むことにした。

第１１５話　ヨースター島での再会（後書き）

Q．仲間が操られるのは何回目でしょう？

A．５回を超えてます。

第116話　タケルの故郷で

ナターシャ達はヨースター島で休んでいた。しかも、フォックがここの大臣と知り合いだった為、手当てを受けることができた。そして、1日間休んだみんなは次の所へ旅立った。

気づけば残りの日数は2日しかない。急いで『マリオ』『ミュウさん』『ハムチィー』『ひろき』『カービィ』の5人を見つけなければならないのだ。その為、次の日の朝には旅立ったのだった。

ナターシャ達は空からみんな探し始めた。すると、強い『気』をナターシャは感じ取り、ある村の方に向かった。しかし、そこはタケルの故郷の戦士村という所だった。

タケルは自分の故郷と言うことで少し興奮していたが、ナターシャいわく、故郷には敵がいるらしい。それを聞いたタケルは闘志を燃やしていた。

みんなは村に降り立った。しかし、これと言った被害は見られず、普通に村人が生活していた。おかしいと思ったナターシャは再度『気』を確かめてみた。しかし、先ほどまで感じていた気が感じられなくなっていた。そして、敵がいるのは気のせいだったと思い安心していると、ナターシャが先ほどとは別の強い『気』を感じ取った。その為、みんなは『気』が強いとされる場所に行ってみた。すると、そこにはハムチィーがいた。

ハムチィーは男の人から修行を教えてもらっていた。みんなが呼ぶと、ハムチィーはみんなの所に飛んできた。そして、再会を喜んだのだった。しかし、みんなはすぐにハムチィーが本物かどうか確かめた。すると、修行を教えていた人がそれを証明した。どうやら

ハムチィーが飛ばされて来て、なかなか手応えのある奴だと思った為、ハムチィーを修行させたらしい。しかし、ここでタケルは少しみんなとは遠くの方にいた。なぜかと言うと、この修行を教えていた人はタケルの父親の『ワタル』だったのだ。

タケルはその事を話すと、みんなはワタルに挨拶を交わした。その為、ワタルと親しくなった。すると、ワタルは家で休むように言ってきた。しかし、ナターシャ達は急ぐからという理由でそれを断った。

ナターシャ達は村に異変がなかったか聞いてみた。しかし、何も異変はなかったと言う。やはり気のせいだったのかと思ったナターシャは、次の町に行こうとした。しかしその時、地震が戦士村を襲った。すると、それと同時に敵が姿を現した。

ナターシャ達は早速戦おうとした。しかし、それをワタルが止めた。傷だらけだし休んだほうがいいと考えてくれたのだ。そしてなんと、ハムチィーだけに戦いを挑ませた。どうやら修行の成果を見せてもらいたいらしい。しかも、ハムチィーもその気満々だった。

そして戦いは始まった。敵が先制攻撃(せんせいこうげき)した。しかし、ハムチィーはそれをかわし、逆に敵に一発ぶちかました。すると、敵は吹き飛んだ。それにはみんな唖然(あぜん)とした。その後もハムチィーの攻撃は続いた。しかし、敵も黙ってはおらず反撃をしてきた。そして、とうとうハムチィーは吹き飛ばされてしまった。しかし、ハムチィーはそれでもなんとか立ち上がり攻撃をしに行った。

しかし、ハムチィーの体はもうぼろぼろで、立っているのもやっとだった。するとその時、ワタルはハムチィーに「あの技を使え。」と言ってきた。その言葉を聞いたハムチィーは、体全身に力を溜め始めた。そこへ敵が攻撃をしようとしてハムチィーに向かって来た。その時ハムチィーは、今まで溜めていた力を一気に敵に向かって放った。

すると、それはブーメランのような形になり敵に向かって行った。そして、その攻撃は敵の体を擦った。すると、その部分から血が出てきた。ハムチィーの魔法は斬撃（ざんげき）のような物になっていた。しかも、それがブーメランの形をしているので繰り返し敵に当てていった。なんとも凄い技である。犬次郎の攻撃とタケルのブーメラン技術が合体したような技だった。

その攻撃はついに敵の顔面に当たり爆発した。しかし、その攻撃を食らってもなお敵は立っていた。しかし、ハムチィーはもう立つことができず倒れ込んでいた。そこへ敵は攻撃をしようとした。ナターシャ達はすぐ助けようと敵に向かおうとした。とその時、ワタルがみんなの前に立ち魔法を放った。すると、その魔法はハムチィーと同じ技だった。しかし、破壊力が全然違っていた。なんと、ワタルの攻撃は敵にまっすぐ向かって行くと、敵を真っ二つにしてしまった。しかも、ブーメランなので再度戻ってきて今度は違う方向から敵を斬った。これにより敵は十字に切れてしまいこの世を去ったのだった。その様子をみんなは驚きながら見ていた。そして、タケルのブーメランの技術はワタルから受け継いだものだと分かったのだった。

ワタルはハムチィーを起こした。そして、回復させて立ち上がらせた。その後でワタルはハムチィーに「まだ力が足りないから攻撃が中途半端だ。後は自分で修行して鍛えてくれ。」と言ってきた。その言葉にハムチィーは頷（うなず）いたのだった。

みんなはハムチィーを連れ次の場所に向かおうとした。すると、ワタルが話しかけてきた。なんと『不思議の村』で人間が降ってきたという情報が伝えられたらしい。その情報を聞いたみんなはそれが『マリオ』か『ひろき』のどちらかであることを確信し、その場

所に向かって飛び立った。

帰り際にワタルはタケルに「頑張ってこうよ。」的なことを言った。すると、タケルはワタルに向かって親指を立てて「俺頑張るわ。」と言った。

そして、ナターシャは不思議の村を目指して飛び立った。

第１１６話　タケルの故郷で（後書き）

タケルの父、ワタル。実はギガスと親交があったという設定になっているが、ギガスと他の親交があった人達の話を書くと長編３つ分くらいになりそうなので割愛。
どんなストーリーなのかは考えてあるけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6296r/

ひろきの不思議な物語～水晶伝説の謎～

2011年10月12日12時55分発行